
神の呪いを受けし者

saitou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の呪いを受けし者

【Nコード】

N0350Q

【作者名】

saitou

【あらすじ】

前世の罪により罰を受けることになった男。

自分の罪が何かも知らないまま不老不死の呪いを体に刻まれる。さらに記憶まで奪われ、元いた世界とは別の世界に放り出されることになる。

p r o l o g u e 天国とは神のおわすことなり（前書き）

初めての投稿、緊張します。

prologue 天国とは神のおわすことなり

side???

目が覚めるとそこは、見慣れた自分の部屋ではなかった。何も無いまっ白い空間だった。記憶が確かなら俺は大学のレポートを仕上げ、て自室で就寝したはずなのだが……。

夢かと思いい頬をつねってみるが……痛い、普通に痛い。

考えていても解決の糸口は見つからないと思い、とりあえず立ち上がって辺りを見回してみる。しかし本当に何も無い。こうして足の裏に地面の感触が無ければ、そこに地面が存在しているのかも解らなくなりそうなほど白一色だ。

もしここに神のような存在でもいたら二次創作でありがちの『間違っ、て殺しちゃった お詫びとして転生させてあげる』的な展開にでもなりそうなものだが。

などと考えていると、なにやら神々しい雰囲気をもった中性的な男だか女だかいまいち判断がつかない顔した人物が現れた。噂すれば影がさす、なんて言うがまさか本当に現れるとは思ひもしなかった。とりあえず神（仮）と俺の中で呼称しよう。

と、目の前の人物の呼称を勝手に決定しているとその神（仮）が話しかけてくる。

「いやいや、（仮）ってなかなか失礼だね、君？」

声に出していたか？ いや、神なのだとしたら心くらい読めても不思議ではないのか。それにしても声を聞いても性別の判断がつかない。神だから両性具有とか性別がないのかもしれないな。

「こんな状況でよくもそんな不毛なことばかり考えていられるね？
普通ここは突然現れた私を質問攻めにでもするところではないかな
？まあ、聞かれたからといって私が答えるかは別問題なのだけれど。」

「どうやら本当に心を読まれているようだ。それにしても心勝手に読むなんていくら神であっても酷くはないか？プライバシーの侵害だ。なんて、愚にもつかないことを延々と考えていると、神（仮）が「そんなことは置いといて」と前置きしてから話し始める。」

「君には罰を受けてもらう。信賞必罰、罪を犯したなら罰を受けるのは当然のことだからね。」

思考が一瞬停止する。

あれ？おかしい、ここまでテンプレ的な展開だったというのに。
ならば次は謝ったりするところではないのだろうか？間違って殺してしまいました、的なあれだ。罰を受ける？俺がいったい何をしたというのだろうか。少なくともこんな大事になるようなことをした覚えはない。

「混乱しているようだが無理もない。罪を犯したといっても実際に事を為したのは君の前世というべき存在なのだからね。君はそう、ただ運がなかった。同情を禁じ得ないが、そう思って諦めてくれ。」

ちょっと待て、前世？それは俺に何の責任もないのではないだろうか。理不尽が過ぎる。このまま黙っていると俺が罰を受けることが確定してしまいそうなので抗議の声を上げる。

「待ってくれ、俺の前世が何をしたのか知らないがいきなり過ぎて

訳がわからない。それは本当に俺が負わなければいけない罪なのか？理不尽すぎるだろう。ちゃんと説明してくれ。」

「別に君に教える必要はないのだけれど。まあ流石にそれではあまりにも不憫過ぎるかな。今の君は何も知らない善良な唯の人間にすぎないのだから。」

簡単に説明すると、君は前世で大罪を犯したのさ、そこで罪を償っていればこんなことにはならなかったのだけれど。まあ今そんなことを言っても詮ないことなのだけれど。

話を戻すと罪を償わずに逃げたんだ。それがまずい。むしろ大罪なよりもそちらの方がまずかったとすら言えるね。」

これはまずい気がしてきた。詳しい事情の説明をしてくれる気はなさそうだ。与えられる情報が少なすぎて打開策なんて見えてこない。とりあえず情報を得るために疑問に思うことを質問してみよう。

「なんで今頃なんだ？俺は今の人生を二十年以上も過ごしてきたんだぞ？そんな大罪を犯したって言うんならもつと早くこうなっていないか？おかしいんじゃないか？」

「君は前世の記憶が無いんだろう？それが一番の原因かな。世界というものは君が考えている以上にたくさん存在していてねえ。それこそ無数の世界が存在すると言ってもいい。前世の情報を持っていない君を特定するには、随分と時間が必要だったという訳さ。」

まあ記憶を消して完全に別の世界に転生してしまえば見つからないと思っていたんだろうけれど。流石にそれは私たちをなめ過ぎというものだろう。仮にも神を自称しているんだから全知全能とはいかなくてもそれなりのことはできるよ。」

おお、やはり神なのか。本人から言質を取ったぞ。これからは呼称

を神（自称）に改めよう。……いやいやそんなことを考えている場合ではない。俺が何とか無罪放免にはなることはないのだろうか。俺が罰を受けるといふのは確定事項なのか。

「……俺がその罰を受けずにすむ方法はないのか？」

「ないね。もう決定されちゃってるしね。そもそもそれが決まったからこそ、今ここに君がいるんだよ？」

ストレートに聞いてみたが、即答だ。取り付く島もない。いったい俺はどうなってしまふのだろうか。大罪を犯したって、いったい何をすればこんな神の御前に突き出されるというのだ。恐ろしい。俺が受ける罰というのはどれほどのものなんだ。

「……その罰って言うのは具体的にどんなものなんだ？」

「そうだね、まあ自分がこれからどうなるかくらいは教えてあげてもいいか。

君に与える罰なのだけれど、名を奪い、記憶を奪い、自分が何者かもわからずに何処か適当な世界で永劫の時を生きてもらっただけさ。そう難しいことでもない、孤独が苦にならなければの話だけれど。」

「……え？」

また思考が一瞬停止する。正直拍子抜けしたのだ。確かにそれはつらそうだし。しかし俺はつきり地獄のようなところで永遠に責め苦でも味わうことになるのでは、と戦々恐々していたのだ。孤独はつらいかもしれないが、拷問みたいなことを延々とされるよりはましだろう。

「それじゃあ、早速始めようか。」

「——っ！？」

そこで俺はさっきまでの能天気な思考を後悔する。

その神（自称）の一言と共に複雑怪奇な魔法陣のような模様が、どこまでも続くこの白い世界を塗り潰すかのような勢いで現れた。その出現はとんでもない重圧感プレッシャーを伴っていた。それはいつそ物理的に何かに踏みつぶされているのではないかと感じるほどで、そして途方もなく恐ろしかった。

体を恐怖が支配する。震えが止まらず呼吸することも忘れる。いつそ気が狂ってしまったらどんなに楽なことだろう。体を動かせる状態ならば何の躊躇いもなく自殺してしまいたい。死にたいと強く願う、死んで楽になつてしまいたい。

そんなことを考えている俺をよそにその魔方陣はどんどん広がっていく。地面ただけでなく空中にまで展開していくそれは、俺の視界のすべてを埋め尽くしていく。どこまで広がったのか、もはや目で見えて確認することは叶わないほど広がっていた。

「『デーシネ・ファータ懇願することによってデウム・フレクティ神々の運命が変えられるなどと望むなヌッリ・エスト・ホミニーいかなる人間にも永遠の幸福はない』」
ヘルペトゥウム・ボヌム

魔方陣の展開が止まると、神（自称）が何事か詠唱する。すると魔方陣がさつきとは逆に収縮を始める。

——俺に向かつて。

「——っ」

今度襲ってきたのは恐怖でなく痛み。その魔方陣が俺の体に侵入す

るたびにナイフでも突き立てられたのではないかという痛みが全身を襲う。死にたいではなく死ぬ、狂いたいではなく狂う、もはや声を上げることができず絶え間ない痛みと苦しみに地面をのた打ち回る。気を失っても痛みで覚醒させられ、また気を失う。

そんなことをいつたい何度繰り返したのだろう。ようやくすべての魔方陣が俺の体の中に収まる。時間の感覚など既になく、どれほどの時間が経ったかは検討もつかない。なぜ未だに正気を保っているのか、意識が残っているのか不思議ではない。

「痛みも恐怖もこの場で十分味わってもらってから拷問なんて必要ないんだよ？」

まあ憐れだと思っし、同情もする。けれど運が無かったと諦めてくれ。恨みたかったら恨んでくれてかまわないよ？それが私たちに届くかどうかは別として。

まあ、せいぜい頑張って生き続けてくれ。」

その言葉を最後に俺は意識を手放した。

1話 初めてのサバイバル

side???

目を覚ますと俺は森の中にいた。いったい何故こんなところにいるのかと、まだ覚醒しきっていない頭で考える。自分は確か自称ではあるが神に出会い前世の罪がどうかで……。

『名を奪い、記憶を奪い、自分が何者かもわからずに何処か適当な世界で永劫の時を生きてもらうだけさ。』

神（自称）の言葉を思い出す。記憶を奪う、か。確かに思い出そうとしても自分のことが何一つ解らない。あの白い空間に誘^{いざな}われる以前に自分はこういう生活を送っていたのか、どんな人たちと関わっていたのか全く思い出せない。言葉や知識、常識などは忘れていないようだが。もっともその知識もいったいどれだけ消えずに残っているのか定かではないのだが。

……成る程、よくできている。自分のことが解らない。これは想像以上に堪えるな。もしかしたら本当に何もかも、全てを忘れてしまっていたほうが精神的には楽だったかもしれない。記憶という人格を構成する上で重要なファクターとなるものがないのは言いようのない不安がある。

しかしこのままウジウジしていても事態が好転することはない。現状把握をしようと立ち上がる。するとハラリと俺の上に乗っていたらしい紙が地面に落ちる。何かと思い拾い上げ、そこに書かれている文字を読む。

『やあ、気分はどうだい？』

まあ良い筈なんて無いのだろうけれど。

私が何故こんな手紙を書いたのか、というのだ。君に名前をあげようと思つてね。

何故そんなことを、と君は思つかもしれないが。これでも良識と常識を兼ね揃えていると自称する私は流石に君を憐れだと思つてね。まあ神と人の常識と良識にどれほどの差異があるのかは置いておくけどね。

話を戻そうか。ほら、自分で自分の名前をつけるなんて正直イタイだろう？だから名前くらい付けてあげても罰ばちは当たらないだろうと思つてね。まあその罰を当てるのも私たち神なんだけどね？

色々と考えてみたのだけれど、人の名前を付けるなんて初めてだから安直に君の元の名前から一文字返すことにしたよ。君に返す文字それは“恵”。

そして名字は神代、なんてどうだろうか？

神代かみしろ
恵めぐむ

うん、皮肉も効いていて良い名前なんじゃないかな？初めて考えたにしては、なかなか良い名を考えついたと、ついつい自画自賛してしまうよ。それにしても神から直々に名を授かるなんてそうそうあることではないよ？自慢してくれていいよ。まあ、そんなことしたら頭のおかしな人と思われるのがオチなんだろうけれど。

ああ、それとこれ以降私たち神が君に干渉することはないよ。あくまで適当な世界に君を放り出すまでが私たちが君に与える罰なのだから。後は適当に苦しんでしまえ、というスタンスだからね。だからそう深く考えずに第二の人生が始まったと思つて楽しめばいいんじゃないかな。まあ永遠の孤独に耐えられるのならば、の話なんだけれど。』

……… なんと言うか、ウザい。そしてくどい。

あの白い空間で話したときは、それほど言葉を交わしたわけではないので気づかなかったが、こいつは確実に嫌なやつだ。

しかしまあ、神にほとんど全てを奪われたと言っても過言ではない俺に対して神代恵とは……。確かに皮肉が効いている。神に代わり恵みをもたらせと？それを贖罪にでもしろというのだろうか。それにしてもこいつは、いちいち厭味っぽいことを言わなければ気がすまないのだろうか。なんとなく励まそうとしてくれている部分もあるのだが、上げてから落とすようなタイミングで厭味っぽいことが書かれているせいでただただウザい印象しか残らない。

なんてことを考えていると、読み終わった手紙がボロボロと灰のようなものになって崩れていく。自動で証拠隠滅とかどんな仕組みだ。

とりあえずこれからどうするべきなのか、と考えていると若干の空腹感を覚える。幸い森の中だし何か食べられるものが無いか探してみることにした。

結果、高かった日が傾き夕暮れ時、黄昏時、逢魔時、まあどれでもいいが、とにかく日が暮れ始めるまで食料を探し回った結果は芳しいものではなかった。数個の果物に食べられるかどうか解らないキノコ、硬くて中身を取り出すのに苦労しそうな木の実、その他キノコと同じく食べられるかどうか解らない山菜が少量。正直腹の足しにならない。というか木の実にいたっては、食べて得られるエネルギーよりも中身を取り出すときに使うエネルギーの方が多いのではないだろうか。

魚でも捕まえようと川を探してみたもののサバイバル経験など無い（忘れていただけかもしれないが）俺に俊敏に泳ぎ回る魚を捕獲することなどできなかった。

完全に日が沈むともともと暗かった森がさらにその暗さを増す。その暗さに一度振り切った心細さがぶり返してくる。自分のことが何も解らずこれからのことも何も思いつかない。不安で不安で仕方が

無い。どうしたものかと採取したものの中で唯一食べられそうな果物の一つを齧りながら思考を巡らす。

そしてふと気づく、夜の森は危険なのではないかと。もし寝ている間に獣にでも襲われたらシャレにならない。死んでしまう。……ん？そういえば神は永遠の時を生きてもらうと言っていたが、もしかして俺は死なないのか？もしや所謂不老不死^{いわゆる}というものになっているのではないだろうか？……まあ考えても答えは出ないか。まさか試しに死んでみるわけにもいかない。今考えなければいけないことは、この夜の森でどうするべきか、だ。火を起こす？サバイバル経験も無い俺が？道具もなしで？手元が不確かなほど暗いここで？無理ではないだろうか。幸いそこまで疲れはないし、眠気もあまり無い。一日徹夜する程度問題無いだろうと考え、俺は寝ずにその夜を明かすことにした。

この森で初めて気がついてから三日が経った。最初は余裕もあり、何とかなるだろうなんて考えていた。しかしその幻想は脆くも崩れ去っている。まともな寝床も作れず、寝心地が最悪だ。その上いつ獣に襲われるか解らないので、眠りが浅い。この三日で大分寝不足気味だ。火を起こせばもう少し安眠できるのだろうが、火を起こすにも道具が何も見つからないのだ。木の棒くらいなら流石に落ちているが、丁度いい木の板や火種になりそうなものが見つからない。もつと知識があれば別だったかもしれないが。未だに獣に襲われていないのは不幸中の幸いだといえよう。

だがしかし今はそれよりも重大な問題がある。腹が減った。とにかくその一言に尽きると言ってもいい。三日経った今でも十分な食料調達の目処が立たない。今や残っているのは最初に見つけたのと同じ果物が一つである。さらに食料を探して彷徨っていたせいか、森から出られない。つまり迷ったのである。いやまあ最初から現在位

置の把握などできていなかったのだが。それでも最初いたところより森の深いところに来たような気がする。どっちを見ても木しかない。

そういえばもし不老不死なのだとしたら、腹が減って動けなくなったらどうすればいいのだろうか。そのまま空腹に苦しみながら誰かが助けてくれるまで永遠に転がっていなければいけないのだろうか。思考がどんどんネガティブな方へと進んでいく。このまま俺はこの世界の誰にも認識されずにここで朽ち果てるのだろうか。

じつとしてみると、嫌な考えばかりが頭をよぎる。無駄な体力を使うのは得策ではないのだが、何か腹に収めて落ち着かないとネガティブ思考が止まらない。最後の食料である果物を齧りながら食べられそうなものを探す。

しかし、そんなことをしていると最悪な出来事が起こる。

今、俺は狼と対峙している。

もう一度言おう、狼だ。それも三匹。三日間運良く会合うことはなかったが、ついに出会ってしまった。俺の中の本能が叫ぶ、勝てるわけねえ、と。そもそも人間が素手で勝つことができるギリギリの生き物が猫と言われているのだ。狼、それも三匹に囲まれてどうしうと言うのだろうか。どうせ出てくるならもつと弱そうな俺でも狩れそうな小動物でも出てきてくれよ。RPGでも初戦闘は最弱モンスターが相手と相場が決まっているのに。まさか俺が来たこの世界の基準では目の前の狼レベルが最弱の部類なのだろうか。いやいや冷静になれば、現実とゲームを混同してはだめだ。

そうして少し落ち着き取り戻すとあることに気づく。こんな状況で俺はあまり恐怖心を抱いていないことに。確かに突然の事態にパニックに陥ったが、こうして冷静になると大して危機感が沸いてこない。全く怖くないといえば嘘になるが、それでもあの時白い空間で

神が魔方阵を展開したときの方が遙かに恐ろしかった。あの出来事の所為でどうやら俺はそこらへんが鈍くなっているようだ。少なくとも命の危険ではあるというのに、冷静な思考を保て体が震えることもない。

まあ、だからと言って俺が狼相手に勝てるはずもないのだが。

今は先ほどまでの様な膠着状態は終わりを告げ、三匹とも俺に襲い掛かっている。現在進行形で体に爪を立てられ、牙を突き立てられている。そんな状態で俺が何故ここまで平静を保っていられるのか。答えは簡単だ。恐怖だけだなく痛みにも俺の体は鈍くなっている。痛いことは痛い。痛みを感じる閾値はそのままのようだが、耐えられる痛みの限界値が普通の人間を振り切っている。体の中に魔法陣が入ってきたときの痛みと比べると、相対的に今感じている痛みも大したことがないように感じる。肉を引き裂かれ抉られている、常人ならば絶叫してもおかしくないだろう傷を負いながらも俺の反応はせいぜい転んで膝が擦り剥けた時程度だ。その反応は、俺の体がいくら引き裂かれても異常な速度で再生され続けているのも一つの原因だといえよう。どうやら俺は本当に不老不死らしい。不老かはまだ確実ではないが、このまあいっまでも狼の好きなようにさせても一向に死ぬ気がしない。

死ぬ気はしない、しないのだがこの状況は何とか打破したい。膝を擦り剥いた程度と言っても痛いことは痛いのだ。俺はマゾではないので痛みを与え続けられるなんてごめんだ。だがいったいどうすれば現状から逃げ出せるか解らない。抵抗しても逃げようとしてもどうにもならない。こちらはダメージを無視できるので、力任せに拳を振るってみたもののあまり効果がない。一体を殴り飛ばしてももう二匹いるので、攻撃がやまない。殴ったほうもすぐに起き上がり再び襲い掛かってくる。

如何ともしがたいこの状況に俺は段々苛立つてきていた。傷が治るといっても体力まで無限にあるわけではない。もともと疲れていたこともあってか俺の動きはどんどん鈍くなっていく。それに比べ狼たちは疲れなど知らぬかのように俺への攻撃を緩めることはない。腹立たしい。自分の攻撃が入ってもそれが通用しないのが腹立たしい。執拗に俺に攻撃してくるのが腹立たしい。怒りが収まらない。自分の無力さに、世界の理不尽さに怒りがわいてくる。俺はついにその怒りを声にして叫ぶ。

「だあぁっ！！！！いい加減鬱陶しいんだよっ！！！！この犬
つころどもがっ！！！！！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。怒りをこめて、目の前の存在にありつただけの憎しみをこめて叫ぶ。

そもそも何で俺がこんな目にあってるんだ。俺をこんな状況に貶めた神（自称）のことが頭に浮かぶ。俺の前世？ 知るかよそんなもん。逃がしたお前らの責任じゃないのか。今まであまりに非現実的で実感がわいていなかった。だからこそ、普通なら怒って然るべき状況だったというのに文句を一言、二言言うだけに留まっていた。しかしここにきて痛みが、怒りが、この状況が現実の物であると実感を与えてくる。それは、更なる怒りを産み、その怒りは憎しみとなり今ここに発露される。

腕を振りかぶる。今までよりも大振りに、ただ目の前の敵に怒りをぶつきたいという一心で。ブチブチと腕から筋肉が断裂する嫌な音が聞こえてくるが、それはすぐに再生される。そして、自分の体のことなど顧みずに敵の攻撃など無視して拳を敵に向かって放つ。腕からだけでなく、足からも腹からも背中からも、体のいたるところから筋肉の断裂する音を響かせながら敵に拳をブチ当てる。

今までの無力さが嘘だったかのように一撃で敵をしとめる。殴り飛

ばした狼は首があらぬ方向を向き、顔面がひしゃげて虫の息だった。俺の拳もぐしゃぐしゃに砕けたが、当然のようにすぐに再生する。敵のうち一匹をしとめたが、怒りは収まらず残り二匹も同じようにしとめ、ようやく俺は落ち着き始めた。

「ハア、ハア……」

かなり疲れた。精神的にも、肉体的にも。

しかしさっきのはいったいなんだったんだ。火事場の馬鹿力というやつだろうか。よく人は自分の力の三割程度しか使えないと言う。それは自分の体が壊れないようにするために、脳味噌がリミッターを掛けているからだそうだが。そのリミッターが危機的状況と怒りによって外れたのかもしれない。まあ、すぐに再生するから俺にとってはノーリスクのようなものかもしれない。

……とまあ、色々と考えるが答えは出ない。とりあえず血だらけになった体が気持ち悪いことこの上ないので、体を洗うために水のある場所を探しに行くのであった。

1話 初めてのサバイバル（後書き）

ちなみに、主人公の元の名前は特に考えていません。

2話 魔法のある世界

side 恵

狼と対峙してから数日が経った。不老不死ということが確定してしまったため、森の外に出て人に会うのもどうかと考えまだ森で暮らしている。しかしあれから俺の食生活は著しく改善された。自分が不死だということを自覚してから、食べるものを選ばなくなった。見るからに毒々しいキノコだろうが、正体不明の草だろうが何でも食べた。何度も体に不調をきたしたが、二度目食べる時には耐性がつき普通に食べられるようになった。俺の体はどうやら不老不死というだけでなく、色々と普通の人間から逸脱してきているようだ。

あ後は色々とか確かめたことができたのであまり退屈せずに過ごすことができた。まず気になったことは、あれから俺の体がおかしいのだ。いや、不老不死の時点でおかしいのだが。あれからどうも力加減が上手くできない。というのも、ことあるごとにあのときの様にリミッターが外れてしまったかのような力が出て、その度に筋肉の破壊と再生が繰り返される。このままでは、不老不死とか関係なく人のいる場所にいけない。小突いただけのつもりが相手の骨を砕いていた、なんて事態が普通に起こりそうだ。不老不死だけなら一箇所に留まらなければ何とかなるかもしれないが、これでは人と関わるのが事態が難しい。何とか訓練してこれに慣れることができるかなければ、俺はこのまま森の中から出られない。元から森にしばらくいるつもりだったが、少なくとも力加減が完全にできるようになるまで、森からは出られない。

こうして俺は森での生活をしばらく続けることになった。

この森で生活を始め三ヶ月ほどが経った。

キレて理性がなくなったりした場合どうなるかは解らないが、力の制御はで切るようになった。今では、自分の意思でリミッターを外して馬鹿力を出すことも可能だ。筋肉が断裂してもすぐに再生するので、俺にとつてはほぼノーリスクで使える力だ。これがサバイバル生活の中では思いのほか便利だった。その上それを繰り返すうちに俺の筋肉はどんどん強化されていった。筋肉は一度壊れるとより大きく強くなるように再生するのだが、俺は筋肉が肥大化する前にまた筋肉が壊れるような負荷を掛けるので、大きくならず密度だけがどんどん高くなっていた。筋肉の破壊と再生を繰り返すうちに俺の身体能力は常人の域を超えていた。それは、わざわざリミッターなど外さなくても襲ってきた獣をあの時の狼のようにできるほどに

そういえば、森で生活しているうちに気づいたことがある。そもそも最初に狼に襲われた時から少しおかしいと思っていたことなのだが。最初に攻撃され俺の血が流れ始めたあたりから狼の様子がおかしかった。血を見たから、血の匂いを嗅いだからでは説明がつかないほどの興奮状態になっていたのだ。不老不死になった影響からなのか、もしかしたら俺の血肉は何かしらの興奮作用、または獣を惹きつける作用でも持っているのかもしれないと思い試してみた。適当に何匹かの動物を捕らえ俺の血を数滴与えてみた。すると、肉食、草食に関わらず興奮状態になった。唯単に血の匂いを嗅いだり、血の味を感じ取ったからというにはおかしかった。試しに自分でも舐めてみたが、特になんともなかった。詳しいことは解らな買った。なので、その結果から俺の血肉はなんだか解らんが美味しいのだろうと適当に結論付けることになった。

そんなこんなで俺は、森の中での生活を割りと満喫していた。大まかな地理も把握した、食う物にも困らない、寝床もつくり夜も安眠できる、火についても身体能力が著しく向上したおかげで付けられるようになった。文化的な生活とは言えないが快適と言って差し支

えない生活ができていた。しかし、だからと言ってこのまま森に住み続けるつもりはない。こういうのは期間が決まっているから楽しめるのだ。サバイバル生活も慣れればそれなりに楽しい。だが、それを永遠にしなければならいとなれば話は別だろう。特に俺の場合合は命の続くまで、ではなく文字通り永遠なのだ。それは流石に遠慮願いたい。

そんなことを考え、そろそろこの森から出て行こうと考えていた。そんな時だった、あいつらが来たのは、招かれざる客が来たのは。魔法使いである。そう、どうやらこの世界は魔法が存在する世界のようなのだ。いや、不老不死の俺が魔法の存在に突っ込みを入れるのはナンセンスかもしれないが。

だが魔法と言ってもメルヘンチックな童話に出てくるようなものではなかった。それは、どちらかと言えば剣と魔法の冒険譚に出てくるような攻撃的なものだった。

そして前述したとおり招かれざる客であり、友好的な関係を気づくことは無理であったと前もって言うておく。

side 三人称

今森の中で対峙している集団は、一般的感性を持っているならおかしいな集団と言って差し支えない様相をしていた。

一方はローブをまといそれぞれ身の丈ほどの杖を所持した三人で、それと対峙しているのは、上半身裸で下はジーンズの男が一人。どちらもおかしいと言えばおかしいのだが、その土地、その時代を考えればよりおかしいのは上半身裸の男だろう。

その集団がいるのは中世ヨーロッパであり、男の黒い髪に黒い瞳と言うのは珍しい物であった。その上着ているものがジーンズだ。時代を先取りしすぎだろう。まあその男とは何を隠そう恵その人なのだが。その集団と先ほどから何事か会話している。というよりは、ロープの男の一人が恵に対し一方的に捲くし立てている。しかし、どうにも意思疎通が上手くできていない。扱う言語が違うようだ。

「ちつ。何言ってるか解らない。英語喋ってるってのはなんとなく解るが、早口でよく聞き取れない。」

恵が舌打ちをして悪態をつく。

その言葉を聞くと、先ほどまで言葉を捲くし立てていたロープの集団の一人が杖を持ち何か呪文のような物を唱える。するとお互いの言葉が理解できるようになる。

「うお！？急に言葉が理解できるようになった？」

「意識疎通の魔法だ。そう驚くほどのことではない。」

「魔法？この世界には魔法があるのか。」

「この世界？何を言っているかは知らんがこちらの質問に答えてもらうぞ。」

「……随分と高圧的な態度だな。人に質問しようとしてる人間の態度じゃないぞ？」

「黙れ、貴様は容疑者だ。質問と言うよりは、尋問に近い物だと思え。」

言葉は通じるようになったが最初の険悪な雰囲気が晴れることはなかった。むしろ言葉が通じたことで余計に両者の間に溝ができたようだ。

「はぁん、容疑者ねえ……」

それで？俺が一体何をしたって疑われているんだ。言ってみるよ、俺には何も心当たりはないぜ？」

恵は自信満々に言い放つ。そもそもこの世界に来てから恵は森から一歩も出ていないのだ。何か疑われるようなことをできるはずがない。そう思ってたの一言だったのだが、次のローブの男の言葉に恵は言葉を失くし固まってしまう。

「少し前からな、この森に勝手に住み着いている者がいるらしい。さらにそれだけならともかく、森の中にいる野生の動物が過剰に狩られているらしくてな。それで領主に調査を頼まれたんだ。そして調べに来てみたら怪しい黒髪に黒目の男がいるではないか。疑ってくれと言っているような物だとは思わないか？」

「……。」

恵はなにも言えなかった。心当たりがあるなんてレベルではなかった。それをしたのは、故意ではないと言えまさしく自分である。自分の血に反応して襲ってくる獣は全て返り討ちにしていた。そのうちいくらか食料にはしたが、到底食べきれぬ量ではなかったのだ。あまつた物は放置だ。反論の余地はなく、容疑者なんてすっ飛ばして犯人は自分であると言ったことが判明してしまった。

「それで、心当たりがないと言っなら貴様は一体いつ頃からここにいたんだ？生活空間を作り上げているあたり昨日今日という訳では

あるまい。

貴様が犯人ではないとしても何か見ているのではないか？」

犯人ではない、と一応仮定してはいるがその目は完全に疑っている人間のそれだ。そのローブを着た魔法使いの男は既に目の前の人間が犯人であると予想を立てていた。ここらでは珍しい風貌、どう見てもここで生活を送っている様子、極めつけは、魔法を使ってみせた時の反応だ。目の前の男は意思疎通できるようになったことには驚いていたが、魔法そのものについては全くと言っていいほど動揺が見られなかった。つまり魔法を知っている。魔法関係者であることは確定していると言ってもいい。関係者ではなかった場合記憶消去しなければならなかったが、幸いにも魔法を知っていることがほぼ証明できた。まあ、恵は異世界なのだから魔法が合ってもおかしくないはないか、と納得していたただけなのだが。ともかく魔法使いの男からしたら、そんな目の前の男は怪しいところが多すぎた。魔法関係者だとしたらあの量の動物を一人で狩るのも難しくない。

「……俺はこの森に今日来ただけですよ？この寝床だってさつき発見しただけデスシ？」

「アア！そういえば怪しい奴を見た気がするゾ。あれは確か森の東の方へ行った気がするナあー。」

「………。」

急に片言だった。片言の上に棒読みだった。そもそも意思疎通の魔法を使っているのに片言になるとはこれ如何に。

当然そんな言葉に納得するような愚か者は魔法使いの男三人の中には誰一人としていなかった。むしろ急に挙動不審になったことで怪しさ倍増である。魔法使い三人からすればこれはもう犯人は確定し

たとも当然、と言つところだろう。

「まあ、とりあえずついて来い。色々聞きたいことはあるが話はそれからだ。」

「それは任意か？なら断らせてもらう。
急用を思い出したので俺は行かせてもらうぞ。」

そう早口に言つて立ち去ろうとする恵だが、そんなこと許されるはずもなく敢え無く腕を掴まれ逃走を妨害される。

「強制だ阿呆が。こんな状況で見逃すわけないだろう。
貴様は誰が見たって百人中百人が怪しいと言つわ。」

恵は焦っていた。このままではいきなり前科もちになってしまう。
しかも捕まった挙句、不老不死だということがばれたら実験動物にでもされてしまふかもしれない。流星に体を弄繰り回されるのは恐ろしい。そして恵は決意する。

（うん、逃げよう。）

決めてからの行動は早かった。魔法使いたちの方に勢い良く振り向くと、その勢いのまま腕を掴んでる男を殴り飛ばす。ぐしゃりと腕を掴んでいた男の顔面は粘土のようにひしゃげる。魔法使いの男たちは驚愕した。気も魔法も使っていないかったというのにあり得ないほどの威力のその拳に。

「な！？貴様っ！！！」

魔法使いたちが意識を恵に戻したときには、既に恵は走り出してい

た。その速度は魔法も気も使っていない、ただの人間の出せる物ではなかった。それを見ると魔法使いの男たちのうち一人は治療に残り、もう一人は恵を追って走り出した。或いはこの時、素直に捕まっていればこの後の恵の運命も変わっていたかもしれない。皮肉にも前世で神のところから逃げ出したように、目の前の罪から逃げ出してしまった。

side 恵

いきなりだが後悔していた。思わず逃げ出してしまったが、判断を誤ってしまった気がしてならない。いや、俺が普通の人間だったらあのまま捕まるのもありだったんだろうが俺は不老不死だ。もしそれがばれたら実験材料にでもされてしまう可能性は低くはないだろう。魔法が存在していても、流石に不老不死なんて存在はそうないだろうから。

そういうことを考慮するところは逃げるしかないだろう。死なないからと言って体を弄繰り回されるのは流石に怖い。痛いとかではなくおぞましい。殴ってしまった人には悪いが、加減したから死んではいけないだろう。それに捕まったら俺の人生がとんでもなくグロい方向へ行ってしまういそうなのでお許し願いたい。

動揺させたおかげで大分距離を離していたからか、心にゆとりを持ってそんなことを考えていると、後ろからの攻撃に気づかず直撃してしまった。

「っが！」

相手が魔法使いだと言うことを忘れていた。魔法使いならそりゃ遠距離攻撃くらいある。だがしかし不死である俺の足はその程度では止められない。攻撃が直撃してもすぐに再生するので痛みを無視して走り続ける。

「なっ！？馬鹿な再生しただと！？」

しまった。なんか聞こえた。これは見られてはいけない物を見られてしまった。より捕まる訳になくなった。だがこのまま走り続ければ逃げ切るだろう、そう考え少し後ろを振り向くと魔法使いが杖にのって飛行を始めていた。

おおいかにも魔法使いっぽい。できれば杖でなく箒のほうがそれらしいのだが。……いやいや、暢気に考えている場合ではない。

その飛行速度はかなり速く、木があるため若干飛びづらそうだがそれでも木の間を縫うように飛んでくる。このままではいずれ追いつかれてしまう。

一度逃げ出してしまった手前捕まるわけにはいかない。ならばどうするか？思考は一瞬、答えは単純。逃げ切れないならば、相手をするまで。

走る速度を緩めずに無理やり方向転換する。足から嫌な音が聞こえるが無視。弾丸のような速度で敵に突っ込み、手加減なしの本気の拳を放つ。こちらが先に殴ったとはいえ一撃で致死レベルの攻撃を何度も撃ってきたのだ、文句はあるまい。

拳を叩き込む。がしかし敵に当たったと思ったが感触がおかしい。俺の放った拳は魔法使いに当たりはしたが大幅に威力が減衰していて、敵を怯ますに留まった。

「なっ！？」

思わず驚愕が口からこぼれる。魔法があるからと言って何でもありか！？俺の全力の攻撃が大したダメージにならない。何にも呪文唱えてないのにバリアー？結界？よく解らんが防がれた。これはまずい。こちらの攻撃が通用しない。

「ふんっ、同じ轍は踏まんわ！気も魔力も使わずに凄まじい威力の拳を放つが、その程度の攻撃では魔法障壁を展開しているオレをしとめることなどできんぞ！」

今のはどうやら魔法障壁という物を展開していたらしい。

名前はともかくこれは本当にピンチだ。今を防がれたら現状あれ以上の攻撃方法なんて持っていない。だからと言って諦めておとなしく捕まるなんて選択肢は既がない。敵は一人だ、全く効かないという訳ではないのだ。ならばこのまま攻撃を続行、隙を見て逃亡を図る。

「はあっ！」

敵は魔法使い、ならば呪文を唱えさせなければどうにかなるだろう。そう考え、攻撃を続ける。予想は概ね当たったようで、俺の攻撃を捌きつつも敵は顔をしかめる。これは、何とかなりそうだと口の端を持ち上げる。その時対峙している男とは別の声が響く。

エクス・ソムノー・エクシネアスト・レンス・サラマンドラ
「目醒め現れよ 燃え出づる火蜥蜴火を以てして 敵を覆わん
カプトゥス・フランメウス
『紫炎の捕らえ手』……！」

横からきた炎が俺を縛り付ける。どうやら時間を掛けすぎたようだ、残りの二人が追いついてきてしまった。まずい、動けない……。そして対峙していた男が呪文を唱える。

「これで終わりだ！」

レグ・レギウス・レクセウス

来れ雷精風の精雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐

『雷の暴風』!!!』

男が呪文を唱え終わると俺に向かって帯電した巨大な竜巻が放たれた。その攻撃に俺はなすすべなく飲み込まれた。

Side
三人称

「てこずったが最後は呆気なかったな。」

「攻撃を受けたとき体が再生していたというのは本当ですか？
 どうやってやっていったのでしょうか。」

「さあな。今となつては解らん。

それにどうやら体がバラバラにされては流石に再生できないようだ
しな。」

「そりやそうでしょう、これで回復できたらもはや殺すことなんて不可能でしょう。」

魔法使いの男三人は犯人である怪しい男の死体を確認しながら話していた。そして確認が終わるとその場から離れていった。

その怪しい男、恵の体はバラバラになっていた。肉が飛び散り、血

が散乱しその場は殺人現場の方がまだまし、と言えるほどの状況だった。

しかし魔法使いの男たちが去ってしばらくすると、小さなけれども複雑な魔法陣が浮かび上がり、それを中心にズルリと肉片同士が集まりだし、足りない部分は再生していた。その様子はまるで逆再生で映像を見ているかのような光景であり、わずかな時間をかけて恵の体は復元された。その場あった肉片は消え去り、残っているのは血の跡だけだった。

「あゝ、あー、フードプロセッサーに掛けられる食材の気持ちがよく解った。

つか、ここまでされても痛みに耐えられるってすごいな。

……それはそうと、服の代わりになるような物探さなくちゃな……。

ー

誰もいない森の中でポツリとそう漏らす。

体は元に戻ったが服まではそういかなかったようだ。

余談ではあるが、その後依頼主をつれて死体確認に魔法使いの男たちが来たが、既に恵は再生し終わってその場を後にしていた。そしてまだ生きているということが発覚し、恵は晴れて指名手配。賞金首の仲間入りを果たしたのであった。

2話 魔法のある世界（後書き）

主人公、原作知識はありません。

まあ元からなかったのか忘れてしまったのかは知りませんが。

3話 神がいたんだ、天使がいたっておかしくない

side 恵

初の魔法使いとの会合を果たしてから俺は森から出て様々な地を転々としていた。何故か賞金首となっていて、魔法使いに追い掛け回されるので落ち着いて一ヶ所に留まることが中々できなかったのだ。

俺はそんな生活を数百年も続けていた。賞金稼ぎの魔法使いたちから時には逃亡し、時には返り討ちにしていたので、最初ははした金だった賞金額も今では百万ドルなんてアホな金額にまで釣り上がっていた。人を初めて殺したときは思った以上に何の感慨もなかった。もしかしたら自分自身で、俺は既に人間とは別の生き物だと思っていたのかもしれない。或いは自分が何度も死を体感（不死なので実際は死んではいないのだが）しているうちに生と死の境界が曖昧になっているのかもしれない。

そんな逃亡生活を続けながらも俺はこの世界について色々調べていた。

まずは今自分のいる世界がどんなところか調べた。すると、どうやらここは完全なるファンタジーの世界というわけでもないことが解った。俺が元いた世界に酷似していたのだ。と言うのも俺が来た時代、場所が中世ヨーロッパ、西暦にして約千年くらいだったのだが、そこから長年にわたり時代の流れを見ると、俺の知識にある歴史とほとんど差がない物だった。今のところ俺の中では、この世界は魔法の存在する俺が元いた世界と同じ歴史をたどっている世界、という認識になっていた。

そして、次に調べたことが魔法についてだ。当然かもしれないが魔法は秘匿されているらしく、一般人は魔法についてその存在を知ら

なかった。秘匿されているので当初魔法に関して調べるのは時間が掛かるかと思っただ、そうでもなかった。あるという前提で探してみるとなかなかどうしてそれに関する文献は意外とあっさり手に入れることができた。

この世界の魔法は発動するのにそれ用の媒体、発動体が不可欠ということがわかった。さらに発動キー、これは自分で決めることができるらしく決まった言葉はない。そして発動キーとは別に呪文。発動キーの後にそれを唱えることにより魔法の術式を完成させ、魔力を魔法に変換し顕現させる。これがこの世界の魔法の大まかな説明だ。例外として、それを省いた無詠唱魔法というものも存在している。詠唱を省くことで通常の魔法よりも素早く発動することができ、戦闘においてかなり有効だ。しかしこれは、呪文をも用いた物と比べると術式の構成が甘くなり威力が落ちる。さらに術式の構成が難しいこともあり大呪文を無詠唱で放つことはほぼ不可能といっている。一長一短と言ったところだろう。

さらにこの世界の魔法を調べるのと同時に自分で魔法が習得できないかと試みた結果、時間は掛かったもののそれなりの腕になったと自負している。さらに術式を自分で開発し、いくつかオリジナル呪文も作った。

まあ数百年も継続して同じことをしていれば、誰だってそれなりの物になるだろう。

他にも俺は自分の体について調べていた。というのもあの神（自称）は魔方阵を展開し魔法のような物を使用し、俺を不老不死にしたことから何とかして神の呪いを解けない物かと思っただ。その結果は惨敗だった。難解すぎる術式により構成されている呪いを解くことは俺にはできなかった。そもそもこの世界の魔法とは根本的に理論体系が異なる物だった。

しかし得る物がなかったわけではない。術式の一部の解析に成功し、

俺の再生力を利用した強力な回復呪文の開発に成功した。開発してから、俺には不要な物だと気づき少し落ち込んだが。

そんなこんなで長い時を生きてきた俺だが今はだいたい西暦にして1400年代後半と言ったところだろうか。ローマ帝国が滅びたあたりだ。

そんな俺が現在何をしているかといえば、絶賛逃走中だ。俺にとって今ではお馴染みとなった魔法使いとの追いかけっこである。別に殲滅してやつてもいいのだが、正直だるい。面倒くさい。いちいち相手にしてられない。

誰かの言葉に一人殺せば殺人犯、百万人殺せば英雄、なんて言葉があるがこのまま永遠に賞金稼ぎが追ってくるようであれば俺はいずれ人知れず英雄になってしまっただろう。殺すことに抵抗がないからと言って、嬉々として人を殺す理由にはなり得ないのだ。

俺としては無用な戦闘は避けたいところだ。いや、もっと言うならば人と関わりたくない。どこか人の来ない山奥にでも引き籠もろうかと切実に思う今日この頃なのである。この世界に来て数百年、最初こそ人と深く関わるのができないのはつらいと思っていたが、今となってはそんな思いは完全に風化している。何せこの世界に来て以来関わってきた主な人種が魔法使い、それも俺の首を狙う賞金稼ぎだ。今でこそ容易に撃退できるようになったが、初めの頃など何度死んだことか。まあ、幸いなことに捕まったことはないのだが。そんな生活をこの世界に来て延々と続けてきた物だから、今では人間嫌いと言っていいレベルにまでなっている。

それにしても今回の奴らはしつこい。態々森に入り撒こうとしてい

るがしているが、なかなかどうしてよく着いてくる。
どうしようかと考えていると、俺を追っている奴らとは別の方向から魔力の反応を感じた。奴らの仲間かとも一瞬思ったがこの森に入ったのは偶然だし、奴らもここまで長い追いかけっことになるとは夢にも思っていなかっただろう。とすると別口か？
ならば俺を追いかけている奴らと鉢合わせにさせ、混乱に乗じて逃げるか。そう決め、さっそく俺は走る方向を魔力を感じる方へと変えた。

side エヴァンジェリン

吸血鬼になり、私をこんな姿にした男に復讐を果たし、あの城を出てから数十年が経った。今では吸血鬼らしい弱点も消え、それなりに力もついてきた。賞金稼ぎの魔法使い相手にも不覚をとることはほとんどなくなった。

しかし今回ばかりは芳しい状況ではなかった。

「ちっ！」

思わず舌打ちをする。

完全に油断していた。まさか不死殺しの装備を持ってきたとは思わなかった。ここ最近力を付けてどうやら慢心していたようだ。このままでは捕まってしまう。

「ケケケ、御主人ピーンチ」

このアホ人形は何故こうも緊張感がないのか……。我が従者ながら頭が痛くなる。

「……おいチャチャゼロ、あいつらを何とか足止めできんか？」

「デキルぜ。……片腕ガ、モゲテナケリヤナ？」

ちつ、ともう一度舌打ちしてしまう。この状況いったいどうしろと言うのか。吸血鬼にされたときにも神を散々恨んだが、いつそう憎しみが強くなる。せめてあの不死殺しの装備をどうにかできれば、状況はかなりましになるのだが。そのためには、時間稼ぎが必要なのだがチャチャゼロがこれではどうにもならない。……これは詰んだか。

そう考えていると、すぐ近くに私を追っている奴とは別の魔力を感じた。どうやら考え事をしていて気づくのに遅れたらしい。このまま進めば丁度挟まれる形になる。奴らの仲間だったらもはや突破口はない。

そんなことを考えているうちにも前方の存在と距離が近づき、ついに接敵してしまう。

「——っ」

鉢合わせた両者が共に息を呑む。反応から見たところ奴らの仲間ではなさそうだ。

ふとその男を見ると黒髪に黒い目と、ここらではあまり見かけない風貌をしていた。どうやらその男も追われているらしかった。それも追いかけてきているのは魔法使いらしい。どっちにしても状況は悪化してしまった。

どうすれば、と考えていたその時私を追ってきていた魔法使いが魔

法を撃つて来る。呆けていたせいで敵の接近を許してしまった。

「魔法の射手！！」
サギタ・マギカ
セリエス 連弾・光の9矢！！」

目の前の男もその呪文の声でようやく我に返ったようだ。だがしかし既に避けるのは間に合わないだろう。気づくのが遅すぎた。

こんな男など無視してすぐに魔法を避ければいい。こんな見ず知らずの奴を助けてやる義理などない。

だがしかし、私を狙ったはずの攻撃でその見ず知らずの奴が命を落とすというのは少し気に入らなかった。そんなのは偽善に過ぎない。今まで必要に駆られたからとはいえ、何人もの命を奪ってきた私が吐いていいような台詞ではない。

しかし、思ってしまった。この男もその風貌の所為で謂れもない疑いをかけられ追われているのではないかと。私と同じように誰かからも受け入れられずに追われる身となっているのではないかと。

私の体はそれ以上の思考を必要としなかった。

気づいたら、そう本当に気づいたらそんな行動をとっていた。

「いつまで突っ立っている！！？さっさと避けるっ！！」

「……え？」

そう言つて突き飛ばしてやると、先ほどよりも呆けた、いや困惑の表情を浮かべた男の顔があった。間抜けな表情だ、何故自分を助けたか理解できない、といった顔だ。そんなのは私自身にも解らない。そんな感想を抱いた次の瞬間、魔法の射手が私を襲った。

「っが！」

普段ならばこの程度の攻撃大したことはないが、今は不死殺しの武

器での傷がある。あまりいい状態ではない。

……こんなところで終わるのか。くだらない人生だった。私が生まれてきた意味とはいったいなんだったのだろうか。不幸になるために生まれてきたのだろうか。

まあ、最期の最期で見ず知らずの人間を助けるなんて身の丈に合わないことをやったんだ。吸血鬼の最期としては中々傑作なんじゃないか？

そんな自嘲めいたことを考えていると、私の絶望は消え去ることになる。

気づくと男が何かの魔法を私の追っ手と自分の追っ手に対して放っていた。見たことのない魔法だった。一見ただの魔法の射手にも見えなかったが、その効力は見たことのない物だった。敵の魔法使いたちにその魔法が当たると、魔法障壁など無いかのように突き破り、当たった部位が完全に消え去った。ダメージを与えたと言う風ではなかった。魔法が直撃したものは全て、障壁も人体も関係なく消滅したのだ。いったいどんな魔法なんだ。

「……大丈夫か？」

考えていると、私が庇った男が、私を救った男が不安げな顔で、少し焦った様子で尋ねてきた。

side 恵

困惑した、驚愕したと言ってもいい。魔力の方に向かい、いざ辿り

着いてみればそこにいたのは、ローブを着ていて顔を窺い知ること
はできないが、なにやら人形をつれたどう見ても子供としか思えな
い背丈の者だった。

様子を見ると、すぐにこの子も俺と同様追われていることが見て取
れた。血を流しながら、こんな森の中で友達と追いかけることとい
う訳でもあるまい。

この子の実力がどれほどのものかは知らないし、何をやったのかも
知らない、しかし子供相手に大人が大勢で襲い掛かるというのは少
々やり過ぎではないだろうか。

当初は俺の追っ手を押し付けて、逃走を図ろうと思っていたのだが
事情が変わってしまった。人間に対しあまりいい感情を持たなくな
ってしまったとしても、流石に子供相手に自分の敵を押し付けるな
んて外道なことを積極的にする気にはなれない。ならば、どうする
か。戦う？ここまで逃げてきたのに、今さら戦うのはな……。

「魔法の射手！！サギタ・マギカ 連弾・光の9矢！！セリエス」

そんなことを考えているとその子の追っ手の方から魔法が放たれる。
しまった、どうやらいきなりの事態に自分の思考の中に入ってしまった
ていたようだ。このタイミングでは避けきれないかもしれない。
しかし、子供のほうは既に気づいていたようで回避は間に合いそう
だった。

どうも俺は不死の上に、痛みをあまり感じない所為で危機察知能力
が弱いようだ。迫ってくる魔法の射手を見ながらそんなことを考え
ていた。

すると、

「いつまで突っ立っている！！？さっさと避けるっ！！」

「……え？」

突き飛ばされた。意味が解らなかった。突き飛ばされたことが、ではもちろんない。俺を助けようとしてくれたことくらい解る。俺を突き飛ばした力が子供の出せるものではなかったこと、でもない。そんなことはこの場においては些事だ。そんなことよりも、何よりも、何故俺を助けようと思ったのかが理解できなかった。俺は不死で、この程度喰らったところで何の意味も無い。いや、失念していた。俺を追ってきている魔法使いたちならともかく、初対面の相手が不老不死なんて見抜ける者はいない。あまりの事態に混乱していたようだ。

「っが！」

そんなことを一瞬のうちに思考しきると、魔法の射手がその子供、少女を打ち抜く。魔法の射手が当たったことにより少女の着ていたローブのフードがずれて、その子供が少女だったと言うことが解った。

そのフードの内より零れだした見事な美しい金色の髪に、噴き出す鮮血に俺は思わず、不覚にも、不謹慎にも見蕩れてしまった。その光景は間違いない、この世界に来てから見たものの中で一番美しいから。

あまりの美しさに天使が舞い降りた、と思ってしまった。どうか笑わないで欲しい。自称とはいえ神の存在を確認している俺にとっては、それも決してあり得ない事ではないからだ。この少女の美しさを目の当たりにしてしまっただけ、俺がそう思うのも無理からぬことだろう。

誤解を恐れずに言うならば、一目惚れしたと言ってもいい。

ドサリ、と音を立てて少女が地面に倒れ伏したことにより、俺はよ

うやくそんな馬鹿な思考から復帰することができた。

見ると、どうやらまだ息はある。まだ間に合う。自分を助けてくれたこの少女を今度は俺が助けよう。この世界で初めて手を差し伸べてくれたこの少女を助けよう。自らを犠牲にしてまで俺を助けようとしたのだ、ならば次は俺の番だ。

この子を救うためには、安全に治療を行うためには、可及的速やかに目の前の敵を消す必要がある。
ならば、文字通り消してやろう。

「マリエス・ラ・ヨハネ・アポカリプス」

始動キーを口にする。すると今まで攻撃してこなかった俺が急に魔法を唱え始めたことに、周りの魔法使いたちが警戒する。

ウンデトリ・ギンヌ・リトウス・イグニス
「火の精霊29柱」
サギタ・マギカ セリエス イグニス
魔法の射手連弾火の29矢」

右手に炎の矢

ウンデトリ・ギンヌ・リトウス・グラキアーレス
「氷の精霊29柱」
サギタ・マギカ セリエス グラキアーリス
魔法の射手連弾氷の29矢」

左手に氷の矢

それを敵に対して放たず、力技で手の内に強引に留まらせる。
そして、その相反する二つの魔法を――

「ウニソネン術式融合」

一つに合わせる。

『咸卦法』、という技術がある。それは、気と魔力という相反する、反発し合う二つのエネルギーを融合させ体の内外に纏うことによって、強大な戦闘力を得るというものである。アルデマ・アート究極技法と銘打たれるだけあり、習得は非常に難しい。反発し合う気と魔力を暴走しないように制御するというのは、それほど困難を極めるのだ。しかし、実のところこの二つのエネルギー反対の性質を持っているという訳ではない。むしろ似通っている性質を持っていると言ってもいいだろう。反発し合うのは偏に別物のエネルギーであるからだ。ならば完全に逆の性質を持つ、指向性を持たせたエネルギーを融合させることでさらに大きな威力を得ることができないか？

その答えがこれだ。

「コンプレティ・ネモリイレ・ユニヴァーサ
完走・万物を破壊しろ

「サギタ・マギカ セリエス エクスイートゥス
魔法の射手連弾消滅の29矢」

完成した消滅の力を敵に向けて放つ。

防御は不可能、ただの魔法の射手と侮るなかれ。その一矢、一矢が空間ごと敵を喰らい尽くす。この魔法の前ではいかなる魔法障壁と言えど障子紙ほども意味も持たない。

消滅の名を冠するに相応しく敵を一人残らず消し飛ばす。

あっさりと、これまでの逃走劇など嘘のように。

初めからこうしていれば良かったと心底思う。そうすれば、この少女は俺を庇い無用な怪我など負わずにすんだと言っのに。

後悔するのは後だ。今はあの少女を治療しなければ。俺の回復呪文を持ってすれば生きてさえいれば、まだ間に合う。

「大丈夫か？」

少女がわずかに俺の言葉に反応する。これなら間に合うな。そう思い治療しようと彼女に近寄る。

「……………何をしている？」

と、少女が俺の行動に疑問を持ったのか問いを投げてくる。

「無論、俺の元に舞い降りた天使の治療を。」

「……………はあ？」

少しくさい言い回しになってしまった。だが、この美しい少女を目の前に格好付けたくなっても仕方がない。男とは悲しい生き物だ。

「……………この傷は、不死殺し武器によってつけられたものだ。そう簡単には治すことはできない。」

「不死殺し？」

少女が聞き逃せないことを口にする。

「……………まさか、君も不老不死なのか？」

「君もだと？」

まさかお前もそうだと言うのか？」

「そうだが、話は後だ。」

今は治療を優先だ。不死殺しだろうが、なんだろうが、治せるはずだ。」

実は何度か不死殺しの武器というのは喰らったことがあるが、俺には効果が無かった。ならば、俺の不死を司る術式から作り出した魔法だ。そんなもの関係なく治せるはずだ。

メディケ・クラー・デー・イプスム
「『賢者よ、汝自身を治せ』」

「……っ」

唱えると、あの神が使っていた物とこの世界の魔法の理論を組み合わせた術式により構成される魔法陣が浮かび上がる。そして、彼女の体が淡く光り、一瞬でその傷を全て癒す。

「これで、完治したはずだが……。
体にどこか問題はあるか？」

「いや、どうやら本当に完治したようだな。」

体を動かし、問題が無いことを確かめた後少女は俺に話しかけてくる。

「まずは礼を言っておこう。」

「……だが聞きたいことが、色々ある。」

「それは俺も同感だ。」

「……でもまあ、その前にお互い名乗ろうか？」

そこでようやく俺たちはお互いの名を名乗りあった。

今、この瞬間に神に呪われた男と、神を呪った少女の道が交わった。

4話 今までとこれからについて

side エヴァンジェリン

「色々と聞きたいことはあるが、とりあえず一番気になることは、お前が不老不死ということだが。それは本当なのか？」

私を助けた男、神代恵と名乗った男に対し質問する。

「ああ、本当だ。

と言つか俺以外にも不老不死の人間がいるなんて、俺のほうが驚いたぐらいだ。」

……人間、か。

「……私は人間ではない。」

「人間じゃない？」

……じゃあ、やっぱり天使か？」

聞きにくいことを平気で聞いてくる奴だ、何故そこで天使なのかは知らないが。

「ケケケ、御主人が天使ダツテヨ。」

うるさい、黙っているアホ人形。

……私が吸血鬼だと言ったことを知ったらこの男もほかの人間たち同

様、私から離れていってしまうのだろうか。拒絶されてしまうのだろうか。だがそれを黙って一緒に行動することになっても、いずれ知られてしまうかもしれない。そうでなくても知られてしまうかも、とビクつきながら一緒に行動することなどしたくない。

「……私は、吸血鬼だ。」

「……それも賞金首になるほどの悪の魔法使いの、な。」

言った、言ってやった。いったいどんな反応をするのか。

「吸血鬼かあ。」

魔法はあるは、吸血鬼が実在するは、何もありだな。不老不死の俺が言うのもおかしいけど……。」

「……それだけか？」

「それだけって……？」

まさか今のは笑うところだったのか！？場を和ませようとして言った冗談だったのか！？

つく、だとしたら俺はなんという残酷な真似を……。」

「オイ御主人、コイツ真面目ナ顔シテ、トンデモナクアホナコト言ッテヤガルゼ？」

チャチャゼロ、お前は人のことを言えないくらいアホだから安心しろ。

「……そんなことよりも、

「……お前は私のことが怖くないのか？」

吸血鬼である私のことが、賞金首である私のことが。」

「怖くないか、と言われてもなあ。

俺のこと庇ってくれたし、俺も不老不死なんて人間から逸脱した存在だからなあ。全く怖くないな、うん。」

それに、俺も賞金首だしな、と笑う。その笑顔に少し心音が高鳴る気がした。

「……ああでも、君のその完成された神々でさえ嫉妬せずにはいられなさそうな美しさには、恐怖すら感じるかな。」

……後半は無視しておこう。

「ケケケ、御主人コイツオモシレーナ。」

……無視しておこう。

「そうだ、お前も不老不死と言ったが、どういう経緯でそうになったんだ。」

まさか、生まれた時からそうだった訳でもあるまい。」

その私の質問に表情を若干曇らせる。不躰な質問ではあるが、お互い様だ。

「……ああ、実は呪いをかけられたんだ。」

「呪い？」

人を不老不死にする呪い？聞いたことが無いな。

「それは、私のように吸血鬼になった、とかではなくてか？」

「違うな、少なくとも吸血鬼にはなっていないな。」

まあ、不老不死の時点で人間じゃないかもしれないけどな。」

と、そんな自嘲めいたこと呟いた後、ポツポツと詳細を語りだした。

話によれば、ある日突然見たこともない場所にいて、神を名乗る者が現れ前世の罪がどうかで、呪いをかけられたそうだ。さらに呪いを受ける以前の記憶を奪われているそうだ。

……それは、なんともまあ、

「つく、くくく。」

「ん？何か笑うところがあつたか？」

いや、神とか前世とか異世界とか、おかしい点は多々あつたけどさ。

「

「くくく、いや悪い。それもあるが、そうではなくてな。」

お前を突き飛ばしたときに思ったんだよ。お前のその容姿はここらでは目立つからな。

私と同じように謂れもない疑いをかけられ追われているのではないかと。私と同じように誰からも受け入れられずに追われる身となつていてのではないかと。

それで話を聞いて見れば思った以上に境遇が似ていてな。ついおかしくなってしまった。」

「境遇？」

そういえばエヴァンジェリンはどういう経緯で吸血鬼に？
言葉を返すようで悪いが、生まれたときからそうだった訳でもない
んだろ？」

む、相手の話を聞いてしまったからには答えぬ訳にもいかないか。

「ああ、私の場合はな……」

私が吸血鬼になった経緯、そして私を吸血鬼にした男に復讐し、住
んでいた城を出たことを話した。

「……なるほどな、確かに似ているな。
ある日突然気づいたらってところが特に。」

「それよりも、聞きたいことが増えた。
神とか前世とか異世界とか、な。」

確認しておくが、それは比喩的なものではないのか。」

「ああ、本当だ。」

自分で言っていてアホらしいとは思うがな。
でも説明するのも面倒だし、直接見せたほうが早いな。」

そう言う私のほうへ近寄ってきて、

「って！？な、何をするっ！？」

近づいてくると、おもむろに私のおでこ自分のおでこを合わせて
きた。

……恥ずかしいじゃないか。

「ケケケ、赤クナツテンゾ御主人。」

だから、貴様は黙っているボケ人形。

「いや、だから直接俺の記憶を見せようかと。説明するよりもそっちの方が早いし、解りやすいだろ？」

んじゃ、いくぞ。

マーテル・ムーサルム ムネーモシユネー

『ムーサ達の母ムネーモシユネーよ

アド・ゼー・ノース アリキアット

おのがもとへと我らを誘え』」

呪文を唱えた瞬間私の意識は飛ばされる。

……ここは。

気づくと何もない、どこまでも続く白い空間にいた。

「よし、成功したな。」

この魔法使うの初めてだったから、上手く行ってよかった。」

「ここが、お前の言っていた神とやらに会ったという場所か？」

「ああ、そうだ。」

つと、どうやら始まったようだぞ？」

そう言つと黒髪の男が現れる。見たこともない格好をしているが、確かにこの男、恵だった。恵が目覚めると、自分の置かれている状況が飲み込めていないようで、頬をつねり夢ではないか確認したり、

辺りの状況を確認したりしていた。

その後なにやら恵が、うんうんと唸り、何か考えていると、その目の前に誰かが現れた。

「あれが神、か。」

なんというか、存在が希薄？いや、曖昧と言ったほうがいいだろうか、妙に認識しづらい。

「まあ、あくまで自称なんだけどな。」

神と思しきそれと恵が話し始めるが、なんというか神というだけあって随分と人を見下した態度をとる奴じゃないか。

その持つて回った言い方といい、人を小馬鹿にしたような態度といふ気に入らないな。

その会話を見ていると、どんどん恵が意気消沈していくのが解る。詳しい説明もなく罰を与えるなんて言われれば誰でもそうなるか。横にいる恵に少し視線を移すと若干顔を顰めている。

ふと会話が途切れると、神を中心に見たことのない術式の魔法陣が展開される。

「——っ。これは……。」

思わず息を吞んでしまう。ただ記憶を映像として見ているだけだというのに威圧感が伝わってくる。神というだけあって態度だけでなく、持っている力も大きい。真祖の吸血鬼である自分と比べてもお大きな、途方もない開きがある。

これを実際に受けたらどれだけの威圧感を感じるか想像もつかない。

そして魔方陣の展開が終わると詠唱を始める。

『懇願することによって（デーシネ・ファータ）神々の運命が変えら（デウム・フレクティ）れるなどと望むな《スペクターレ・プレカンドー》』

いかなる人間にも《ヌツリー・エスト・ホミニー》永遠の幸福はない《ペルペトゥウム・ボヌム》』

すると、展開されていた魔法陣が恵の体へと流れ込んでいく。

魔法陣が入っていく度に苦しむその姿は尋常ではなく、何故発狂せずに済んだか疑問に思うほどだ。

やがて魔法陣が全て体に収まると、恵が意識を失い映像が終わりを迎える。

「……なんというか、あれが神かどうかは今一つ確信が持てないが、お前が凄まじい力を持った奴と出会いその体に不老不死の呪いを刻まれたということは納得した。」

「ん、解ってもらえて何より。」

あと、異世界云々の話だけど、さ。」

言いよどんでいるが、何かあるのか？

「……あのさ、俺。未来から来たっていったら笑う？」

未来だと？神の次は未来か。話がどんどん広がっていくな。ここまできると誇大妄想としか思えなくなってくるな。いや、だがさっき記憶を見てしまったしな。

「呪いをかけられる以前の記憶がないって言っただろう？それはあくまで自分自身についてなんだ。」

知識とかは抜け落ちてないんだよ。まあ、それもどこまで覚えていられてるんだか確認の仕様もないけどな。」

俺は西暦で言うところと2000年以降に生きていた、はずだ。覚えてないからこれも正確なのか解らないけどな。」

この世界に来てから約400年色々見て回ったけど大まかな歴史の流れは俺の知っている知識とほとんどずれがない。」

400年、私よりも随分と年上だな。」

……それは置いておいて、

「だがそれでは、何故異世界だと？それだけなら単に過去にただだけではないのか？」

「少なくとも、俺の元いた世界では魔法はもちろん気だつてない。気らしいものが無い訳じゃないが、この世界の物みたいに身体能力を著しく高めたり、気を飛ばして物理的な破壊力を持たせることなんてできなかった。」

それは……

「魔法が秘匿されているからではないのか？実はあったが知らなかっただけ、というほうが異世界などというよりも現実的だと思うが。」

「

「いや、魔法や気なんかを抜きにしても、この世界の人間は戦闘力や身体能力が高い人間が多すぎる。どう見ても常識の範疇から飛び出ている奴が多すぎる。」

それにあの神の言葉を鵜呑みにする訳でもないが、アイツの言い方からして元の世界ってことはないと思うんだよな。」

ふむ、言いたいことは解るが、

「まあ、これに関してはここでいくら議論しようが答えは出ないか。この話についてはいったん保留ということだ。」

じゃあ、話したから今度は俺が質問させてもらうぞ。」

いつの間にか互いに一つずつ質問しあう形になっているが、まあいいだろう。

「何だ？まだ聞きたいことでもあるのか？」

私が話せることは、もうほとんどないと思うが。」

「ああ、別にそんな大したことじゃないんだが。

吸血鬼ってやっぱ血とか吸うのか？」

あと、日の光とか十字架が苦手だったりするのか？」

何だ、そんなことが。本当に大したことじゃないな。

ハイ・デライトウォーカー

「いや、私は吸血鬼の真祖だからな。最初の頃こそ、そういった弱点もあつたが今では既に克服した。」

血も飲まなくても問題ない。せいぜいが魔力の補給に飲む程度だ。」

「へー、弱点克服してる吸血鬼ってまさしく最強なんじゃないか？
というか無敵と言ってもいいだろ、それ。」

「そうでもないさ。さっきの様に不覚をとることだってある。
それに不死性のことを言ったらお前のほうが上じゃないのか？」

それよりも、次は私が質問する番だな。」

「何でも聞いてくれ。答えられることなら何でも答える。
こんなに誰かと話したのは随分久しぶりだから気分がいい。
それに相手がこんな美少女だと聞かれてないことまでベラベラと喋
ってしまいそうだ。」

コイツはいちいち恥ずかしいことを言わんと気がすまないのか？
いや、容姿を褒められて嬉しくない訳ではないが……。

「ン？御主人マタ顔ガ……」

だからお前は黙っている……。

私は咳払いを一つし態度を繕ってから質問を再開する。

「聞きたいことはお前の使った魔法についてだが、治癒魔法につい
てはなんとなく予想がついた。

あの神とやらが使った術式を利用しているな？」

「ご名答。

一目で気づくとは驚きだ。」

「あとは、あの魔法使いどもを殲滅した魔法についてだが。
あれは正直よく見ていなかったたので解らん。
いったいどんな魔法なんだ？」

「あれは、やってることはかなり単純なんだよ。
咸卦法つてあるだろ？あれを呪文でやったつてだけの話なんだよ。
まあ習得は文字通り血が滲むというか、血が吹き出るレベルの傷を

負いながらになるから俺みたいな不死性持っていないと習得前に死ぬ
と思うけど。」

なるほど、咸卦法か。思いついても実践する奴はいないだろうな。
費用対効果を考えたとき、そんなリスキーな物を習得するよりも普
通に高位呪文でも覚えたほうが手っ取り早いだろうしな。

「……とりあえず、私の聞きたいことはこれで終わりだ。
そっちは、まだ何か聞きたいことはあるか？」

「ああ、聞きたいこと、というよりも提案なんだけどいいか？」

提案？妙に言いづらそうだが、いつたいなんだ？

「ほら、お互い不老不死なんて珍しい存在だろ？」

そんな二人が出会ったんだ、袖振り合うも多生の縁と言うし。

……これから一緒に行かないか？」

ほう、それは——願ってもない。

「フフ、そうかそうか。」

お前がどうしても言うなら、その提案に乗るのも吝かではないな。
私は別にどうでもいいが、私と一緒にいたいとそこまで切実に願わ
れたはその想いを無碍にする訳にもいくまい。」

「御主人ウレシソーダナ、オイ。」

今は気分がいい、何とでも言うがいいボケ人形。

「ああ、俺はどうしてもエヴァンジェリンと一緒に行きたい。」

随分とストレートに言ってくるじゃないか。
そこまで言われれば仕方がない。

「いいだろう、その提案受けさせてもらおう。

あと、私のことはエヴァでいいぞ、メグム？」

そう言って手を差し出す。

メグムは一瞬戸惑った顔をしたが、すぐに理解したようでこちらの
手を握り握手をしてくる。

「ああ、エヴァ、これから長い付き合いになるだろうからよろしく
な。」

「ああ、よろしく。」

こうして、私とメグムは行動を共にすることになった。

オマケ

「それじゃあ、早速行くか。」

そういつてエヴァンジェリンが立ち上がると、少しふらつく。
以前までならばそこで膝をついてしまいが、今は――

「おっと、大丈夫か。」

横から恵が手で支える。エヴァンジェリンはそれだけのことがどうしようもなく嬉しく感じた。

「ああ、大丈夫だ。

奴らに負われていた所為で少し魔力を使いすぎただけだ。
休めば回復する。」

「魔力、か。

そういえば血を飲むと魔力を補給できるって言ってたけど、俺の血で良かったら飲むか？」

恵が提案するが、エヴァンジェリンは少し逡巡する。

「しかし、それはいいのか？」

「俺は血をどんなに流しても、体の破損箇所として再生されるから何の問題もないと思うけど。」

その言葉を聞きエヴァンジェリンは決意したように頷く。

「そうだな、ならその言葉に甘えさせてもらうとするか。
……少しかがんでくれ。首筋に口が届かん。」

「？ 血を飲むだけなら腕とかでもいいんじゃないか？」

「……そこは様式美というやつだよ。
吸血鬼といえば首筋から血を飲むと相場が決まっている。」

「そんなもんか……」

エヴァンジェリンのその言葉に恵は軽く納得し、言われたようにかがむ。

が、彼女の従者の人形がボソリと恵には聞こえないように、

「ケケケ、下心丸見エダナ御主人。」

なんて呟いているが当の彼女は無視を決め込んでいる。
そして、かがんだ恵の首筋にゆつくりとその牙を突き立てる。ズブリと牙が肌に食い込み侵入していく感覚に酔いしれながら、流れ出してきた血を一口すすする。
すると、

「——っ」

何かに取り憑かれたかのように一心不乱にその血を飲み始める。
その様子に従者の人形が気づく。

「ン？御主人ナンカ変ジャネエ力？」

「あ、そういえば俺の血はなんか特殊だった気が……。」

「……。」

その恵の言葉に人形も無言になってしまふ。

しばらくその場を静寂が支配し、響くのは血を吸う音のみとなる。

そしてそのまま数分が経ち、ようやくエヴァンジェリンが血を飲み終えると、咳払いをし自身の先程までの醜態を取り繕う。そして、冷静さを装い恵に問いかける。

「何だ、お前の血はいつたい何なんだっ。」

「……何か問題があったか？」

態度は冷静さを装っているが彼女の顔はまだ赤いままで、それに少し気まずそうに恵が聞き返す。

「いや、問題はないが。」

魔力保有量は多い、はつきり言って私以上と言ってもいい。

だが味は……美味しい。いや、美味すぎる。

一口飲んだだけで、夢中になってしまふ程だ。こんなことは初めてだ。」

その答えに恵はあの不老不死の呪いの影響の一つではないか、という意見を述べる。

それに対し彼女は少し考え始める。

しかし、

「何か問題があるなら、以降俺の血を飲むのは止めておくか？」

恵がそう問うと、彼女は思考から意識を引き上げ顔を赤くし、

「いや、特に問題があるわけでもないし、これからチョコチョコ飲ませてもらう。」

そう返すのであった。

4話 今までとこれからについて（後書き）

オチがない。

5話 ヴラド・シエペシュ（前書き）

今回サブタイトルの内容はあまり関係ありません。

5話 ヴラド・ツェペシュ

「それで恵、どこか行く当てはあるのか」

「いや、ないな。逃亡中だったから目的地があったわけでもないしな。」

意気揚々と旅を再開した恵とエヴァンジェリンだったが、お互いに行く当てがなかった。逃亡生活を続け各地を転々としていた二人には無理からぬことなのだが。それはお互い承知していたためか特に何も言わずにいたが、エヴァンジェリンには先程から気になっていたことがあった。先程の目的地についての質問もそれを誤魔化すためだったのだが、ついに我慢できずにそれを口にしてしまう。

「……おいチャチャゼロ、何故お前はメグムの頭の上に乗っているんだ」

そう、彼女の従者であるチャチャゼロが恵の頭の上に乗っているのだ。それも出発してからずっと、である。あまりにも自然にそこに収まったため、エヴァンジェリンはおろか、恵すらも今まで何も突っ込まなかったのである。

「高クテ、イイ眺メダゼ」

チャチャゼロのその返しも何の理由にもなっていないものだった。

「そんなものは理由になっていないだろう、理由がないならさっさと降りろ」

そんなチャチャゼロの答えにエヴァンジェリンはこめかみを引くつかせながら文句を言うが、

「アアン？別に恵八何モ文句無エミテエダシ、イイジャネエカ」

チャチャゼロの言うことも、もつともである。そもそも乗られている恵が一言も文句を言わないので、チャチャゼロがそこをどく必要などない。

しかし、それでエヴァンジェリンが納得するはずもなく、

「メグムもメグムだっ！何か言ったらどうだ！？」

その矛先が恵にも向かう。

しかし当の恵は本当に気にしていないようで、

「え？いや、全然重くもないし乗っていたいなら、別に乗っていてもいいけど」

「ケケケ、ホラ御主人、本人カラモ許可ガ下リタゼ？」

その言葉にエヴァンジェリンの中で何かが切れた。

「くっつ、だったら私が乗るからお前はそこからどけっ！」

エヴァンジェリンはそこが不満だったのだ。何故従者の人形が主人を差し置いて恵とそんなにも密着しているのか、と。そう文句を言っただけでよかったのだ。だからと言って直接そんなことを言うのは気恥ずかしいので、遠回しに言っていたのだ。しかし、それでは一向にどきそうもないので、ついに本音を漏らしてしまう。その自分

が犯した失態に彼女は赤面してしまうが、

「ああ、そうかエヴァと俺じゃ結構歩幅に差があるし歩きづらかったかな。」

「ただ今は、チャチャゼロが乗ってるからこれで我慢してくれ」

と、そんなエヴァの様子を察して恵がエヴァを横抱きに抱え上げる。横抱き、そう、いわゆるお姫様抱っこと言われるものだ。

「——っ」

その恵の行動に先程とは違う理由で顔を朱に染めてしまう。そしていきなりのことと言葉を失ってしまう。そんな様子に恵は苦笑してしまう。

「違ったかな？嫌だったら下ろすから言ってくれ」

恵のその言葉にエヴァンジェリンは、未だ赤い頬を見せまいとそっぽを向いて答える。

「……間違ってない。嫌でもないから下ろさなくていい」

その答えに、恵は苦笑をさらに濃くする。

「ん。それは何より。」

完治したとは言え、さっきまで怪我人だったんだから、遠慮するなよ？」

エヴァンジェリンはそれには答えず、赤い顔を隠すように恵の胸に顔を押し付けるのだった。

「ケケケ、恵二会ツテカラ御主人ハ赤クナツテバツカダナ」

そのチャチャゼロの呟きには誰も答えず恵は再び歩き始めた。

side 恵

あの後、目的地もなくどこへ行こうかと迷っていたが、あることを思いつきまずはルーマニアに訪れた。15世紀後半ルーマニアといえはあることが思い浮かぶだろう。

そう、ワラキア公ヴラド・ツェペシュだ。ドラキュラ伯爵のモデルになったと言われている串刺し公その人である。

俺の知る史実上では、例え貴族であっても反逆したものは串刺しに処す、などの残虐な行為から串刺し公と呼ばれ、そこから吸血鬼と重ねられたらしいのだが。この世界ではもしかしたら、ということがあるかもしれない。何せ今、俺の腕に収まっている可憐な美少女が吸血鬼なのである。絶対にないと否定する材料などないのだ。

「メグム、何か目的があつてここまで来たみたいだが、いったい何なんだ？」

そろそろ教えてくれないんじゃないか？」

俺の腕に抱かれながらエヴァが尋ねてくる。チャチャゼロと一悶着があつてからエヴァは、度々俺に抱っこをねだってくるようになった。最初はおずおずと恥ずかしそうに頼んできていたのだが、今はもう慣れたものだ。俺のほうに両手を伸ばし無言で見つめてくるの

だ。その愛くるしさと云ったら、筆舌に尽くしがたい。最初のように恥ずかしそうなのも可愛らしいのだが、今のようには遠慮なしに甘えてきてくれる姿は俺の理性を揺るがしてくるほどだ。想像してみたい。まるで、精巧にできたビスクドールのごとく完璧と言っても過言ではないほどの美しさを携えた少女が躊躇いなく自分に甘えてくる姿を。わずかな警戒心も抱くことなく自分にその身を委ねてきてくれる姿を。

あらかじめ言うておくが俺は断じてロリコンではない。どちらかと言えば、大人らしい女性のほうが好みなのだ。しかし、だがしかしエヴァを前にしては、そんな好みがどうかそんなものは彼方へ追いやられてしまう。以前俺は、初めてエヴァをこの目に捉えたときに、そのあまりの美しさに天使ではないかと勘違いしてしまったが、今ならそれは間違いであつたと断言することができる。仮にこの世界に天使なんてものが実在したとしても、エヴァより美しいなどありえないだろう。それほどまでに、エヴァの美しさは完成されているのだ。時折、エヴァが吸血鬼にならずこのまま成長していたらどれほどの美女になったのか、と思ってしまうが詮無きことである。

もちろん、成長していれば美を司る女神であるところのアフロディテでさえ、その足元にさえ及ばない程の美女になっていることは疑いようもない。だがしかし、先程述べたとおりエヴァの美しさは完成している。滑らかでふわふわの金髪然り、キメ細やかな白い肌然り、吸い込まれてしまいそうな大きな瞳然り、吸血鬼の特徴である鋭い牙でさえその可愛らしさを引き立てる要因になっている。その不遜な態度も思わず抱きしめたくなくなってしまふもので、決して俺を不快にさせることはない。

それに、エヴァが吸血鬼になっていなければ、こうして一緒にいるどころか、出会うことさえなかっただろう。こんなことを言つては不謹慎なのだがエヴァが吸血鬼になったことは、俺にとって幸福なことだったのだろう。もちろん、エヴァを不幸のどん底に叩き落したそれには怒りがわいてくる。しかし、この幸福を享受する俺がそ

れに対して怒りを覚えるのも身勝手なことなのかもしれない。

閑話休題。

話が逸れたな。

「ああ、実は俺の知る歴史上でこの領主が吸血鬼なんて呼ばれている人物なんだ。もちろん俺の世界でのそれは、単なる物語のモデルとしてただけだ。

吸血鬼が実在する世界なんだから、もしかしたら本物かもしれないと思って。本物の吸血鬼だとしたら同じ不老不死として顔を見ておきたいと思ってな。

……ん？エヴァどうした？」

エヴァの質問に答えたのだが、反応がない。エヴァの様子を窺うと耳まで赤くして俯いている。これはどういうことだ。

「ケケケ、恵サツキノ言葉、全部口ニ出シテダゼ」

声に出していたか。まあ聞かれて困ることでもない。俺の真摯な偽りなき気持ちだ。

そう考えていると、エヴァが顔の赤いまま話しかけてくる。

「メグム、確かに私は吸血鬼になったことは不幸だと思っている。だが、お前に出会えたのは幸せなことだと思うよ」

「ありがとう、エヴァ。その一言に救われるよ」

そう返すと、エヴァはまた恥ずかしくなったのかフンツと鼻を鳴らし、そっぽを向いてしまう。

俺はその様子を苦笑してしまうが、それには触れずに歩みを再開し

た。

「よし、それじゃあドラキュラ公の姿を拝みにいきますか」

結果、ヴラド・ツェペシュはただの人間だった。

初見で既にあれは違うと直感のようなものが働いたのだが、確信が持てないため俺とエヴァはしばらくそこにいついた。一ヶ所に留まるのは危険かとも考えたが、そこはヴラドがいい隠れ蓑になつてくれたというところだろうか。ここに来たとき既にヴラドの悪名は周辺に届いていたので俺たちのことなど目立たなかったのだ。

そして、その様子を遠目から確認すること十数年、ヴラドは着実に年を取っていることが見て取れた。それだけで、もはや確定したようなものだったのだが、幽閉から開放されて数年後ヴラドは戦死することになった。

それを見届けた後、そろそろこの地に留まるのも無理があつたので、俺たちはその地を後にした。

「それにしても、ヴラドはただの人間だったな」

「まあ、そう易々と私と同じ吸血鬼などいるはずがないからな。だが、久々に長い間一ヶ所に留まれたのは良かった。やはり、どこ

か安住できる地というのは欲しいものだな。

次はどこか、そういう所を探すことにしないか？」

確かにこの世界に来てから、あんなに長い間同じ場所に住んだのは珍しいことだった。

久しぶりに逃亡生活から逃れ、安らかな日々を過ごすことができた。そんな地を探す、か。考えたことがなかったな。そもそも不老不死なんて存在を看過し、受け入れてくれるなんてありえないことだと思っていたからな。

しかし、特に目的もない現在そんな地を探すのもいいかもしれない。

「そうだな。それも良さそうだ。

目的もなくただフラフラとしているよりも断然有意義そうだ」

「それでは決まりだな」

そうして俺とエヴァは安寧の地を求めて再び旅に出るのだった。

6話 仮契約

side 恵

安住の地を探し、俺たちは魔法世界に訪れていた。△ンドゥス・マギクス

魔法世界、あるとは知っていたが、今まで訪れたことはなかった。自身が賞金首なのだ、態々敵の多いこの地に来る必要を感じなかったし、意味もないと思っていた。しかし、今回はそのリスクを犯してまで魔法世界に来た。というのも普通の人間たちから受け入れてもらえなくても、魔法世界ならばどこかに吸血鬼や不老不死なんて存在も受け入れてくれる場所があるのではないかと考えたのだ。扉を通るときは冷や冷やしたが、思いのほか警備が緩く、認識阻害魔法と幻術による年齢詐称ですんなりと通ることができた。どうやら魔法世界の民衆の間では旧世界△ンドゥス・ウェトウスのことは、伝説かお伽噺の存在だと思われるらしいかった。一部の者にしか旧世界やゲートの存在は知られておらず、自然と警備の手も薄くなっているのだ。幸先が良かったので案外簡単に俺たちを受け入れてくれる場所が見つかるのでは、と期待を抱いてしまった。

しかし、現実というのはそう甘くないみたいだ。

「なかなかうまくいかないもんだなあ」

「仕方ないさ。いくら魔法世界の住人とはいえ、私たちのような吸血鬼や不老不死なんて存在そう簡単に受け入れられんさ」

俺たちは魔法世界においても受け入れられる存在ではなかったようだ。この世界は人間だけでなく獣人や魔獣、亜人など様々な種族が

存在している。そんな世界だからこそ受け入れてくれると期待を抱いたのだが、不老不死という存在は思っていた以上に忌避されてしまうようだ。

それも当然かもしれない。例えどんな種族がいようと、それらは全て生き物なのである。俺たちとは違い限られた時間を生き、そして死んでいく。それこそが自然の摂理であり、生き物としての正しいあり方だ。どんな姿形をしていても生き物であるならばそれから逃れられず、それを可能としている俺たちに畏怖を抱くのも無理のないことだ。

「ケケケ、オレ八人ヲ切レテ楽シイケドナ」

「ハア」

そのチャチャゼロの言葉に思わず溜息が出る。

魔法世界に来たことよって、俺たちの名前は爆発的に広まりつつあるのだ。吸血鬼と不老不死の男が、住む場所を探して各地を点々している、と。もともとが賞金首だったのも効いて、賞金稼ぎなどの魔法使いの襲撃量が今までの比ではなくなってきた。マギステル・マギ

その上、ここ最近になってきて賞金稼ぎ以外にも立派な魔法使いと呼ばれるものをはじめとした、正義の名において悪を討つ、といったノリの連中が湧いてきているのだ。金のために賞金首を、というのなら理解できるのだが、そういう正義を謳う奴らには若干であるが辟易している。受け入れられないなら、せめて放っておいてほしい。俺たちは基本的に向こうから攻撃してこなければ、何もする気はないのだから。だが正義の味方連中曰く、俺たちは存在が既に悪であるらしい。

これも俺を凹ませている原因の一つになっている。魔法世界に行こうと発案したのが俺なのだ。その所為で、こういった敵がどんどん増えているという事実には俺は責任を感じていた。

それが、顔に出ていたのかエヴァに指摘されてしまう。

「責任を感じているのか？」

だったら気にする必要なんてないぞ、メグム。

私たちのような存在は、生きていればそれだけで敵が増えていくようなものだ。

ここへ来なかったとしても、敵が増えないなんてことはなかったさ」

「そうは言ってもなあ……」

エヴァが慰めてくれるのだが、そう割り切れるものではない。俺が原因でエヴァを危険に曝す機会が増えるのは、あまり気持ちのいいものではない。

そんな俺の様子を見たエヴァは口の端をニッと持ち上げ、

「そうか、そんなに責任を感じているのか。」

ならば、その責任として私と契約でもしてもらおうか？
バクテリオ

もちろんメグムが従者で、私が主だ。」

と言ってくるが、

「ああ、全然構わないぞ。」

と言つかこっちがお願いしたいくらいだ」

そんなものは俺にとってなんら罰にならない。

エヴァと仮契約なんてむしろご褒美にしかないだろ。

「えっ？」

ち、ちよっと待て」

「ん？どうしたエヴァ、急に取り乱して」

さっきまでの意地の悪そうな笑みを崩して急に慌てだしたエヴァ。いったいどうしたのだろうか。俺の腕の中でふんぞり返っている愛らしいエヴァをもっと愛でていたかったのだ。いや、こうしてアワアワと取り乱しているエヴァも可愛いからいいか。

「わ、私の聞き間違いかもしれないから、もう一度聞いておくが私と仮契約してもいいと言ったか？」

「ああ、言った。」

俺としては断られる可能性があると思っていたことに驚きなんだがな。

それに最初に会ったときに言っただろ？一目惚れだったと」

「そ、そんなの私は聞いてないぞ！？」

あれ？言っただけだったか。そう言われると、言っていない気がする。ただ心の中で思っただけだったな、そういえば。

「そうか、言っただけだったのか。じゃあ、改めて言っておこうか。」

一目見たときからエヴァの虜だった、永遠に共にいたいと思っっている。仮契約だろうと何だろうと、エヴァの全てを受け入れて見せる」

腕の中に収まっているエヴァに語りかける。俺の思いの丈を込めて。

「フフフ。そうか、メグムはそんなに私と一緒にいたいのか。」

そうか、そうか。まったくメグムは仕様がないうた。

なら、早速仮契約の準備だ」

エヴァはそう言つと俺の腕から降りて、機嫌が良さそうに仮契約の魔方阵を地面に描いていく。

描き終わるとエヴァはその魔方阵内に早速入り俺を誘う。

「よし、メグム魔方阵の上に乗れ」

その言葉に従い魔方阵の上に立ち、エヴァと向かい合う。

「私は悪の魔法使いだ。一度手に入れものを二度と手放すつもりはないぞ？」

それでも本当にいいのか？」

エヴァが俺に覚悟を問うが、

「当たり前だろ。むしろ捨てられてもついていくさ。
言っておくが、俺はこう見えても一途でしつこく、嫉妬深いぞ？
覚悟を決めるなら、俺じゃなくてエヴァの方だな」

この世界で初めて手にした温もりを逃すはずがない。

「ふん、それこそ今更だな。

お前が私のことを好きで好きで、仕方がないことなど知っている。
それに捨てるつもりなどないさ、永遠に私のものにしてやる」

永遠、それは俺たちにとっては正しく永遠。比喻ではなく、老いる

ことなく、死ぬこともない俺たちにとってその言葉は、有限の時間しか持たない者たちのそれよりも遥かに重い。それをエヴァは口にした。

「ああ、それじゃあ」

俺は少しかがんでエヴァと目線の高さを合わせる。

エヴァと目が合いお互い離せなくなる。

「エヴァ……」

「メグム……」

そして、エヴァがその目を閉じ、俺を待つ体勢になる。

徐々にその距離を詰めついにその唇が重なる。

その瞬間、魔方阵から更なる光がこぼれ、エヴァの口から甘い声が漏れる。

「っん……」

その声に俺の理性は脆くも崩れ去った。

俺は自分の舌をエヴァの口内に突き入れた。

「——っ!？」

エヴァはそれに驚き、閉じていた目を見開き俺の舌を噛んでしまう。エヴァの鋭い牙により俺の舌からわずかばかり出血する。もちろんすぐに再生するが、それでも俺の血をエヴァは摂取してしまう。それにより、エヴァは興奮状態に陥る。

俺はその隙にエヴァの舌を絡めとるように、自分の舌を動かしながら

らエヴァの口内を舐る。

「っん、……はぁっ……んくっ……んっメグム……」

徐々にエヴァの目からも理性の光が消え、自ら舌を絡めてくるようになる。お互いの口の中を舌が行き来し、舌を絡めあう。エヴァが離れないように腕を腰に回し、空いたほうの手をエヴァの頭の後ろに添える。そうすると、いつの間にかエヴァも両腕を俺の首に回し、離れないように強く力を込めてくる。

エヴァの口内に俺の唾液を送ってやると、少し驚くがすぐに嚥下する。そのお返しとばかりに、エヴァが自分の唾液を送ってくるが全て飲み干す。

「——んっ……ちゅっ……ちゅぶ……ふぁっ」

ピチャピチャとグチュグチュと辺りに淫靡な音が響く。

そこで、いったん俺たちは唇を離す。二人の唇の間に糸が引く。お互いに見つめあうと、エヴァの瞳に熱がこもり、潤んでいた。その瞳には確かな情欲が浮かんでいた。

そして、ついに俺はエヴァをその場に押し倒し――

「オイ、ソロソロソノ辺ニシテオイタ方ガイインジャネエカ？」

従者の人形、チャチャゼロによってそれは止められた。

「ケケケ、流石ニ野外デソレ以上ハマズイダロ？」

チャチャゼロのその言葉にようやく俺もエヴァも自分たちの状態に

気がつく。

屋外で見た目二十代の男が、見た目十歳の少女を押し倒している。うん、誰かに見られたら非常にまずいな。いや、辺りに人がいないことを確認していたので、それは大丈夫だ。しかし、それを差し引いても屋外でそれはまずいか。

俺とエヴァは名残惜しさを感じつつも、無言で離れ居住まいを正す。お互いが落ち着いたところで、エヴァが咳払いをして何事もなかったかのように話し始める。未だ顔は赤いままなのだが。

「これで、メグムは私の従者だ。
先程言ったとおり、永遠に私のものだ。絶対に手放さなんからな」
そう言つてエヴァはその手にもっているものを俺に渡してくる。

「これが、メグムの仮契約カードのコピーだ、渡しておくぞ」

「ああ、大切にするよ。
俺とエヴァの絆をあらわす物だからな」

俺のその答えに満足したのか、エヴァはいつになく上機嫌で俺の腕の中に戻ってきた。

こうして、俺とエヴァの絆はより深まり、今までよりもその距離は近くなっていた。

7話 魔王

△ンドゥス・マギクス
魔法世界

現在、ここ魔法世界でたった三人、正確には二人と一体を討伐するという目的のためだけに約一万人からなる一個師団が編成されていた。

約百年前ほどから、この魔法世界に吸血鬼と不老不死の男が現れ、各地を転々とし始めた。その二人には賞金が懸けられており、腕自慢の賞金稼ぎや立派な魔法使いたちが、もはや数え切れないほど返り討ちにあっていた。そしてその二人の目的も解らず、訪れた土地を一つの例外もなく恐怖と絶望に叩き落していることから、やがて魔王と呼ばれた。

そうになると、自分の腕に覚えがあるものは、こぞつてその魔王と呼ばれる存在を打倒しようと躍起になり始めた。それは、単なる賞金首として扱われている時の比ではなかった。

しかし、例えばどんな屈強な戦士でも、どんな賢明な魔法使いであっても、その二人と一体の従者を打倒するには至らなかった。元から強く適う者などいないのでは、という強さを持っていた彼らだが、話を聞いていると厄介なことに、どうやらその強さは年々増しているらしかった。

子供や女など力無い者は度々見逃される、という事例が何件も報告されているが、それでも彼らを打倒せんと挑んだ者のほとんどが戻ることはなかった。

その三人との戦いは常に苛烈を極めるものであった。

従者の人形はその身の丈の何倍もある様々な刃物を用いて戦う。

強さもさることながらその残虐な性格と戦い方が恐れられ、『キリング殺戮人形』と呼ばれた。

吸血鬼の少女は、闇の眷属の膨大な魔力を活かし、桁違いの威力の強力な高位呪文を従者が戦っている間に連発し、あらゆる敵を殲滅した。

少女はその闇の眷属と呼ぶに相応しい圧倒的な実力から『ダーク・エヴァンジェ闇の福音』と呼ばれた。

そして、魔王と呼ばれる不老の男は、見たこともない強力無比な魔法を扱い全てを消滅させた。それは、人も魔法も無機物も、皆等しく消し飛ばした。破壊ではなく消滅、その魔法は対峙した全てを跡形もなく消し去る。その様子は、この世の終わりを感じさせるには十分すぎる光景であり、その男こそが魔王だと確信させるものだった。

それによって、魔王と呼ばれる男は『フィニス・エクス・レジェンダ終焉の導き』の二つ名を持つことになった。

現在集められている一個師団は、その二人と一体を打倒するためだけに編成された部隊だ。魔王といえば、勇者が倒すのが王道ではあるが、この時代には残念ながらそれほどの器を持った英雄が現れることはなかった。個人で魔王を打倒するほどの実力を持つものが現れなかったからこそ、こうして魔王討伐部隊が編成されたということだ。

魔王を打倒するほど、とは言わないが集まった者たちは誰もが実力者であり、己の力に自信を持っていた。

だからこそ、たった三人を相手にこれほどまでの戦力が必要なのか、と疑問を抱かずにいらなかった。確かにその三人は強いのだろう。魔王と言われるほどの存在なのだ、弱いはずがない。中途半端な実

力で、そこまで呼ばれるようになることはないはずだ。

だからと言って、たった三人を相手に一万人である。普通に考えれば、過剰戦力もいいところだ。

誰もが思っていた、ここまでの戦力が揃っていれば流石に魔王といえども倒すことができるだろう、と。どんなに強くても、それは所詮個人の戦力でありできることは限られている、と。

だがそれは、無常にも裏切られることになる。

戦局は一方的なものとなっていた。

数で有利な師団が魔王たち三人を圧倒していた、という訳ではない。むしろ逆だった。

たった三人を相手に、一万からなる一個師団が一方的にやられている状態だ。

魔王側の三人を除いてこの場にいる全ての人間がありえない、どうしてこうなったんだ、そんな気持ちでいっぱいだった。

一個師団は魔王の居城がたたずむ、龍山山脈へと赴いたのだが、まず、それが間違いであった。そこは言ってしまうえばラストダンジョン、敵を阻むための罠が張り巡らされていた。竜種対策はしていたものの、罠に関しては考えを及ばせていなかった。その所為で部隊の人間は誰もが二の足を踏む状況となった。

最初、それに対し危機感を持つものは少なかった。

「魔王と言っからどれほどの者かと思えば、こんな罠を仕掛けているとは案外小心者だな。」

誰もが、そんな心境だった。一万人もの人間が集まっていたことで、気が大きくなっていたということもあるのだろう。魔王と呼ばれている彼らを直接見たことがない所為で、彼らの実力を正確に把握できていないということも原因だったかもしれない。何より、まだまだ魔王の住む城からはかなり離れており、魔王が自分たちの接近に気づいているとは誰も思っていなかった。理由は幾つも存在するが、とにかく彼らは油断していた。既にそこは彼らのテリトリーだったというのに。

「マレウス・アクイローニス
氷神の戦鎚」

それは、唐突だった。

巨大な氷塊が、未だ罨で足止めされている一個師団に叩き付けられた。

完全に気を抜いていた隊員たちはその一撃だけで、百人単位が潰される。そこでようやく臨戦態勢になる隊員たち。しかし、なつたところでは敵の攻撃がやむわけでもなく、体勢が立ち直る前に、空中にいる吸血鬼の少女、『闇の福音』から氷神の戦鎚が幾つも放たれる。体勢を立て直し、冷静さを取り戻した人間からその攻撃に対応し、反撃を開始する。腕に覚えがある集団だけあり、反撃を始めればその単調な攻撃に対応する程度は簡単なことだった。

あるものは避け、あるものは防ぎ、またあるものはその氷塊を砕いて見せた。そうして、闇の福音の攻撃を掻い潜りあるものは浮遊術で、あるものは虚空瞬動、そしてまたあるものは杖による飛行で空中の闇の福音に迫っていく。

「いくらなんでも舐めすぎだぜ、闇の福音！」

「ほう、ここに攻めて来るあたり雑魚ばかりではないということか」

何人もの実力者が迫ってきては、流石の闇の福音といえど呪文詠唱を続けるのは困難だったらしく、魔法の詠唱を切り上げて距離をとった。それに対し、逃がさないとばかりに魔法使いたちが無数の攻撃魔法を放つが、避けられ、魔法障壁で防がれ、一部の魔法にいたっては驚くべきことに吸収されていた。

そして、敵から十分な距離をとったところで何をするのかと思えば、彼女の二つ名の一つである『人形使い』^{ドール・マスター}に相応しく人形を転移させ操り始めた。突如として現れた人形、その数は千にも及び、彼女に迫ってきていた敵のことごとくを撃墜した。

空中で激戦が繰り広げられている頃、地上でもまた激戦と呼ぶに相応しい戦いが起こっていた。

飛行手段を持たない者は、地上から魔法や気弾を飛ばしていたが、それはやってきた彼女の従者、『殺戮人形』チャチャゼロによって止められた。その人形は噂に違わず己の倍以上の大きさの刀剣類を扱い敵を駆逐していった。

「ケケケ、コンナニ沢山攻メテクンノハ初メテナ。
切りガイガアルゼ」

「人形風情がなめるなっ！」

それは、人形ならではの、人には不可能な動きを駆使して並み居る猛者たちを次々に切り伏せていった。その戦いぶりは正しく人形、感情無き戦闘機械と呼ぶに相応しいものだった。その姿には歴戦の猛者たちといえども、背中に薄ら寒いものを覚えるた。

そんな芳しくない戦況の中、ついに目的の人物、大本命である魔王

が現れる。

「あれが、魔王……。」

『終焉の導き』……………」

誰が呟いたのか、いつの間にか闇の福音のそばにその姿はあった。その姿はどこまでも黒いものだった。漆黒の髪に、それと同じく漆黒の髪、更になら下まで黒を基調とした服装は魔王と呼ぶに相応しい姿であり、放つ存在感もその場に在るほとんどの者が圧倒されるものだった。

だがしかし、それで折れるようなものにはおらず、誰もがその最終目標、言うなればラスボスと言うべき存在に戦意を昂ぶらなかった。

「魔王が姿を現したぞっ！」

奴を倒せば、こちらの勝ちだ！」

その声に不利な戦況にも拘らず、誰もが雄たけびを上げた。己を鼓舞するように叫び、魔王に突っ込んでいく。

しかし、無常にもそれは魔王には決して届かなかった。

それを従者の人形や闇の福音が黙ってみているはずもなく、魔王に向かうものを切り伏せ、叩き潰し、凍りつかせ、吹き飛ばした。

その隙に魔王は呪文詠唱を始める。それは広範囲殲滅魔法であり、放たせるわけに訳にはいかない。誰もが止めようと魔王に攻撃を通してと更に勢いを増す。

だがしかし、

「っ、邪魔をするな、闇の福音！」

「馬鹿か貴様らは？」

邪魔をしないはずがないだろう」

それを止めようにも、闇の福音が操る千体の人形とチャチャゼロを突破できるものはおらず、いつしか魔王の詠唱も終盤に差し掛かり、それが放たれるかと思ったその時、魔王はそれを放たず、自らに取り込んだ。

ステージネット コンプレクシオン
「術式固定！ 掌握！」
プロ・アルマティオーネ
術式兵装

カルミナ・アビシャル
『深淵魔王』」

その見たこともない、恐らくは魔王のオリジナル呪文であろうそれを取り込んだ魔王の姿に誰もが戦慄した。

その黒かった姿が白く染まっていた。漆黒の髪は完全に色が抜け落ちたように真っ白になっており、体全体が淡く白い輝きを放ちその姿の輪郭を曖昧なものにしていた。

そして、魔王がその閉じていた目を見開いたとき更なる恐怖がそこにいたものを襲った。

黒かった瞳は、紫色に輝いていた。それは禍々しく、毒々しく、見ているだけで命を吸い取られてしまうのではないかと錯覚させるものだった。

「深淵魔王……………」

その姿に本物の、真の魔王を降臨させてしまったと、その場にいる皆が恐怖した。

そして真の魔王の攻撃が始まる。

それはあまりにも単純明快なものだった。

突っ込んできた。ただ自分たちに向かい魔王が直進してきたのだ。確かにそれは凄まじい速さではあるが、直線の起動を捕らえるのはそれほど難しくはない。故にそれを撃墜しようと攻撃を仕掛ける。無数の魔法や気弾が魔王に迫る。

しかし、それは一つ残らず魔王に当たった瞬間一つの例外なく消えてなくなった。

「……え？」

それは誰の漏らした声だったのだろうか。もしかしたら攻撃を放った全ての人間が漏らしてしまった声かもしれない。それほどに不可解な光景だった。

防がれるでもなく当たった瞬間に魔法や気弾が消えてなくなる光景は悪夢以外の何ものでもなかった。

しかし、それでも諦めることはなく接近戦の得意なものが魔王に向かっていく。だが、魔王にはそれすらも届くことはなかった。

剣で切りつければ剣が消滅し、直接殴れば腕が消滅した。

魔王が腕を一度振るうごとに、数十人単位で消滅していく。

その光景に、ついに戦士たちの心は折れだして逃げ始めるものが出始めた。

それに対し魔王はつまらないものを見せられたかのように、興奮めだと言わんばかりの表情を浮かべ、最後の攻撃を放った。

エーミッタム
「解放」

魔王の体が白から黒に戻り、消滅の力の全てがその手の内に集まりだした。

「『汝等不死なる神でなく死する人だと自覚せよ』」
メント・モリ

それを敵に対し放つ魔王。白い闇が解き放たれて、全てを飲み込んだ。

その次の瞬間には未だ五千人余りもいた人間たちは、そのほぼ全てが消滅した。

人間だけでなく、飲み込まれたものは全て消滅してしまった。

余りもあつけなく、圧倒的な終わり方だった。

その戦闘の一部始終は奇跡的にも生き残った、その師団に参加していたものによって伝えられることになる。その魔王の圧倒的な強さ、残虐さ、そしてあの白い姿から、その後魔王は『深淵魔王』と呼ばれ長く魔法世界に伝えられることになった。

しかし、その日の戦闘を境に魔王はその居城と共に魔法世界から消えることになった。

それにより、力を使い果たして眠りについた、どこか別の場所に居場所を移した、異世界にいつてしまった、など根も葉もない噂を広がった。その噂には、魔王が滅んだ、死んだというものは一つもなく、懸賞金は更に跳ね上がることになり、長く魔王との戦闘の話は語り継がれる。

だが、その後魔王を倒すために探し出そうと言うものが現れることはなかった。

side 恵

俺たちは現在、魔法世界の龍山山脈というところに居を構えている。と言うのも魔法世界に来て数十年各地をフラフラしていたのだが、どこも俺たちを受け入れてくれる場所が見つからず、更に襲撃者が来るたびに戦闘によりいた場所をメチャメチャにしてしまったことにより、いつの間にか魔王なんて呼ばれるようになってしまった。その所為で更に動きづらくなり、ここ龍山山脈に逃げるように住み着き始めたのだ。

龍山山脈、その名の通り竜種が生息しているので滅多に人が近寄らない。そのため俺たちが住むには丁度良いと住み始めた。

最初は竜種の対処に中々苦労したが、今では城を築き結構快適な暮らしをしている。この城だが、エヴァがデザイン設計をして、主に俺とチャチャゼロが建築作業のような力仕事を行った。素人が城などを建てることができるのか疑問に思うかもしれないが、魔法をなめてはいけない。魔法は万能ではないと言うが、工夫次第では様々なことに応用できるのだ。ちなみに城の名前はレーベンスシュルト城（エヴァ命名）である。

ここに住んで数十年、俺たちは今までになくゆったりとした日々を過ごしていた。襲撃者もたまにやってくるのだが、この城に辿りつく前に竜に襲われてしまい、辿りつかないことがほとんどだ。辿りついたとしても、俺のエヴァとの仮契約で出たアーティファクト^{God knows}天網恢恢疎にして漏らさず』により、すぐさま察知して処理した。

俺のアーティファクト『天網恢恢疎にして漏らさず』だが、簡単にいってしまえば探知系のアーティファクトだ。見た目は銀の指輪でデザインも良く常に身につけている。広範囲の探索から、近距離の敵の襲撃の察知など中々優秀なものだ。さらにこのアーティファクトは発動体としても使うことができ、その性能は俺の全力の魔法にも耐えられるほどだ。

俺たちはその生活の中で今までできなかったことをやっていた。

まずは、俺がエヴァに闇の魔法マギア・エレベアを教えてもらった。それにより俺の消滅魔法にも磨きがかかり魔法の射手程度ならノーモーションで撃てるようになった。さらに高位の魔法でも消滅魔法を撃てるようになった。

次にエヴァと共に俺の呪いの術式の解析を始めた。エヴァがいるので既に俺は不老不死を解除する気はなかったが、俺が治癒魔法に利用したように、何かに利用できないかと考えて研究しだしたのだ。昔に一人で解析していたことがあったが、その時はほとんど何も解らずじまいだった。以前の俺では不可能であったが、その時に比べ腕の上がった俺とエヴァで解析した結果様々なことが解った。

まず解ったことは、この呪いはその機能と効果を保つために常に大気からわずかにではあるが、魔力を取り込んでいることが判明した。さらにその余剰分を俺に還元しているのだ。そして、その還元された魔力に器が沿うように俺の最大魔力量も増加していくようだ。その所為で俺の魔力は年々増加していたのだ。俺の魔力が吸血鬼であるエヴァを大きく上回るものであった原因はここにあったようだ。長年生きてきた所為で、還元された魔力がかなりの量になっていたのだ。

エヴァはこの術式に着目して、闇の魔法にそれを取り入れた。それにより費用対効果を考えて今まで不可能だとしていた、闇の魔法究極闘法である敵弾吸収を可能とした。これにはエヴァは大変な喜び

ようを見せてくれた。その姿はとても愛らしかった。

次に解ったことだが、この呪いは機能に決して支障がきたすことのないように、この呪い以外の全ての呪いと判断したものを無効化^{キャンセル}するような術式が組まれていた。これこそが俺に不死殺しが効果のない最大の要因であった。知らずに治癒魔法に応用していたようだが、これは不死殺しも呪いの一つとして処理してしまうのだ。そのため俺には不死殺しは効かないし、あの治癒魔法はそれを無視して完治させることができたのだ。

この術式を利用し解呪魔法を作成した。これについては試していないので、どれほどの効果を持っているかは不明だ。

最後に解ったことは、この呪いは決して俺の正気を失わせないような術式が組まれている。これは恐らく俺が狂ってしまつては、永遠に苦しめるといふ神の目的が果たせなくなるからだろう。これにより、俺は神に呪いを懸けた時も痛みで狂うことはなかったのだ。さらにこの術式は俺に対する精神操作系の魔法も無効化することが解った。

これにより、記憶の改竄やその改竄の無効化などの魔法を作った。これにより俺の記憶も戻るのではないかと考えたのだが、俺の記憶に関しては完全に破壊、または抜き取られてたためか最初から存在しないものとなっており、記憶は戻ることはなかった。

まあ、エヴァがいる今はそんな過去など、どうでもいいとは流石に言わないが必要ないものであると割り切ることができ、落胆することもなかった。

まだ何か隠されているのだうろが、今の俺たちにはここまでしか解らなかった。ここまでとしか、と言ってはいるが成果としては十分なものだった。

そんな風に俺とエヴァは中々充実した日々を過ごしていた。しかし、そんな日々もついに終わりを迎えることになった。

俺たちが魔法世界に来てから約百年程が経過した頃に、今までにない大軍が龍山山脈にやってきたのだ。流石に竜を退治しに来たというわけではないだろう。十中八九、というより確実に俺たちを本気で討伐しに来たということだろう。

「エヴァ、今までにないほどの大軍が攻めてきた」

「ほう、数は？」

「約一万くらいかな」

「それはまた、随分と大げさな人数を連れてきたものだな」

俺が告げた人数にエヴァはこめかみを押さえ嫌そうに顔を顰める。それも仕方ないだろう。一万つて、どれだけ人数集めているんだよ。暇人だなあ。俺たちは基本的にここに攻め入ってこなければ、何もしないのに。

「勝っても、負けてももう魔法世界いるのは限界かもな」

「確かに、なら最後に魔法世界の連中に圧倒的な実力というものをを見せてやろうじゃないか？」

メグム、例のやつを使え。アレを見せれば、しばらく私たちを襲おうなんて考えなくなるだろう？ 旧世界に戻るなら追っ手が来ないように牽制の意味合いもあって丁度いい。」

エヴァの言うアレとは広範囲消滅魔法を闇の魔法で取り込んだものことだ。開発したのは良かったが余りの威力にエヴァから封印指

定が掛かったものだ。

それを使えというのだ、どれだけ嫌なのかが伝わってくる。

「イエス、マイロード」

エヴァの期待には応えなければな。

その俺の答えにエヴァは笑みを見せ、

「いい答えだ。私とチャチャゼロは先に出ている。
お前の力を存分に見せてやれ」

「ケケケ、腕ガ鳴ルゼ」

そう言っ出て行つた。

俺も準備を整えその後をすぐに追った。

戦局は既に圧倒的なものとなっていた。これはアレを使う必要なんてないんじゃないだろうか。まあ、エヴァの期待を裏切るわけにはいかないが。

俺が現れると、

「あれが、魔王……」

『終焉の導き』……………」

なんて、呟くやつがいるが俺がエヴァの従者だと知ったらどんな反応を示すのだろうか。

そんなことはどうでもいいか。今は早く呪文を完成させなければ。

「マリエス・ラ・ヨハネ・アポカリプス
ト・シユンボライオンデイアー・コネットホ・モネラネ・フロゴス
契約に従い我に従え炎の霸王

エヒゲネナ・田カネー・カタル・母・ホギネー・ロンファイア
来れ浄化の炎燃え盛る大剣

レウサントーン ビュール・カイ・テイオン
ほとばしれよソドムを焼きし

ハ・エベフレゴン・以て死トートウス エイス・クーン・タナトゥ
火と硫黄罪ありし者を死の塵に」

俺が呪文詠唱を始めると、敵がそれを止めようと迫ってくるが、全
てエヴァとチャチャゼロの手によって止めれた。

デクストラ・スタグナン・ローラニア・フロゴシス
「右腕固定 『燃える天空』」

右腕に魔法を留める。かつてとは違い力技ではなく、闇の魔法の技
術の一部を使うことによってより安定している。
さらに詠唱を続ける。

ト・シユンボライオンデイアー・コネット・タリセスタ・ホネー・バシレイア
「契約に従い我に従え氷の女王

エヒゲネナ・チオト・土オン・瓜・ホギネ・ニエ・クリュスタレ
来れ永久の闇永遠の氷河

バーサイス・ゾーサイス トン・イゾン・タナトン
全ての命ある者に等しき死を

ホス・アタラクシア
其は安らぎ也」

これはエヴァに教えてもらった、広範囲殲滅用氷魔法を術式融合用
にその術式を弄ったもの。

シニストラ・スタグナン・ヌスミゲー・カタストロフエー
「左腕固定 『終わる世界』」

それを左手に留める。

そして、

ウニソネット
「術式融合！」

術式を融合させる。

しかし、これでは終わらない。

オフリガード
「助奏」

この魔法は余りも強力なため、術式の融合後にさらに呪文詠唱を加えることで、ようやく安定させその形を保つことができる。

ウィーウェ・メモル・モルティス
「死を忘れずに生きよ」

俺の手の内で暴れまわる魔力を安定させるために、さらに言葉を紡ぐ。

パツリダ・モルス
「青ざめた死は 貧者の小屋も

パウベルム・タベルナース
王者のそびえ立つ館も 等しい足で蹴りたたく」

敵が俺の呪文に疑問を持ち始める。アレは何だ、と。見たこともない、と。

それも当然、これは俺のオリジナル呪文であり、エヴァとチャチャゼロ以外に見せるのは初なのだから。

エデ
「食べる 飲め 遊べ

ボスト・モルテム・ヌツラ・ウオルフターズ
死後に快樂はなし

『汝等不死なる神でなく死する人だと自覚せよ』
・モリ

完成した広範囲消滅魔法『メメント・モリ』を敵には放たず、手に留め、

スタグネット
「術式固定！
掌握！」
コンプレクシオー
プロ・アルマティオーネ
術式兵装

カルミナ・アビシャル
『深淵魔王』

取り込む。

ただ放つだけでも、それで簡単に終わらせることができるがエヴァの要望に応える。

この姿は正しく無敵とっていいだろう。

魔法も物理的なものも、触れたものは皆等しく消滅する。

攻撃が通じず、触ればそれで一撃死だ。絶望を感じずにはいられないだろう。

そして、攻撃を始める。いや、攻撃などと呼べるものではないだろう。

ただ、敵に向かって突っ込む、それだけで敵は消滅する。敵も迎撃しようと攻撃してくるが意味がない。全て魔法も気弾も消えてなくなった。

そして、しばらく敵を消していると、逃げ出すものが現れ始めた。そこで、エヴァから念話が入る。

『メグム、そろそろ頃合いだろう。終わらせる』

『了解』

ああ、かなり疲れた。この術式兵装、久々に使ったからしんどかった。

エーミツタム
「解放

『汝等不死なる神でなく死^{・モリ}する人だと自覚せよ』」

体に装填してある『メメント・モリ』を放ち、終わらせる。
やっぱり、最初からこれを放っていたほうが早かった気がする。

「メグム、お疲れ。

疲れているところ悪いがレーベンススルト城を魔法球に入れるから手伝ってくれ。」

敵を一掃したところでエヴァが話しかけてくる。

これから急いで旧世界に戻るつもりなので、荷造りしなくてはいけないのだ。

「了解。それじゃあ、とつとと始めますか」

そうして、俺たちはレーベンスシュルト城を魔法球の中に入れた後、魔法世界を後にした。

余談だがこの戦いで俺の二つ名が魔王から深淵魔王にランクアップした。

8話　メアリー・スー

side 恵

ムンドウス・マギクス　ムンドウス・ウェトウス
魔法世界から旧世界へ戻ってきてから数百年が経過した。

俺たちは旧世界に戻ってきてから、しばらくヨーロッパ各地を転々とした。

その後ヨーロッパを出て暗黒大陸、将来的にはアフリカ大陸と呼ばれるはずの土地を訪れた。これはエヴァの提案だったのだが、ヨーロッパも大方回っていたのでそれもいいか、と思い快く承諾した。最初、魔法世界から追っ手が来ないかと危惧していたが、よっぽど最後の戦いが効いたらしくそのようなものが来ることはなかった。それでも、旧世界に元からいた魔法使いの賞金稼ぎはいたのだが、それも暗黒大陸に入った辺りから現れなくなった。

そして、俺たちは暗黒大陸に住み始めた。ここは文明が他の国に比べ未発達なので、人に関わらないように引き籠もっていれば誰にも咎められず生きていられた。

レーベンスシュルト城を魔法球の中から取り出し、人が近づかないように結界を張った。そうすれば、城を訪れるものなど誰もいなかった。

暗黒大陸に住み始めてからは、襲撃者が来ることもなくエヴァと安らかな日々を送ることができた。

ここに住み始めてからは敵もいないので、たまに腕が鈍らないようにエヴァたちと模擬戦をするくらいしかすることがなかった。

その所為でエヴァが暇を持て余し、思いつきによって俺に執事の真似事をさせ始めた。エヴァ曰く「メグムは私の従者なんだから、執

事の仕事くらいできなくてどうする」だそうだ。これは最初は渋々だった俺も、やっている内に段々楽しくなっていた。感覚的には本格的にイメージプレイをしている感じだろうか？

そんな緩く幸せな毎日をエヴァとイチヤつきながら過ごしていると、予期せぬ訪問者がレーベンスシユルト城に訪れた。

それは、あと十数年もすれば二十世紀に入る、といった時期だった。

「ん？」

「どうしたメグム？」

「侵入者だ。まだ城までは入ってきてないが、結界を突破されたみたいだ」

いつものように、エヴァに執事をさせられている時にそれを感じた。アーティファクト『天網恢恢疎にして漏らさず』により結果内に何ものかが侵入したのを察知した。これには少し驚いた。ここに移り住み数百年、結界を突破して侵入してきたものなどいなかったのだ。人払いに、侵入妨害、対物、対魔といったかなり強力な結界を張っていたので誰も入って来れないと思っていたのだが。時代はもうすぐ二十世紀ということもあり、アフリカはヨーロッパの植民地となり始めているので、それと一緒に魔法使いも入り込んできたのかもしれない。

「侵入者、か。ここからも、そろそろ移ったほうがいいかもしれんな」

エヴァもどうやら俺と概ね同じようなことを思っているらしい。
と、そんなことを考えていると、エヴァが意地悪そうに微笑んでこ
ちらを上目遣いで見て、

「それよりもメグム、お前は今執事だというのにその言葉遣いは頂
けないなあ。

フフ、これは侵入者を処理した後にお仕置きが必要かな？」

なんて言ってくる。

俺はそんなエヴァの腰に腕を回し、空いた手をエヴァの頬に添えて
軽くキスをする。

「……っん」

そして、唇を離し、

「まあ、その話は侵入者をどうにかした後にしようかエヴァ」

侵入者を排除するために動き始める。
が、しかし、

「いやー、お熱いねー」

「「っ!?!」」

先程までエヴァと俺しかいなかった部屋にいつの間にか茶髪に碧眼
の白人の女がいた。

ついさっきまであった侵入者の反応と一致するためコイツが侵入者
で間違いないだろう。エヴァと共に警戒態勢をとる。この城には直

接転移できないような仕掛けが施されているにも関わらずコイツはどうやって……

「ストップ！

ちよっと待って、アタシは貴方たちと敵対する気なんかないから！」

なんて言っているが、警戒を解くはずがない。
どう考えても怪しすぎる。

「とりあえず、自己紹介をば。
わたくし
私、メアリー・スーと申します」

キラツと効果音がつきそうな程いい笑顔で小首を傾げ、親指、人差し指、小指を立てた右手を顔の横にもって持つてくるポーズをとってソイツは名乗った。
それを見た俺とエヴァは、イラツと警戒心が苛立ちに変わった。

side メアリー

「それで？ 貴様は転生者だと」

「……はい」

「この世界が物語の中のものだ？」

「……はい」

「ここに来たのは、メグムが転生者と似た気配があったから確認しに来たと?」

「……はい」

名乗った後、アタシは絶賛質問、否、尋問を受けていた。

はつきり言おう、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを舐めていた。

原作だと若干、情に絆されやすいギャグキャラっぽくなっていたのに……。

マジ恐え。何だこの威圧感。原作に出てくる奴らはこんなのに対してあんな舐めた態度をとっていたと言うのか。いい度胸してるとか、肝が据わっているとかなそんなレベルじゃない。中学生という若さの勝利なのか。

そして、執事服を着ている隣の男、魔法世界で終焉の導きの二つ名をつけられ1000万ドルもの賞金が懸けられている魔王。こっちも凄まじい威圧感だ。何故執事服なのかは聞いてもいいのだろうか? いや、それよりもこの男はいったい何なんだ。転生者っぽい反応だったから来たんだけど、実際見てみるとアタシとは違つと解つた。

「……あの、こちらかも質問よろしいでしょうか?」

とりあえず、本人に聞いてみるのが一番早い。

「ん? 何だ言ってみろ。内容によっては答えてやらんこともない」

「そちらの神代さんは、いったいどのような存在なのでしょう? 転生者ではなさそうなんです?」

「……何故そんなことが解る？」

「ああ、それはアタシが神様からもらった能力の一つです」

そう、これはアタシが神と交渉して得た能力の一つだ。

「……神からもらった？」

そのアタシの言葉に魔王が反応した。恐れ。何か気に障ることを言ったのか？

「それは、どういうことだ？」

「そんな質問をするってことは、やっぱり神代さんは転生者ではなさそうですね。」

良ければ、お話を伺ってもよろしいですか？」

「まあ、別に知られて困ることではないし構わないが」

お、答えてくれるようだ。でも何でかエヴァンジェリンさんから発される威圧感が若干上がった気が……。

「俺の場合は、転生じゃなく神から罰を受けたんだ……」

神代さんの話によると転生したのではなく、前世の罪で記憶を奪わ

れ呪いをかけられたらしい。それは大変だな。それにしてもチート能力をもらわずそこまで力をつけたのはすごい。いや、不老不死というだけで凄まじいチートじゃないか？まあ、望んでもいないのにそんなもんもらって嬉しいかどうかは微妙だけど。自分以外の不老不死が存在する世界に来て良かったですね、なんて言ったら厭味に聞こえるだろうか？

「メグムが話したんだ。今度は貴様の喋る番だ」

「あ、はい。なんなりと」

ここで断って無事に帰れる自信がない。

「貴様が転生者というものだと思ってるとして、この世界が物語の中というのはどういうことだ。私たちが、この世界にいる人間が物語の登場人物だとも言うのか？」

「ああ、それですか。それは少し語弊がありましたね。説明が足りませんでした。」

神曰く、世界というものは無数に存在するらしいです。私の前世の世界では、この世界のことが物語として広く世に出ているんですけど……。

他の世界を観測する力を持っている人間がいるとしたら？
そして、もしそれに気づいていないとしたら？」

「……つまり、この世界を観測したものを、自分のアイデアと勘違いして、それを物語として綴って発表していると？」

「話が早くて助かります。」

そういうことです。これも神曰く、ということなんですけど。

まあ、でもその中には神代さんは登場していないのでパラレルワールド、ということなんでしょうけどね」

「……次は、貴様が本当に転生者なる存在なのか、という問題だが……」

そう言うところエヴァンジェリンさんは神代さんの方を見る。

「それについては、恐らく間違いないだろう。

そのメアリー・スーなんていう皮肉たっぷりの名前。

そんな名前を名乗って、転生者なんて言っているんだ間違いないだろう。

自分でつけたのか？」

記憶は失っているのに、そんな知識は残っているのか。

そう、この時代でこの名前を名乗って、転生者なんて言えば解る人間には解る。

「そうですね、自分で名乗り始めました。

この世界の親にもらった名前をいつまでも使ってるのって何か申し訳なくて」

自分で言うておいて、なんて自分勝手な意見だろうと思う。アタシの転生の器となった子供の両親には、とても悪いことをしたと思う。でもまあ、せつかく転生なんて珍しい体験ができたんだ。自分の好きな様に生きたいじゃないか。

エヴァンジェリンさんは興味がないのか、アタシのそんな自分勝手な意見には何も言わないで次の質問をしてくる。

「次に神にもらった能力とやらだが、詳しく話してもらおうぞ」

「あ、はい。」

アタシはそもそも神の暇潰しで選ばれて、輪廻から外されて転生することになったんです。

でもアタシが望んだことは神の望みとはずれていたみたいですけど」

「と言うと？」

「神様は退屈を潰すために力を持たせて物語りに介入して欲しかったらしいんですけど、アタシは物語の中の出来事を生で見たかったですよ。」

だから貰った能力も戦闘にはまるで役に立たないものなんです」

「具体的にその能力は？」

「まず一つですが、転生者が同じ世界にいた場合、たとえ地球の裏側にいようと捕捉でき、実際に目で見ればそれが確実にそうだと解ります。」

次に、逃げ足です。いかなる敵からも逃走することが可能、なはずですよ」

「ん？　はず、というのはどういうことだ？」

「……正直、貴方たち二人を前にして逃げ切れるのかどうか不安で仕方ないんです」

そう、神に貰った能力だ。平気なはずだとは信じたいが、目の前の二人レベルを見ると不安になってくる。

「次に不老ですね。物語を傍から見ると必要だと思ったので。」

不死ではないのがポイントです。流石に永遠に死ねないのは恐ろしいですからね。

最後に――世界を渡れます」

これが、アタシの目的を達成するためには一番重要だ。ちなみにこの部屋に転移してきたのはこの能力の応用だったりする。世界を渡れるほどのだから、同じ世界内の移動などお手の物だ。

「世界を渡る？ それはどういう……」。

……ああ、物語を生で見たい、つまりは他の物語も見たい、ということか」

「はい、仰るとおり」

そう、アタシは様々な物語を見たい。

転生者もしくはそれに順ずる存在がアタシ以外いるのも予想済みなので、そこはいい。だからその一つ目の能力だ。原作通りでなくとも、たくさんの心躍る物語を直接この目で見たいのだ。

しかし、よく解ったな。解りやすかったかな。それとも数百年も生きていると察しがよくなるものなのか。

「なるほど。」

私は聞きたいことはあらかた聞いた。メグムは聞いておくことはあるか？」

「そうだな、他にも転生者はいるのか？」

「いえ、今のところいませんね。」

まだ原作開始より大分前なので、そのうち現れるんじゃないですか？」

「……随分と適當だな」

仕方がないじゃないか。実際にアタシにも解らない。能力のおかげで今いないことが解るだけでも凄いことなんだから、そこを是非とも評価して欲しい。

「転生者が現れたとして、お前のように全員が原作知識とやらを持つているのか？」

神から貰う能力と言うのは全員が備えているのか？」

「それも解らないですね。

現れてみないと何とも言えませんね」

それこそ、本当に解らない。転生してくる人がいたとして、原作知識を持つているかも、どんな能力を貰ってくるのかも、この世界を自分の意思で選んで訪れるのかも解らない。

そもそも能力を貰えないかもしれないし、どこの世界に行くか、どの時代に生まれるか選択する自由があるのかも神の気分次第だろうし。ちゃんと前世の記憶を引き継いでこられるのかすら不明だ。

「……存外使えないな。

いや、元から期待していないから存外、と言うのは訂正しよう」

訂正すんのは、そこですか。酷くね？色々と情報あげたじゃん。

アタシが凹んでいると先程質問を打ち切ったエヴァンジェリンさんが話しかけてきた。

「そつだな、なら貴様の言う原作知識とやらを話せ。

ああ、私が登場するなら、私のことに関しては物語の説明に支障が

ない程度にできるだけばかして話せ。

メグムと出会えなかった私の話など聞きたくもないからな」

ああ、熱い熱い。何？真夏なんですか？このバカップルが！

「何か文句でも？」

「いえっ！ありません！」

おっと、顔に出てしまったか。気を付けなければ。

そして、アタシは大雑把に知り得る原作の流れについて話した。

エヴァンジェリンさんについては、主人公の師匠的ポジションにいたということだけを説明した。

「なるほど、な。」

その物語の中の私は、随分と腑抜けて甘くなっているみたいだな。

それで、話を聞く限り私は中々重要なポジションにいるんじゃないか？

貴様はそれを正そうとしないのか？」

「ああ、はい。それは貴女の人生ですから、お好きにすればいいんじゃないでしょうか？

原作通りに話が進まなくても、楽しければアタシは別にいいですから。

たとえそれが、バッドエンドになってしまったとしても」

そのアタシの答えが意外だったのか二人は少し目を丸くした。やった、一矢報いたぞ！

「それは……中々あくどい考えを持っているな貴様は。少々意外だったぞ。」

しかし、全てをしっているくせに、何もするつもりがない傍観者というのは、聞いていてかなり酷い人種だと感じるな。人格破綻者と言っても過言ではないな」

そうか？いや、確かに酷くはあるんだろうけど。

でもアタシは何もしないと言っているんだ。良いことも、悪いことも。なら人格破綻者は流石に言いすぎじゃないか？まあ、そんなことで言い争うつもりはないけどさ。

「その神から与えられる能力は何でもありなのか？制限は何かないのか？」

「それは世界観を壊さない程度なら、割と何でもありだと思います。逆に言う让世界観を壊すようなものは不可能ですね。」

アタシが世界を渡るなんて能力をもらえたのは、基本的に逃走用の能力だからどこの世界に行っても、それほど世界観を壊さないからこそですし」

まあ、神としても世界観をぶち壊しにするレベルの能力なんか与えたら、つまらないんだろうね。

「最後に、原作よりかなり前、とのことだが何故こんな時代に転生してきたんだ？」

「ああ、それは原作の舞台となる麻帆良学園が少し前に創設されまして、それを見たかったんです」

「ふむ、なるほど……」。

これで聞きたいことは終わりだな」

それなら、

「アタシはそろそろお暇してもよろしいでしょうか？」

「ああ、別に構わないぞ。

貴様も一応女だしな、私たちに敵対しないと言っなら危害を加えるつもりはない」

あ、そこは原作と一緒になんだ。

「ただし、敵対するというなら容赦はしない」

訂正、やっぱり怖いや。

「それじゃ、アタシはこの辺で。

あ、そうだ。同じ年をとらない者としてたまに遊びに来るかもしれないから、その時はよろしくお願いします」

「は？ いや、来なくていい……」

アタシは言いたいことだけ言って、エヴァンジェリンさんが言葉を言い終わる前にレーベンスシュルト城から転移した。

さて、次は何を見に行こうかな。

side 恵

「行つたみたいだが、また来るのか……？」

「中々自分勝手な奴だったな」

「「はあ……」」

エヴァと俺で溜息をつく。

最初は俺たちを前に萎縮していたが、最後の方は段々と碎けていったな。

エヴァやチャチャゼロ以外とともに会話したのは久々だったが、アレならいらないな。

エヴァの様子を見ると、同じ意見のようだ。

「とりあえず、一休みしたら荷造りを始めるか？」

「そうだな、侵入者が奴だったから良かったが、いや、良くはないんだが。」

そろそろ、この土地にも魔法使いどもが入ってきそうなのは変わらないしな。

またこの城を魔法球に入れるから手伝え、メグム」

「了解」

エヴァはどうやらお仕置きについては忘れているらしく助かった。別に残念なんて思っていない。

そして、この数日後に俺たちはアフリカ大陸を後にした。

その後俺たちは、ロシア南部、モンゴル、中国、インド、マレーシアなど様々な国を回り、日本に辿りついた。

そして、京都を見て回っている時に武田惣角なる人物に出会い、大東流という流派の合気柔術を習うことになった。武田惣角という名前に若干聞き覚えがあったが、思い出すことができなかった。もしかしたら後世に名を残すほど有名な武術家だったのかもしれないが、俺はそういった知識には明るくなかったらしい。

合気柔術を一通り教わった後、俺たちは日本各地を回った。

俺は恐らくこの世界に来る前は日本人だったはずなのだが、日本という土地に別段郷愁のようなものは感じなかった。

エヴァの気が済むまで日本を回った後に、俺たちは南海の孤島に移り住んだ。

島全体に結界を張ったのでアフリカにいた時よりも、人が寄り付かない住居になった。

俺たちは再びゆったりとした生活をしばらくすることになった。

この時はまだ、数十年後にメアリー・スー以外の人間がここを訪れることになるなんて、俺もエヴァも予想していなかった。

8話 メアリー・スー（後書き）

次からは少し別の転生者がメインになる予定

9話 不運な転生者

これは英雄の物語ではない

しかし、英雄は現れる

ムンドウス・マギクス
魔法世界の帝国剣闘界でジャック・ラカンが頂点を極めた数年後、そこには若くして剣闘界の頂点に登り詰めた転生者の姿があった。無論、彼が転生者だと知っている者など誰もいるはずはないが。それでも、あのジャック・ラカンよりも若い年齢で剣闘界をトップに立ったことによって注目を集めていた。それは解放奴隷となって、傭兵剣士として幾多の戦場を転戦していたジャック・ラカンの目にも止まることになった。

「ほう、最近随分と騒がれてる奴がいるから見に来てみれば、中々威勢のいいのがいるじゃねえか」

転生者アベル・B・カトラルは自らの意思で関わろうとせずとも、物語に関わっていくことになる。

side アベル

ついてない、俺は運が悪い。転生する前もそうだった。

くじはいつも外れるし、懸賞なんて当たらない。席替えすれば一番前だし、俺が出かけたときに限って突然雨が降り出したりなんかしやがる。他にも色々あった。

一つ一つを聞けば鼻で笑つちまうようなことばっかだが、それがいつもいつもだ。そういう小さな不幸がチョコチョコくると、嫌になってくるもんだ。

そんなついてない俺が転生者として選ばれた時には何の間違いだよ、と思った。

しかし、好きな世界に行つて、能力貰つて、フラグ立ててハーレムとか作れる、ついに俺にも幸運が、みたいにも考えた。

けどまあ、話を聞いてみれば神の暇潰しで、能力貰うときもかなり制限があるし、やっぱりついていないのか、と凹んだ。

それでも、俺が行くことになる世界が魔法先生ネギま！というのを聞いたときは喜びを隠し切れなかった。そこならフラグを立てまくることも夢じゃない。

それが、いざ転生してみれば生まれたのは魔法世界の大戦前で、原作入ったら俺オッサンじゃんと凹んだ。

しかし、運が良いのか悪いのか魔法世界で長命の種族として生まれた。この種族は人間とはほとんど見た目は変わらないが、身体能力が高く、若い時期が長く続くというどっかの戦闘民族みたいな種族だった。これにより俺は希望を見出した。

神に貰った能力を鍛えて、大戦時に赤き翼アラルフラの一員になって活躍してやろうと、幼い頃から鍛えだした。

それが運の尽きだった。幼い頃から言葉を理解し、普通に喋ることができ、黙々と鍛え続ける。ハツキリ言つて、そんな子供は傍から見たら気味が悪い。

それは、もちろん実の両親から見ても変わらないだろう。この世界での俺の親は、俺の扱いにほとほと困り果てていた。そんな親に対し、本来生まれてくるはずだった子供のことを思うと、俺もどう接

していいのか解らなかった。親子仲は冷め切っていたと言ってもいいだろう。

そんな時ついに決定的なことが起こった。新しい子供が生まれた。俺に弟ができた。それによって親は俺のことを捨てやがった。

いや、まあそれについては恨んではない。悪いのはこっちで、むしろ恨まれるようなことをしているから。それでも俺は声を大にしてい言いたい。俺、ついてねえ！

誰かに拾われることもなく、俺はあれよあれよという間に気づいたら奴隷剣闘士としてデビューしていた。あのジャック・ラカンが頂点を極めたという、帝国剣闘界に幼くして放り込まれてしまった。幸いにもジャック・ラカンは既にここを去った後だったので、俺は解放奴隷となるべく日々戦いに明け暮れていた。

最初は神から貰った力を駆使すればすぐにでも、と思っていたが俺が貰ったのはあくまで才能だったので中々苦労した。

ここで俺が神から貰ったものを説明しておこう。

ズバリ咸卦法についての才能だ。アレはスーパー。イヤ人みたいでかつこいい。

いや、ならサ。ヤ人の能力を貰つとけと突込みが入りそうだが、制限があったのだ。そんな世界観を壊しそうなものは、つまらなそうだから却下だと。

その上、努力もなく強い奴見せられても燃えない、という理由で貰ったのは才能なのだ。

確かにこれは修行すればするほど上達していくのが解るので楽しいんだが、こんなことになるならもっとお手軽に強くなれるものを貰っておけば良かったと思う。

他には可能な限り、気と魔力の保有量を多くしてもらった。これは、ナギ・スプリングフィールドやジャック・ラカンには及ばないが、かなりの量を得ることができた。

魔法についての才能はそれほど無いから、魔力も基本的には咸卦法のための燃料でしかないけど。

俺はある程度までは順調に勝ち進むことができた。若くして、究極アルテマ技巧ニアートと名高き咸卦法を使いこなすということで注目も集めた。

しかし、俺は甘かった。一定以上のレベルが相手になると途端に勝つことができなくなった。

咸卦法には致命的な弱点があった。発動するのに、いちいち手に気と魔力を溜めて融合するという動作が必要となってくる。相手のレベルが高くなってくると、これをさせてもらえなかった。そんなことを暢気にしている内に、次々に攻撃をしてくる。

原作ではそんなことは無かったが、考えてみれば当然のことだった。敵が必殺ともいえる技を発動しようとするのに、黙って見ている馬鹿はいない。共に戦う仲間がいれば話は別だが、一対一の試合でそんなことも言つてられない。

解り易すぎる弱点だったが、これが露見してからは今まで勝てていた奴にも負けるようになっていった。

悔しくはあったが、今更戦い方を変えることもできず俺はただ自分にできることを鍛え続けた。

つまり、咸卦法をより高みの技術へと昇華させることのみを考えた。態々、手に気と魔力を溜めて融合させるのは何の為だ？簡単だ。その方が、気と魔力を扱い易いからだ。それだけの理由だ。それ以上の理由なんて無い。なら、体内で気と魔力を融合することも無理ではないはずだ。

この考えのもと俺は、ただひたすらに咸卦法を磨き続けた。比喻ではなく、血反吐を吐きながら修行を続けた。

そして、ついに俺はノーモーションでの咸卦法の発動を可能とした。これには周りも大いに驚いたようだった。初めて試合で見せた時の相手の驚愕した顔が、今でも忘れられない。

その後、俺は一山越えたことによって、急激に実力をつけていった。

そして、

『アベル選手、優勝——っ！！』

実況が俺の優勝を高らかに宣言する。

ついに俺は剣闘界の頂点に登り詰めた。……これでやっと解放される。

最初思っていたよりかなり時間が掛かってしまったが、ようやく苦
労も報われた。

『おおっと、ここでお知らせですっ！』

ん？何だよ、せっかく人が気分よく浸ってる時に。

『数年前までこの地で名を馳せていたジャック・ラカン氏が、今優勝を果たしたアベル選手にエキシビジョンマッチを申し込んできた

——っ！！』

ん？え？今何て言った？

俺の疑問を無視して、会場は伝えられた情報に盛大に沸いた。

『なんとラカン氏は、このエキシビジョンマッチにアベル選手が勝った場合は賞金の倍額を自腹で進呈するそうですっ！

だがしかし、人生そう甘くはない！負けたら、賞金は全額没収だ

——っ！』

その言葉に観客の熱がさらに上がっていく。

おいおい、何だよこの空気。これ俺が拒否できる空気じゃねえよ。

『さあつ、アベル選手はこの挑戦を受けるのか——っ!?!?』

断りてえ。いや、俺も大分実力付けて自信はついてきたよ。

だけど、ジャック・ラカンはまだダメだろ。どう考えても勝てる気がしない。

いや、もしかしたらまだ原作で見たような、デタラメな強さではないかもしれない。

バクティオー

まだ、ナギと仮契約もしていないはずだし。アレは俺とは相性が悪すぎる。俺の戦いは基本が接近戦だ。咸卦法を用いた遠距離用の技もあるが、無数の剣群が飛んできた場合対処法が無い。素手のほうが強いなんて原作では言っていたが、相性というものがある。俺にとってはラカン・インパクトのような大技よりも、大量の剣で遠くからチマチマ攻められる方が遥かにやりにくい。

どうせ、この空気では断ることなんて無理そうだし、ここは覚悟を決めるか。

はあ、それにしてもついてない。

そして、エキシビジョンマッチ当日。

俺とジャック・ラカンは対峙していた。

「逃げずに挑戦を受けるとは、いい度胸してるな?」

「あの状況で断れる奴がいたら見てみてーよ」

「はっ、確かにそりゃそーだ。
まあ、これも人生経験だと思え。優勝賞金は勉強代だと思って諦めるんだな」

ウハハ、と笑ってふざけた事を言っ てきやがる。

「一つ聞いていいか？」

「ア？」

俺の質問に笑うのをやめて、こちらを見てくる。

「何で、俺に挑戦なんかしたんだ？」

そう、不思議に思っていた。原作ではこの男は基本的に、自分のためにしか戦わないような男だったはずだ。それが、一度通り過ぎた剣闘界の舞台に戻ってきて、何故俺と戦おうなんて思ったのか。

「戦場を転々としている俺に噂が聞こえてくるくらいだからな。
どんな奴か気になって見にきたんだよ。そしたら、中々活きのイイのがいるじゃねえか。」

ここは、先輩として鼻を折っておきたくなっ てな」

さすががいかに最低な理由だな。
それにしても、

「……噂？」

いや、だいたい想像つくが。

「ああ、究極技法『咸卦法』をさらに高みの技術に昇華して、破竹の勢いで勝ち続けてる奴がいる、ってな。それで実際に見てみりゃ、中々のもんだったって訳よ」

なるほど、前回の俺の試合を見てそれが限界だと思ってるから余裕綽々の態度って訳か。

—— 舐めるな。

アンタの強さは原作で十分解っている。あのレベルの強さなら俺ではまだ敵わないだろう。だが、それでも俺はここまでやってきた。神から貰った才能があったとはいえ、それはジャック・ラカンも変わらないはずだ。努力はしたんだろうが、ジャック・ラカンは間違いない天才だ。あのバグといわれるほどの才能があったからこそその強さだ。

俺に与えた才能は咸卦法ただ一点だが、それ故にそれだけを鍛え続けた。

簡単に負けてやるつもりは無い。

『さあ、ついに始まりました、エキシビジョンマッチ！

若くして咸卦法を使いこなす、今大会優勝者アベル・B・カトラル

—— つ！』

『オオオオ！』つと俺の登場に会場が沸く。

『それに対するは、数年前に名を馳せた最強の剣闘士の呼び声高い、ジャック・ラカン—— つ！』

ジャック・ラカンの登場によりさらに会場の声が大きくなる。

『会場の方も熱が最高潮に高まってきた——っ！
両者準備も万端のようですし、それではっ！』

そこで実況は一度言葉を区切り息を吸い込む。

インキビデ
『開始っ！』

そして、試合の開始を告げた。

シュンタクシス・アンティケイメノイン
——気と魔力の合——

試合開始と共に瞬時に咸卦法を発動させる。

これに関しては、もはや慣れたもの。タイムラグ無しに瞬間的に発動できる。

それに対しラカンは開始同時に高く飛び上がり、その拳に気を溜める。

「まさか、これだけで終わらねえよな？」

——羅漢適当に右パンチ！——

ラカンが右拳を放ってくる。

……だから舐めるな！

「咸卦砲撃『竜胆』！！」
ゲンティアナ

ラカンの巨大な気とは対照的に俺が放つものは圧縮されていて、見た目だけで言えば遥かに劣っている。
が、しかし。

「うおっ！？」

俺の放った『竜胆』はラカンの気弾を貫き穿った。

この技は体の内外に纏っている咸卦法のエネルギーの全てを集め圧縮して放つ。咸卦法を瞬時にノーモーションで行える俺だからこそ打てる技だ。俺でなければ、打った後に無防備になってしまう。この技は体に纏うエネルギーを一発ごとに全て消費することから一発ずつしか打てない。だが、その弱点を補って余りある威力を誇る。咸卦法のエネルギーを圧縮して放つそれは、ただの気弾や中途半端な魔法程度は貫き通す。

その様から、群生せず、一輪だけで咲き誇るようなその姿から『竜胆』である。

そして、俺の『竜胆』はその名の指し示すとおり、ラカンの放った気を貫き、吹き飛ばし、ただ一輪だけ、その斜線上に咲き誇る。

それは過たず、ラカンに正確に突き刺さる。

『おおっと、アベル選手の放った技が、ラカン選手の技を吹き飛ばした——っ！

それをまともに喰らってしまったラカン選手、果たして無事か——

——！？』

俺のことを舐めて、適当な一撃を放つからそんなことになる。

ただ、これだけで終わるとは到底思えないが……。

煙が晴れてくるとそこには、無傷のラカンが立っていた。

「今ので無傷かよ……」

「いやいや、今のはいい一撃だったぜ。効いた、効いた」

『ラカン選手！なんと無傷——っ！！』

実況がやかましい。言われなくても見りゃ解る。

「は、お前のことを甘く見ていたぜ。

まさか俺の攻撃を正面から、ぶち抜いてくるとは思っていなかったぜ」

「フンッ、油断してるからそうなんだよ」

「ああ、確かに油断してたな。

だが、ここからは本気で相手してやるよ」

そう言うとなラカンの威圧感が跳ね上がる。

それだけで、背中に嫌な汗が浮かぶ。

「はっ、最初からそうしてりゃいいんだよ」

精一杯の虚勢を張る。たとえ負けるとしても、無様な負けだけは認めんだ。

俺にもここまで勝ちあがった意地がある。誇りがある。矜持がある。

「いい、威勢だ。

それじゃあ、行くぞ？

できるだけ粘ってみろ」

そう言うと、ラカンの姿が消え、

「っ！」

瞬時に俺の懷まで潜り込んできた。

その距離で、手加減無しの拳を連続で叩き込んでくる。俺はそれを、捌き、避け、防ぐ。それだけで精一杯だ。しかし、それでも何発かもろに喰らってしまう。

「っがあ！」

腹に一撃を受け、一瞬動きが止まる。……まずい。

「隙有りだっ！」

——ラカン・インパクト！！——

ゼロ距離から、溜め無しで強力な一撃を放たれる。

動きの止まった俺はそれに抗うすべも無く、吹き飛ばされる。

そして、ドゴォツと轟音を立てて会場の壁に突き刺さる。

『ラカン選手のラカン・インパクトが決まった——っ！！』

これはアベル選手も堪らず吹き飛ばす！アベル選手一卷の終わりか——

——っ！？』

———
まだだ。

まだ、俺は全てを出し切っていない。負けるにしてもそれからだ。ユラリ、と効果音がつきそうな程、自分でも笑ってしまいそうな程鈍い動きで立ち上がる。

『なんと、アベル選手立ち上がった———っ！
傷だらけの体で、未だその目に浮かぶ闘志は衰えていない———
っ！———』

俺の復活に会場が今までに無いほど沸き上がる。

「おいおい、今を受けてまだ立ち上がるか。
マジでお前のことを甘く見てたみたいだな」

ラカンも俺が立ったのは流石に予想外だったらしい。
はっ、だから何度も言わせんな。舐めてんじゃねえよ。

———
咸卦法全開『ヘリアンティス向日葵』———

『おおっと、アベル選手の体が突如輝きだした———っ！———』

『向日葵』は俺の中の全魔力と気を消費し、全てを咸卦法のエネルギーに変換する技だ。

気も魔力も枯渇してしまうので、使うことは無いと思っていたが。

「へー、こんな奥の手まで隠していたとは驚きだ」

「……これだけじゃない」

「ん？」

今の俺の出力は普段の比ではない。単純な出力はおよそ十倍ほどだ。これを、全ててめえにぶつけてやるっ！

「——っ」

ゴシャツと人体が出す音にしては些か歪な音が、ラカンの顎から響く。

俺の拳がヒットし、今度はラカンが吹き飛ぶこととなった。だから、てめえは油断しすぎなんだよ！

「つく、予想以上だぜ」

だから、

「これだけじゃねえって言ってたんだろっ！」

——咸卦闘法『インバチエンス鳳仙花』——！！——

吹き飛んだラカンを追って拳を放つ。

その拳はラカンに当たった瞬間に、

「っこれは！？」

弾け飛ぶ。触れるとはじける鳳仙花の果実の如く。

拳が当たる瞬間に咸卦法の反発力を、そのまま解き放つ。

『向日葵』を使った状態でのこれは、まさに一撃、一撃が必殺の威

力を持つ。

それを、何度も何度も放つ。

このラッシュにはラカンもかなりのダメージが入っているみたいだ。

——だが、それでもまだこの男を打倒するには至らないようだ。
打たれながらもニヤリと笑いこちらを見てくる。

「マジで、予想以上だったぜ。

最後の一撃は真正銘全力の一撃だ」

そう言うと、俺の既に燃料切れの攻撃を片手で受け止め、その拳に
気を集め始める。

——零距离・全開！！！！ ラカン・インパクト！！！！——

その攻撃は、俺を飲み込み、さらに会場まで吹っ飛した。

『……最後の方は、もう何がなんだか解りませんでした。どうやらラカン選手の全力の一撃がアベル選手に決まったようです。
会場もメチャクチャですが、いったいどうなったのでしょうか』

「おお、流石にこれはやり過ぎちゃったか」

ラカンは若干額に汗をかき頬をかく。

そして俺は、最後の力を振り絞り立ち上がる。

「まだ立つか。ホントしつけない」

ラカンが呆れた声を出すが無関係ない。
俺は言うべきことを言う。

「……次は、俺が……勝つ」

その言葉を最後に言い放ち、俺はぶっ倒れた。

side メアリー

うへあ、凄えー。

ジャック・ラカンとか生で見ると、本気でやばいなー。

それとあそこまでやり合った転生者もかなり強かったね。

バグキヤラとか言われる理由がわかったね、うん。

確かにアレはバランスを大きく崩してる感じるねー。

まあ、面白いもの見たからいいか。

あの転生者君は、無駄に熱くて見ていて楽しいな。いずれ、接触してみてもいいかもね。

さあ、次のイベントは何があったかな？楽しみだ、早く見てみたいよ。

s i d e ラカン

いや、思わぬ収穫だったな。噂のやつがここまで、できる奴だったとはな。

「……っつ」

「おっ、どうやら気がついたみたいだな」

「……ジャック・ラカン？　何でお前が……」

おいおい、先輩をフルネームで呼び捨てとは礼儀がなってねえな。

「俺がお前を買ったんだよ」

「はっ？　俺はもう解放されたはず……」

ところがどっこい、

「それがまだだったんだな、これが。」

俺の挑戦を受けたから、それが終わってからにずれたんだよ。お前が奴隷から解放されるの」

「っな!？」

フハハ、驚いていやがるな。

「そこで、あの勝負俺が勝ったから、お前の賞金を俺が手に入れ、その金でお前を買ったんだよ」

それを聞いて脱力してやがる。見てておもしろいな。

「だから、お前は今日から俺の仕事を手伝ってもらうぜ。少なくとも、俺がお前に使った金の分はな」

「お前の仕事って……」

「おう、傭兵だ。」

これから、馬車馬のようにこき使ってやるからな」

それを聞いたアベルは限界だったらしく、再び倒れて気を失った。

10話 紅き翼（前書き）

戦闘シーンって難しい。

10話 紅き翼

side アベル

現在俺とジャックはヘラス帝国の辺境で、既にお馴染みとなりつつある仕事の依頼を請けている。

……ついにこの時が来たか。

「対象は、この三人の男、それに……この少年だ」
ターゲット

そう言つて、帽子を目深にかぶつてその顔をうかがい知ることのできない、黒いスーツを着込んだ男が四人の写真を見せてくる。

アラルブラ 紅き翼の初期メンバーである、ナギ、詠春、ゼクト、アルビレオの四人だ。

そう、ついにジャックが赤き翼に入る切欠となるイベントが起こるのだ。

「フン、なんだガキじゃねえか」

「子供と思つて油断していると痛い目を見るぞ。オスティア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。既に精鋭で組織された討伐部隊も送つたが、悉くが返り討ちだよ」

ジャックはその写真を見て余裕そうな表情を浮かべているが、黒スーツの男の言うとおりだ。俺は原作を知っているからだが、この赤き翼のメンバーの強さは解っている。油断したら、文字通り命取りとなる相手だ。

「君たちが望むなら、部下もつけよう。
正規兵でなく、傭兵・賞金稼ぎになってしまうが……」

「いらねーよ。」

俺とコイツで充分だぜ、任せときな」

ジャックのその台詞、一見頼もしいものに聞こえるが、俺には嫌な予感が走る。

「……おいジャック、まさか今回も全て俺に押し付けるわけじゃねーよな」

そうこの男、俺を買った後に宣言どおり馬車馬の様に働かせやがった。いや、馬車馬のほうが、まだましかもしれない。自分で受けてきた大量の依頼を、片っ端から俺に押し付けるてくるのだ。その量たるや、俺を過労死させる気かと思うものだった。たとえ、過労死しなくてもあんな仕事を請け続けていたら、いつか死んでしまうと本気で思ってた。

……そのおかげで、実力が上がったのも確かなんだけど。

だが、今回の相手はまずい。流石にあのメンバーを俺一人に押し付けられたら死んでしまう気がする。ジャックは原作だと、こともなさに生き残っていたが、それはジャックだからだ。

ナギと戦っている時に他のメンバーは手を出さなかったが、俺の時にもそうなるとは限らない。いくら強くなったとは言え、紅き翼のメンバー全員にいつせいに来られたら、流石に勝てる気がしない。

「ああ、今回の対象には少し興味があるからな、俺も行く」

まあ、それなら最悪でも死にはしないか。

これで俺も紅き翼にはいることができそうだ。ジャックと行動を共

に出来たのは、今考えると僥倖だったのかもしれないな。俺が単独で入ろうと思って行動しても、ちゃんと接触できたか解らないからな。

そして、襲撃当日。

「んっふっふ。コイツが旧世界の日本の鍋料理って奴かあ。
じゃ、早速肉を〜」

「あつ、ナギおまつ……！
何、肉を先に入れてんだよ！？」

崖の上から、紅き翼の様子を窺っていると飯を食っていた。
あー、そうだった。確かこの時あいつら鍋食ってたんだよな。
……鍋か、そういえば『ネギま！』の世界に来てからそんなもの食ったこと無いな。俺も元は日本人だったので、正直羨ましい。この世界に来てから日本食なんて、お目にかかったことすらない。それどころか、奴隷剣闘士時代はまともな飯なんて食えてなかったからな。

……戦闘はジャックに任せて、俺はあいつらのところに鍋食いにいこーかな？ いや、ばれたら流石にジャックも切れるか。
俺がそんなこと考えているうちにも、下では鍋將軍がどうか楽しそうにワイワイと鍋をつついていいる。いいなあ、ああやって何人かで囲って食べる鍋、マジ俺も食いてえ。

あと、鍋將軍じゃなくて鍋奉行だろうが。將軍と奉行とじゃ仕事内

容が違いすぎるだろ。鍋奉行が、鍋を仕切りたがる人だとしたら、鍋將軍はいたい何なんだよ。何だよ、鍋でいたい何と戦うんだよ。いや、食材を奪い合うという意味では、戦場とも言えるから將軍でもあながち間違いないかねーのか？でもそれじゃ結局仕事内容変わってるじゃねーか。

……あつちを楽しむだというのに、こっちときたら。俺は後ろにいるジャックの方へ振り返る。

「……はあ」

「おい、てめえは人の顔見て何溜息ついてやがる」

いや、だってさあ……

「まあいい、そろそろ行くぞ」

そう言つてジャックは一振りの剣を振りかぶり、

「あ」

投げた。

そして、それはあいつらが食事している中心、つまり鍋へと向かつて凄まじいスピードで飛び、過たず突き刺さる。

隣れ、鍋はひっくり返し詠春の頭へ見事に、まるで狙ったかのようにライド・オンした。

……何てことを、俺はまだ一口も貰ってないのに。

詠春も俺と同じように食い物を台無しにされた所為か、怒っているのが遠目からでも確認できた。

「食事中失礼——ッ！」

俺は傭兵剣士ジャック・ラカン！！
ちなみにコイツは俺の後輩でアベルだ！！」

お前、空気読めや。

「いつちよ、やろうぜツ！！」

挑発するにしても飯台無しに必要なえだろ別に。久々に日本食が食いたかった。

「どーしたー来ねーのかあ——！！？
来ねーなら、こっちから……」

尚も挑発を続けるジャックだが、次の瞬間に、

「いッ……」

「斬る」

「おほッ」

一瞬で距離を詰めてきた詠春に、持っていた剣を断ち切れ気持ち悪い声を出した。

「お？ 詠春の攻撃、凌いでるぜ」

「あの大男、やりますね。

目つきの悪い眉無しの方も見たことがあります。

二人とも少し前まで、南で話題になっていた剣闘士ですよ」

ナギとアルビレオが俺たちについて話している間にもジャックと詠春は何合も切り結んでいる。

「ちよっ、タンマタンマ。

あんたマジで強えな、ちょい待たね？」

「ふざけるなっ！

やる気なら本気を出せ、貴様っ！」

「へっ、ソースか。

けど、あんたの相手はコイツが努めるぜっ！」

そう言うジャックはこっちの方へ跳んできて、俺を詠春の方へ押し出す。

「えっ」

ちよっと待て、そこは原作通りにお色気作戦でいいんじゃないの！？

「貴様が相手かつ！」

それに対し、詠春は馬鹿正直に俺の相手をしようと迫ってくる。

真面目かつ！？

「っく」

——シュンタクシス・アンティケイメノイン 気と魔力の合——

俺はそれに咸卦法を発動して対応する。

「これは、咸卦法かつ！？
何の予備動作もなしに……」

詠春は驚いた様子を見せるが、攻撃の手は緩めずに切り込んでくる。
俺はそれをいなし、避け、反撃していく。

「っち、マジで強え。」

ジャックの野郎、後で覚えてやがれっ」

原作では既に現役を引退して、良い所がほとんど無かったが流石最
に盛期は違う。英雄の面目躍如と言ったところだろう。剣筋の鋭さが
ヤバイな。剣の腕だけで言えば、ジャックよりも高いと言っている。

「神鳴流奥義『斬岩剣』！」

「っうお、あつぶね」

いきなり奥義なんて打ってきやがった。

でも神鳴流って何で技打つとき、高確率で技名叫ぶんだ？

いや、俺も思わず叫んじゃう時あるけどさ。まさか俺と同じで、そ
の方がテンションが上がるなんて馬鹿な理由じゃあるまい。

そんなくだらない理由で、自分の放つ技を態々相手に伝えているん
だったらマジでただの馬鹿だろ。それだと俺もジャックも馬鹿にな
るな。ジャックはともかく俺はそこまで馬鹿じゃない、はずだ。

それにしても、本当に強いな。剣と拳を交わしながら、俺は驚いて
いた。

馬鹿にする訳じゃないが、それでも原作のイメージが強かったから、
ここまでの戦闘力を持っているとは思っていなかった。少なくとも
本気を出さなきゃ勝つことは無理そうだ。

これは、必殺技行くか。

——咸卦闘法『カクトゥス霸王樹』——！！——

これは、『鳳仙花』を発展させた技。鳳仙花は攻撃を叩き込む瞬間に咸卦法の反発力を解き放つ技だが、この技は俺に接触するとオートで反発力が解き放たれる。

これは、体の内外に纏っている咸卦法の外側の部分だけをわざと不安定な状態で維持する技だ。そうすることによって、触れた瞬間にその均衡が崩れその部分の咸卦法が反発力として解き放たれる。非常に繊細な気と魔力のコントロールが必要で、習得難易度は咸卦法の比ではない。神から咸卦法の才能のみを与えられ、それだけを鍛え続けた俺だからこそできる技だ。あのジャックですら匙を投げるほど、と言えばどれだけ難しいか解るだろう。

この技は鳳仙花に比べれば一発、一発の威力は劣るが、その分鳳仙花には不可能なほどの連撃が可能となり、さらに敵の攻撃が触れた瞬間に爆発を起こすため防御にも使える。攻防一体の技なのだ。

「つく、これは」

詠春もこの技の特性に気づいた。

ここで、ようやく詠春の攻撃が緩んだ。俺の技に迂闊に手が出せないと判断したのだろう。

ここが、チャンスだ。

「ストップ！

一回、冷静にならね？

鍋ひっくり返したのは俺じゃねえぞ？」

ここで停戦を提案。どうせその内仲間になるんだから、ここで俺が

戦うことに意味を感じない。ジャックがナギと戦っていれば、その内仲間になれるはずだ。

「ほら、あつちであの赤毛と戦っているのが、鍋ひっくり返した犯人だよ、解ってんだろ？」

だから、あんたが俺と戦う理由はないはずだ」

そう言っつて、いつの間にやらナギとドンパチやり始めていたジャックの方を指差す。

「しかし、そちらは依頼でこちらを襲いに来たのでは……？」

俺のその台詞に訝しそうな顔をし、尚も警戒を解こうとしない詠春まあ、それも当然のことだ。敵にこんなことをいきなり言われて素直に信じる訳がない。

だが、それについての答えは既に用意している。

「はっ、アイツには日頃から仕事押し付けられてるからな。珍しく本人がやる気出してるんだ。全部アイツに任せる。それで、あいつが負けたらそれまでってこと」

これは、詠春を納得させるために言ったが、同時に本心でもある。今まで俺に仕事を悉く押し付けてきたんだ。一番大変なイベントくらい、てめえがこなせよジャック。

「随分と薄情だな？」

「ま、どうせアイツが負けるなんてありえねえしな」

「なるほど、信頼している訳か」

「強さだけはな」

原作を知っているから、と言うだけではない。アイツとやり合ったり、共に戦っていれば、嫌でもあいつの強さは解る。若干身内びいきが入っているかもしれないが、アイツが負けてる姿というのは想像しづらい。

まあ、俺の最強の技を使えばどうなるかは解らないが。ただ、あの技は敵を殺すことのみを考えて作り出しているので、今のところジヤックや赤き翼の連中に使う気にはならない。

「という訳で、俺らもあっちの観戦に行かね？」

「あ、ああ……」

詠春とともに、空中に浮いているアルビレオとゼクトの隣へ並ぶ。すると、アルビレオが話しかけてくる。

「おや、そちらは終わったのですか？」

「ああ、元々今回の仕事は乗り気じゃなかったしな。いつもの意趣返しで、あの馬鹿に全部任せた。

そっちこそ、あの赤毛に加勢してやらなくていいのか？」

「はい」

「バカの相手は、バカにさせるのが一番じゃ」

「はっ、違いねえ」

俺の質問にアルビレオとゼクトが軽く返してくる。

俺もそうだが、こいつらも仲間を信頼してんじゃねえか。

そうして、俺は赤き翼のメンバーと一緒にバカ二人の戦いを観戦することになった。

side ラカン

俺は作戦通り、敵の一人をアベルに押し付けることに成功した。
これで、あの剣士はアベルが何とかするだろう。

「フ、一丁上がりだ」

と、格好をつけていると上から雷撃が降り注いでくる。

「ぬんっ」

俺はそれを華麗な身のこなしで楽々かわしてみせる。

「おう、出たな。

赤毛の魔法使いは弱点なし。

特徴、無敵」

煙が晴れるとそこには、杖を携えた赤毛のガキが立っていた。

「……てめえら、手え出すなよ」

そいつは、随分と好戦的な笑みを顔に貼り付けていた。
随分と勇ましいことだな。

「奇遇だな小僧。」

俺も南じゃ、無敵と滅法噂の男だ。
因みにあつちで剣士と戦ってる奴も俺ほどじゃねえが強えぞ」

「はっ、詠春だつて強えぞ？」

それよりオッサンいいのかよ、剣無しで」

「心配すんな。」

俺は素手の方が強え」

そこで、お互いの気と魔力が凄まじい勢いで高まるのを感じる。

「は」

それに、赤毛の小僧が笑みを漏らす。

「フン」

俺もその笑みに、笑みをもって応える。

——次の瞬間お互いの顔面を、お互いの拳が捉える。

「ぐおっ」

ゴシャッ、と人体が奏するには些か物騒な音を立てて、赤毛の小僧が吹っ飛ぶ。

「は」

向こうの拳も中々重かったが、俺を吹っ飛ばすには至らない。

「へ」

それでも赤毛の小僧は、すぐに体勢を立て直して大量に分かれて……

「うおっ、たくさん!？」

ニンジャかよ……、うーんと」

分身の術って奴か？

それにどう対応しようか考えるが、

「めんどくせつ。

——ぬふんっ!」

途中で面倒臭くなり、気を叩き付けて一帯を吹っ飛ばす。

ドウツ、と凄まじい音を立てて周囲に生えていた木も巻き込みながら、小僧の分身を全て吹き飛ばす。

しかし、その中にあの小僧の本体はいなかった。

どこにいるのかと、辺りを見回す。

いた。奴は空中で、杖を携え呪文詠唱していた。

ヘカトシタキス・カイキリアキス・アストラフサト

「百重千重と重なりて走れよ稲妻」

「大呪文かッ」

——気合防御!——

「『千の雷』……！」

その赤毛の魔法で辺りが焦土と化した。

俺たちはその後、焦土を拡大させながら戦い続けた。それは、なんと13時間にも及ぶ長い戦いとなった。

朝日が昇り、小鳥が朝を告げるかのように囀る中、俺たちの戦いは一端の終結を見せた。

しかし、残念ながら決着がつくことはなかった。

「フ……フフ……」

やるじゃねえか、小僧」

「あんたこそな」

お互いフラフラで、肩で息をしている状態だ。俺をここまで苦戦させたのはアベル以来だな。だが、今回はタイマンという訳ではない。

「いや、4対2で挑んでおいてこの様じゃあ……俺の完敗か」

そういや、アベルの奴はどうなったんだ。大分時間経ってるから、決着がついてないということはないと思うが。

「俺は……俺に並ぶ人間がいたってだけで満足だぜ」

そんな、熱い会話を俺とナギ・スプリングフィールドが繰り広げている時だった。

「お、やーつと終わったか。長かったなー」

「本当ですねー」

「ほら、ナギもう行くぞ」

アベルが何故か敵と仲良さそうに、俺たちのもとに寄ってきた。
……何やってんだ、コイツは。

「……おいアベル、てめえは何で敵と仲良くしてやがんだ、ア？」

「いやー、ジャックに任せれば何とかなると思って。
まさか、ジャックが負けるとはなー」

そつぽを向きながら棒読みで言っても説得力が無え。
それに、さっきは完敗とか言ったが、実際まだ負けてねーつつの。
と、そんなことを話しているうちに、小僧がああ剣士に背負われて
去っていく。

「こら、てめえ……」。

ナギ・スプリングフィールド！
リベンジすんぞつ、必ず決着……つけてやる……ぜえっ」

「おお——っ。

いつでも来いや、筋肉ダルマあ。
戦争やってるよりも気が晴れらあな」

その後、俺たちとアイツらは再戦を果たしたり、何故か酒と一緒に飲んでいたり、なんだかんだと色々あった。アベルとナギが戦って、アベルがボコボコになっていたのが、いい気味だった。アイツは遠距離から質より量で攻めると、割と簡単に落ちるな。

他にも色々、もう本当に色々あった。

そして、気づくと俺もアベルも奴らの仲間になっていた。

本当、何でこうなったんだ？

11話 恋とはするものでなく、落ちるもの

一目惚れ、というものを信じるだろうか。

少なくとも俺はそんなものは信じていなかった。何故って、それは所詮相手の容姿だけを好きになったということで、そこには心の入る余地なんか無いから。

いや、フラグがどうか、ハーレムがどうか考えていた俺がそんなことを言っても何の説得力も無いかもしれない。しかしそれは男なら誰でも一度は考えそうな、所謂ロマンというやつであり、恋やら愛なんて感情とは程遠いものだ。

とにかく、少なくとも俺は一目惚れなんてものは単なる幻想であり、それは決して純粋な想いにはなり得ない、そう思っていた。そして、俺はそんなものは決してしないだろうと、そう思っていたし、事実転生前に歩んだ人生においても一目見て人を好きになるなんて経験は一度もしたことなど無かった。

それはもちろん、この世界においても揺らぐことのないものだと思っていた。

さらに言うならば、俺は未だにこの世界を物語の中のものだと思い込んでいたのかもしれない。俺というイレギュラーがいる時点で、そんな考えは捨てるべきだったというのに。

その所為か、本気でこの世界の誰かに心の底から惚れる、という事態を想定していなかったのかもしれない。

side アベル

俺とジャックが赤き翼に入り暫らく経った。

様々なことがあった。いや、解っていた筈だけど実際に自分がその渦中にいると中々しんどいものだった。

初め紅き翼はアルギユレーの辺境で細々と活動していた。
アルブラ

しかし、帝国が大規模転移魔法を実戦投入したことにより、連合の防衛の要となっていた巨大要塞「グレートブリッジ」をついに陥落させたのだ。

そこで、俺たち紅き翼の出番が来た。

紅き翼が前線に出ると、俺も含め紅き翼のメンバーはいずれも八面六臂の大活躍を成し遂げた。

中でも「グレートブリッジ奪還作戦」での活躍は目覚ましいものがあつた。

その戦いは、今までの中でも最大の激戦と言えるほどの大きな戦いとなった。

それによりナギは敵兵からは『連合の赤毛の悪魔』と恐れられ、味方からは『千の呪文の男』と讃えられることになった。

この一大決戦により、戦況は一変した。今まで帝国に押されるばかりであつた連合は、大逆転を果たした。

連合は勇躍し、領内にまで攻め入っていた敵兵を攻め戻し、逆に帝国領内にまで躍進するほどの勢いを見せた。

余談ではあるが、この頃にナギのファンクラブが設立した。

いや、実のところジャックや俺は奴隷剣闘士時代から既に、規模は小さいもののファンクラブ自体はあつたんだが。

さらにこの頃に、ガトウやタカミチといった新しい仲間が加わった
りした。

どうでもいいが、この頃のタカミチはまだまだ可愛げがある少年であり、原作のあの老け具合を思い出すと何とも言えない虚しさが俺の中を吹き抜けていく気がした。

そして俺は、ついにあの王女様に相見えることになった。なってしまった。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ？」

俺たちは今、ガトウに本国首都まで呼び出されていた。まあ、俺は用件を知っているんだがな。

「会って欲しい人がいる。協力者だ。」

「協力者？」

「そうだ」

そのナギの疑問にに答えたのは、俺たち以外の者だった。

「マクギル元老院議員！」

お偉いさんの登場に皆が驚く。

「いや、わしちゃう。

主賓はあちらのお方だ」

マクギル元老院議員はそう言って、俺たちの視線をある方向へ促す。そして、その方向からコツコツと靴が床を叩く音を伴って、白いローブを着た、それでも凜とした雰囲気伝わってくる女性が入ってきた。

「ウェスペルタティア王国……アリカ王女様だ」

一目見て、俺の時間が止まった、気がした。

「——っ」

思わず息を飲んでしまった。

誰が来るか、どんな人が来るか解っていたはずなのに。

それでもなお、俺はその姿に、見惚れて、見蕩れて、魅入られてしまった。

鼓動が、煩いくらいに高鳴った。

有り得ないと、そう思った。

たとえ、それがどんな美しい女性であろうとも、一目惚れなどしたことがなかった。

その上、彼女はものがたりこの世界の主人公の母親になるはずの存在であり、ナギと結ばれることなど最初から決まっているような存在だ。

俺の想いなど届くはずもないし、仮に万が一何かの間違いで届いてしまったとしても、碌なことになるとは思えない。最悪、主人公が不在なんて事態になってしまう。

そんなことは解っていた。

……解っていたはずだった。

それでも、この想いは鎮まってくれそうにはなかった。

行動を抑えるということだけなら、恐らく誰にでもできるだろう。それでも想いを、自分の思い道理にすることなんてできなくて……決して叶うことのない、実ることのない、そんな恋心を抱いてしまった。

これも、運が悪いと言っのだろうか。初めて一目惚れした相手がよりによって彼女だとは。

ふとナギの方を見ると、俺と同様にアリカ王女に見惚れていたようで、それをジャックに気づかれていた。

幸いなことに、ジャックはナギの方に気がいつていて、俺の様子に気がついてはいないようだった。ああ見えて、バカの癖に、ジャックは恋愛関係には鋭かったりするので、見られなくて良かったとホッとする。

そしてこの想いが誰にも永劫気づかれないようにと、そう心から願った。

「ワハハハハ、上手いことやりがつて、こんガキヤ！」

「ああ！？ 何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ、お姫様とイチャイチャ、キヤイキヤイ、お喋りしてたろーがッ！」

「してねっつの、何がイチャイチャだ、バカッ！」

アリカ王女がを去った後、紅き翼のメンバーだけが残ったこの場で、ジャックとナギが騒いでいる。こいつらは、仲がいいなあ。バカ同士波長が合うんだろう。

それにしても、ナギはこの頃はまだ本当にガキだな。アレは誰が見ても上手くやってるようにしか見えねえって。

流石はネギ・スプリングフィールドの父親ってどこか？フラグ乱立能力は遺伝です、ってか？

ああ、妬ましい。

……フラグ乱立より何より、あの王女様の心を射止めるってことが何よりも妬ましいな。

「なーに、言っただよ、俺なんか……」

『気安く話しかけるな下衆が』、だぜ？

……いや、ありやいい女だぜ、一本芯の通ったな」

原作通りというかなんと言うか、ジャックの扱いはぞんざいなものだった。

まあ、それも仕方のないことだとは思う。ジャックみたいな大男がいきなり、あんなに馴れ馴れしく話しかけてきたら誰だって警戒するわ。

因みに俺は、王女様とは一切話そうと、というか目を会わせようともしなかった。

無理だろ、コレ以上惚れることになったらやりきれない。

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？

俺あ、あんなおつかねえ女見たコトねえぞ。

なあ、アベルお前もそう思うだろ？」

何故そこで俺に振ってくるよ。誰か俺の複雑な心境を察してくれよ。いや、知られたくはないんだけどさ。

さて、なんて答えたもんかねえ。

「……まあ、お前らが王女様に対してなんて思ってるかは知らないが」

「知らないが？」

「とりあえず、ナギはあの王女様に見蕩れてたな」

「っな！？」

とりあえず、ナギに対して爆弾を投下しておいた。俺に振ったのが運の尽きだ。

「グハハハハ、やっぱりそうなんじゃねーかよナギ。でも、それを認められないところが、まだまだ可愛いガキなんだよな、てめーはよ」

「んっだそりゃ、意味解んねえ、触んなっつーの！
っーか、お前アベル何言ってんだよッ！
てめーら二人と勝負するか、コラッ！？」

その後もギヤイギヤイと騒ぐ二人だったが、

「しかしよ、ウェスペルタティアの王女ってコトはアレか？
例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

その言葉に、先程騒いでいたのが嘘のようにトーンダウンした声でナギが答える。

「いや……姫子ちゃんのこと……なんか話にくいみたいだったな」

「へえ……？」

その様子に、ジャックもからかうような真似はしなかった。

「アリカ姫……か」

その場にいる誰かがポツリと漏らした。

王女様が助けを求めてきた理由は、王国がヘラス帝国とメセンブリーナ連合の勢力境界に位置していたため、自ら調停役となって戦争を終わらせようとしていたが力及ばず紅き翼に助けを求めに来た、ということらしい。

何から何まで原作通り、世はコトも無し、ってか。

「要するに戦争やりたいやつらがいるんだろ、まーた『あいつらか！？』」

「『コスモエンテレケイア完全なる世界』……帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイア内部にまでシンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです……。
やはりこれは、思った以上に根が深い……」

『完全なる世界』、か。こいつらに関しては、原作以上のことは知らないから俺も力にはなれないんだよな。

というわけで、俺たちは休暇中に『完全なる世界』について独自の内定を開始した。

ここで、驚くべきことが起こった。

なんと、ジャックとナギに加えて俺まで居残り組みとなってしまう。赤き翼の連中の認識では俺は二人と同レベルだったらしい。

俺は内偵くらいできると、抗議したのだが、その時の反応が皆一様に「え？ 何言ってるのコイツ？」って感じだった。これは、シヨックだった。

そして結局、内偵は俺、ジャック、ナギを除いたメンバーで行われることになった。

俺はこの後、無理にでも内偵組についていけば良かったと後悔することになる。

休暇中、あの馬鹿と王女様は、二人で買い物に行ったり、用もなく二人でブラブラと出かけていたりといつたりとイチャイチャ、イチャイチャしていたのだ。

これは、いったい何の拷問なのかと。唯でさえ、イチャついてる人間が目の前にいたらイライラするというのに、よりによってその片割れが俺自身が想いを寄せる人間なのだ。せめて、俺の見えないところでやって欲しかった。

その二人が中睦まじくしているところを見るたびにズキズキと心が痛み、虚しさのようなものが吹き抜けていく気がした。

そんなことをおくびにも出さず、普段通りに振舞っていた俺を褒め

てやりたい。

そんな拷問な休日を通り過ぎていと、遂にナギが証拠を掴む日がやってきた。

「まさか……こんな……」

「よお、ガトウどうした？ 深刻そうな顔してよ」

「いや、ガトウが深刻そうな顔してんのはいつものことだろうが」

「顔のことは、余計なお世話だ、アベル」

「それでどうしたんだよ」

「ああ、ラカン。

いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが……。

コレがどうにも信じがたい内容でな。いや、情報ソースは確かなんだが……うゝむ。

信じていいんだか、悪いんだか……しかしコレが確かなら奴らの行動も……」

そう言つて、考え込むガトウ。

この会話にはなんだか、デジャヴを感じた。確かこの後すぐにナギが証拠を掴んでくるんだっけか？

「んだガトウ、ハッキリしねえな。もつと解り易く言えや」

ズイッとガトウに迫るジャック。

「いや、言ってもアンタにや興味ない話だよ、多分。

それより、こっちの方が深刻だ。この男にも『完全なる世界』との関連の疑いが出てきた……大物だよ」

そう言つてガトウはある人物のプロフィールが書いてある書類を差し出してくる。

「コイツは……今の執政官^{コンスル}じゃねーか!!

このメガロセンブリアのナンバー2までが奴らの手先なのか!？」

その人物には、流石のジャックも驚きを隠せなかったようだ。

「確証はない、外では喋るなよ?」

そう、ガトウが言い終わつた瞬間にまるで狙い済ましたかのようなタイミングで町の方からズズンツという爆発音が聞こえてきた。

ビンゴだ。今日はナギと王女様が出かけているし、間違いないだろう。

ジャックとガトウは何だ、と騒いでいるが、後はナギが帰ってくるまで待つてりゃ問題ないだろ。

そして、

「……で、貴様は一昼夜アリカ女王殿下を連れ回した拳句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか!!どんな夜遊びだ、それは?!?」

詠春がお冠になった。

「まあ……」

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！

何の為に秘密裏に調査していると……大体、万が一王女殿下にお怪我でもあつたらどうする気だっ……！」

詠春は怒ると怖いな。普段溜め込んでる所為か、いったん爆発するととんでもないな。

でも、これじゃ話が進まない気がするのでそろそろ止めておくか。

「詠春それくらいでやめておいたらどうだ？」

王女様も怪我無かつたんだし、別にいいじゃねえか」

「それは結果論だっ、大体アベル、お前がもつとナギと王女殿下について気を配っていればこんなことにはっ！」

うおっ、こっちに怒りの矛先が向いた。いやいや、俺ってナギを抑える係りとして期待されてたの？無理だろ。ナギも王女様も俺が何言っても聞くような玉じゃねーよ。

王女様にいたっては、未だに会話どころか目すら合つたこともねーよ。

「いや詠春、姫さんもノリノリだったぜー？
楽しかったー、とかつて」

「嘘をつけっ……！」

どうせ貴様が無理矢理連れ回したんだろう！ 姫にこんなご迷惑をおかけするとは、どうやってお詫びすればよいか。国際問題級の……

…」

ナギの言葉に予先が戻る。クドクドと説教を続けるが、ナギの反省が見られない態度がさらに詠春をヒートアップさせる。詠春、そんなに怒って疲れないのか、これからもお前は苦労していきそうだな

と、そこへタカミチ少年がやってきた。

「詠春さん、あのコワイ冷血なお姫様が今、廊下で僕に向かってニツコリ……」

僕ビックリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。

確かに笑いましたよねっ」

「うむっ、驚いたのじゃ」

おいおい、タカミチお前は王女様のことそんな風に思っていたのか。不敬罪で処刑してやるのか？

……言っておくが、決して王女様の笑顔が見れたのが羨ましいからなんて思っていない。

とりあえず、タカミチ少年のその言葉を聞いて詠春はようやく沈静化した。

言葉を失った詠春を見て、アルなんかクスクスと笑っている。

そして、ナギはというと、

「な？」

と、あっけらかんと言いつつ。

そして、

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

とキメ顔で言い、証拠品を詠春に突きつけた。

その後、王女様は後帝国の第三皇女と接触するために俺達と別れた。そして今、俺達はナギの見つけてきたメガロメセンブリアの執政官がこの戦争に加担しているという証拠を手に、本国首都のマクギル元老院議員を訪ねにきた。

「マクギル元老院議員、証拠をお持ちいたしました。」

「ご苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……ブラエトル法務官はまだいらっやいませんか」

「法務官は……来られぬこととなった」

「……ハ？」

この茶番必要か？どうせこいつの正体はアーウェルンクスなんだから？だったらナギが攻撃する前に、俺の本気の一撃で殺すつもりでいいか。

「アレから少し考えたのだから、ね……？」

マクギル元老院議員は何も言わずに近づいてくる俺を訝しげな顔で見つめて言葉を止める。

俺はそんな様子を無視して自然体で近づいていく。

その俺の行動にジャックやガトウは疑問符を浮かべているようだが、ナギだけは警戒態勢に入っていた。流石だな。

そして、十分に距離を詰めたところで、

「む？ いったい何かね……」

——『竜胆』！——

瞬時に咸卦法を発動し、全力の一撃を叩き込む。流石に近距離からの竜胆はいくらなんでも避けることは無理だったようで直撃する。

「「な……」」

ジャックとガトウが驚愕の声を上げる。

「ちょ——っ!？」

アベルお前何やってだよっ!？

いきなり元老院議員を亡き者にするとか何考えてんだよっ!？
馬鹿だとは思ってたがここまでとは……」

ガトウが詰め寄ってくるが、それをナギがフォローする。

「馬鹿はオッサンだぜ？
よく見てみるよ」

「何っ？」

ナギが促した方向に目をやると、晴れた煙の中から人影が現れた。あれでも仕留められないか。

「……よくわかったね、究極技巧の男。そっちの千の呪文の男も気づいていたようだし……」。

こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ。本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガ口湾の底だよ」

「てめえっ！」

ナギかその言葉に反応し突っ込もうとするが、横から炎を操る男と、風を操る男が現れその道を阻む。

「強えぞ、奴ら！」

「ハッハ、だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ……」

万倍！！！！ 戦いやすいぜッ！！」

そう威勢よく巨大な剣を取り出すジャックだが、

「フ……」

敵はそんなことお構い無しにどこかへと通信をする。

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！

ああうむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ。

スプリングフィールド、ラカン、カトラル、ヴァンデンバーグ、奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている、軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

ここだけは、原作から変えたかったが無理だったか。

「……君たちはやり過ぎたよ。

悪いが退場してもらおう」

そう言っていると、巨大な石の柱が、俺たちのいた建物ごと貫いて現れた。

結局、俺たちは反逆者となってしまうた。事前に知っていても変えられないもんだな、と少し落ち込んだ。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。

ヌッフフ、いいねえ人生は波乱万丈でなくっちゃな」

ジャックは暢気にそんなことを言っているが、俺とナギの気分は重い。

「……姫さんが、やべえな」

こんなことになるなら、ナギだけは無理言っても王女様についていってもらえば良かったな。俺の見通しが甘かった所為か……。いや、まだ原作通りになっただけのことだ。良くはないが、最悪で

もない。

今は余計なことで悩むのはよそう。

そして、まんまと罠に嵌まった俺たちは、連合からも帝国からも終
われる身となってしまう、辺境を転戦し原作通りに『ノクティス・ラビリントゥス夜の迷宮』へ
王女様を救出しに行くことになった。

12話 みんな大好き戦争

ノクティス・ラビリントゥス
夜の迷宮

夜の迷宮を轟音が駆け抜け、その一部が破壊された。

それは、囚われの姫を救うためにやってきた、英雄の仕業だった。

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

そこには、物語の一部のような気取った台詞はなく、ぶっきらぼうな言葉が交わされるのみ。

しかし二人の間には、確かな信頼と絆があった。

side アベル

現在は俺たちは王女様たちの奪還を果たし、オリンポス山にある隠れ家に無事到着した。

王女様の奪還は、案外すんなりいった。コスモエンテレケイア『完全なる世界』は優秀なんだか無能なんだか解らないときがあるな。

いや、最近感覚が麻痺しつつあるが、この紅き翼アラルフラが異常なまでの戦力を持っているだけか。

「何だ、これが噂の『赤き翼』の秘密基地か！
どんな所かと思えば……ただの掘立小屋ではないか！」

テオドラ皇女が、隠れ家に文句を付け出した。

いや、隠れ家なんだから地味なものに決まってるだろう。

ジャックもその言葉にムカついたようで、売り言葉に買い言葉で返す。

「俺ら逃亡者に何期待してんだよ、このジャリはよ」

「何だ貴様、無礼であろうっ！」

確かにその通りではあるが言いすぎだジャック、相手は子供なんだからもうちょっと言葉をオブラートに包めよ。

「まあまあジャック、あんま怒んなよ。実際みすばらしいんだから仕方ねえだろ。」

皇女様も、うちのアホが悪いね、コイツ基本バカだから」

そう言つて、苦笑しながら皇女様の頭を撫でてやる。

ああ、なんだろうこの気持ち。ちよつと前までフラグがどうか考えてたのが馬鹿みてえ。

いや、実際馬鹿だったんだろうな。アリカ王女様に惚れてからというもの、どうにも邪な気持ちというものが減衰して仕方がないな。

テオドラ皇女に対しても純粋な気持ちで、小さな子供を相手にするように接することができる。前までのハーレム願望があった、邪な俺は死んだようだ。
が、しかし。

「ほ、ほう、そなたは話が解るようじゃな。そなた名は何と言つ？」

なんて、顔を若干赤らめながら聞いてくる。

「……アベルだけど」

若干不安だが、名を名乗ると、

「そうか、ではアベル、そなたには特別にテオと呼ぶことを許可しよう」

なんて言ってくる。

ん？ これはフラグが立ったな。いらなと思った矢先に何してんだ俺は。

無欲の勝利って奴なのか。これがアリカ王女に会う前だったら良かったんだがな。

実らないとは解っていても、この思いが俺の中で燻っている限り気持ちに応えてやることはできなそうだ。我ながら随分と女々しいな。

「グハハハハ、このジャリー丁前に色気ついてやがるぜっ」

ジャック、お前は何ですぐに煽るんだ。

「やっぱり貴様は無礼者じゃっ！

アベル肩を貸すのじゃ」

そう言つて俺の方に飛び乗ってくる、テオドラ皇女殿下。肩車はジャックがするんじゃないかったのかよ。

俺の肩に乗ることにより、目線がジャックと同じくらいの高さになり、口喧嘩を始める。

ギヤーギヤー、ギヤーギヤーうるせえ。人の頭の上で喧嘩始めないで欲しい。

「よし、お前ら向こうでナギたちが割りとしリアスな感じだから、そろそろ黙ろつぜ」

そう言つて、二人の視線を促す。

丁度、ナギが王女様に騎士の誓いを立てているシーンだった。

「連投に帝国……そして我がオスティア、世界の全てが我らの敵という訳じゃな。」

じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

無敵の言葉にジャックが妙に反応するが、本当にコイツは空気読めないのか。

「世界全てが敵——良いではないか。」

こちらの兵はたったの八人、だが最強の八人じゃ」

その最強の中に自分が入っているかと思うと感慨深いねえ。

「ならば我等が世界を救おう。」

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

「……へっ、やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

そう言つて跪くナギ。悔しいが、その姿は様になっていて、王女様ともどうしようもないくらいにお似合いだった。

その後は、敵味方の判別など難しいことはガトウを中心とした頭脳労働班が担当し、王女様たちが味方を増やすのに奮闘した。

そして、ナギやジャック、俺といった肉体労働班戦闘を担当した。やることは単純明快、敵だと判明した奴らを徹底的に叩き潰した。味方を増やし、敵を倒して外堀を埋めていくという単純明快にして質実剛健な方法だ。

原作で言っていた、映画3部作、単行本にして14巻分にも及ぶ、というのがハツタリではないほどの死闘を約6ヶ月続け、遂に敵の本拠地である『墓守り人の宮殿』に辿りついた。

「不気味なくらい静かな奴らだな」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

『墓守り人の宮殿』を前にして、そんな軽口をナギとジャックが叩き合う。

そこへ、将来アリアドネー魔法騎士団の総長になるセラスがナギに話しかけてくる。

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了いたしました」

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺たちが本丸に突入できる。」

頼んだぜ」

「ハッ、それであの……ナギ殿」

「ん？」

「サ、サ、サインをお願いできないでしょうか」

「ああ？ ああ、いいぜそのくらい」

「尊敬していました」

思ったとおり、ナギにサインを求めている。

ここで一つ言い訳をさせてもらおう。俺やジャックがサインを求められないのは決して人気がないからという訳ではない。そりゃ、ナギの人気は紅き翼の中でもダントツと言っていいだろう。だからと言って、俺らにだってファンがいらないわけじゃない。まあ、俺とジャックは剣闘士時代からのファンが多いからナギとは対照的に、ファンはムサイ男の割合が高いのだが。

ここで言いたいのは、セラスが魔法使いであるという点だ。確かにナギの人気に起因してないといえば嘘になるが、ナギは魔法使いというジョブであるが故に同じ魔法使いから尊敬されているという点とだ。

俺やジャック、詠春は強いとはいえ魔法使いではないので、サインを求められない。

アルやゼクトは魔法使いではあるが、ナギの陰に隠れてしまう。つまり、ナギ以外のメンバーがサインを求められないのはあくまで相手が魔法使いだからであり、これが相手が剣闘士だったら俺やジャックは大人気だし、剣士だったら詠春の一人勝ちだ！！

——以上負け惜しみでした。

と、俺がどうでもいいことを考えていると、アルと詠春がガトウと通信していた。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。

帝国の皇女とタカミチ君も同じだろう。

決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね、私たちでやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

そのアルたちの深刻な会話にナギが答える。

「ああ」

そして、杖を自分の手元に引き寄せ、

「よおしつ、野郎ども——行くぜっ!!」

開戦が告げられた。

予定通り外の敵は、帝国・連合・アリアドネー混成部隊に任せ、ナギを初めとした、俺含む紅き翼メンバーは戦場となっている空を駆

け抜け、即効で『墓守り人の宮殿』への侵入を成功させた。

そこで待ち受けていたのは、アーウェルンクスを初め、炎を纏う男、雷を帯びる男、水を操る男、そして影使いの五人だった。

「やあ『千の呪文の男』、また会ったね。

これで何度目だい？僕たちもこの半年で君に随分と数を減らされてしまったよ。

この辺りでケリにしよう」

「おおっ」

アーウェルンクスの台詞にナギが叫び声をもって返す。

炎の男はジャックが、雷の男は詠春が、水の男はゼクトが、影の男はアルがそれぞれ担当した。

そして、ナギはアーウェルンクスに突っ込んでいく。

俺はというと、ナギと一緒にアーウェルンクスの方へ駆けた。

「ナギ！俺の最強の新必殺技を叩き込むから、時間稼ぎよろしくっ！」

新必殺と銘打ってはいるが、ただお披露目機会が無かったただけなんだが。

「ああっ！？アベルお前俺に時間稼ぎやらせるとはいい根性してんなー！？」

大見得切ったんだ、できませんじゃ済まなえぞっ！！」

「解ってるっつーのっ！！」

失敗することは無いだろう。

ただ、今まで一度も実戦投入していなかったので、如何せん使い慣れない。

準備までに時間が掛かる。

「言つとくけど、チンタラやってたら俺が決めちまうからなっ!!」

いい自信だ。

確かにお前ならアーウェルンクスを打倒できるだろう。

だが、まだラスボスがいるからナギの負担は少しでも減らしておいてやりたい。

俺では恐らくアレには勝てないだろうから、ムンドウス・マギクス魔法世界の人間である俺では。

俺が準備している間、ナギとアーウェルンクスの間を強力な魔法攻撃が飛び交う。

ナギの雷の槍をアーウェルンクスが砂塵で防ぎ、すぐさまその砂塵で反撃に移る。

ナギはそれを避け、次の攻撃に入る。それに対し、アーウェルンクスは石の槍で相殺させる。

そんな熾烈極める戦いの中、ようやく準備が終わる。

ナギとアーウェルンクスの攻撃飛び交う中に突っ走っていく。

それに一瞬ナギが驚くが、問題ない。

既に『カクトゥス霸王樹』を発動させているので、向かってくる攻撃を吹き飛ばしながら突き進む。

実は『霸王樹』を併用しなければいけないことが、準備に時間が掛かる原因だったりする。

今から俺が打とうとしている技は、相手に接近しないと使用不可の

ため敵に接近する必要がある。相手が雑魚ならばいいが、アーウェルリンクスレベルが相手になると『霸王樹』発動させなければ容易に近づけない。

『霸王樹』は俺の技の中でも最高難易度を誇り、制御が難しい。それ故準備に時間が掛かる。

だが、いったん準備が終了すればこっちのものだ。

自分の攻撃をもとめせずに、突き進んでくる俺にアーウェルリンクスが驚愕の表情を浮かべる。だが、もう遅い。ピタリとアーウェルリンクスの腹部に手のひらを当てる。

「君の事をすっかり失念していたよ」

なんて、余裕そうな言葉を吐くがもう詰みだ。

——咸卦法・究極闘法『アラニウム・リーリア彼岸花』！——

技を放った瞬間にアーウェルリンクスの体が、ビクリと跳ね次の瞬間に体の穴という穴おから血液が吹き出る。

「っな……ぐあ……」

先程までの余裕は吹き飛び、攻撃を吹き飛ばした時よりも遥かに驚愕した表情を見せる。

原作では、ナギにやられた後もまだ生きてはいたが、俺の攻撃を喰らったアーウェルリンクスは言葉を残すまもなく絶命した。そこへ、ナギが駆け寄ってくる。

「おいおい、一撃かよ。」

アベル、何だよ今の技は？」

「ああ、咸卦法のエネルギーを相手の中に無理矢理流し込んだ。んでもって、流し込まれると、俺の制御から外れたエネルギーが体の中で爆発を起こして、中からボカンッ、て訳」

そして、体から血が吹き出る。そのシルエットがまるで彼岸花の花びらのように見えるために『彼岸花^{アフリナム・リリア}』。

白眼とかあったらこの技もつと使い勝手よさそうなんだけどな！。

「うげっ、えげっねえ技だな」

俺の説明を聞いたナギが舌を出して嫌そうな顔をする。

「言つなよ、だから今まで使わなかったんだよ」

敵の本拠地とは思えない程、緩い空気で俺とナギがそんな会話をしている、他のメンバーも駆けつけてくる。

ということは、もうすぐラスボスが来るってコトか。と考えていると、ゾクリと背筋に悪寒を感じた。

「ナギッ！！」

その瞬間ナギを蹴り飛ばす。

一瞬ナギが何すんだよ、という不満そうな顔をするが、次の瞬間に俺の体を敵の攻撃が貫く。

「ッガハ……」

解っているから避けることも考えていたが、ちょっと無理だった。

「!？」

「ア……アベルッ」

俺が貫かれたことにメンバーたちが驚く。

「誰だ!？」

ジャックが攻撃が放たれた方向を向くと、そこにはライフメイカー造物主と思われる影がユラリと現れた。

それに、いち早くゼクトが反応し障壁を張る。

「いかんッ」

クラティス・アイギス
——最強防護——

それに他のメンバーも続き、防ごうとするがそこにはナギの姿もあった。

コレでは意味が無い。ナギのダメージを少なくしようと思っていたというのに。

俺はボロボロの体を無理矢理動かす。ダメージはでかいが、無理をすれば動かないというほどのものでもない。

「ナギッ！ てめえはどいてろッ!！」

ナギを押しつけて前へ出る。

ヘリアンティス
——向日葵!——

残りの気と魔力を総動員する。

次の瞬間、造物主の放った強大な魔力が俺たちを直撃する。

一瞬、ほんの一瞬は拮抗したが、俺たちの防御はすぐに紙切れのようになり吹き飛ばされた。

「ぐっ……バカな……」

「まさか……アレは……」

ナギを除いて造物主の攻撃を喰らった俺たちの様子は死屍累々としたものだっただけで、ジャックに至っては両腕を無くしていた。

アルも詠春もゼクトも傷だらけで、ジャックに至っては両腕を無くしていた。ここら辺は原作通りだが、ナギの傷はかなり少ない。ほっとけば治るような傷くらいしかついていない。

それにしても造物主、ジャックが力の差とか関係なく絶対に勝てないということが解ったと言っていたが、確かにその通りだ。

アレにはもはや、どうすれば勝てるのかが解らない。どうなれば勝ちとなるかすら解らなかった。

「てめえらっ、後は俺に任せなッ」

その声の方向に倒れ付していた俺たちが視線を向けると、そこには原作よりもはるかにピンピンした姿のナギが立っていた。

「ふふ、よからう。ワシもいくぞ、ナギ。

傷もお前を除けばワシが一番浅い」

「お師匠……」

そのナギにゼクトが続いた。

「ゼクト！ 二人では無理です！」

「ナギ待て！ 奴はマズイ、奴は別物だッ」

アルとジャックが二人を引きとめようとするが、

「俺は無敵の千の呪文サウザンドマスターの男だぜ？

俺は勝つ！！ 任せとけ！！！」

ナギは俺たちの方へ振り返り、そんなカッコいいことを言い放つ。
そして、造物主のいる方向へ向かっていく。

俺はそれを見届けると、瞼を閉じた。

流石にダメージがでか過ぎる。ここまで意識を保っていただけでも
自画自賛したいくらいだ。

ここまでくれば、後はナギに任せれば大丈夫だ。
俺は安心して意識を手放した。

13話 歪む想い

side アベル

ラスボス戦後、俺が次に目を覚ましたのは白を基調としたどこか病室を連想させる部屋だった。

……とりあえず、こういう時はアレ言っとくか。

「知らない天井だ」

「おや、起きましたか」

「……アル、いたのか」

いたのなら言っただけいい。恥ずかしいことを言ってしまった。まあ、アルが知ってるはずないからいいか。

「ええ。」

今は世界が救われたと言うことで盛大なセレモニーが行われていますよ」

「そうか、ナギはやっぱり勝ったか」

勝つだろうとは思っていたが、それでも若干不安があった。

俺と言っイレギュラーの所為で何かしら変わってしまうのではないかと。

そういえば原作ではゼクトが死亡扱いになっていたが、どうなんだろうか。

「みんな無事だったのか？」

「いえ、ゼクトは……」

「そうか……」

コレも原作通りか、やるせないな。

……ん？　そういえば何でアルがここにいるんだ？

「お前は出なくていいのかよ、セレモニー？」

「私は人前に出るのが苦手ですので」

胡散臭い笑顔で、そんなこと言われていもなあ。

「そういうあなたは、出ないのですか？」

今から行けば、まだ間に合うと思いますよ」

「いや、俺は……」

いいかな。なんと言うか今回のことで色々と思うことがあった。

自分の無力さを実感したと言うか。

確かに俺がいたことでナギは原作よりもいい状態で造物主との戦闘に臨めただろう。

だが、俺がいなかったとしてもナギは勝ってたはずだ。

俺の存在は意味があったんだろうか。

蓋を開けてみれば、ジャックの両腕は吹っ飛ばし、他のメンバーも瀕死状態になるし、ゼクトは何か裏切っちゃっただろうし。

俺は、転生者だけどそれなりに努力してきたから、それなりに意地

というか、誇りというか、とにかくそんなものを持っていたんだが。

「ハア……」

「どうしましたか、溜息なんてついて？
所謂燃え尽き症候群と言うやつでしょうか」

「……ああ」

思えばこの世界に来てから、奴隷剣闘士になったり、解放されたと思ったら今度はジャックに強制労働を強いられたり、いつの間にかアラルブラ紅き翼^{アラルブラ}に加入していたり、遂には世界救うような戦闘の最前線で戦つてたり、中々波乱万丈な人生歩んでるじゃねえか。

ここまで、よく生き残れたよな俺。本当運が良いんだか悪いんだか転生者なんだからもつと反則臭い力とかあっても良かっただろう、とか望むのは我侭なんだろうか。

いや、そりゃ転生当初は喜んだし。英雄にでもなつてやろーか、とか軽く考えてたさ。

けどそこまでの道のりは、思ってたよりもしんどかったし、自分の意思じゃなく流されていったようなもんだからな。

……何やってんだろうな俺。

どうせこの後、俺がいなくても原作より悪くなることなんてないだろうし、逆に俺がいたところで、原作よりも事態が好転する気もない。

俺は才能と努力により、この世界でも最強クラスの力をつけられたが、それだけだ。一人の戦力だけで世界を変えられるほどではない。
△ンドゥス・ウエトゥス
今まで戦つてばっかだったからな、一回紅き翼から離れて旧世界にでも行こうかな。もう原作に関わりたいたも別に思わないしな！。

このまま隠居でも決め込もうかな。

あれ、そういえば魔法世界の人間は旧世界に行けるのか？

「どうしましたか？」

俺が悩んでるとアルが問いかけてくる。

「ん？ いや、戦後処理はみんなに任せて、一人旅にでも出ようかな、と。」

アリカ女王様が逮捕された時にその場にいたら俺暴走する可能性があるしな。

いたら、原作より良くなるどころか、余計事態を悪化させそう気がするでしょうがない。

アリカ女王様が悪者になるのは正直腹立たしいし、耐え難いものがある。

だがしかし、今までの力づくで何とかなった戦闘とは訳が違う。政治関係では俺は絶対に力になれる気がしない。オスティア崩壊についても俺ができることは、悔しいがない。

ならば、イレギュラーである俺は消えていた方がいい気がする。

「それは……本気ですか」

「ああ、今すぐにでも出て行くかな」

思い立ったが吉日、時間が経ったら決意が鈍る。

何だかんだで紅き翼の面々と一緒にいるのは居心地がいい。残ってたら、ズルズルとそのままになりそうだ。

「誰にも言っていないんすか？」

「ああ？ アルに言ったじゃねえかよ」

とりあえず、誤魔化す。

「テオドラ皇女が悲しみますよ?」

「ジャックがいるだろ」

「あんな少女に好意を抱かれているというのにもったいない」

「……アル、それはマジか、マジで言っているのか。
いや、疑ってはいたがまさか本当にロリコンだったとは……」

原作でもそうだったし、コレまでの付き合いからそうじゃないかとは思っていたが……。

「いえいえ、違いますよ?
たとえそうだったとしても、ロリコンという名の紳士ですよ」

それでも結局ロリコンだろうが……。

「はぁ、お前は本当によく解らん奴だよ」

俺はそう言っただけで立ち上がり、部屋の出口へと歩き出す。

「本当に行くんですね……。
最後までい愛しのアリカ女王をその目に焼き付けていなくていいんですか?」

アルのその言葉に思わず足を止め、振り返る。

「……ア？」

「好きなんでしょう？あれ、違っていましたか」

ニヤニヤと厭らしい笑顔で、俺に確認してくる。

「アル、何でそのことを……」

「私の趣味をお忘れですか？」

「他者の人生の収集……」

「ええ、あなたの人生はまだ収集していませんでしたが、そのくらは解りますよ」

「他に誰か知っている奴は……」

「ご安心を、ラカンあたりは怪しいですが他には気づいている人はいないでしょう。」

「アベル、あなたは存外自分の気持ちを隠すのが上手いですから」

「ジャックか……。流石にアイツに気づかれないでいるのは無理か。」

「紅き翼の中では一番付き合いが長いし、何故か鋭いしな。」

「……ハア、頼むから誰にも言わないでくれよアル。」

「自分でも女々しいって理解してるから、人に知られるは勘弁願いたい」

「フフ、解っていますよ。そんなこと言い触らす訳無いじゃないですか」

だから、その笑顔が胡散臭いんだって。

「ま、その言葉信じておくよ。

みんなにはさ、療養のために少しの間隠居するだけでも言っておいてくれ」

そう言っただけこそ、扉に手をかける。

「今生の別れ、という訳でもないんでしょう？」

「……さあね、どうだろうな」

それは、どうなるか俺にも解らん。

「じゃあな、元気でやれよ」

「ええ、ではまた会いましょう」

その会話を最後に俺はそこ立ち去った。

side アルビレオ

「本当に行ってしまったか……」

アベル、あなたは自分の想いを打ち明けることが、終にありません

でしたね。

あなたは、ナギがその想いを抱くよりも前からアリカ女王を想っていたというのに。

いったい何に遠慮していたんでしょうね。

王女という立場からでしょうか？いえ、あなたはそんなことを気にするような人ではありませんでしたからね。とすると、やはりナギに遠慮して、ということなのでしょう。ですがそれだと変ですね。ナギがアリカ女王に明確にその想いを抱き始めたのは、会ってから暫らく経ってからでしたから。アベルは最初会ったときから恋に落ちていたようです。

アベル、あなたは最初からナギとアリカ女王が互いを想い合うのを知っていたのでしょうか。それとも、ただ単に奥手だったというだけなんでしょうか？

……まあ、アベルなら後者なのでしょうね。だとしたら、何と言うか不運というか、不憫というか……この先もあなたの想いが実るのは難しそうですね。

コズモエンテレケイア ライフメーカー
完全なる世界、造物主をナギが打ち倒し、紅き翼が英雄となつてから約十数年後の旧世界のどこか

そこには、紅き翼のメンバーであり、造物主戦後早くも消息不明となつたアベルの姿があつた。

side アベル

大分前だが俺が魔法世界を去り旧世界をブラブラと当てもなく旅をしていると、アリカ女王様の処刑の噂が流れてきた。

それからもうかなりの時間が経過した。

魔法世界を離れてから、紅き翼時代と比べまったく忙しくなくなったので、時間の感覚おかしくなりつつある。ほぼ半ニート状態なので、今何曜日？何月何日？そもそも西暦何年だよ、とかそんな感じになりつつある。金はジャックといたときに荒稼ぎしていたので、まあ細々と暮らしていただけならしばらくは困ることはない。

アリカ女王様のことは気がかりだが、原作通りあいつらが助けただる。

あいつらが、そういう大仕事をミスるとこんなで想像できない。とくにナギは主人公属性の塊のような奴だったので、見事囚われのお姫様を救う王子様の如く助け出したに決まってる。

……と強がってみたものの、やっぱり気になる。こん、なことなら誰かとの連絡手段くらい残しておけばよかった。

「ハア……アリカ女王様は無事だったんだろうか……」

「あ、それだったら原作通り紅き翼の人たちに救出されてたよー」

突如後ろから聞こえてくる声。

俺はそれに驚き、後ろを振り向きつつその場から飛び退く。

そこには、茶髪に碧眼の女がいた。

……こいつは何だ？仮にも紅き翼の一人に名を連ねる俺が、声をかけられるまで気配にも気づけなかった。

いや待て、こいつ今原作通りって言ったか？つまりこいつも転生者

なのか。それなら原作にいなかった俺が転生者というのが解ってもおかしくないのか。しかし、俺にいったい何のようだ？

「お前も転生者って訳か？ いったい俺に何のようだ」

「ん、ご名答。いやいや、流石英雄さん鋭いねー」

こいつはおちよくってんのか？

「茶化すな、もう一度聞くが何のようだ」

「あー、何でもみんなそんなに警戒するの？
アタシ程人畜無害な人間もそうはいないってのにー」

普通、気配も無くいきなり現れたら警戒するに決まってるだろ、馬鹿なのかこいつ。

「とりあえず、自己紹介しとくよ。
アタシはメアリー・スー。そっちの紹介はいらないよ、英雄アベル・
B・カトラルさん」

随分といい笑顔でその女、メアリー・スーは名乗った。

side メアリー

アタシが自己紹介はいらないと言い放つと、目の前の男、アベルはさらにその顔を訝しげに歪める。

「嫌だなー、そんな警戒しないでってばー。

君だつて一応世界を救った英雄紅き翼の一員なんだから、それなりに有名なんだよ？

別に知られてたつて不思議じゃないじゃん」

その言葉にも納得はしていないようだが、それでは話が進まない判断したのか先程の質問を再びしてくる。

「まあいい、それで結局そのメアリー・スーさんは、英雄であるところの俺にいったい何のようなんですか？」

言葉に棘を感じるなー。

「だからさ、あの女王様のことについて教えに来たんじゃない。原作通りにナギ・スプリングフィールドが救い出してめでたし、めでたしだったって」

「……それについては感謝するが、本当にそれだけか？」

「あ、やっぱり解るー？

実は他にも情報を持ってきたんだー」

そう、情報だ。

このアベル君は放っておいたら、もう原作に関わる気がなさそうだった。それではつまらないので、発破をかけにきたのだ。

△ドゥス・マギクス

魔法世界の大戦を見ていて思ったのだ。

物足りない、と。確かに当初は原作を、物語を生で見るというのは

楽しかった。

だがしかし、このアベル君とジャック・ラカンの試合を見た時に感じた程の興奮を感じることはできなかった。知っているストーリーを見るのと、未だ見ぬ物語を見るのであれば、大抵の人間は後者の方が胸がときめくというものだろう。

魔王こと神代さんも原作に関わるつもりは無いだろうから、エヴァンジェリンさんも麻帆良に行くことは無いだろう。その時点で原作は崩壊するのだが、それでは物足りないのだ。

もっとたくさんのイレギュラーなキャストが関わって物語りに彩りを添えて欲しい。

最初の望みから徐々に歪みつつあることを自覚しつつも、この欲望は止められない。

アタシの欲望を駆り立てる原因となった、このアベル君には是非とも物語りに関わって欲しい。

「情報？」

「そう、情報だよ。

だけど、その前に質問させてもらおうかな。

君はこれからどうするつもり？」

このまま原作に関わることに無く生きていくつもりじゃない？」

「……ああ、そうだな。

俺がいなくても、世界は廻る。

俺が下手に手を出して将来的に魔法世界が崩壊、なんてことになったら笑い話にもならねえしな。

この世界には^{ものがたり}はれっきとした主人公が存在するんだし、原作に存在しなかった俺が手を貸す必要もねえだろ」

やっぱりね、それが理由でアリカ女王様の救出にも関わろうとしな

かったのかな。

だけどさ、そう簡単には世界は廻らないものみたいだよ？

「ところがどっこい、このままだと原作通りにはならないんだなー。多分主人公の力不足で魔法世界滅ぶんじゃない？」

「……ハ？」

アタシのその言葉があまりにも意外だったのか、呆けた顔をする。考えたこと無かったのかな、自分以外の転生者の存在を？

「アタシが目の前にいることで気づかない？」

「……他にも転生者がいるってことか」

苦々しい顔でポツリと結論を呟く。

「That's right. その通り、大正解。

その人とエヴァンジェリンさんが一緒にいるから、主人公君の師匠がいなくなるね。

あ、高畑・T・タカミチさんの師匠もいなくなっちゃうねー。

あ、でもその人は正確には転生者じゃないんだけどね。

まあ、イレギュラーだっていうのは転生者と変わりないけど」

「それは……まずいな……」。

……待て、正確には転生者じゃないってどういうことだ」

それを聞いて果たして何の意味があるのかな。

「本人じゃないから、あんまし詳しいことを教えるつもりは無いけ

ど、簡単に言っていると転生者得点なし、原作知識なし、って感じ。原作知識についてはアタシが既に可能な限り教えたけどね」

「……他に転生者はいるのか？」

「いや、いないね。今のところ現存している転生者はアタシと君だけだ。

イレギュラーとして、さっき言ったエヴァンジェリンさんと一緒にいる人がいるけど。

あ、でも神様の暇潰しなんだから、原作が始まったらもつと出てくる可能性は無きにしも非ずだからね」

「……そうか」

そのアタシの言葉に苦虫を噛み潰したような顔をする。

そりゃそうか。このままいけば魔法世界は完全なる世界の計画通り消滅させられる。

「それで、君はこの話を聞いていたいどうするのかな？」

答えなんて限られてはいるが、敢えて自分で言わせたい。

「とりあえず、タカミチ探して修行つけてやらないとか。

……それで、タカミチは何とかなるとしてもネギ・スプリングフィールドは無理だな。戦い方を教えてやることはできても、俺が魔法を教えることは不可能だ。

それに、著しく戦闘力が上がる要因である闇の魔法を習得できない。このままいけば、ジャックが闇の魔法を知ることなさそうだし…

…」

なにやら、一人でブツブツと言い出す。ちょっと不気味だ。
助け舟を出してあげようか。

「良かったら、エヴァンジェリンさんと魔王の居場所を教えてあげようか？」

「……魔王？」

あ、反応するのそこなんだ。

「魔法世界にいたんなら聞いたことない？」

数百年前に魔法世界にいたっていう魔王。フィニス・エクス・レジェンダ終焉の導きのことを。
その人こそが現在エヴァンジェリンさんと一緒にいるんだよ」

「確かに何か似たような話を聞いたことがある気がするが、それは御伽噺とか童話の類じゃないのか？」

「実在するよ。調べれば、まだ懸賞金も懸けられたままだと思うよ？
ただ、数百年前に魔法世界であった戦闘以後、その首を狙う人もいなくなつて最近じゃ、君が言ったとおり御伽噺みたくなってるけど」

「魔王……」。

そいつは転生者得点無しなんだろ？
どうやってそこまで……」

「色々あつたらしいねー」。

なんやかんやあつて強くなつたみたいだよ」

「……なんやかんや？」

「なんやかんやはなんやかんやです」

アタシがその件に関しては、詳しく話す気がないことが解るとその件についてはすぐに諦めてくれた。
そして次の問いを投げてくる。

「……それで、その魔王の居場所を聞いて俺に何しろって？」

解んないかなー。

察して欲しいんだけどな。

「だから、頼んでみれば？ 闇の魔法を教えてませんかーって」

アタシのその言葉にアベル君は面喰ってしまふ。

「それで教えてくれるとは思えねえんだが……」

「そこは君が交渉するしかないねー。

え？ アタシ？ 無理無理、あの二人相手に交渉するなんて、チキンなアタシには無理だね。

言っておくけど、エヴァンジェリンさんとかメツチャ恐いから。原作みたいなノリじゃ絶対いけないから。威圧感がマジ、パないからまあ、それでも可能性はゼロじゃないし、交渉くらいする価値はあるんじゃない？」

それに対し、アベル君は少し考えた後結論を出した。

「……頼む、その居場所とやら教えてくれ」

こつも思い通りに事が運ぶと、嬉しくなっちゃうなー。

side アベル

メアリー・スーとかいう女に出会ってから少し調べてみた。
俺だってあの女の言うことを全て鵜呑みにするほど馬鹿じゃない。
そもそも、魔王なんてやつが実在するのか。

エヴァンジェリンの存在は一体どうなっているのか。

その結果、あいつの言うとおり魔王は実在した。正確な記録はもう
ほとんど残っていないかったが、それでも未だに史上最高額の懸賞金
の人物として手配されていた。

それでも俺が聞いたことがなかった理由は、単純に言う存在が禁^{タブ}
忌として扱われていた。

昔、腕利きの軍隊を向かわせたが瞬殺され、それ以後魔法世界から
いなくなったことにより、下手に手を出す必要はないと判断された
ようだった。

そして、エヴァンジェリン。これについてもあいつが言ったことに
真実味が出てきた。

いや、メアリー・スーから聞いた居場所に行けば、真偽のほどは確
かめられるが、交渉するのに何の前準備なしにそこへ行くことは躊
躇^{ためら}われた。

残っていた魔王につてのわずかな記録を見ると、その魔王とエヴァ
ンジェリンらしき人物が共に行動していたということが分かった。
それに付け加え、原作から逆算した場合エヴァンジェリンは既に麻

帆良にいないとおかしいのだが、それも確認できない。ただ秘匿されているという可能性もあるのだが、前の情報と合わせて考えるとそんな楽観視はできなかった。

その情報から俺はこれから指針を立てることにした。

まず第一にしなければいけないことは、魔王たちとの交渉だ。

そのための交渉材料を手に入れなければならない。

次にすることは、タカミチの修行だ。少なくとも原作程度には強くなっているとは思わなくては。幸い、タカミチも咸卦法を使うので、師として俺は打って付だ。原作よりも強くすることだって不可能じゃない。

次に考えるべきはアスナ姫のことだ。これはどうすればいいのか判断に迷う。

放っておけば記憶が消される。しかもその後、ネギ・スプリングフィールドのパートナーになってしまう。これは、なかなか可哀想だとは思う。しかし、そこら辺をあまり原作から離したくない。そもそも俺は少し前まで原作に関わる気がなかったので、スルーでいいかと考える。

それに伴い、ガトウも死んでしまうが、もともと死ぬ予定なのを俺が歪めることになるので、これもスルー。

次はこの世界の主人公ネギ・スプリングフィールドについて。

こいつの村が襲撃されるが、それもノータッチで行こうと思う。

どっちにしても村人が死ぬことはない。石化させられるだけだ。

そもそも襲撃の正確な日時を知らないし、それがなくなった場合、闇の魔法習得に必要な心の闇というものがネギに芽生えなくなる可能性が大きい。それは回避したい。少なくとも主人公には原作と同等の戦闘力は身につけて貰わねば困る。

……自分で言っていて反吐が出そうになるな。

未然に防げるであろう不幸を、自分の都合で見過ごす。

助けられる命を、友の命を見捨てる。
余りにも身勝手な行いだ。

だが……それでも、俺は止まらない。

アリカ女王様が罪を背負ってまで救った世界、それを失わせること
など看過できない。

たとえ誰に罵られようとも、俺は魔法世界を失わせない。

14話 魔王と英雄の会合

side アベル

ああ、憂鬱だ……。

今からもう二度と会うまいと思っていた人物に会わなければならぬ。

俺から興味が失せていると助かるんだが、いったいどうなっていることやら。

思い悩んでいると、俺のいる部屋の扉が勢いよく開け放たれる。

「アベル——っ!!」

「よおテオ、久しぶりだな」

「よお、ではないっ！

今までどこに行っておったのじゃ!？」

普通に挨拶する俺に対し、激しく興奮するテオ。

「大戦の後に突然姿を消しおって!」

そう言っただけ俺の首をガクガクと揺さぶってくる。

「色々を事情があつたんだよ……」

言い訳をしようとするが、テオの様子が次第に暗くなっていき、首を掴んでいる手からも力が抜けていく。そして、遂には顔を俯かせ

ポツリと言葉を漏らす。

「あれから……あれから大変だったんじゃぞ」

聞こえてきた声は、涙声だった。

大変だった、恐らくアリカ女王様のことを言っているのだろう。

「ああ、色々と噂は聞こえてきた。

でも俺は旧世界にいたから、噂を聞いたときには全部終わった後だった……」

何の言い訳にもならないかもしれないが、これは本当のことだ。

「力になってやれなくて、悪かったと思ってる。

アリカ女王様のことは……残念だった、本当に。

……惜しい人を亡くちまったな」

救出されたことは知っているが、現場に立ち会わなかった俺がそれを知っているはおかしいので、処刑されたという前提で話す。

その俺の言葉に、先程まで暗かった雰囲気霧散して一気に呆けた空気になる。

「え？ あ、いや、うんそうじゃな」

俺の言葉に少しあわてた様子を見せる。

俺が事情を知らないと思って、真相を話していいものか思い悩んでいる、といったところだろう。

「どうした、テオ？ 何か言いたいことがあるなら言ってくれ」

ここで、俺がテオの持っている情報を共有した、という事実があったほうが後々矛盾が出ることがなさそうなので、聞いておく。

テオは、少し逡巡するが、「実はの……」という前置きをしてから、アリカ女王様が救出された経緯を説明してくれた。

「そうか、アリカ女王様はナギが救ったのか。
なんていうか、流石ナギってところだな」

「あまり驚いておらぬようじゃが？」

俺のリアクションが薄かったのが気になったのか、そう問われた。
俺は元々リアクションとかでかい方じゃないから、怪しまれないと思っていたが流石に反応が淡泊過ぎたらしい。ここはフォローを入れておいたほうがいいな。

「ああ、ナギたちならそういう行動とってもおかしくないっつーか、
そっちの方がアイツらしいからな」

「ふむ、そんなものか？」

何とか納得してもらえたか？

「それで？　今まで姿を晦ましていたのに妾めかけの所に来たのは何か用
があったのではないか？」

む、やはり解るか。いきなり訪れたら、そりゃ誰だって何か用事が

あると察するか。

「ああ、いきなり来て不躰だとは思うが頼みがあってな」

「頼み、とな？」

「いや、正確には頼みというか相談というか。

テオ、フィニス・エクス・レジエンダ終焉の導きの二つ名を持つ魔王を知っているか？
そいつについて今日は話がある」

俺がその名を口にするとテオは、まるで可哀想なものをみるかのような生暖かい目を向けてきた。

「アベル、お主その年になって童話の話などを真面目にする気なのか？」

やめてくれ、哀れんだ目で俺を見ないでくれ、悲しくなってくる。

「いやいやテオ、衝撃の事実だけど魔王は実在するんだよ。
こいつを見てくれ」

そう言っただけ俺は、魔王について調べた資料を取り出す。
それを見せるとテオはむむうと唸りながら読み進めた。

「……確かにかつての魔法世界に魔王は実在したようじゃの。
じゃが、その魔王がどうしたんじゃ？」

「実は魔王にはまだ懸賞金が懸けられてる。
それで、俺が魔王討伐もしくはその生死の確認をしようと思ってな。
テオには俺がそのどちらかを達成した場合に魔王の懸賞金を取り下

げてもらおうと思つてな。

かなり古い賞金首の上に軽く禁忌扱い^{タブー}されてるから賞金を取り下げてもらうには、誰か口利きしてくれる奴がいないと無理っばいんだよ」

「フム？ その言い方だと懸賞金はいらんのか？

それに、何でまたそんな古い賞金首のことで右往左往しようというのじゃ」

ムンドゥス・ウェトゥス

「旧世界をフラフラしている時に、魔王の情報を聞いてな。

それからどうも気になって、どうにかしてやろうと思つてな。

賞金については、まあ色々事情があつてな。賞金を貰うのは申し訳なくてな」

……嘘はついてない。ただ重要なところを何も言つてないだけだ。

「それで、頼めるか？」

「その程度のことなら、できんこともないと思うが。

アラルブラ

紅き翼の一人であるアベルだったら魔王を討伐した、と言っても何もおかしいことはないはずじゃ」

「そりゃよかった」

とりあえず魔王に対しての交渉材料はできた。これで足りるかどうかは解らないが、今俺が考え付くのはこれくらいだ。メアリー・スーはあまり魔王について話そうとしなかったが、察するに望んで魔王なんて呼ばれるようになった訳じゃあるまい。エヴァンジェリンと一緒にいるということからも、やむにやまれぬ事情があつたのではと思う。ならば懸賞金が懸かっているというのは、邪魔な荷物に

しかならないはずだ。それを無くすと言えば、少しは話に応じてくれるはずだ。

「アベルの頼みなら聞いてやるのも吝かではない。た・だ・し、その代わりに妾の頼みも聞いてもらうぞ」

俺が思考に埋没していると、テオが俺の頼みを聞く条件を突きつけてきた。

その顔は、年月が経ち成長しているにも関わらず、昔見た悪戯っ子そのままの笑顔だった。

「俺にできることなら、何でもいいぜ」

テオを利用しているという罪悪感からか、軽い気持ちで了承してしまった。

「なら、妾の騎士に……」

「それは無理だ」

油断していた、そうくるとは。

テオの騎士になんてなってしまうたら、自由が利かなくなる。

「ムー」

俺が即答したのが不満らしくテオが頬を膨らませる。俺は両手でその頬を挟むように潰しながら苦笑する。

「悪いな、ちょっとやることがあってな。それが終わったら騎士になるのも悪くないな。」

もつとも、その時になつてもまだテオが望んでいたら、だけどな」

「ホントかつ！？」

「うおっ！

…… ああ、本当だよ」

凄いいつきだな。やっぱりまだ俺に好意を持ってくれてんのか。
嬉しいんだけどなあ。未だに俺の中では気持ちの整理ができていな
い上に、今はテオや紅き翼のメンバーに少し負い目を感じているか
ら、好意を向けられるのが痛い。

「ならば今は許してやろう。だから、これは予約じゃ」

そう言つて仮契約バクティオーの魔法陣を描き始める。

つて仮契約っ！？

「ち、ちよつと待て、テオ。話がなんだか性急過ぎる。
そういうのは、何と言つか心の準備というものが……」

ナギとの仮契約すらスルーしたというのに、こんなところで俺は唇
の純潔を失うのか。

「何を生娘のようなことを……。
ハッ、まさかアベルお主……。フッフ、そうかアベルの初めては妾
のものか……」

やばい、テオの様子が何かやばい。

「お、落ち着けテオ、仮にも一国の皇女がはしたないぞ……」

必死にテオを諫めるが、テオが止まることはなかった。

……そうして俺は、魔王への交渉材料を得るとともに、大切なものを奪われた。

side エヴァンジェリン

メグムの淹れた紅茶をそつと口にする。

口に含んだその瞬間に甘いマスカットフレーバーが広がる。

口の中に若干の渋みも感じるが、それもマイナスではなく紅茶の味により深みを与えている。

「ふむ、ダージリンか。また腕を上げたなメグム」

今は、ほぼ日課となっている執事ごつこをメグムとしている。

何回の孤島に移り住んでから、娯楽が少ないのでこんなことでも立派な娯楽になる。

まあ、ごつこと言っても数十年単位でやっているのでメグムの執事としての腕前はそこの本職にも負けないほどだが。

「ああ、セカンドフラッシュだから香りもいいだろ？」

……言葉遣いがすぐ崩れるのが玉に瑕だが。

「メグム、執事している時は言葉遣いを気をつけろといっているだろ。」

そうやってすぐ言葉遣いを崩しては雰囲気が出ない」

「いや、エヴァ相手に言葉遣い変えるのは変な感じがしてな」

「ハア……まったく。」

まあいい、紅茶の味は十分合格点だったからな、ご褒美をやるっ」

そう言つて、メグムの前に素足を差し出してやる。

メグムは私の前に跪き、足を舐め始める。

「っん、……いいぞメグム、そうだ指を一本、一本丁寧に舐めろ」

メグムは私の言葉通りに指を丁寧に、その舌で舐っていく。

「フフ、随分と熱心だなメグム」

「……ご褒美だからな、味わわなければ勿体無いだろ？」

そう言つた後メグムは舐めるのを再開させる。

指一本をそれぞれふやけるまで舐めあげ、時間をかけて五指全てを舐め終わると、今度は舐め終えた指をくわえ始めた。そして、跡がつきそうな程強く吸い付いてくる。

「っん、あ……メグム、少し痛いぞ」

私の言葉に、いったん口を離して物欲しそうな目で、こちらを見てくる。

そんな目で見られたら思わず苛めたくなくなってしまふな。まあ、そんなことはしないが。

「別にやめなくてもいいぞ？

ご褒美だからな、好きなだけ舐めるがいい」

メグムから与えられるなら、痛みもまた喜びに感じる事ができる。痛みも快樂も全てを受け入れよう。

私が許可を出すと、メグムは再び舐め始める。指は全て舐め終わったので、今度はその舌を足の裏に伸ばしてくる。それは、敏感なところを容赦なく舐ってくる。

「っん、あ……はあっ……んくっ……」

思わず声が漏れてしまう。

メグムも私の声を聞き、さらにその興奮を高めていく。足の裏から今度は足の甲へと、舌を滑らせてくる。

丁寧に、丁寧にゆっくりとその舌を舐め進めてくる。

足の甲も舐め終わってしまうと、くるぶしを伝いその上、ふくらはぎにまで舌が上ってきた。

「おい、メグム……っん、少し調子に乗りすぎじゃないか、あ……。これ以上は、夜になってからベッドの中で……っんく、あ……」

「好きなだけ、いいんだろう？

なら俺が満足するまで、舐めさせてもらっ」

「ち、ちよつと待て、…… あんつ…… それは足までの話だ…… つん」

「だから、“脚”だろう?」

つく、この屁理屈を。

なんて考えながら、私も少しその気になってきたところで、ふとメグムの舌の感触が消える。

「……む? どうしたメグム、満足したのか?」

まさか、こんな中途半端なところでやめるとは思わず、不満を漏らしてしまう。

「いや、まったく満足はしていないが…… 残念ながら、お客様だ。流石に人前でエヴァの痴態を見せる気はないからな」

こんな時にいったい誰だ。

まさか、

「またあの不快な女か?」

いや、というかここに来る奴なんて限られている。アイツ以外に特に心当たりがない。

いつそもう殺してしまっていんじゃないか?

女子供は殺さぬ主義だが、相手から喧嘩を売ってくるのであれば話は別だ。

それに、あれを女という理由だけで殺さないのは、世の一般女性に對して失礼な気がしてくる。

殺すまでいなくても、氷河の中に永久に閉じ込めておくくらいした方が、世のためにもなりそうな気がするな。

「いや、どうやらメアリー・スーではなさそうだ」

「む？ とすると……」

「ああ、どうやらメアリー・スーが言っていた英雄殿が終に来たらしいな」

……どうやら英雄は私とメグムの蜜月を邪魔する敵らしいことが判明した……。

s i d e アベル

魔王に対抗するための武器と引き換えに大切なものを失った俺は、メアリー・スーから聞いた魔王の住処にやってきていた。
……やってきたのだが、

「なんだ、このリゾートは……」

そこには、どこの富豪の別荘だよとつつこみたくなるリゾートが広がっていた。

孤島故に、完全にプライベートビーチの様相を示している。

そういえば原作ではエヴァンジェリンの別荘の中にそんなのもあった気がする。

とするとここが、あの別荘のモデルなのか？

「つく、何か『墓守り人の宮殿』みたいなラストダンジョンっぽいのを想像していただけない、こんなのを見せられるとやる気が削がれるな」

だが、考えてみりゃ、当然か。ここは旧世界。それも二十世紀後半だ。

いくら認識障害とか便利な魔法とかあっても、そんな大規模な魔城みたいな物がおったってるなんてありえねえか。

「さて、これからどうすりゃいいんだ……？」

来てみたはいいが、ここからどうすればいいか判断がつかない。

勝手に家——原作に出てきたエヴァンジェリンのログハウスに雰囲気のもの——の中に入るのは流石にマズイ気がする。英雄だからって、ゲームのように勝手に民家の中に入っているはずがない。そんなことをしたら普通に不法侵入だ。

だからと言って、呼び出しのためのチャイムがある訳でもなし。うん、とりあえず大声で呼んでみるか。

俺は大声を出すべく、肺の中に空気を取り入れるがその時背後から声がかかる。

「オ？ 侵入者力？ ココニ侵入者ナンテ初メテジャネエ力？」

「——っ！？」

ゾクリと背筋に悪寒が走り、その場から飛び退る。

そのすぐ後に、俺が元いた場所に大袈裟なまでにでかい包丁のような形の刃物が通り過ぎた。

「今ノヲ避ケルトハ中々ヤルジャーネーカ。
久々二人ヲ切レルカラナ、チョットハ楽シマセロヨ」

こいつは、チャチャゼロっ!?

人形だからか、気配をギリギリまで感じることができなかった。
流石に素でやり合うのは危険と判断し、咸卦法を発動させる。
迫り来る凶刃を捌き、蹴り飛ばして距離をとる。

「おい人形、こっちに敵意はねえよ。
さっさとその物騒なもんを収めろ」

こいつをここで破壊なんてしたら、確実に交渉なんてご破産だ。
ここまでやってきてそんなことになったら、笑い話にもならねえ。

「アン?　ンナコトア、ドウデモイイゼ。
人ヲ切ンノハ久々ナンダカラ、黙ッテオトナシク斬ラレトケヨ」

こいつ話が通じねえ。

どうしようかと思っているとそこに今まではいなかった人物の音が
響く。

「チャチャゼロ、一応お客様だ、そこら辺にしておけ」

「何デダヨ恵?　侵入者ナンダカラトットト斬ッチマエバイイダロ
?」

「いや、話くらいは聞いてやっても罰は当たらないだろ。
それに、そいつは英雄と呼ばれているらしいからな、多分チャチャ

ゼロ一人じゃ敵わないと思うぞ?」

こいつ、俺のことを知っている?

いや、魔法世界ではかなりの有名人だから知られていてもおかしくはない、か。

それにしても、こいつが魔王なのか。

確かに、強い。どれ程かまでは流石に解らないが、こいつは確実に強い。対峙するだけでそれを肌で感じる事ができる。

「チャチャゼロが殺されたりなんかしたら、エヴァも俺も黙ってられない。」

だからここは、その剣を収めておけ」

その言葉に、チャチャゼロは渋々ながらも剣を収めた。

「やあ英雄殿、待ち侘びたよ。」

こんな所で立ち話もないだろう、家の中へ」

そして、俺はその魔王の招待に応じて家の中へ着いていった。

通された部屋には既にエヴァンジェリンがいた。

今ならメアリー・スーの言っていたことが理解できる。

魔王と思しき男は、今のところこちらに対し敵対心をもっていないからか、そこまで威圧感を感じることはなかった。

しかし、今日の前に座っているエヴァンジェリンからは、敵意を剥き出しにして凄まじい威圧感を放っている。確かにこれは、一介の女子中学生が耐えられるものではない。

何故初対面の俺にここまで敵意を持っているのかは理解の外ではあるが、目の前の少女にしか見えない容姿を持つ吸血鬼は、確かに強者の持つ威圧感を放っていた。

「ほらエヴァ、そろそろ機嫌を治せよ。
ちゃんと埋め合わせは今夜するからさ」

「……約束だぞ」

いきなり目の前で甘い雰囲気醸し出し始めた魔王と吸血鬼。
何だこれは、新手の精神攻撃の類か？
もしそうなのだとしたら、それは間違いなく成功しているだろう。
俺の心は順調にささくれ立ち始めている。交渉ごとにおいてイライラなんてしたら、望んだ結果を掴み取ることなんて難しいだろう。
俺は既に相手のペースに乗せられているのか。恐るべし魔王、伊達に永い時を生きてきた訳ではないということか。

「……そろそろいいか？」

頃合いを見て、イチヤついでる二人に声をかける。

「ん？ おっと、お客様と言いながら放っておいてしまった。
悪いな、エヴァのこと以外割とどうでもいいもんで。
それで、英雄殿は俺たちに頼みがあるらしいが、いったい何だ？」

応じてはくれるが、若干言葉に悪意を感じた。

その上エヴァンジェリンは会話を遮ってしまったことで、こちらを鬼のような形相で睨んでくる。……いや実際に鬼なのか、吸血“鬼”だし。

それにしても、英雄殿なんて呼ばれ方は気持ち悪いな。

「その前に、自己紹介しねえか？
その呼ばれ方は好きじゃない。俺は……」

「ああ、別に名乗らなくてもいい。知っている、アベル・B・カトラルだろ？」

俺は神代恵だ、英雄殿。エヴァについては知っているらしいから、割愛させてもらう」

なるほど、俺が有名ってだけじゃないな。メアリー・スーに俺のことを聞いていたか。

ていうかこいつは解っててそんな呼び方してたのか。

まあ、エヴァンジェリンについては俺もその方がありがたい。

さつきから態度が一向に軟化する気配がないので余計な波風を立てたくない。

「それで英雄殿、俺たちも暇じゃない、することがあるから早いところ話し進めてくれないか？」

「ん？ ああ、悪いな」

いや、することってただ二人でイチャつくだけだろ？

「なにか？」

「……いや、なんでもない。

それで頼みだが、エヴァンジェリンに原作通りネギ・スプリングフィールドの師匠になって欲しい」

「「断る」」

「っっ……」

即答だな……、しかもハモってるし。
仲のよろしいことで。

「……断る理由は？」

「逆に聞くが、私たちがそれを了承する理由を言ってみろ。
メアリー・スーに聞いてからここに来るまで随分と間があったからな。

何か交渉材料になるようなものでも持ってきたんだろ？

まずはそれから提示しろ。話はそれからだ。

出し惜しみなどせずに用意してきたカードを全て切ってみるんだな。
この場において、貴様は私たちに請うている立場だ、もったいぶっている余裕などないと思え」

これはエヴァンジェリンの方には完全に敵意をもたれているな。
確かにとっと交渉材料をだした方が良さそうだ。

「俺の要求を飲んでくれるなら、お前らに懸かっている賞金を帳消しにする」

「ほう……」

俺の提示した条件は思ったよりも効果的だったようで、聞いたエヴァンジェリンが考え始める。今はほとんど襲撃してくる奴はいないとはいえ、追われていた時代は相当苦しいものだったんだろう。

「なるほど、話を聞いてやる気にはなった。

それで、貴様の要求の内容は解ったが、その理由は何だ？」

「理由、か。

一言で言うと魔法世界が消滅するのを避けたい。

そのためには原作通りに主人公が強くなってくれるのが一番のはずだ。

俺じゃあ、魔法世界の人間である俺じゃあコスモエンテレケイア完全なる世界の奴らには勝てない」

俺から理由を聞くと、神代のほうがそれに応えてくる。

「理由はわかったんだが……」。

それならもつと手っ取り早く確実な方法があると思うんだが」

「……なに？」

それは、聞き捨てならない。そんな方法があるなら是非聞いてみたい。

俺の頭じゃ、そんな都合のいい方法は思いつかない。

「簡単だよ。

なんて言ったか、ほら、あの黄昏の姫御子？ そいつを始末すれば話は早い。

聞いた話によると、そいつが魔法世界を無に帰す儀式の鍵なんだろ。だったら敵に奪われる前に殺してしまえば、魔法世界は無事なんじゃないか？」

その答えを聞いて、ドクリと鼓動が鳴った。

確かにそうすれば、完全なる世界に魔法世界が消滅させることはなくなるかもしれない。

——いや、違う。たとえ、アスナ姫を殺したところで解決する問題

じゃない。

完全なる世界が計画を進めることができなくなっても放っておけば、そう遠くない未来に魔法世界は崩壊してしまう。それじゃあ何の意味もない。

「……ダメだ。たとえ、完全なる世界の計画を阻止しても魔法世界は崩壊する。

それじゃあ何の意味もない。俺の望みはあくまで魔法世界消滅を防ぐことであって、完全なる世界を潰すことじゃない」

「なるほど。

エヴァはどうする？ 俺は正直な話、どっちでも構わない。

永い生の内のほんの少しの暇潰しと思えば、どうということはない。エヴァの意見に従うよ」

「そうだな、私もメグムがいいならそれでいいが。

最近は私たちに手を出してくる奴もいなくなったが、いつまでも賞金首でいるのは鬱陶しいしな。

それが、消えるというならば願ってもない」

どうやら、俺の依頼を受けてくれるらしい。

「俺の要求は通ったと思ってもいいのか？」

「一先ずはな。

だが、見込みがないと思えば修行なんてつけてやらんぞ？」

「ああ、それで構わない」

少なくとも才能は原作では折り紙つきだ。そこについては心配する

ことはないだろう。

「詳しいことは追って連絡するから、俺は今日のところは帰らせてもらう」

「ああ、とつとと帰れ、そしてもう来るな」

最後までエヴァンジェリンには毒を吐かれながら、俺はその家を後にした。

一番厄介な魔王の説得という問題は片付いた。

だがまだ問題はまだ色々とある。それを解決しなければ。

……とりあえずタカミチに修行をつけてやるか。

人物設定

1 / 3 1

強さ表追加

随時更新予定（前書き）

人物紹介、という名の時間稼ぎ。

本日中に次話が仕上がらないので、次までの繋ぎ。

人物設定

1 / 3 1

強さ表追加 随時更新予定

・神代 恵 かみしろ めぐむ

主人公にして魔王。容姿のイメージは、『D・Gray-man』のティキ・ミック。

名前の由来は作中に出てきたとおり神に代わり恵をもたらす、という主人公を皮肉ったもの。

この理由からつけたので元の名前とかは一切考えていない。というか今後出る予定がない。

神の呪いをその身に刻まれて不老不死。

死なないというよりも、もはやその身に死の概念が存在しない。体が破壊されることはあっても、死ぬということはありません。

その身に受けた呪いは神が全力を持って施したものであり、解呪はどんな方法をもってしても不可能と言っても過言ではない。

地平を埋め尽くすほどの膨大な術式であり、同じ神であっても呪いをかけた者自身でなければ解呪どころか複雑怪奇過ぎて解析しきることすら困難。これを解呪しようとするくらいならば、その神を直接殺しにいった方が早いほど。

作中で主人公とエヴァが解析できたのは術式の内のほんの一部であり、全体の1%にも遠く及ばない。

性格はエヴァ至上主義。また、千年の時を生きてきた所為か、エヴァのことに限らず以外には気が長い。

しかし、まだ人間嫌いが直った訳ではないのでエヴァ以外に気を許すことは基本的にない。

それでも余計な争いを起こす気はないので、大抵の相手に対しては物腰は柔らかい。

オリジナルの消滅魔法を使う。イメージはメドローアを思い描いてくれれば大体あつてゐる。

作中に登場した詠唱は、ラテン語の諺が元ネタ。意味は大体が『^メ死^{メント・モリ}を想え』的な感じ。

この消滅魔法を使うのは咸卦法を上回るほどの精密な魔力コントロールが必要となり、暴発した場合は死亡必死なので、不老不死でなければ習得はほぼ不可能。

闇の魔法を覚え、術式固定と体の中に魔法を装填する技術を身につけたことにより、魔法の射手くらいならば、いちいち術式融合せずに無詠唱で放てる。

エヴァも無詠唱は無理だが、魔法の射手程度ならば消滅魔法を使える。

発動体は、自分を襲ってきた者から奪っていた物を使っていたが、エヴァとの仮契約^{バクティオー}で出たアーティファクト『天網恢恢祖^{God Know}にして漏らさず』^{WS}を手にしてからはそれを使っている。

アーティファクトは探知系のもので相手に気づかれずに感知することが可能。

その最大範囲は、麻帆良学園都市を悠々と覆えるほど。

また気配や姿を消されても察知可能。

痛みに関して鈍く不死である主人公は、危機察知能力が低いので、このアーティファクトは重宝している。

・アベル B カトラル

原作知識もちの転生者にして、アラルブラ紅き翼の一人。

容姿のイメージは『D O G S』のハイネ・ラムシュタイナー。
ミドルネームのBはベネット。

名前の由来は、フルネームを英語で書くと『A b e l・B e n n e t・C a t t r a l l』、イニシャルがA B C。そのイニシャルA B Cを元に適当に名前を割り振った。作者のセンスがないので適当極まりない。

神から貰った才能ありきではあるが、努力の人。

性格はジャック・ラカンの影響されたからか、ぶつきら棒。しかし、ラカンほど適当な性格ではない。そして、たまに熱血。

アリカ王女に一目惚れした。だが、原作の邪魔になるのではと思い、一切のアプローチはしなかった。したとしても叶わぬ恋ではあったが。

アリカ王女に惚れた影響で、邪な感情が消えた。
その所為で、以前よりもモテる様になり、ファンクラブの人数も増えた。

その影響の一端で、テオドラにフラグを立てた。しかし、未だにアリカ王女に対しての想いを引きずっていて、その想いには応えることができないでいる。

自分でもそのことに対して、女々しい、情けないと思っている。だがしかし、テオドラと半強制的に仮契約し、終に唇を奪われてしまった。

この世界は『ネギま!』の世界とは違うものと思いつながらも、魔法世界を救う方法を思いつかないのであるべく原作通りに進めようとしている。

神から貰ったものは『咸卦法』の才能。

それを幼い頃から鍛え続けた。しかし不幸かな、その所為で気味悪

がられ捨て子となり、いつの間にか奴隷剣闘士としてデビューしていた。

だが、そのおかげで咸卦法に更なる磨きがかかり、その上幸か不幸か自分の意思とは関係なく紅き翼の一員となり原作介入フラグを立てた。

咸卦法の技術においてはタカミチは言うに及ばず、ガトウですら足元に届くか怪しいレベルにまでなっている。

手に魔力と気を溜めずに咸卦法を成立させることができるのは、恐らく後にも先にもアベルのみであろう。

咸卦法を磨いて身につけた技は以下の通り。

・咸卦砲撃『ゲンティアーナ竜胆』

技名の由来は、一発ずつしか打てず敵の攻撃を貫通して吹き飛ばし、斜線上に一輪咲き誇る姿から『竜胆』。

弱点としては、一発打つたびに咸卦法のエネルギーを使いきり、再び咸卦法を発動させなければいけないこと。大抵の相手なら弱点にもならないが、最強クラスを相手にした場合はその隙をつかれる可能性があり、命取りになる危険性がある。

・『ヘリアンティス向日葵』

体内の気と魔力を全て使い切り、咸卦法を使用する。

技名の由来は、使用時に体が光り輝き日輪を思わせることからその名をつけた。

使った後は、ほぼ行動不能に陥るので、ほぼ使わない。

・咸卦闘法『インパチエンス鳳仙花』

触れた瞬間に咸卦法の反発力を、そのまま解き放つ技。

触れたらはじけることから鳳仙花の果実を連想することが技名の由来。

・咸卦闘法『カクトウス霸王樹』

『鳳仙花』を發展させた技。

鳳仙花は攻撃を叩き込む瞬間に咸卦法の反発力を解き放つ技だが、この技は接触するとオートで反発力が解き放たれるようになってい

る。
体の内外に纏っている咸卦法の内外がわのものを極めて不安定な状態で維持している。

どちらかと言うと防御用の技として考案した。

アベルの技の中で最も習得が難しい。そして、異常に燃費が悪い。実力が近い者ならば、遠距離から質より量で攻撃すれば、割と簡単に落ちる。

・咸卦法・究極闘法『アラニアム・リーリア彼岸花』

技名の由来は、相手に当てると血が噴出し、まるで彼岸花のようなシルエットを描くため。

相手の体内に、咸卦法のエネルギーを流し込み、制御下から外れたエネルギーが敵の中で爆破するという技。どんな相手であろうと、決まればほぼ確殺。

倒すためでなく、殺すための技。

触れていれば打ち込めるので、接近戦において最強と言っても過言ではない技。

弱点としては、生物以外には効力が弱く、遠距離からの攻撃に対応できない。

まだ技は増える予定あり。

アベルは全体的に見て燃費が悪い。

接近戦に特化しているが、遠距離戦においては力を発揮できない。遠距離では、ナギやラカン相手にはボコボコになる。

ただし、『彼岸花』ありならば、接近戦においてはナギやラカンを

圧倒できる。

魔法に関しては、見習いよりは多少マシという程度。ただし、高レベルの戦闘においては、ほぼ必須なので浮遊術は習得している。

技の設定や、その性格、立ち位置、その内に抱える苦悩等が主人公よりもよっぽど主人公っぽい。

・メアリー スー

傍観者気取りにして、観測者気取り。

名前の由来は言わずもがな、知らない人でもググって頂ければすぐ分かる。

容姿は茶髪に碧眼、白人ということ以外特に決めていない。

美人ではあるが言動が胡散臭く人に与える印象は良くない、。

神から貰ったものは一つ目が、転生者が同じ世界にいた場合、たとえ地球の裏側にいようと捕捉でき、実際に目で見ればそれが確実にそうだと判断できる。

この作品の主人公の様に、転生者でなくてもイレギュラーの存在である場合は補足できる。

ただし、その目で実際に見るまでは転生者かそうでないかは判断できない。

二つ目は逃げ足。いかなる相手からも逃走可能。

三つ目は不老。ただし不死ではなく、殺されれば死ぬ。

四つ目は世界を渡る力。

神と交渉して、四つもの力を貰った。

全ては自分が物語を楽しむための能力。

四つの能力の代償として、戦闘力は皆無。どんな世界においても、どんなに鍛えても、一般人にすら一方的にボコられるほど弱い。そして、原作の登場人物に自分から関わることができない。故に自分で物語には影響を与えられない。

エヴァに接触できたのは、本人そのつもりが無く、偶発的に出会ってしまったから。

恵のいる場所に転移したらそこにエヴァがいたので、関わりを持つことができた。エヴァ本人が原作から大きく乖離しているというのも関わることのできる一つの要因。

当初こそ、物語を実際に生で見ることを至高の喜びとしていたが、アベルとラカンの戦いを見て、結末が分からない方がより楽しいという思いが芽生えた。

そのため、転生者には物語りに積極的に関わって欲しいと思っている。

一言で言うと、『未知の結末を見る・Acta est fabula』、某水銀気取り。

性格は、究極的な自分本位。楽しめればそれでいい。

碌な死に方ができそうにない性格。

ただし、二つ目と三つ目、四つ目の能力により殺すことが非常に困難。

生き汚く、憎まれっ子世に憚るを体現している。

確実に殺すためには、メアリー・スーが存在している世界を一瞬にして滅ぼすのが一番手っ取り早い。

四つ目の能力を応用し、究極の転移能力に昇華している。

『ラカン式強さ表』

クラス 数値 該当者・該当物

EX | 神代恵（『深淵魔王』状態）

み）

SA 1 2 0 0 0 ラカン（自称） 神代恵

1 0 0 0 0 アベル

1 3 0 0 0 アベル（『彼岸花』使用時、接近戦の

8 0 0 0 リヨウメンスクナノカミ

AAA 3 2 0 0 フェイト（数値は数倍の可能性有）

3 0 0 0 カゲタロウ

2 8 0 0 鬼神兵（大戦期）

2 2 0 0 闇の魔法・術式兵装のネギ（原作）

2 0 0 0 高畑・T・タカミチ

2 0 0 0 ? フェイト・パーティーの魔道師

1 5 0 0 イージス艦

1 5 0 0 ? 月詠

1 1 0 0 闇モードのネギ（原作）

AA 7 0 0 新ネギの基礎体力

6 5 0 竜種（非魔法）

5 0 0 魔法世界に來た頃のネギ（原作）

A			B			C			D		
300			200			100			3050		
麻帆良学園 魔法先生（平均）			戦車			魔法学校卒業生			旧世界達人（気未使用）		
									魔法使い（平均的魔法世界人）		
									長谷川千雨		
									ネコ		
									メアリー・スー		
									03		
									05		
									2		
									1		
									0		

人物設定

1 / 3 1

強さ表追加

随時更新予定（後書き）

強さ表、携帯からご覧になられている方は見づらいかもしれません。
すいません。

15話 春來たる魔王

side 恵

『次は――麻帆良学園中央駅――』

む、やっとか。

アベル・B・カトラルからの連絡を受け、原作開始の舞台である麻帆良に電車に乗ってやって来た。その道中なんといたたまれなかったことか。

電車内のあまりの人の多さに最初は辟易したものの、現在エヴァと俺の周りには避けるようにして人がいなくなっている。

まあ、それも無理からぬことだろう。何せ、金色の妖精かと見紛えるほど見目麗しきエヴァがフリルとりボンが大量についた豪華なゴスロリ服に身を包み、その隣には執事服を着た俺がいる。さらにエヴァの腕の中には大きな人形、チャチャゼロが抱かれている。

どう考えても、どう見ても日本の電車の中に相応しい組み合わせではない。奇異の目で見られている、ということはない様だが、それでも近づきたい雰囲気があるようで、結果俺とエヴァは座席の一角を独占する形になっていた。

その所為で、最初とは違う意味で居心地が悪いことこの上なかった。それもやっと終わる。そろそろ俺の肩に体重をかけ眠っているエヴァを起こすか。

「エヴァ、そろそろ目的地だから起きたほうがいいぞ」

そう言って、エヴァの肩をユサユサと揺する。

すると、エヴァはその愛らしい目を擦り、寝惚けながらではあるが意識を覚醒させた。

「むう……、メグム私を起こす時は頭を撫でて優しくキスをしながら、といつも言っているだろう……」

エヴァのその言葉に車両内にいた乗客の目が俺とエヴァに集まった。今まで感じる事がなかった、奇異の視線を感じる。

エヴァは見た目だけなら10歳前後にしか見えない可憐な美少女だ。対する俺は、見た目20代程度。現代日本においては後ろ指を差され犯罪扱いされてもおかしくはない組み合わせである。だがしかし、その程度で動揺するような俺ではない。

「今は人目があるから、それは明日の朝まで我慢しようか」

そう言つて、その頭を優しく撫でてやる。

それにエヴァは心地良さそうに目を細める。

「……ん」

俺が一切動揺することなく、まるでそれが当然のことであるかのよう
にエヴァの言葉に対応したため周りの奇異な目も収まる。やましい
ことがない時は、動揺せずに堂々としていればいい。それだけで
周りに無用な誤解を与えなくて済む。

そして、ようやく目的の駅まで電車が辿りつき、そのドアが開く。
学生服を着た中学生、高校生の年頃であろう青少年少女が、ドアが開
くと同時に走り出した。

それとは対照的に俺たちは急ぐ必要はないのでゆつたりと歩き出す。
そういえば今は日本は春休みのシーズンではないだろうか？とする
とこの大量の学生たちは部活に精を出し、青春を謳歌している学生
たちなのだろうか？

「メグム抱っこ……」

少し歩いたところで未だ寝惚け眼まなこのエヴァが俺の方に両手を伸ばしてくる。

エヴァは基本的に夜型なので朝方から昼間にかけては眠いのだ。

俺は慣れた手つきでエヴァを横抱きにし、抱き上げる。するとエヴァは再び寝入ってしまう。

エヴァが眠ってしまうと、エヴァの腕の中に収まっていたチャチャゼロが俺の頭によじ登ってくる。

「コンナ二人ガイルト斬リタクナルナ」

まったくこいつは血に飢え過ぎだろう、物騒極まりないな。

今までは良かったが、法治国家である日本の往来でそんなことをされては堪らない。

「ダメだ、こんなところで惨劇を作り出そうとするな。それと、人前ではあまり喋るなよ」

注意してやるとチャチャゼロは渋々ながら口を噤む。

そうして学生たちが駆け抜け、人も疎まばらになってきた道を再び歩き出す。

すると、少し歩いたところに英雄アベル・B・カトラルが待っていた。

「やあ英雄殿、実際にこうして会うのは久しぶりだな。

とりあえず一言だけ言わせて貰うと、スーツが壊滅的に似合っていないな」

「……放っておけ。」

「というか第一声がそれはどうなんだよ？」

そう、このアベル・B・カトラル、以前俺たちのところに訪ねてきた時の若干ラフな格好と違いスーツを着込んでいる。それがまた、似合っていないことこの上ない。

学園都市という場所にいながらスーツを着込んだその様は、教師というよりもヤのつく自由業を営む方、と言われた方が信じられるだろう。

いや、それならばある意味では、場所が相応しくないというだけで似合ってはいるのか。

「誰がヤのつく自由業だ、オイ？」

む、口から出ていたようだ、気をつけねば。

それよりもそうやって凄む姿が、さらに堅気の人間に見えなくしていることに気づいて欲しい。

「そんなことよりも俺とエヴァに鍛えてほしいという奴のところへ連れて行ってくれないか？」

俺の要求に少し気まずそうに頭を掻く。

何だ、不都合なことでもあるのか？

「あー、それなんだが、まだソイツは麻帆良には来ていないはずだ」

「は？」

何だそれは、俺たちを前のりさせたのか？

教えを請う立場の奴がまだ来ていないとはいったいどういうことだ。

「それじゃあ、そいつはいつここへやってくるんだ？」

「……再来年のの二月頃」

俺が若干ではあるが不機嫌になったことを察して、目を逸らしながら答える目の前の英雄。

確認しておこう、今は三月だ。ということは丸々二年ほど待たなければいけないということが。

「……ふう、帰らせてもらっ」

「ち、ちよつと待て、いや待ってください。

説明するから、とりあえず話だけでも聞いてくれ」

慌てて俺の肩を掴み引き止めてくるが、魔王に縋り付く英雄というのは見ていて情けなくなってくるからやめて欲しい。あと、あまり騒がれるとエヴァが起きてしまう。

「……ハア、話は聞いてやるからその手を離してくれ」

そう言つて俺は英雄の手を振り払った。

話を聞くと、どうやら英雄殿は少しでも原作に沿う形にしたいそう
だ。

どういう経緯かは知らないが、原作ではエヴァは主人公ネギ・スプリングフィールドが受け持つクラスで中学生をやっていたそうだな。なので主人公が受け持つことになるであろうクラスにエヴァがいなというのは状況は避けたいということらしい。それで、そのクラスが中学生に上がる直前に俺たちをこの地に呼んだという訳だ。なるほど、話は理解した。だがしかし、

「だったら何故俺を教師に？ その上お前まで教師をやるといのはどういうことだ？

原作に近づけたいんだろう？ ならばイレギュラーである俺たちが原作に関わっていくのは避けたほうがいいんじゃないのか？」

こいつは何故かエヴァには生徒に、俺には教師になって欲しいなどと言い放った。

俺が教師になったら原作通りという目的から大きくずれる可能性があるのではないか？ そもそもお前も教師をやるといのも原作から乖離してしまうんじゃないのか？

「ああ、あんたの疑問も当然だろうが、こっちにも事情がある。メアリー・スーが言っていたんだよ。俺たち以外にも転生者が現れる可能性は十分あるってな。

そういう奴が原作介入してきた場合、近くに原作知識がある奴がいないと防げないだろう？ ネギ・スプリングフィールドには何としても原作通り進んで、魔法世界を救ってもらわなきゃ困るんだよ。邪魔が入ったら、それが達成できなくなるかもしれないねえ。それだけは絶対に防ぐ」

なるほど、確かにメアリー・スーはそんなことを言っていたような気がするな。

だが、それでも疑問が残る。

「お前一人で十分なんじゃないか？ 転生者に対する警戒は。別に俺がわざわざ教師になる必要まではないと思うが」

「こう言っちゃ何だがな、あんたもイレギュラーの一人だから目の届く範囲にいて欲しいんだよ」

なるほどな、俺に対しても警戒しておきたいということか。中々どうして用心深い男だ。

「それと気を使ってやったってのもあるんだぜ？
エヴァンジェリンとなるべく一緒にいたいんじゃないのか？
教師になればエヴァと一緒にいられる時間が増えるだろ」

そう言われればそうなのだが、一つだけ言っておこう。

「そもそもお前がこんな面倒なことを言い出さなければ、それこそ四六時中俺はエヴァと一緒にいられたということを努々忘れるなよ？」

そう言つて、抗議の視線を送つてやると、

「ハア……解つてるから、そう睨むなよ」

俺の視線に対し、鬱陶しそうに手を振つて、遮ろうとする。

「それと、エヴァが中学生などやりたくないといった場合は、俺たちはすぐにでも帰るぞ」

「あー、それも含めて落ち着いて話し合うために、そろそろ学園長室に行かないか？」

こんなところで立ち話そ続けんのもあれだし、学園長にも挨拶しねえとだ」

英雄殿はそう言つとさっさと歩き出していつてしまった。
仕方がないので俺もその後続いた。

その道中エヴァが目を覚ましたのでエヴァを降ろし、歩きながらさつきまでの話の説明をした。

「ふむ……中学生か……」

「嫌なら、キャンセルしてここから立ち去るか？」

「……いや、平和ボケした日本の学生生活というのを経験してみるのもいいかもしれん。

楽しいかどうかは置いておくとして、珍しい経験であることには変わりない。

暇潰しにはなるだろうし、メグムに私の制服姿を見せてやれるしな。……まあ、中学生というのは気に入らないがな」

エヴァがいいなら俺も文句などない。

エヴァの言うとおり所詮暇潰しだからな、精々楽しませてもらうか。

それにしても、

「英雄殿、いったいいつになったら学園長室とやらに着くんだ？
結構な時間歩いたと思うんだが」

エヴァに説明を終えても未だ目的地に到着しない。

「……迷った……」

「何？」

英雄殿から発された言葉は、予想だにしないものだった。

「いや、正確には迷ったという訳じゃない。ただ学園長室の場所が分からないだけだ。

現在地は把握しているから決して、そう決して迷子じゃない」

そう言う英雄の顔は、どこか焦りと不安の入り混じったものに感じるのは俺の気のせいなのだろうか。英雄が迷子なんて締まらないから本当にやめて欲しい。

「何で場所を知らないんだ、来たことがあるんじゃないのか？」

「前にタカミチを鍛えに来て以来だからな。その後は魔法世界でテ
ムンドウス・マギクス
オ……皇女殿下の相手をしてたから、来たのは久しぶりなんだよ。
前来た時は案内してもらったし、だいたい学園町室の場所なんて用
もないのにいちいち覚えてられるかよ」

何を開き直っているんだこいつは。

ハアと溜息を聞こえるように大きくついてやる。

すると、英雄殿とは別方向から知らない声が呼びかけてきた。

「アベルさん、こんなところにいたんですか、あんまり遅いから探

しにきましたよ」

振り返ってみると、そこには煙草を吹かしたオッサンがいた。

「おお、タカミチが助かった、学園長室の場所を忘れちまってな。

……それにしても老けたな、俺がやった魔法球使いすぎなんじゃないか？」

「ハハ、紅き翼の皆さんに追いつきたくてアベルさんが行ってしまった後も修行してましたから」

なにやら俺たちを無視して談笑を始める二人。
何でもいいから早く目的地に連れて行つて欲しいんだがな。

「……英雄殿」

「おっと、悪いな。それじゃあタカミチ案内頼むわ」

「あ、はい、そうですね。」

えーと、そっちの二人は？」

「ああ、旧世界こうちをフラフラしていた時に知り合っただ。因みに魔法関係者な。

色々あって、学園での仕事を手伝ってくれることになった、学園長の許可が出ればここで働いてもらうことになってる」

「そうなんですか。」

僕は高畑・T・タカミチ、アベルさんには、昔修行をつけて貰ってたんだ。

これから同僚になるかもしれないからよろしく頼むよ」

英雄殿に紹介されると、その男、高畑・Ｔ・タカミチは名乗り、手を差し出してくる。

タカミチか、英雄殿の話の中に何度か出てきていたが、こんなオッサンになっっているとは。

時の流れとは残酷なものだ。

「ええ、こちらこそよろしくお願いします。

申し送れましたが、神代恵です。

アベルさんに続き、紅き翼のメンバーと知り合えるとは光栄です」

考えていることを露も面に出さず、にこやかに朗らかに、その手を握り返す。

俺のその丁寧な対応を見た英雄殿は、その顔を一瞬引き攣らせた。それとは対照的に高畑・Ｔ・タカミチは褒められたことに對し、少し照れたような顔をする。

エヴァは執事ごっこで慣れているので、特に何の反応もなかった。

「私はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウエルだ。

私とは別によろしくなくていい」

俺とは打って変わって、辛辣な言葉を浴びせるエヴァに愛想笑いを浮かべる高畑。

「ハハ、これは手厳しい。エヴァンジェリンさんは生徒ということになるのかな？」

「そうだが……気安く名を口にするな。

名乗りはしたが、貴様に気安く名を呼ぶことを許した覚えはない」

エヴァのその言葉に高畑は今度こそ黙ってしまった。
しかし、その沈黙は長くは続かず、

「……そ、それじゃあここで喋っていても何だし、学園長室に向かうか」

気を取り直し、俺たちを案内するために、先行し始めた。

そうして進みだすと、英雄殿が俺にだけ聞こえるように話しかけてくる。

「あんた、あんな態度も取れるんだな？」

俺に対しては、『英雄殿』なんて厭味つびたらしい呼方すんのに、タカミチに対しては随分と丁寧な対応だったじゃねえか」

「お前に対しては気を使う必要がないだけだ。

言っておくが、気を許しているという意味ではないからな？」

そういえば、英雄殿は教師をやることになるなら教員免許は持っているのか？」

「はっ、俺がこの数年の間皇女様と遊んでいただけだと思っただけだ間違いだ。

この数年で、教員免許は取得してあるぜ」

いや、お前が皇女とやらと遊んでいたかどうかは知らないがな。

「言っておくが、俺はそんなもの持っていないからな。

どうするつもりだ？ 事務員にでもなるか？」

「そこも想定済みだ。どこに出しても平気な様に偽装書類を作って

きた。

中学生の勉強くらい教えられるだろ？」

中学生程度なら余裕だろうが、そういう問題か？偽装書類って、英雄がいったい何をしているんだ。なんだか不安になってきたな。こいつもしかして勉強とは別の部分で色々足りていないんじゃないか？

「そうだ一つ聞いていいか」

そういえば気になることがあった。

「何だよ？」

「二人とも名乗った後で今更だが、俺やエヴァは名前を出しても平気なのか？

一応英雄殿が何とかしてくれたようだが、俺たちは少し前まで賞金首だっただろう？」

「ああ、それなら大丈夫だ。

あんたらは二つ名とかは童話やら御伽噺になってるからやたらと有名なんだが、実名なんて知っている奴はほとんどいねえ、皆無と言ってもいい。

エヴァンジェリンはともかく、あんたに至っては会った時に初めて名前知ったんだぜ？」

「そうか、それなら安心か」

そうこうしてる内に目的地に辿りついたようで、高畑が俺たちに声をかけてきた。

「二人とも、ここが学園長室ですよ」

開け放たれた扉を英雄殿と共に潜り抜けたところで俺は言葉を失った。

自分自身、大概人外じみていると自覚しているが、学園長室の中にいたのは正しく人外の様相をしていた。どう見ても、後頭部の長さが尋常ではない。

漫画に出てくるような仙人を思い描いてくれれば、ほぼ寸分の違いなくその姿を写しているだろう。

いったいこいつは何だ？魔法使いがいる学園とはいえ仙人が学園長を務めているとは、些か考えづらい。とすれば、その姿から連想できるものといえば、『ぬらりひょん』。

「フオ、アベル君来てくれたか。
む、そちらの方々はいったいどちらかの？」

そうだな、状況から考えれば、どちらかと言えばそちらの方が当て嵌まるだろう。

ぬらりひょんと言えば、どこからともなく家に入ってきて自分の家にいるかのように振舞い、人間が見ても『この人はこの家の主だ』と思わせ、追いつくことが出来なくなるという。

つまり、現在この学園の人間はこの妖怪をこの学園の主だと錯覚しているということになる。

「ああ、旧世界での俺の知り合いでな、中々優秀だから一緒に雇ってもらおうと思ってな。

教師としてだけじゃなく、警備員としても優秀だと思うぜ？
警備員が足りないとか聞いたから、人員確保してきたんだよ」

「フオ、そうじゃったか、それは有難いの。
英雄の推薦ならば実力は疑う必要もないじゃろっし」

これは中々マズイ状況なのではないだろうか。学園のトップが妖怪にのつとられていて、尚且つ誰も気づいていない。別にこの学園の心配をする訳ではないが、暫らく仕事場になる予定の場所がそんなことでは、安心して働く気にはなれない。

「おい、神代？ 挨拶くらいしておけよ」

「英雄殿、普通に話しているが、目の前にいるのは妖怪の類じゃないか？」

俺は妖怪が牛耳る学園を仕事場にしたいわけではないぞ？」

「フオッ？」

「いや神代、目の前にいるのは確かに人間だ」

「こんな奇天烈な頭蓋骨を持っているやつを人類として認定していることがあるだろうか、いやない」

あり得ない、こいつが人として認められるならば、俺とエヴァが苦勞して歩んできた今までは一体何だったんだ。

俺の後ろにいるエヴァを窺い見ると、概ね俺と俺と同じ思いなのかその目を白黒させていた。

「いや、気持ちは解らないこともないが、現実を受け止めようぜ」
思わず拳を強く握り締めしまう。

「しかし、だがしかしッ」

こんなこと認められるか!!

「ああ、理不尽だよ……だがこれが現実なんだ」

俺は思わずそこで膝を折ってしまった。

「メグム……」

そんな俺を後ろから優しく聖母の如くエヴァが抱きしめてくれた。

「エヴァ……」

それにより俺は、ようやく落ち着きを取り戻すことができた。

「ねえ、そろそろワシ泣くか怒るかしてもいい？」

妖怪のその言葉で室内にあった変なテンションが消え失せる。

そして、英雄殿は咳払いを一つし気を取り直す。

「思わず乗ってしまったが神代、目の前にいるのが学園長で間違いない」

「そうでしたか、これは大変失礼な勘違いを。申し遅れましたが、私は神代恵と申します。

英雄殿、アベルさんとは懇意にさせて頂いております。

以後お見知りおきを」

名乗りをあげ恭しく頭を垂れる。

「わ、ワシは近衛近衛門じゃ。
こちらこそよろしく頼むぞ」

妖怪はそんな俺の変わり身の早さにか、先ほどの無礼を一言で済ませた厚顔無恥さにか、少し呆気にとられたような表情を見せるが、すぐに気を取り直し話を再開させる。

「それでじゃ、神代君は教師ということじゃが、そちらのお嬢さんは生徒ということでもいいのかの？」

「ああ、今年から中学生だそうだ。書類は用意してあるから後は学園長が許可くれればいい」

その妖怪の質問には英雄殿が答えてくれた。

「……何かアベル君色々と用意周到じゃな。
そういえば、その二人は今日はどこか泊まるところはあるのかの？」

そういえば、泊まるところは考えていなかった。エヴァと一緒にいられるならどこでもいいが。

「学園長、前に指定したところに指示通り家建てといってくれたんだろ？」

この二人はそこに住んでもらう予定だ」

「一応この学園全寮制なんじゃが……」。

「というかあれはお主が住むためじゃなかったのか」

「全寮制って言ったって、例外くらいあるだろ？ あそこは学園の敷地内なんだから問題ないだろ。それに俺は普通に職員寮でいい」

「いや、じゃが教師と生徒が同じ家に暮らすというのは……」

「それも問題ない。というか問題になってもそれくらい揉み消すくらい訳ねえだろ？」

英雄殿はそう言つと、悪そうな顔で笑う。これは英雄がしていい顔ではないと思う。

「この二人にはそういう条件で来てもらったんだよ。背に腹は変えられねえだろ？ 優秀な人材なんだからここで逃すのは惜しいと思うぜ」

「むう……確かにアベル君が優秀と太鼓判を押すような者ならば惜しいが。」

……神代君はともかくとして、そちらのお嬢さんの實力はどれ程なのかの？」

「もちろん優秀だ。下手したらタカミチにも匹敵するかもな」

「フオツ！？ それが本当だとしたらその年で凄まじいの」

英雄殿がそんなことを言うが、俺もエヴァもあの程度なら片手で捻れると思うが。

「まあ学園長、詳しい話は後ですとして、今日のところは俺たちに荷解きさせてくれねえか？俺もこっちの二人も長旅で疲れてんだよ」

「む、確かにそれもそうじゃの。アベル君もそっちの二人も詳しい話は後日することにしようかの」

俺とエヴァはほとんど何も言わないまま話が纏まってしまった。楽だし文句はないが、勝手に決められるのは釈然としないものがあるな。

「それじゃあ神代、お前らが住む場所に案内してやるから着いてこい」

そう言つて、英雄殿は学園長室の扉から外に出た。
俺とエヴァもその後続いた。

暫らく英雄殿に着いていくと、ログハウスが見えてきた。

「お、見えてきたな。」

あれがあんたらに住んでもらうことになる家だ。
原作と同じ場所に同じデザインの家建ててもらったんだぜ？」

「ほう、中々良さそうな家じゃないか」

そのログハウスはエヴァのお気に召したようだ。

「気に入ってもらえて何よりだ、それじゃあ俺は職員寮に行く。後

はごゆっくり」

そう言って英雄殿は去っていった。

「ふう、やっと二人きりになれたなメグム」

英雄殿が去ると、早速エヴァは俺にしな垂れかかってくる。
俺はそれを拒むことなく抱きしめてやる。

「ああ、そうだな。こんなに長い間二人きりになれなかったのは久しぶりだったから辛かった」

「ああ、私もだ。暇潰しもいいが、やはり二人きりの時間はいいな」

俺とエヴァの間に甘い雰囲気の流れ始める。

その雰囲気以身を任せ、俺とエヴァの吐息が一つになろうとする。

「イヤイヤ、俺ノコト忘レテンジャーネーヨ御主人モ恵モ」

チャチャゼロの一言で我に返る俺とエヴァ。

「……お前は、せつかくいい雰囲気になのに邪魔するんじゃない」

「まあまあ、お楽しみは後にとっておこうエヴァ。

今は家の中に入って休もう」

「……それもそうか、チャチャゼロお前も早く来い」

「俺ノ扱イガ酷エナ」

チャチャゼロの言葉を締めにして、俺たちは家の中に入っていった。
そうして、俺たちの長い一日は過ぎて言った。

16話 未来火星入

「エヴァ、湯加減はどうだ？」

「ああ、丁度いいぞ」

エヴァンジェリンは今、湯船に浸からないよう髪を上げ、風呂に浸かっている真つ最中だった。それだけならば、なんらおかしいことはない。流れる水が苦手などと云われる吸血鬼だが、真祖であるエヴァンジェリンはそんな弱点は克服しているし、そうでなくとも風呂くらいは入るのだ。

しかし、だがしかしその浴槽を満たしている液体が問題だった。

そこには本来湯が張ってあるべきであり、決して赤くドロリとした粘性のある生暖かい液体が入っていていいものではない。

現在その湯船を満たしている液体は、彼女の最愛にして永遠の恋人であり、従者である恵の血液だ。

歴史上でも血で満たした湯船に浸かるなんて酔狂な真似を実際に行ったものなど、血の伯爵夫人と呼ばれた、エリザベート・バートリくらいなものだろう。

それでも彼女の場合はあくまで自分の美を保つため、という理由の元にその様な行為を行っていた。狂った行動ではあるが彼女なりの規律の元に動いていた、ということである。

しかし、エヴァンジェリンは、その様な理由は持ち合わせてはいない。エヴァンジェリンが恵の血液に満たされた風呂に浸かるのは、偏に快楽を享受する為である。

愛する者の温もりが全身を包むその感覚は、彼女にとめどもない愉悅をもたらす。

その上、恵の血液は、吸血鬼の彼女にとっては至高とも言える味わいであり、その味はあらゆる美酒にも勝るほど。そして、その血液自体が興奮作用を持っているかのように、触れるだけでその身を昂ぶらせてくれるのだ。

普通、血の風呂なんて、むせ返るような鉄の臭いと、体に纏わりついてくるヌルリとした感触、禍々しく毒々しいその赤い色で不快感を感じるだろう。

だが、今それを実際に行っている最中のエヴァの顔に、不快感など微塵も浮かんでいない。

その表情は、頬を上気させ耽美的な幸福を余すことなく受け取り、この世界で最も幸せを感じていると言われても信じてしまいそうなほどだ。

彼女は、両手で自分の入っている湯船から血を掬い取り、ズズツと音を立てて飲み下す。

「美味しい、がやはり首筋から直接の方がいいな」

その味にわずかばかりの不満を漏らす、彼女のその顔に浮かぶ表情はやはり悦び一色である。

「メグム、入って来い。私と一緒に入浴するぞ」

「ん、了解」

恵は、普通ならば一瞬戸惑ってしまいそうな要求に何の躊躇いもなく応える。

「しかし、これをする度に思うんだが、自分の血に浸かるってのはあまり気分がいいものじゃないな」

エヴァンジェリンにとってこれが至高の愉悦を与えてくれるものであっても、恵にとつては違う。少なくとも自分の血液に対して欲情するようなことはない。どちらかと言えば普通に不快感を覚えるものである。

だがしかし、エヴァンジェリンの願いとあらば叶えることが彼の至福であり、彼女との触れ合いこそが彼の至高の瞬間なのだ。血によつて感じる不快感程度は物の数にもならない。

「フフ、そんなことを言いながらいつも入ってきてくれるお前が、私は愛おしくて堪らないよ」

エヴァンジェリンは、恵が文句を言いつつも入ってくることに對し嬉しそうにその双眸を細める。そして、同じ浴槽の中にいる恵にその体を預ける。

「まあ、この位ならな。エヴァと一緒にいられることに比べれば、他の事なんて全てが些事だ」

そう言つて恵は、自分に体を預ける少女の体を優しくその腕に受け止め、抱き締める。

そうしてやると腕の中に収まつた少女は妖艶に笑う。

「私にとつても、メグムのこと以外は瑣末なことだよ。

今回の物語の主人公を鍛えてやる、ということもな。

ムンドゥス・マギクス

魔法世界の命運を握つていようが、どうでもいいことだ。

一度私たちを弾き出した世界がどうなるうと知ったことではない。せいぜい私たちを楽しませて暇潰しになつてくれればいいがな」

そう言つと、彼女は妖艶な笑みを浮かべたまま恵の首筋に顔をうずめる。

そして、そのまま普通ではありえないほどに鋭く伸びた犬歯を、愛する者のその肌へと突き立て、淫靡な音を響かせて血を啜る。恵むとはいえば、それを拒むことなく受け入れ、エヴァンジェリンの頭を優しく掻き抱く。

「……ッぷは、やっぱり首筋から直接首から吸うほうが色々いいな。」

メグムもそう思うだろう？」

「ああ、エヴァとこんなに密着できるだけで俺は天にも昇る気持ちだ」

「フフ、私にあんなことまでしておいて、今更これくらいで大袈裟な奴だ。」

そういうことは、少なくともこのくらいしてから言え」

そう言うときエヴァンジェリンは恵の顔に自分の顔を近づけ、そのまま唇を重ねる。

エヴァンジェリンの口内には未だ血の味が残っているが、そんなことは関係なく、お互いの口内をお互いの舌で貪り合う。

そのまま浴場には、長い時間淫靡な音が響き渡ることになった。

side 恵

「メグム、そういうえば私たちの処遇はどうなったんだ？」

風呂から上がり、エヴァの髪をタオルで拭いていると、そんな問いを投げかけられる。

「ああ、英雄殿の思惑通りエヴァは主人公が担当するクラスになったそうだ。

ただ、何でも高畑というあの男が出張が多いとかで、そのクラスの担任に英雄殿、副担任に俺がなることになった。そのことについては少し予想外だったらしくてな。慌てふためいていたぞ」

あの時の英雄の動揺ぶりは腹を抱えた。元々頭を使うタイプでもないだろうに、何でも自分の思い通りに事が運ぶとも思っていたんだろうか。確か『俺自身が原作を崩壊させてどうすんだよ』だったか？まさかその可能性について考えていなかったとはな。俺はてっきりそれも織り込み済みで動いているものだとばかり思っていたんだが。

「そんな愉快なことがあったのか。私もものぐさせずに行っておけばよかったな」

「まあ、すぐに持ち直して、より近くで介入者を警戒できると前向きに考え始めていたけどな」

「なんだつまらん、始まりもしない内から潰れるというのも斬新で面白かったかもしれんに」

「まあ、そう言うなよ。確かにそれも斬新ではあるが、それじゃあ流石に英雄殿も浮かばれないだろう。それに、せっかく暇つぶしの舞台を用意してくれたんだ、そうそう簡単に終劇されても興が醒めるというものだろう」

そうだ、わざわざ日本くんだりまで来て、すぐに終わってしまったては無駄足もいいところだ。

「……そうだな、それも一理あるか。

だが、その舞台が始まるまでは退屈な日々を送らねばならない、か。……メグム、することもないし風呂での続きを始めるか？」

エヴァが妖艶な雰囲気を出し、こちらを見上げてくる。

昼間からか？まあ、いいだろう。拒むどころか、むしろ望むべきところだ。

「そうだな、それじゃあ寝室へ……」

と、エヴァを抱き上げ寝室へ向かうところ、カランコロンのと玄関のベルが鳴り、客人の来訪が告げられる。

「……誰だいたい。もつと前か後に来ればいいものを何故このタイミングなのだ」

「ふう、とりあえず見てくる。多分英雄殿だろうから追いついてくる」

というか、今のところこの家に訪ねてくる者に心当たりがない。

「ああ、早めに頼むぞ」

「御意」

俺が玄関に向かう途中も、せつかなのか何度かベルが鳴らされる。

「はいはい、どちら様でしょうか？」

玄関を開け放つと、そこには頭の両サイドにシニョンを作った中華風の少女がいた。

英雄殿がいるとばかり思っていたので、少し面喰ってしまう。

「え、ええと……どちら様ヨ？」

まさか同じ質問を返されるとは思っていなかった。
というよりも、

「人の家を訪ねてきて、いきなり家人の名前を尋ねてくるのはおかしくないか？」

そこに誰が住んでも知らずに訪ねてくるのは、迷子や遭難者くらいではないだろうか。だが、どちらにしてもいきなり名前を尋ねてくるのは変だろう。

「ええと、そうだったネ。私は超 鈴音。エヴァンジェリンさんに用があつてきたんだが、御在宅力？」

エヴァのことだけは知っているとは、いったいどうということだ？

side 超

……これはいったいどうということネ。

エヴァンジェリンさんの家を訪ねてきたら、正体不明の男が出てきたヨ。

記録が確かなら、ここにはエヴァンジェリンさんしか住んでいなかったはずネ。

誰かがこの家に訪ねてきていたのだとしても、彼女と親しい人間にこんな男はいなかたと思うガ。

「エヴァに用？」

エヴァに君のような知り合いはいなかったと記憶しているが」

うう、何故か私が不審者扱いヨ。怪しいのは目の前の男のはず、私悪くないヨ。

「いやいや、人間の記憶とは案外曖昧な物ヨ？

貴方が覚えていないだけかもしれないネ。それにエヴァンジェリンさんの人間関係を本当に全て把握していると言えるの力？ 貴方が知らないところで親交を育んでいたとは考えられない力？」

「ないな、ありえない。俺がエヴァに関することで忘れているということがあるえないし、もしエヴァがそんな親交を深めるような人物がいたら俺に報告してくれているからな」

む、断言されてしまったヨ。これは口八丁手八丁という訳にはいかなそうネ。

それにしても今の言い方は、余程エヴァンジェリンさんと深い関係を持っているように聞こえたガ、それだと記録に残っていないのはおかしいネ。

私が過去に来たことで何かしら変化があったの力？

いや、それはおかしいネ。私がこの時代に来て、そこまでの時間は経っていない。そんなわずかな期間で彼女とそこまで深い関係が築

けるとは思えないヨ。

「そ、それじゃあ貴方の方こそいったい誰ネ？
いったいエヴァンジェリンさんとはどういう関係ヨ」

解らないならいつそ本人に聞いてしまっネ。

このタイミングなら尋ねても別段不自然ではないはずネ。

「俺か？ 俺は……」

「おいメグム、まだか？ 待ちくたびれてしまっぞ。
客などさっさと追い返して早く私の相手をしろ」

男が名乗ろうとしたその時、その声を遮って家の中からエヴァンジェリンが出てきてしまったネ。何でこのタイミング出てくるネ。出てくるなら最初から出てくるか、男が名乗り終わった後出てきて欲しいヨ。

「ただ、どうやらこの男の名前は“メグム”というらしいネ。……
やはり知らない名ヨ。」

「お引取り願おうにも、どうにもしつこいお客様でな。
なかなか帰ってもらえないんだよ。何かエヴァに用があるらしいが、
知っているか？」

目の前の男、メグムさん？に促され、エヴァンジェリンさんがこちらへと視線を向ける。

「む？ ……知らんな。」

「おい小娘、私に用とはいったいなんだ？」

紆余曲折あったが、やっと話を始められそうネ。

「実は、ダーク・エヴァンジェル『闇の福音』に折り入ってご相談があるネ」

「ほう、よくそんな古めかしい名を知っているな貴様。

ここ数百年程はそんな名前で呼んでくる奴もいなかったが……」

ん？……数百年？ということヨ？

エヴァンジェリンさんは15年程前までは賞金首だったはず。

そんな長い間その名が呼ばれなかった？

……今は考えても答えは出ない力。それならば目的を果たすだけネ。

「何でも物凄い腕利きの魔法使いだと、聞き及んでいるネ。

その凄腕の魔法使いに是非とも知恵を貸して欲しいヨ」

「ほう……」。

まあ、いいだろう。話くらいは聞いてやろう。

とりあえず中に入れ。

メグム茶の準備を頼むぞ」

「解った。

茶葉の指定はあるか？」

「いや、何でも構わん」

ふう、当初想像していたよりも遥かに大変だったが、何とかエヴァンジェリンさんの家へ足を踏み入れることができたネ。このまま話も上手いこと進んでくれればいいんだが、色々といレギュラーがあり過ぎて展開の予想がつかないネ。

いったいどうなることやら不安いっぱいネ。

でも今ハカセと共同開発しているガイノイドの動力部には彼女に協力してもらい、魔力を使った物にしたいネ。

大丈夫、あの男の存在が気掛かりだが、エヴァンジェリンさんは今は魔力が封じられていて従者がいない状態のはずネ。完成したガイノイドを従者として使うことを対価にすれば、決して色の悪い答えは返ってこないはずヨ。データを収集することもできて一石二鳥ネ。そうこうしている内に、部屋に通されエヴァンジェリンさんと向かい合わせに座る。

話を始めようとしたその瞬間邪魔が入った。

「オイ御主人、誰力来テタミテーダガ、アノ男力？ ナラ斬ラセロヨ」

「ッ！？」

「気の毒だが、アイツではない。故にお前の出番はない」

「チッ、退屈ダゼ。アア誰力斬テエ」

あれはエヴァンジェリンさんの従者カツ！？何で普通に動いてるネ！？

これじゃあ従者とか言っても乗り気にならないかもしれないネ。なら従者としてじゃなく、家事をこなしてくれる侍従として売り込めば……

「エヴァお待たせ。

……君も紅茶でよかったかな？」

そう言っつて、私の前に置かれる紅茶。

カップを手にして、一口飲んでみると……美味しいヨ。

この男は侮れんネ。

茶葉がいいのか、腕がいいのかは知らないがこんなに美味しい紅茶は初めてヨ。

……これは家事の手もいらないかもしれないネ。

「それで小娘、私に相談とはいったい何だ？」

『闇の福音』なんて名前を出したんだ。よもや半端な覚悟では来ていまい。

もし退屈な、取るに足らないくだらない話ならば……解っているな？」

どうするヨ。

既に交渉材料が二つも潰された状況ネ。

まだ色々と手札は^{カード}あるが、ここで切るには些か尚早が過ぎるというものネ。

なんだか不安が大きくなってきたヨ。

エヴァンジェリンさんも思っていたよりも威圧的だたし……。

うう、お腹痛いネ、帰りたいヨ。研究室に引ッ^{ラボ}込んで研究していたいヨ……。

未来人兼火星人の少女の困難な交渉が今始まる。

闇の福音と、そうとは知らないが魔王の威圧に彼女は耐えられるのだろうか。

果たして原作通りに茶々丸は生まれてくることができるのだろうか。この世界がイレギュラーだらけであることをまだ知らない彼女はどこまで魔王たち相手に食い付けるだろうか。自分の持っている手札が実は役に立たない物だと知ったその時、彼女の胃はそのストレスに耐え切ることができのだろうか。

彼女の明日はどちらにあるのだろうか。

16話 未来火星人（後書き）

しばらく忙しくなるので、更新が不定期になるかもしれませんのでご了承ください。

17話 打たれる楔

「……なるほど。」

科学の技術と魔法を組み合わせたガイノイドか」

超が部屋に通され、互いの自己紹介を終え、一通りガイノイドについての説明をされるとエヴァンジェリンは考え込む素振りをする。しかしその顔には意地の悪い笑みが浮かび、逆に超の顔色は芳しくない。

「私は面白そうだと思うが……どう思う？ メグム」

エヴァンジェリンはしばらく考えると、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべたまま、後ろに控えていた男、神代恵に意見を仰ぐ。

「確かに面白そうではあるな。聞いた限りでは、現代においては有り得ないほどの技術レベルのようだし、何より魔法と科学のハイブリッドというのが斬新でいい。その技術と俺とエヴァが持つ魔法の知識を合わせて、いったいどんな物が出来上がるかは解らないが興味惹かれる話だな」

その思っていたよりも遙かによい反応に、超は悪かった顔色がわずかに回復し、一縷の希望を見出す。

しかし、希望とは絶望の種であり苗床である。希望などを抱くから絶望する。初めからそんなものを抱かなければ、裏切られた時のショックはそれほどでもない。

「そ、それじゃあ……」

「が、却下だな」

超の期待の籠った言葉を遮り両断し、恵は否定の一言を紡ぐ。それにより超の顔には困惑の表情が浮かぶ。それもそうだろう、先程までは好感触だったのにも関わらず一言で、にべもなく断られたのだ。理由が理解できないのだろう。

そんな超の困惑を余所にエヴァンジェリンと恵の考えは思いのほか単純な物である。ほんのわずかな光を見せて打ち砕く。意地の悪い方法ではあるが、この二人は意図的にそれを行っているに過ぎないならば何故そんなことをしているのか。その答えも単純だ。

エヴァンジェリンにとっては、それは暇潰しの一環に過ぎない。久しぶりに聞いた自分の二つ名である『闇の福音』^{ダーク・エヴァンジェル}。その名を知った上で自分に交渉を持ちかけてくる思い上がった小娘、これほどからかいがいのある相手もそうはいまい。その恐ろしさを理解したうえで来ているということは、余程自分に自信があるということなのだろう。高だか二十歳にも満たない小娘風情に挑まれること自体には甘く見られたものだと思える部分もある。だが、その鼻っ柱を押し折ってやれば、退屈や恵との睦言を邪魔されたイライラも少しは鳴りを潜めるといふ物だろう。彼女にとって今の行動は、そういういた々な鬱憤をぶつけるためという訳だ。

恵にとっては、超のことなどどうでもいいことではある。だが、何よりもエヴァンジェリンが楽しんでいる。それを理解している恵はエヴァンジェリンの意図に乗る。目の前の少女を気の毒だとも思う気持ちが無い訳ではないが、エヴァンジェリンが楽しんでいるのならそれは二の次だ。エヴァがこうして幸せそうに愉悦の表情を浮かべているのに恵がそれを妨げることなど有り得ない。

「フッフ、困ったなあ？ メグムがそう言うのでは貴様の提案に頷く訳にはいかないなあ」

まったく困っていない、それどころか嬉しそうに楽しそうに顔を綻ばして、内心を隠そうともしないエヴァンジェリン。

「な、何故ネ？ 先程までは乗り気だたではない力？」

それとは対照的に、超は困惑を隠そうにも隠し切れずにいる。自分の中の疑問を何の捻りもなくストレートに相手にぶつけてしまふ。

それは天才と言えども年端もいかぬ未熟さゆえか、それとも目の前の強者たちの雰囲気既に呑み込まれているからなのか。

「何故って、俺たちに利点がないだろ。」

俺たちが君に技術提供して得られる利益はあるのか？

まさか俺たちが長い年月を経て培ってきた物をただで提供してもらえるなんて考えていないよな？」

暗に見返りをよこせという要求をする恵。だがその実、恵にとっては見返りはそれほど重要という訳ではない。もちろん初対面である超にただで技術提供してやるつもりはないのだが、その本意はやはり彼が愛してやまないエヴァンジェリンのためである。彼女ならこう言うだろう、『何の対価もなしに悪の魔法使いに要求する気か』と。それを彼女の口を汚させずに相手に伝えたという訳だ。

「それはもちろんヨ。」

起動実験を終えたガイノイドの実験機をあなた方に提供するネ。もちろん整備含めたアフターケアもするネ」

「実験機、ねえ……」

超の提案にエヴァンジェリンは微妙な反応を返す。

「……お気に召さない力？」

「そういう訳ではないが、それを渡されて私たちにどうしろと？
見ての通り、私には恵とチャチャゼロがいる。生憎従者に困っている、ということはない。」

それに、そのガイノイドとやらがどの程度の物なのか実物を見てみないことには何とも言えんしな」

それを聞いた超はこのままでは話が進まないと判断し、まだ早いと自身で断じていた手札^{カード}を切ることを決心した。本来それは使うはずのなかったものであり、ある意味エヴァンジェリンには最高の切り札になりうる物だ。

ただし、この世界が超の知るとおりの歴史を歩んでいるとしたら、という前置きが入ってしまうが。

「……ならば情報ならどう力？」

「情報？ いったい何のだ？」

「エヴァンジェリンさんの呪いと、それをかけた相手についてネ」

超は気づくべきであった。今、自分のいる世界が、己の知る歴史とは差異があるものだということに。恵という存在、チャチャゼロが普通に動いていること、気づくことのできる要素は幾らでもあった。頭のいい超のことだ、恐らく普段の冷静でいられる状況だったならばそこまで考えが至ったのだろう。だがしかし、目の前にいるのは片や千年、片や六百年という途方もない年月を生き抜いてきた強者である。幾ら未来より訪れた天才と言っても、高が中学生程度の年齢の少女が正面切って相對するには些か荷が重過ぎる相手だ。本人

自身は、自分が冷静であることを疑っていないだろう。自信を持つというのはいいいことではあるが、時としてそれは己の首を絞めることになる。

「はあ……？」

……ああ、なるほどそういうことか」

「？」

提示した物に対してエヴァンジェリンの反応が存外薄かった、いや薄過ぎたことに超は疑問符を浮かべる。それも当然、超が言ったことは、本来であればエヴァンジェリンにとって最も食い付くべき情報であるからだ。それに対して、目の前の彼女の反応は余りも興味なさげなものであった。それを見て、漸く超は違和感を覚える。だがしかし、それは最早手遅れであり、既に超の足は運命の糸に絡めとられた後だった。

「貴様、超鈴音といったか？」

つまり——貴様があの女の言うところの未来人、という訳か」

エヴァンジェリンは密かに心中で、もしくは転生者か、と付け加える。

「ッ！？」

そのエヴァンジェリンの言葉に超は凍りつく。今までのやり取りで、未来人であることを仄めかす様なことなど言っていない。この時代では有り得ない程の技術を持っていることを示しはしたが、ここ麻帆良という土地であればそこまでおかしいことではない。それにも関わらずエヴァンジェリンは未来人というキーワードを口にした。

未来人など、いくら非常識がまかり通る麻帆良といえども口に出すことが憚られるような言葉である。それを、口にした。さらに、エヴァンジェリンが言った“あの女”という言葉。これらから考えられることは、超のことを、未来からやってきたと知っている者がいるということだ。

「クツクツ、図星のようだな小娘？」

先程の呪い云々の話は出すべきではなかったな。

残念ながら私は呪いになどかかっていないし、それをかけた相手とこののにも当然興味ない」

今までとはまた別種の意地の悪い笑みを浮かべる。

それは、小生意気なガキをいたぶるものから、新しい玩具を見つけたような顔への変化だった。

「……それはいつたい誰から聞いたことヨ……？」

逆に超の顔には、嫌な汗が浮いている。

「それを私が言うと思っているのか？」

それに、言ったところで大した意味もない。

理解しているだろう？ 自分が既に詰んでいるということを」

その言葉に超は齒噛みする。こんなはずではなかった、と。本来ならば、計画していた通りならば、超はエヴァンジェリンに対して情報の開示はせずに上手く立ち回るつもりだった。

それが早くも崩れ去る。超にとっては予想外もいいところだろう。恵という存在、呪いのかかかっていないエヴァンジェリン、さらには本来ならば存在しない英雄、超の計画を揺るがすには過剰とも言えるほどの戦力だ。

だが、ここで超にとってはさらに予想外となる言葉をかけられる。それが幸か不幸のどちらに繋がるか保障することはできないが。

「超鈴音、そう露骨に絶望を顔に貼り付けるな」

虐めたくなるだろ？とエヴァンジェリンのその顔には書いてあるような、凄惨な笑顔を浮かべていた。

「安心しろ、お前の提案には乗ってやるし、計画とやらを邪魔する気もない」

その言葉に、超は技術提供を約束してもらえた喜びよりも、計画のことまで知られていることに驚愕する。

「不思議そうな顔をしているな？

何、簡単な話だよ。お前の幼稚で稚拙な計画が、どこまで私たちを楽しませてくれるか興味があるんだよ。

メグムと共にあった日々は幸福ではあったが、どうにも娯楽が少なくてな。

お前の無様な足掻きを見せてみる。

私たちの掌の上にいることを自覚しながらも、美々しく踊り狂うがいい」

ニイツと口角を持ち上げ笑うその様は、正しく闇の眷属というに相応しいものであった。

その笑顔に、超の中には言い知れない怖気が走った。

結果だけを見れば、過程を無視するならば、概ね超の思い通りものを得られたとっていいだろう。だがしかしエヴァンジェリンによってもたらされた情報と、挑発するような小馬鹿にするような嗤いが、どうしようもなく超を不安にさせる。自分の計画は失敗する運

命にあるのではないのかと。それを目の前にいる二人と、その二人に教えた女とやらは知っているのではないかと。

楔は打たれた。しかし超は、己の計画を止めることなどできない。過去にまで来ておいて、何もせずに終わることなどできはしない。超は拭い切ることのできない不安を抱えたまま計画を進めることになった。それは、彼女の運命をいつたいどのように変えることになるのだろうか。

「さて、話も纏まったところで、今日はそろそろお引取り願おうか？私もメグムもこれからすることがあるのでな。
後日、連絡をよこすがいい」

「……解ったネ」

立ち去る超の顔に浮かぶのは、自分の提案が通ったことによる喜びではなく、自分の行為が全て徒労に終わるのではないかという不安に苛まれるものだった。

「フフフツ、フハハハハハ！！！」

超が立ち去った部屋の中でエヴァンジェリンの笑いが高らかに響く。

「見たかメグム？ あの小娘の顔を。」

実に愉快だ。あの自信に溢れる顔を屈辱に染めるのは、何故こつも密の味がするのだろうか？」

「エヴァが楽しそうなのは俺も嬉しいんだが、そこまで楽しそうにされると妬いてしまうな」

「ん？ あんな小娘に対して嫉妬か？」

フフ、愛しい奴だ。安心しろメグム、何度も言うが暇潰しだ」

「解ってはいるんだがな。」

どうしても嫉妬の炎が……」

「まあ、そんな感情は今ほ捨て置け。」

やっと邪魔者が帰ったんだ、楽しまねば損だろう」

「それもそうだな」

そう言うと思はエヴァを抱き上げ、今度こそ寝室へと向かう。
そうして二人の甘い時間は過ぎていく。

side 超

屈辱的ネ。

私の計画が幼稚？稚拙？

「何も知らないくせに解た様なことを……」

だが、計画が露見してしまったとしても、止める訳にはいかないヨ。
幸いあの二人は計画の邪魔はしないと聞いていたヨ。

それならば、たとえあの二人が何を知っていたようと、私ならば上手くやれるはずネ。

それよりも問題は、私のことを知っていたと思われる人物ネ。神代恵という男然り、この世界にはまだ他にもイレギュラーが存在する可能性があるネ。

もしかしたら、それこそ私のように未来から来た者もいるかも知れないネ。

それも、私の存在も含めた未来から……。

これは、情報収集をもっと進めた方が良さそうネ。

何、悪い話ばかりではないネ。考えようによっては、未来からの忠告とも取れるヨ。

今のままの計画では、まだ足りないよ。ならば僥倖ヨ。情報を集め、さらに計画を完璧なものへとしてみせるネ。

side 三人称

その後日、エヴァンジェリンと恵は、葉加瀬聡美と超鈴音の研究室に訪れていた。

「これが、ガイノイドとやらか。
見たところもうほとんど完成しているように見えるが」

そこには見た目はほぼ完成と言っても差し支えない姿のガイノイドが存在していた。

「まあ、基本的な駆動系・フレーム・量子コンピュータ・人工知能は既にできているからネ。後クリアするべき問題は動力部のみヨ。
現時点では、どうしても外部電源に繋がっていないと起動できない状況ヨ」

「なるほど、そこで俺たちの知識を得ることで、魔力による動力を、という訳か」

「そういうことネ」

自分なりに折り合いをつけた超は、恵とエヴァンジェリンの前でも取り乱すような真似はしなかった。それに対し、エヴァンジェリンは少しつまらんと思っていたりした。

「これが、その草案ヨ」

そう言つて、超は動力部に関する理論をまとめたものを恵とエヴァンジェリンに手渡す。

「ほう、魔法の知識に乏しくせにここまでのものを仕上げるとは、中々どうして大したものではないか」

それを見たエヴァンジェリンは素直に感心して見せた。

「だが、これだと魔力供給を一々ゼンマイを巻いて行わなければならないのか」

「そこらへんは仕方がないネ。流石に永久機関を作るのは無理ヨ」

不満を漏らす恵に対し、超は反論を返す。

「なら仮契約のように離れた状態でも魔力供給できるようにはできないのか」
バクティオー

「人間と同じ様に、という訳には行かないヨ」

「おいメグム、ならアレを使ってみたらどうだ？」

「アレか……確かに流用できれば、魔力供給の必要がなくなるかもしれないな」

「アレ？　いったい何のことを言っているヨ？」

恵とエヴァンジェリンだけで解り合っているところに超が問いを投げかける。

その問いにエヴァンジェリンは待っていると言い、そこらにあった紙にペンを走らせた。

「これを見てみる。」

簡単に言えば、大気中の魔力をそのまま自分に還元する術式だ。

これを使えば基本的に外部供給などいらない、半永久的に動き続ける動力を作成可能じゃないか？」

「これは……」

それは、超には最早理解の範疇を超えているものだった。科学に関しては、天才と呼ばれるほどでも魔法に関しては二人には遠く及ばない。説明されても、それがどんなものか理解できそうもなかった。

「フン、流石にそれを理解するほど魔法に通じているという訳ではないか。」

まあ、それが理解できるようであれば、初めから誰かに技術提供を頼る必要などなかっただろうがな。

この術式は私と恵の知る中でもかなりのレベルのものだからな」

「……その通りヨ。

だが、そんなものを私に教えていいの力？」

「やるなら徹底的にだ。

私たちが関わるのに中途半端なものが出ては敵わん」

「それならば有難く使わせてもらっヨ」

「言うておくが、貴様らが使うのは構わんが他の人間に漏らすことは許さんからな？」

「そこは承知しているネ」

そんな感じに、話は進んでいった。

そして、魔力を用いた動力部が完成し、起動実験の時が来た。

「終にこのときが来たヨ」

「はい、超さん終にここまで来ましたね」

そこには超と恵、エヴァンジェリンの他にも葉加瀬聡美もいた。

「それでは始めましょうか。

搭載コンピュータ、ウォームアップ完了。システムオールグリーン」

「動力内の魔力も充填完了、問題ないヨ」

「その他の実験用の設備も問題ありません」

科学面で特化した二人が、次々と確認事項をチェックしていく。
これについては、恵もエヴァンジェリンも畑違いなのでノータッチ、
何も言わずにことを見守る。

「起動実験準備完了しました」

「うむ、ハカセ始めるネ」

準備が終わったようで、起動を開始する。

「駆動系各部への通電確認しました」

「搭載コンピュータ電力供給が完全起動可能領域に入ったヨ」

「AIシステム起動してください」

「AI起動、プログラム群起動開始するネ」

次々にチェック項目をクリアしていくと、ガイノイドがピクリと反応を見せる。

そして、その瞼を持ち上げた。

「おはよう茶々丸、気分はどうネ？」

因みにこの名前はエヴァンジェリンが命名した。私のものになるのだから、私が名付けるのが当然だとのことだった。そして、歴史が

変わろうとも、そのあたりのセンスが変わることはなかったようで、原作通りの名前に決定した。

「ガイノイドである私に気分という言葉は適切ではありませんが、駆動系及びシステムにはなんら問題は見受けられません。正常であると判断できます」

そう言い、茶々丸はすつと立ち上がって見せた。

「それならば、無問題ネ。

エヴァンジェリンさん、初期設定は済ませてあるからマスターとして認証するヨ」

そう言つて超はエヴァンジェリンを促す。

「茶々丸、私がお前のマスターのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

それを聞いた茶々丸は、一瞬停止し情報进行处理する。

「……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、マスターとして認証しました」

茶々丸がエヴァンジェリンをマスターとして認証すると彼女は満足そうにうなづく。

「超鈴音、このまま茶々丸は連れて帰って問題ないか？」

「大丈夫ヨ。でも大切に扱って欲しいネ」

「ハッ、いきなり壊したりはせんさ。
恵、茶々丸帰るぞ」

「マスター、そちらの方は」

エヴァンジェリンが帰路に着こうとすると、茶々丸は恵の方を見て
質問する。

「ん？ ああ、そいつメグムだ、神代恵。
私の恋人兼、従者だ。言ってみればお前の先輩に当たるのか？
優先度は私の次に登録しておけ」

「了解いたしました。……神代恵様、優先度をマスターの次に登録
いたしました」

「それじゃあ、今度こそ帰るぞ」

こうして茶々丸は、無事原作通り生まれた。

しかし、恵たちと同じ永遠の命を持つガイノイドである彼女は、彼らにとって家族と呼ぶに差し支えない存在となる。その家族を、原作通り主人公のハーレムの一員に加えることなど、エヴァンジェリンも恵も決して許すことなどないだろう。

原作通り生まれたとしても、彼女が歩む未来は原作とは異なったものとなる。

17話 打たれる楔（後書き）

機械関係には明るくないので、茶々丸関連の描写がキツい。

18話 事実の確認 配点(すれ違い)

モニター以外に光源のない、まるで悪の組織の幹部が使っているようなその部屋で、超鈴音はキーボードを叩きながら調べた資料を読み漁っていた。

「神代恵、それにアベル・B・カトラル……力。いったいどうなってるヨ、調べるほどに私の知らない人間が次々と浮かんでくるネ」

それは、自分が知らざるイレギュラーに出会ってしまったことで集めた情報。

本来ならば、自分こそがこの時代においてのイレギュラーであったはずが、自分こそが歴史を変えられる存在であったはずが、自分こそが未来をより良い方向へ導いていくはずだったはずが、蓋を開けてみれば自分以外にも大きなイレギュラーが既に二つも存在している。それが、今超が口にした二人だ。

「神代恵……」

まずは一人目、神代恵。先日、超があいまえたエヴァンジェリンと共にいた、彼女の言葉を信じるならば従者である男。

こちらについては、超は大した情報を得られずにいた。それもそのはず、超は知る由もないことだが恵は数百年前に魔法世界で禁忌として指定されているので、超といえども一朝一夕で情報を手に入れることはできない。

流石に魔法世界の童話の中の魔王と同一人物だとは、気付かないだ

ろう。

「アベル・B・カトラル……」

次に二人目、アベル・B・カトラル。こちらは麻帆良内の情報の見直しをした際にその存在を確認した。超の知りうる歴史通りならば、超のクラス担任はネギ・スプリングフィールドが来るまでは、高畑・T・タカミチが務めているはずだった。しかし、調べてみればアベルという見覚えのない名前がそのポジションに納まっていた。

超はアベルに関しては、簡単に情報を集めることができていた。こちらについては、隠されるところか魔法世界にファンクラブまである始末なので、労することなく情報を手に入れていた。

だが、超はいとも簡単に手に入れたこととは裏腹に、この情報には思わず目を丸くした。何せ、英雄である紅き翼の一人アラブルなのである。

自分の知らない英雄が増えているということ、その英雄が麻帆良で教師をしていることに超は何の冗談だと叫びたいほどだった。紅き翼のメンバーということならば麻帆良には高畑がいるにはいる。しかしこう言っては何だが、格が違う。高畑も今や魔法世界では有名な人と言つていいほど名を馳せているが、それは割かし最近のことだ。大戦期に最前線に立ち戦っていた訳ではない。

それに対しアベルは大戦期において、ナギやラカンと並ぶほどの戦果を上げている。

そんな本物の英雄が、何をトチ狂ったのか教師をしているのだ。超の苦悩も推して知るべしと言つところだろう。

「……やはり、これは本格的に計画を見直す必要があるかもネ……」

そう言つて超は大きな溜息をつき、思う。自分の考える計画は確かに稚拙であったかもしれない、と。

超が計画のために用意している戦力など、アベル一人いれば容易に

壊滅させられてしまう。超の計画などその程度のもだったのだ。
エヴァンジェリンや恵がその気になれば、個人の戦力だけで潰されてしまうようなものだったのだ。

超はその事実を受け止め、計画に修正を加え始める。

最善にして、最良にして、最高の未来を得るために、圧倒的に、徹底的に、完膚なきまでに成功させるために、油断なく、隙なく、容赦なく事を運ぶと、超はそう心に決める。

そんな時、超の悩みの種となっている人物たちはといえば……

彼らも彼らで、色々と難儀していた。

「あ・ん・た・は何してんだよオツ!？」

エヴァンジェリン邸にアベルの声が響き渡る。

不満を一切隠すことのない、力いっぱいのかぶりであった。

「カトラル様、早朝ですので近所迷惑になります。音量を抑えください」

それは、早くもエヴァ一家に馴染みつつある、家事をこなしていた茶々丸に片手間で窘められる。

「あ、すいません。

これはご迷惑を……、いやここ周りに他に住んでる奴なんていねえだろツ!」

アベルは頭に血が上っているというのに、茶々丸の言葉に律儀に突っ込みを入れる。

だが、その声もまた喧しいものだったので、今度は恵から苦言を呈される。

「それでも五月蠅いことには変わらないから黙ってくれ英雄殿、エヴァが起きるだろう。」

それに、お前のようなガラの悪いのがいると茶々丸の教育上よろしくないから、お引取り願えないか？」

「あんたはいつから子煩悩みたくなっただんだよッ！？」

……いや、今はそんなことはどうでもいい。

何で超鈴音にイレギュラーの存在を仄めかす様なこと言っただんだッ！？」

先日エヴァンジェリンと恵が超と接触した時に、好き勝手やりすぎたことに対し、アベルは激怒していた。結果だけ見ると茶々丸は無事誕生し、原作通りの様相を保っているようには見える。しかし、超の心中は原作とは大きく異なったものとなっているだろう。自分の計画を暗に失敗すると予言されたのだ。心穏やかに、という訳にはいくまい。

だが、恵はアベルのその怒りに対し、呆れた様子で一言の元に切り捨てる。

「英雄殿、お前は阿呆か。」

確かに少しやり過ぎた感はあるが、俺たちはあの超とかいうのクラス担任と副担任になっちゃっているのだろう？　だったら遅かれ早かれ気付かれていただろう」

「だとしても、だ。もつとやりようがあっただろうが」

恵の言うことにも一理あるが、それでもアベルは納得できない。恵たちが行ったことは、原作を完全に崩壊させる危険性を孕んでいる。

すなわち、超の計画の成就。

聡明な超に予め、計画が失敗してしまうことを伝えてしまったら、計画を見直し完璧な崩すことのできない計画を練り上げてくる可能性がある。

原作ではネギに希望を託すような形で未来に帰ったが、計画が始まる前から超を刺激するようなことをしたら計画を達成することに固執し、手段を選ばなくなるかもしれない。

搦め手で来られた場合、アベルはそれに対処することが難しい。故にアベルにとつて力技だけで解決できない方法をとつてきそうな超は鬼門とも言える。

が、その批判に対しても恵はバツサリと切り捨てる。

「俺にばかり文句を垂れているがな、これは英雄殿のミスでもあるんじゃないか？」

「ア？ 何で俺のミスになるんだよ」

「元はいえ、超のことを俺たちに伝え忘れていたお前が悪いと、そう言っているんだよ、英雄殿」

「っ……」

その指摘にアベルは言葉を失う。

そもそも恵たちと超の初めての顔合わせが何故あんなものになってしまったかと言えば、それは偏に恵たちが超のことを知らなかった

からである。知らなかったからこそ、原作など歯牙にもかけぬような言動を取ったのだ。

知っていたからと言って、その通りに行動したかは定かではないが……。

ともかく、アベルは恵たちに超や茶々丸について話していなかったのだ。それについては、アベルに責任があると言い切っても間違いではない。

まあだからと言って、今回の全ての責任がアベルにあるかと問われれば、否と言わざるを得ない。

「いや、だけどよ……俺はメアリー・スーからお前らには原作知識を伝えたって言われてたんだよ」

アベルはそう反論する。

そう、アベルたちの間には認識の齟齬があった。

確かにメアリー・スーがアベルに言ったとおり、恵たちは彼女から原作知識を聞いていた。

だが、それは全てを聞いていた訳ではないのだ。エヴァンジェリンの要望により、物語の大筋程度しか聞いていない。細かい出来事や、登場人物の名前など興味の無いものは聞いていないし、聞いていたとしても既に数十年も前の話、覚えていないはずもない。

メアリーがアベルに言ったことは、『原作知識についてはアタシが既に可能な限り教えたけどね』、だ。

そう、可能な限り、だ。それはメアリーの知識内で、という意味とエヴァンジェリンたちが聞いてくれる範囲で、という意味だったのだ。

アベルは前者の意味のみで受け取ってしまった。

それは、メアリーの思惑通りなのか、はたまた偶然だったのか。どちらにせよメアリーが望む、原作からの乖離が始まる原因の一つとなった。本人は今頃どこかでほくそ笑んでいるのかもしれない。

「なるほど、英雄殿はメアリー・スーに担がれたという訳か。ならばやはり今回のことは、情報の確認を怠った英雄殿の責任もあつた訳だ」

それを聞いた恵はアベルに止めを刺した。

アベルの言い訳は、同時に己のミスを認めるたことに他ならない。墓穴を掘ってしまったのだ。

「……解つた、今回のことはもうそれでいい。だが、もうこんなことのないようにしてくれよ」

アベルは最早反論できずに、次からの注意を促す。だが、それすらも恵は切つて捨てる。

「それは英雄殿の努力次第というものだろう？」

「何……？」

その挑発的ともとれる恵の物言いに、一度下がったアベルのボルテージは再び上がり始める。

「おい神代、それはどういう意味だ。まるであんたが原作をぶち壊す様なことをするように聞こえたんだが？」

それはまさに一触即発の雰囲気であり、英雄と呼ばれるアベルのそれは常人ならば言葉を発することすらできない程の凄みだ。

「別にそういう訳ではないんだが……」。

忘れたのか、英雄殿？ 俺とエヴァがすることは、物語の主人公とやらに修行をつけてやることだけだ。他の事については一切関知する気はない。

原作から外れないよう努力するのは英雄殿の役目だ。そこは俺たちに頼ろうとするなよ」

そんな雰囲気など気にも留めず、平時と変わらぬ様子で恵は言葉を紡ぐ。

そして発する言葉は純然たる事実。恵やエヴァンジェリンがアベルと約束したのはあくまでネギ・スプリングフィールドに修行をつけることであり、それ以上のことについては一切アベルから聞いていなかった。

しかし、だからと言ってアベルからしてみれば、納得できることではない。

恵の言ったことはつまり、好き勝手やるから尻拭いはよろしく、という意味にも取れる。

というか、アベルにはそうとしか聞こえなかった。

「てめえ……あんまり舐めたこと言ってるじゃねえッ」

そして遂にアベルはキレる。

勢いよく立ち上がり、座っていた椅子が倒れるのも無視し、対面に座っている恵の胸倉を掴む。

だが、それは予想外の出来事で沈静化する。

バシャリと、シリアスな雰囲気も、一触即発な雰囲気もブチ破り、二人の頭上より水がかぶせられる。

それは恵にすら予想外であったようで、二人で目を丸くする結果となった。

二人が同じ方向に目を向けると、そこには無表情の茶々丸が立っており、その手にはどこから用意したのかバケツがあった。

「カトラル様がヒートアップしていたようですので、冷まして差し上げました——以上」

そう言い、ペコリと綺麗に一礼すると、家事に戻っていく茶々丸。その淡々とした様子に恵もアベルも呆気にとられたように、固まる。

「……お宅のお子さん、随分いい性格をしているようで……」

余りのことで、アベルのテンションも落ち込む。まさか礼儀正しい茶々丸に一応客人である自分が水をぶっかけられるとは思っていなかったのだらう。げんなりした様子で恵に皮肉を言う。

「……なにぶん、生まれて間もないからな……」

それに対して恵は言葉を濁し、目線を逸らす。

アベルに対し教育上悪いから帰れと言った手前、茶々丸がとった行動にばつが悪くなり、言葉を返すことができなかった。

「……なんにせよ、今回のことはもう済んだことだ、これ以上は言わねえ。」

あんたらに対して何か期待することもしねえ。

ただどな、原作を積極的に壊すような行動はこれ以上しないでくれ。協力関係にあるあんたらにそんな事をされたんじゃ、こっちの身が持たねえ。

これは俺ができる最大の譲歩だ、これが守れないなら……」

茶々丸のお蔭で、クールダウンしたアベルは先程は打って変わって随分と冷静に自分の意見を述べる。そこには確固たる意志があり、決して譲らという思いが見て取れた。

視線を交わすこと数秒、その真摯な眼差しに、然しもの恵も折れてしまう。

「……はあ、解ったよ英雄殿。

ただし、事前に情報は入れてくれよ？

しつかり情報さえくれれば、原作を壊すような行動は控えよう。

エヴァにも俺から言い含めておく。

……これで満足か？」

「……ああ」

恵の最低限の協力を取り付け、アベルは漸くその怒りを霧散させた。

「それと、もうすぐ原作キャラクターたちの入学式、つまり教師生活の始まりだから準備しとけよ神代」

そして、怒りを鞘に収めたアベルはいつも通りの雰囲気に戻り、軽い口調で恵にこれからの注意をする。

「言われるまでもない、準備は完璧だ。
英雄殿の方こそ準備はできているのか？」

それに対し、恵も軽く返す。

「当たり前だろ。

……じゃあ、俺はそろそろ行くわ」

そんなやり取りを最後に、アベルはびしょ濡れのままエヴァンジェリン邸を後にする。

そして、アベル去った後のエヴァンジェリン邸では、

「茶々丸」

「何でしょうか、恵様」

「何故水を？ いや、決して悪いと言っている訳じゃないんだが、随分と過激じゃないか？」

恵が茶々丸に対し躑を行っていた。

「？ 熱くなられていましたので、頭を冷やしていただこうと思ひまして」

それに対し、茶々丸は要領を得ないといった様子で、首をかしげながら返す。

「クールダウンというなら俺にはかける必要なかったんじゃないか？」

アベルだけでなく、自分にまでかけられた水。恵はそれが何故か聞いておきたかった。

「恵様の身に危険が迫っていたと判断しましたので、取り急ぎ行動に移してしまつたので、手元が狂ってしまいました。

しかし、危機から脱することができたので、そのことについては許して頂きたい思います」

茶々丸から帰ってきた応え、それは恵を慮つてのことだと言う。

それを聞いた恵は、最早それ以上追求することができなかった。たとえ、その時の様子がまったく急いでいるように見えなかったとしても、まるで見計らったかのようなタイミングでバケツを持ってきていたとしても、恵はそれに対しつつこむことはなかった。

「そ、そうか、それなら仕方ない。茶々丸は何も悪くないな。ただ、これからは気をつけてくれると助かるな」

「誠意努力いたします——以上」

そう言つて家事に戻っていく茶々丸のその背に何も言えない、躰に關しては案外甘い恵であつた。

19話 入学式（前書き）

やっとテストが終わった。

19話 入学式

side 恵

入学式。

それだけに限るわけではないが、それに準ずる式典というものは皆須らく、示し合わせた様に偉い人間が長々とつまらない話をする。

そういった暗黙の了解でもあるのだろうか。

解つてはいる。何事にも形式美というものが存在し、ある程度の荘厳さを保つためには、その形式美というものに則る必要がある、ということくらいは。

しかし、それでも俺は思うのだ。そういった時間こそ、生きている中でも特に無駄な時間を過ごしている時なのではないか、と。

人間の生は短い。俺やエヴァと違い、その時間には限りがあるのだ。それをよくもこんな無駄なことに貴重な時間を裂けるものだ、不思議に思う。

普通の人間として生きていた時の記憶を失っているからか、はたまに長い時間を生き過ぎたからなのか、俺にはそのあたりがどうにも理解できない。

まあ、結局のところ何が言いたいのかといえば。

妖怪爺、話が長い、早く終われ。

これに尽きるだろう。

side 三人称

学園長、近衛近右衛門の有り難くもない無駄に長い、誰も得などし

ない話が終わり、恵とアベルは担当するクラスである1 - Aに向かっていた。

「学園長の話は長かったな、英雄殿」

ふと、恵がアベルに話しかける。

それはとりとめもない話であり、教室にたどり着くまでの間を繋ぐための話。自分の抱いてる不平不満を、目の前の人間に愚痴という本当にどうでもいい話。

しかしただ一点、その呼び方についてはアベルは看過出来ない。

「……神代、いい加減その呼び方は止めておけ」

今更ではある。

その呼ばれ方にアベルはずっと不満を抱いていたが、言っても直らないので放置していた。

しかし、生徒たちにまでその呼ばれ方を聞かれるのは、よくない。

「いや、普段はもう諦めてるからいい。

だけどな、人目がある時と校内にいる時はダメだろ。

生徒にまでそんな渾名を付けられたら俺は学校になんて来ねえ」

別に正体がばれてしまうから、なんて理由ではない。

魔法関係者には既に知られているし、そうでない者には英雄などと言っても解る筈もない。

しかし、恵がそんな呼び方をしていて、他の者までそれを真似したりなどしたら、アベルからしたら堪ったものではない。

本来なら恵から呼ばれるのも、馬鹿にされているようで不本意極まりないというのに、それが増えてもしたら我慢できなくなるだろう。

「確かに、何故そんな呼び方をしているか、なんて聞かれたら面倒臭いな。」

それじゃあ……アベル先生行きましょうか？」

アベルに呼び方を指摘されると恵もそれに同意し、呼び方を改める。そして、それと同時に態度まで丁寧な物に変化させる。

アベルは以前見たことがあるとはいえ、その急激な態度の変化に若干引いてしまう。

アベル先生、なんて爽やかな笑顔で呼ばれると、それはそれで普段とのギャップの所為か気味の悪さを感じてしまうのだった。

「……ハア、何であんたはそう極端なんだ。」

まあ、直してれるんなら文句は言わないでおくが。

つと、ここだな」

不毛な会話を繰り広げている内に、いつの間にやら二人は1 - Aの教室の前まで辿りついていた。

「……先に入るか、神代？」

扉に手をかけ、開け放つ前にアベルは恵に先に入るかどうかを問う。

「？ 担任が先に入った方が自然だと思うが。」

それとも何か先に入ることに不都合でもあるのか？」

その質問の意図が恵には理解できない。

それに対し、アベルは扉の上の方を指差し、その疑問に答える。

「見えてんだろーが、古めかしくも定番な黒板消しトラップが」

アベルの指差すその先には、扉に挟まれた黒板消しの姿があった。しかし、その程度解っていれば防ぐことなど容易い。

「別にその程度物の数でもないだろ？」

「いや、それだけじゃないっていうか、防いでも後々面倒そうっていうか……」

細かい原作知識を持っているアベルは仕掛けられているトラップがそれだけでは済まないだろうと予測していた。

だからと言って、別に防げないということなどはない。アベルが何を危惧しているのかと言えば、ある程度の身のこなしを見せると五月蠅そうな一般人がいるということだ。

主に褐色格闘中華娘や長身細目忍者などがそれに当たる。

「？ よく解らない奴だ。そんなに嫌なら俺が先に入るぞ」

アベルが説明すれば話は早いのだが、一人で悩んでいてそこまで気が回らない。

アベルが何に悩んでいるかなど露も知らない恵は、アベルを無視して教室内に入る。

「あつ、ちよつと待て……」

アベルの制止も無視し、恵が扉を開けると同時に、それに挟まれることで固定されていた黒板消しが重力に従い落下を始める。予め知っていたので、それは難なく受け止められ、恵の手に収まる。

しかし、それだけでは終わらない。

ドアの敷居を跨いだそこにはロープが張られている。上の黒板消しに注意を引き付けた上で足元にトラップを仕掛けるという、中学1

年生がやるにしては少しえげつないトラップが、そこには仕掛けられていた。

「……むっ」

思惑通りに黒板消しに氣をとられていた恵は、不覚にもそれに足を捕られる。

しかし、それで転ぶなどということは当然なく、すぐに体勢を立て直す。

だが、たとえそれで転ばなかったとしても、ロープの先に施されていた更なるトラップが連動して作動する。鏝の代わりに吸盤が先端についている矢が数本、恵に向かって放たれる。さらにそれと同時に、水で満たされたバケツが上から恵めがけて落下を開始する。

「ほう……」

恵はそれを、中学生がするには妙に手が込んでいると暢気に感心しながらも、放たれた矢を空いている方の手で全て掴み取る。

さらに落下してくるバケツを無理なく避け、中身が零れないように氣を付けながらも——アベルの方へと蹴り上げた。

「……っな」

突如として飛来するバケツに一瞬戸惑うアベルだったが、恵に負けない流れる様な動作でもって、クラス名簿を持った手とは逆の手で受け止め、水が零れないようにバランスをとる。

「おっと。」

……おい神代、トラップを防ぐのはいいけどよ、俺のほうに寄越すな」

そう言ってアベルは、手に持った水の入ったバケツを床に置く。

「突然のことだったので。」

それにアベル先生なら大丈夫だと思っていきましたから」

アベルは文句を言うが、恵はそれを涼しい顔で返す。

それを見ていた生徒たちの反応は、

『おおお——ッ！！』

まるで、ちょっとした大道芸のようなそのやり取りに歓声を上げた。その内複数名、具体的に言えば先程挙げた、アベルが目を付けられなくなかった者たちが興味深そうな目を二人に向ける。アベルの心配はここに現実のものとなった。

アベルはそんな視線に気付きつつも当然無視し、手を叩き鳴らし生徒たちの意識を自分に向けさせる。

「お前ら、少し静かにしてくれ。自己紹介くらいさせる。

俺はこのクラスの担任になったアベル・B・カトラルだ。

担当教科は英語、適当によろしく頼む。

んで、こっちが……」

アベルは簡単に自己紹介を済ませると、恵の方に視線を向ける。

「神代恵です。」

この度、1 - Aの副担任になりました。

担当教科は数学です。以後お見知りおきを」

内容は同じく簡単なものだが、アベルとは対照的に丁寧な言葉遣い

で自己紹介を済ませる恵。

そして、自分たち二人の自己紹介が終わるとアベルは生徒たちに自己紹介を促す。

「それじゃあ次はお前らの番だ。

適当に自己紹介しろ。順番は……出席番号順でいいだろう。

一番、相坂は……」

アベルはちらりとその席へ目線を向けるが、当然そこには誰もいない。

「……いないから、二番、明石から自己紹介よろしく」

そうして明石裕奈から自己紹介が開始される。

一人ひとりが出席番号、名前、何か一言、といった風に自己紹介をしていき、つつがなく全生徒が終えると、生徒の内の一人が手を挙げる。

「はい、質問いいですか？」

「何だ朝倉？」

手を挙げたのは朝倉和美であつた。

「私が掴んだ情報によると、うちの担任って高畑っていう人だつたと思っただけど、そこらへんどうなんですか？」

その朝倉が挙げた、高畑という名前に生徒の中で一人反応する者がいた。

まあ、言わずもがな神楽坂明日菜なのだが。

side 明日菜

朝倉が担任の人たちにした質問に思わずグッジョブと心の中で賞賛を送ってしまった。

そう、そうよ。

朝倉から私たちの担任は高畑さんだっていうのを聞いてから、ずっと楽しみにしてたのに、何で全然違う人が担任なのッ！？

「残念だがその情報は古い。

タカミチ……高畑先生は出張が多いから担任の業務に差支えが出そうだったんでな。

代わりに新任である俺たちが、このクラスを担当することになった」

出張。

確かに高畑さんは麻帆良の外の仕事に出かけることが多かった……。でもだからって、副担任くらいにはしておいても良かったんじゃないのッ！？

「……うー」

別にその人の所為ではないとは解っているけど、副担任となった神代という人に思わず睨んでしまう。すると、私の視線に気付いたよ

うで、こちらを向き、笑いかけられてしまった。

「……ッ」

まさか、こっちの視線に気付かれるとは思ってなくて、目が合ってしまったことに赤面してしまう。こっちの怒りを含んだ視線に笑顔で返されたことが余計に恥ずかしさを煽り、思わず顔をそっぽに向けてしまった。

何でそんな余裕な態度なのよ、私が子供みたいじゃないッ。いや、そりゃ子供なんだろうけど、小さな子供に向ける様な笑顔向けられたらばつが悪いじゃない。

「はい、私も質問ー」

私が一人懊悩していると、朝倉以外も質問をしだす。朝倉が質問をしたことを切欠に、次々と手を挙げだした。

「二人ともかなり若そうだけど年はいくつですかー？」

確かに二人とも若そうね。

どっちも20代くらいに見える。さっき新任って言うてたし、そんなものだろうと思う。

「年？　いくつでもいいだろ。」

新任ってそこから、勝手に想像しろ」

「秘密です。」

見た目よりも高い年齢とだけ言うておきましょう。実年齢を聞いたら、皆さん驚くと思いますよ？」

アベル先生のほうはぶつきらばうに、神代先生のほうは笑顔を保つたまま答える。

だけど何で二人ともそこで年を隠すのよ？

女じゃないんだから年くら言っても良いじゃない。

というよりも神代先生のほうは、聞くと驚く年齢って何よ？

実は30代とか？まさか40代ってことはないと思うけど……。

そんな感じで質問はしばらく続いたけど、二人ともぼやかした答えだったり、誤魔化す様なことを言ったりと、ほとんどまともに質問には答えていなかった。

「えー、二人についてほとんど何も解ってないじゃないですかー」

質問が一通り終わると、朝倉が抗議の声を上げる。

まあ、はぐらかす様なことばっか言ってたからそれもしようがないと思う。

「悪いが抗議は後で聞く。

今日はもう時間だ。ホームルームはここまでだ」

「それでは皆さん、今日はここまでということだ。

また明日会いましょう」

二人はそう言つと、とつとと教室を出て行ってしまった。

かなり強引に終わらせたわね……。

朝倉はまだ不満げにしている。

でも不満を言いたいのは私の方よ。

ハア、高畑さんが担任だと思ってたのに……。

side アベル

やっと解放された。

子供、それも女子ってのは何でああも姦しいかね……。

「随分と疲れているようですね、アベル先生」

「……そういうお前は随分と余裕そうだな神代」

何でこいつはこんなにケロリとしてんだよ。

ホームルーム中、質問責めにあってまったく堪えてないっていったいどうなってるんだよ。

「ほとんど質問はあしらってましたからね。私としてはあんな適当に答えていたのに何故そんなに疲れているかが解りませんよ。それに制服姿のエヴァを見ていれば疲れなんて感じませんし」

サラリと爽やかな笑みのままとんでもないことを言い放つなよ。突然すぎて突っ込めねえ。

というか、

「お前は質問されてる間、ずっとエヴァンジェリンを見てたってか

？」

勘弁してくれよ……。

今まで何も言わなかったけど、こいつ完全にロリコンだよな。
アルもそうだったし、俺の周りはそんなんばかりだよ。

「言っておきますけど、私はロリコンではないですよ？」

……心を読むなよ。

それに否定する意味ねーだろ。お前エヴァンジェリンに手出してんだろ。

言い逃れなんてできねーよ。誰に聞いても同じ答えが返ってくるっつーの。

「別に心なんて読んでませんよ。

それに勘違いしてますね。エヴァは立派な淑女レディですよ？

彼女を愛しているからといって、ロリコン呼ばわりされるのは心外ですね」

いやいや、読んでもるじゃねえか。俺さっきから声出してねえのに会話成立してるだろ。

……っか、こいつ目がマジだ。

言い訳とか冗談じゃなくエヴァンジェリンのことを本気で淑女だと思っ
ていやがる。

「そもそもエヴァは年齢は約600歳。

これだけで既にロリなんて言われる所以はない訳です」

「いや、年齢云々よりも見た目が問題だろ。

何も知らない奴から見たら実年齢なんて解るはずもねえしよ。

周りから見たらお前は完全にロリコンなんだよ」

「見た目で人を判断するなんて嘆かわしい。英雄が聞いて呆れるな。周りの評価を気にして自分の本懐を遂げられないなんて、愚か者以外の何ものでもない。」

それに見た目のことを言うならば、エヴァの美しさは容姿が若干幼いということくらいで霞むものではなく、至高の美を体現した存在といっても過言ではない。そんな彼女に出会ってしまったのだ、永遠の愛を誓う以外の選択肢などあるはずもない」

ああ、やばいな。これは放っておいたらひたすらに延々と喋り続けそうな勢いだな。

「ストップだ神代。」

解った、よく解ったからもういい。
それと口調が元に戻ってるぞ」

「おっと、まだ慣れていないからつい素の口調が出てしまった。だが、解ったと言うがエヴァの魅力について理解したというなら驕りが過ぎるぞ。」

数百年共にいる俺ですらエヴァの魅力を正しく理解しきれているのか解らないんだ」

……こいつエヴァンジェリンのことに關しては面倒臭いことこの上ないな。

「だから、もういいって言ってんだろ。」

それよりも、今夜0時に世界樹広場に来い」

「……………世界樹広場？ いったいそこで何があるんだ？」

ん？何だ今の間は。世界樹に反応したのか？

……まあ、いいか。

「新人の魔法関係者の顔合わせがあるんだよ。

俺たち含めて新しい人員に、警備関係とかの話があるんだよ」

「エヴァも連れて行ったほうがいいのか？」

話が早くて助かるな。

「ああ、うちのクラスの生徒も何人か来るから、エヴァンジェリンも連れてきたほうがいいな」

「了解だ。今夜0時だったな？ 確かに承った」

神代は最後に了解の旨を簡潔に告げると、俺の前から去っていった。

それにしても、妙に素直というか、聞き訳がいいというか……。

いつもなら、もっと何か俺に文句でも言ってきそうなものなんだが

……。

何か違和感を感じる態度だったな。世界樹に何か思うところでもあるのか？

もしかして、超のように世界樹を何かに利用しようとしても企んでいるのかアイツは。

……考えすぎか。そもそも俺は魔法に関しては詳しくないから悩んだところで答えなんて出ないしな。アイツが何か企んでいたとしても、最悪殴って止めりゃ何とかなるだろ。

それに、こっちの指示に従ってくれるんなら、俺が文句を言うのは

筋違いだしな。

さてと、まだ大して仕事もないことだし、夜の仕事に向けて俺は少し仮眠でもとっておくかな。

20話 その剣は、誰が為に抜かれるのか

side 刹那

木乃香お嬢様をお守りするために訪れた麻帆良。

数年ぶりに見た彼女の笑顔は昔と変わらず輝いていた。

でも、私は昔のように彼女に接することはできない。変わってしまったのは私の方だ。

昔の、何も知らなかった幼い頃のようにには戻ることはできない。幼い頃、木乃香お嬢様とまだ親しく友人として接していた日々。あの頃はすべてが輝いていた。

しかし、私が付いていながらもお嬢様の身を危険にさらしてしまったあの日から、私は変わってしまったと、自分でそう思う。

己の無力さを呪った。この身の内に流れる烏族の血を呪った。そして知った、知ってしまった。自分が木乃香お嬢様と友人として肩を並べるには相応しくない者であるということ。

だがしかし、お嬢様をお慕いするこの気持ちだけは変わっていないと、そう断言できる。

彼女の友人になることはもうできないけれど、彼女の隣に立つことはもうできないけれど、それでも私にできることはある。私はただ、お嬢様を陰から守るのみ。その身に降りかかる危険から、災厄から、この身を賭してでも守ろうと、そう決意した。

だからこそ、関東魔法協会が存在する帆良に來たのだ。

関西呪術協会と敵対しているここへ身を寄せた私は、向こうの人間から裏切り者として扱われる可能性が高い。だが、それでもいいと思った。元よりこの身は穢れた存在。烏族とのハーフ、それも白い翼を持つ、だ。受け入れてくれる場所など最初から無かったと思え

ば、どうということはない。

私が最優先すべきはお嬢様なのだから。

そこで、ふと思う。

自分のクラスの担任と副担任になった者たちのことを。

アベル・B・カトラルと神代恵のことを。

前者のアベル・B・カトラル、という名前には聞き覚えがある。私の記憶が確かならば、長の戦友、昔共に戦った仲間であつたはずだ。それならば成程、教室へ入ってきた時のあの身のこなしも納得がいく。ただ飛んできたバケツを受け止めただけではあるが、それだけでもその動きが洗練されたものだと解つた。

完全に不意をついた形にも関わらず、高速で飛来してきたバケツに反応して見せたあの反射神経、バケツをなみなみと満たしていた水を一滴も零さずにバランスを保つたあの芸当、どちらも口で言うほど簡単ではないだろう。

長のかつての戦友ということならば、信用もできるはずだ。実力も申し分なく、信用できそうな人間がいるというのは頼もしいことだ。

一方でもう一人の、副担任の神代恵という男には妙なものを感じた。どこか、という風に具体的に何か言える訳ではない。見た目や態度だけで言えば、むしろ好印象を受けたと言つていいだろう。質問のほとんどをはぐらかすような答え方をしていたのを除けば、物腰は柔らかで丁寧な喋り方も相俟つて誰もが好青年と判断するはずだ。それでも何か、私の人ではない部分が、何かを感じた。

それがいったいどういったものか、私は掴みかねている。その感覚は、嫌悪からくるものなのか、それとも好意からくるものなのか、それすらもよく解らないものだった。とにかく未だかつて感じたことのない、そんな感覚だつた。

だが、私にとってはそんなことはどちらでもいい。私が気にしていることは、私の中の人ではない部分が反応したということだ。それ

が何を意味しているかは解らない。しかし、もしかしたらお嬢様に害を為すかもしれない。近い内に探りを入れてみねばと、そう思う。私がそんな風に、考え事をしていると青天の霹靂と呼ぶべきことが起こる。

「せっちゃん、久しぶり。あ、ウチのこと覚えとる？」

木乃香お嬢様に話しかけられてしまった。

迂闊だった。考え事に夢中になって接近を許してしまった。だが、やってしまったという気持ちと同じくらいに、私のことを覚えていてくれたことに嬉しく思う。思わず口元が緩みそうになってしまう。

しかし、それを面に出すことはない。深く、心の内にその感情を押し込む。

「ええ、覚えています。」

……私は少し用事があるのでこれで」

「……あつ……」

私が素っ気無い態度をとると、お嬢様の表情が悲しそうに曇る。

それが、私の心を抉る。お嬢様を傷つけてしまったと、後悔の念が沸きあがってくる。優しい方だから、慈悲深き方だから、私などのために心を痛めてくれる。そんな彼女を傷つけてしまう私の何と罪深きことか。

だが、それでも彼女と親しく接することなどできない。私などがお嬢様に馴れ馴れしくするなど許されざることだ。私という存在がいつか彼女の汚点になってしまつかもしれない。私はそれが恐ろしいのだ。

だから距離をとる。

私は一礼をし、お嬢様の前から立ち去った。

どうか、私のことなどでその心を痛めないでと願いながら。

side 三人称

時は深夜0時。

草木も眠る、と言うほどではないが十分深いといっていい夜。

そこ、世界樹広場には不自然なほどにまったく言っていていいほどの気配がなかった。

それは何も深夜だからという理由だけではないし、まして偶然などという理由でもなかった。端的に言ってしまうと、人払いの術がそこにはかけられているのだ。

ここで少し訂正しておこう。前述した人の気配がまったくなく、というのは正確さに欠ける。正確に言うのなら、一般人の気配は一切ない、が正しい。

ならば、そこにいるのはいったい誰か。答えは言わずもがな、魔法関係者だ。

アベルが恵に告げたように、ここでは麻帆良に来たばかりの魔法関係者たちの顔合わせが行われるのだ。

と言っても、実のところそれは建前のようなもので、今回のそれは英雄であるアベル・B・カトラルが麻帆良に来たということを皆に伝えるためという意味合いが強い。

と言うのも長く麻帆良では人材不足が続いていた。

それは、エヴァンジェリンが原作通りに麻帆良にいない、ということが大きな原因となっていた。

原作では、エヴァンジェリンのその強大な魔力は学園結界に利用されており、それにより結界を大幅に強化していたのだ。それが無いという事実は、ここ麻帆良を侵入者から守ることをより厳しいものにしていた。

さらに一部の物にしか知られていないことだが、学園長である近衛近右衛門は、自身の魔力の大部分を学園結界に回して、結界の強化を図っている。だが、その魔力量はエヴァンジェリンのそれと比べると大分見劣りする物であり、学園結界は原作ほど外敵への効力が無くなっている、というのが現状となっていた。

それで、何故今まで麻帆良が平和を保っていたのかといえば、偏にそこにいる魔法関係者の優秀さによるものだろう。原作ではあまり活躍が見られない魔法先生陣だが、それはネギ・スプリングフィールドに焦点を当てて物語が進められているからであり、本来麻帆良にいる魔法先は生高畑を始めとして優秀な人間が揃っている。

その平均レベルは本国魔法騎士団の平均レベルと拮抗するほどのものであり、いずれも高位と呼ばれる程の魔法使いたちなのだ。

些か、正義や英雄というものを狂信する傾向があるものの、能力面で見るとそれなりに優秀な者が揃っている。だが、いくら優秀な人材だと言ってもそこは人間。数が足りないというのは、一個人の力でどうにかなるほど簡単の問題ではなく、警備の手はギリギリといったところだった。

そこに舞い込んだ英雄の教師への就任だ。それに喜ばない人間など、そこ麻帆良の魔法関係者の中にはいないだろう。さらに、その英雄が優秀だと太鼓判を押す人間を連れてきた、というのも麻帆良教師陣にとって喜ぶべきことだった。

だがしかし、ここで一つ問題が起こる。

そこには、ほとんど集まるべき人間は既に来ていたのだが、恵とエヴァンジェリンが来ていなかった。

「のおアベル君、神代君とマクダウェル君がまだ着ておらぬようじやが？」

「あー、確かに伝えたはずなんだけどなあ」

アベルは近右衛門の問いに頭を掻きながら答えを濁す。

実際アベルにも何故あの二人が来ていないかなんて解っていないかった。

確かにアベルは恵に伝えたし、恵はそれに確かに了承の旨を返した。ただ一点、その時の恵の態度が妙に素直だったのが気になった。だが、それでも来ない理由は思いつかなかった。あるいは、その場のぎで適当なことを言ったのかと考えるが、あの時の様子はそんな感じではなかったと思い直す。結局のところアベルには何故二人が未だこの場に現れていないかのかなど、まったくもって見当がつかないのだ。

「むう……来ないのならば仕方ない、彼らには後で必要事項を伝えるとして、始めるかの……」

予定されていた時間になっても来ないことを見かねた近右衛門は話を始めようとする。あくまで今回のメインはアベルなので恵たちがいなくてもいいと考えたのだ。しかし、そこで漸く恵たちが現れる。それは、その場に満ちていた静寂を破るようにコツコツと革靴が石畳を叩く音を伴いやってきた。

「遅れてしまい申し訳ありません、少々支度到手間取ってしまったもので」

「別に謝ってやる必要もあるまい。こっちはわざわざこんな時間に来てやったんだからな」

恵とエヴァンジェリンの登場にその場にいた誰もが注目した。

その二人は対照的な態度をしていた。恵は若干申し訳なさそうに、エヴァンジェリンは傲岸不遜に。そんな二人の格好はエヴァンジェリンはゴスロリ服、恵は執事服と、その態度も相俟ってどこのお嬢様とその付き人だと言いたくなるものだった。

そのエヴァンジェリンの不遜な態度に文句を言いたそうな教師もいたが、それは近右衛門が手で制する。

「フオフオ、確かにこんな時間に呼びつけたのはこっちじゃからの、別に遅れたことなど咎めはせんよ」

そして近右衛門は、エヴァンジェリンの態度にも気を悪くする様子もなく話を始める。近右衛門の認識ではエヴァンジェリンは孫と同じ年齢であり、そんな子供に多少無礼な態度をされたからといって目くじらを立てて怒るほど狭量ではない。

「では、今度こそ話を始めるかの。

もう皆知ってると思うが、今回集まってもらったのは紹介したい者があるからなんじゃが。

アベル君、自己紹介頼めるかの」

近右衛門に促され、アベルがその場の者たちに自己紹介を始める。

「アベル・B・カトラルだ。

アラルブラ紅き翼に所属していたとでも言えば、通りがいいか？

まあ、タカミチの先輩兼師匠とでも思ってくれば間違いじゃない」

簡単なものではあるが、アベルが名乗ると周りから小さく歓声のよ
うなもの上がる。

「皆知つてると思うがアベル君は今日から麻帆良で教師として働いてくれとる。

これからは警備員の仕事も手伝ってくれるそうじゃ。

そこでアベル君、皆の前でその実力の一端をみせてくれんかの」

近右衛門はアベルの短い自己紹介が終わると、その実力を皆に見せるて欲しいと提案をする。

「だが断る。俺の実力なんか見せるまでも無えだろ。少なくともタカミチよりは強い。

それだけ解つてりゃ、別に改めて見せる必要は感じられねえな。

それよりも俺が連れてきた奴の実力を見たほうが有意義だろ。

俺が推薦したとはいえ実力がどれ程か実際見といたほうがいいだろ」

だが、アベルはそれをすぐさま断り、恵の実力を見てはどうかと提案する。

これには、アベル自身も恵の実力がどれ程なのか知っておきたいという腹積もりがあった。

実のところアベルは、恵の実力に関してほとんど知らない。ただ過去に魔王と呼ばれ、その存在そのものが禁忌となるほどのエヴァンジェリンを超えるほどの懸賞金を懸けられていた、ということくらいしか知らないのだ。

それは最早、アベルにとって単なる伝承の様なものであつて実力を測る指標にはなり得ない。

アベルとしては、実力の全容とまではいなくても、その一端を垣間見る機会が欲しいと前から思っていた。だからと言って、自分が戦うわけにもいかない。英雄である自分と戦闘をさせてあまり恵を目立たせるのはどうかと考えているのだ。そしてそれ以前に恵やエヴァンジェリンにはネギの修行をつけて貰うという役割があるので、

自分の不用意な行動で気を変えられてしまつては堪らないと、そう思い今まで行動に移せないでいた。そんなアベルにとって、恵の実力の一端を測れるこの機会を逃す手は無い。

「タカミチ、お前が相手してやつてくれ。多分お前より強いぞ、こいつ」

「え、僕がですか？」

「私の意思は完全に無視ですか……」

アベルは当然の如く、恵の相手に高畑を指名する。

それは、近右衛門を除けば麻帆良の中でアベルに次ぐ實力を持つているからであり、恵の實力を測るには打って付けであると考えたからである。

そのアベルの指名に高畑は疑問の声を返すものの、己の師の一人である人間が自分より強いと言ったことから、疑問の言葉とは裏腹にやる気になっていた。

未だ、アベルを超えたなどと驕っているつもりはないものの、アベルの修行が終わった後も自分なりに修練を積み、さらに魔法世界で実戦を重ねてきた高畑はそれなりに實力を付けたと自負していた。

その自分を師に見せたいと、高畑はそう思っていた。

一方、恵の方はといえばやる気などまったく見られず、その突然の指名に溜息をついていた。自分の強さを人に見せびらかす趣味など無い恵としては、明らかに格下の相手など面倒臭いと思えない。だが周りの反応は、興味深そうに見る人間が多数だった。高畑の實力は、麻帆良の戦力の中でもかなり高く、近右衛門が学園に魔力を裂き戦えない現状では、実質麻帆良最強と言つても過言ではない。英雄であるアベルが、その高畑よりも強いと言ふのだ。興味を持つ

ても仕方のない話だろう。

エヴァンジェリンに至っては、恵に対し

「軽く遊んでやれ、恵。

あの程度に梃子搦るなど許さんぞ」

などと言う始末である。

段々と高畑と自分が戦う空気になりつつあり、さらにエヴァンジェリンからそんなことを言われてしまった恵には、最早戦う他なかった。

だが、その空気を読まず、むしろぶち壊すように高らかに手を上げるものが一人。

「神代先生のお相手は、私にさせて頂けないでしょうか」

桜咲刹那、それが彼女の名前だ。

side 刹那

私のその突然の提案に神代先生は訝しげにこちらを見てくる。

「桜咲さん……？」

神代先生、彼は長の昔の戦友であるアベル先生の推薦でここへ来た

と言う。

本来ならば、それだけで彼を安全な人物だと断じるに足る情報だ。それでも私の中で納得できない部分がある。

私なりに神代先生のことを見極めておきたいと、そう思う。

彼を初めて見た時に感じた違和感、それが未だに拭えないのだ。

それどころか、再び彼をこの視界に収めることで、さらにその感覚が加速する。

神代先生がマクダウェルさんと共にこの場に來た時に、いったいどんな関係なのだろうかと疑問に思ったが今は関係ない。

今はただ、何故誰も彼に対して違和感を感じていないのかと疑問に思う。

それはやはり、私の人でない部分が何かを感じとっているということの証明なのだろうか。

私が入でないということの、化物であるということの証明なのだろうか。

「私も新参の身。神代先生も同じ立場の方がやり易いでしょう。私は未だ未熟故、自身の至らぬ部分を見つめるという意味でも、アベル先生に認められるほどの方と手合わせしてみたいのです」

如何にも、それらしい理由を言う。

こう言えば、私の提案も無碍にはされないだろう。

「……フム、確かにの。」

アベル君の言うとおり、神代君の実力も見ておきたいしの。

桜咲君の言うことも最もじゃし、その向上心は見上げたものじゃ。

それならば、神代君と桜咲君で一つ模擬戦ということはどうじゃろうか」

学園長のその提案に周りも概ね賛成の声を上げる。

良かった。私の意見が上手いこと通った。そのことにほんの少し安堵する。

「いや桜咲、神代はかなり強いから、こう言っちゃなんだが生徒であるお前じゃ相手にならねえと思うぞ？　だから今回はタカミチに任せて引いておかないか」

「それは重々承知しています。

それを理解した上で、私は神代先生と手合わせしたいのです」

私の身を案じてだろうか、アベル先生が模擬戦に異議を唱えてくるが、それは私は止めるには至らない。私には私なりの考えがある。

「桜咲君がこうもやる気なんじゃ、見守ってやってはどうかねアベル君」

「ハア、解ったよ、解りましたよ。

それじゃあ桜咲、精々頑張ってくれ」

「うむ、それでは神代君、桜咲君、位置についてくれるかの」

学園長のその言葉で私と神代先生は世界樹広場の中心辺りに向かい合うように立った。

対峙することで解る。アベル先生の言うとおり、私と彼とではかなりの実力差があるのが。

それがいったいどれ程の差なのかまでは流石に解らない。それでも恐らく私では敵わないのだろう。

それでも私は見極めるために剣を抜く。

私の感じるこの違和感がいったい何なのかを。

彼は木乃香お嬢様にとって害為す存在になりえるのかどうかを。
それを見極めるために。

21話 その剣は魔王に届かない（前書き）

思ったよりも長くなってしまった。

本当だったら、19〜21話は一本にまとめるはずだったのに……。

21話 その剣は魔王に届かない

「……………はあ」

対峙する桜咲刹那を見て恵は、面倒なことになったと溜息を一つつく。

恵としては、殊更に自身の実力を隠していこうなどという心算^{つもり}はなかった。

しかし、だからと言って恵には自分の強さをひけらかす趣味も無ければ、弱いもの虐めをして楽しむ趣味も無いのだ。

にも拘らず、何故こんな如何にもか弱そうな少女の相手などしなければいけないのかと、そう思っていた。これならば、まだ高畑と手合わせした方がましだとも。

そして何より恵が今面倒だと感じているのは、刹那の自分を見るその目だ。

その目を恵はよく知っていた。敵を見る、とまでは言わないまでも、どこか陰の籠ったものだ。かつて、まだ魔女狩りが横行していた時代、魔法世界に滞在していた時代、エヴァンジェリンと共に彼自身がずつと受け続けていたそれに酷似していた。

今更、刹那一人のそれを受けたところで、どうということはない。

……ないが、それでも受けていて気持ちのいいものではないし、恵にはその様な視線を桜咲刹那から向けられる覚えなどなかった。恵としては、この地で余計な波風を起こす気はないのだ。仮に起こすとしても、それはエヴァンジェリンが望む時であり、それは決して今ではない。

だが事実、今刹那は敵意にも似たそれを恵に向けているのである。恵としては、その瞳に宿る陰はいつたい何によるものなのかと、問いを投げたい気分であった。

対する刹那には、自分の目にそんな感情が籠っていることなど一切の自覚がない。

それは、偏に木乃香に危険が及ぶのではないかと危惧していることによつて、自然そうなっているに過ぎない。従つて刹那には、恵のつく溜息の正確な意味など知る由もなかった。

刹那は、恵が溜息をついているのに対し、自分がいきなり模擬戦の相手などを申し出たことに呆れているのだろうか、と生真面目にも見当違いな予想を立てていた。

そんな向かい合う二人の胸中など知る由もない近右衛門は、二人の準備が整つたと見るや模擬戦についての説明を始める。

「フム、双方準備はいいかの？」

それでは始める前に簡単にルールを決めようかの。

桜咲君は得物が刃物じゃから峰打ちで、と言いたいところじゃが格上の神代君が相手ではそれはキツイじゃろう。武器を気で強化しない、というところが妥当かの。

神代君はあまりに威力の高い魔法や殺傷力のある魔法は使用を禁止する、というところかの。

勝敗条件はどちらかの戦闘不能もしくはギブアップを宣言した時点でその者の負けじゃ。

二人ともそれでいいかの？」

そのルールの説明に恵は肯定の意を表す。

「ええ、私はそれで構いませんよ」

恵にとっては如何なるルールを敷かれたところで、目の前の少女に負ける要素などあるはずもない。反対する理由など何一つない。しかし相對する少女にとってもそうだとは限らない。

桜咲刹那にとっては違ふのだ。

「学園長、私の扱う神鳴流は剣に気を纏わせないと真価を発揮できないのですが……」

彼女の扱う流派は、神鳴流。その流派は数百年に渡り、魔を打つために研鑽の積まれてきたものであり、真骨頂は剣筋、足運び、剣速、そのどれもでない。己が武器に気を通わせる事により妖怪、物の怪、化生、化物をも引き裂くことのできるその技の威力にこそある。魔を滅するための剣であるため、対人用の剣技よりも威力が求められる。

故に神鳴流は武器を選ばない。気で強化という前提があるため、得手不得手というものは少なからず存在するのだが、剣であろうと無手であろうと、本来その威力が落ちるということはない。

しかし、否だからこそと言うべきか、武器を気で強化してはいけないという制限がついた場合、神鳴流の技は満足に力を発揮することはできない。

格上を相手にする上で、その制限は些か以上につらいものがあるだろう。

「むう、それは困ったの……」

それを失念していた近右衛門は、刹那のその指摘でさてどうするかと悩む。

近右衛門としては先程の刹那の気概を見せられては、なるべく本人が満足するような形でやらせてやりたいという思いがあった。

それに対し、恵はにこやかな表情を保ったまま事も無げに言っ

ける。

「学園長、それでしたら桜咲さんの方には特に制限は要りませんよ」
早く終わらせて欲しいと切に願う身としては、ルールなど勝手にすればいいという心情である。たとえ、何をどうしたとしても結果はそう変わらないのだ。にも拘らず下らない議論で時間を浪費していくなど愚の骨頂だと、恵はそう考える。

「しかし、それでは万が一ということもあるし……。
まさか模擬戦で大怪我をしましては、笑い話にもならんぞい」

だが、だからと言って近右衛門がその言葉に簡単に頷けるかと言え
ば否だ。

近右衛門はこの場を預かる身、それが生徒や教職員を徒に危険に曝
すわけにはいかないのだ。

「大丈夫ですよ、万が一どころか億が一にも有り得ません」

しかし、その言葉ですら恵は切って捨てる。

それは、決して揺らぐことのない己への信頼であり、自信ではなく
確信。

事実にして、不変の真実。

しかし正しく事実ではあるが、その物言いに刹那はピクリと反応を
示す。

恵にとってその言葉は、相手を貶めるというよりも自身を誇るとい
う意味合いが強い。

千年にも及ぶ研鑽とエヴァンジェリンより賜る信頼、それがある限
りその自信や誇りが揺らぐことなど有り得ない。

だが、そんな事情など知らない刹那からしてみれば、今の言葉は挑

発めいたものに感じられても仕方がない。

「フオツ、これは随分と剛毅なことを言いよるのお。」

神代君がこう言ってることじゃし、桜咲君もそれでいいかの？」

そんな二人の心情を知ってか知らずか、近右衛門は恵の言葉に軽い賛辞を送り、刹那にも恵の案でいいかの確認をとる。

「はい、神代先生が許してくださるのならば、私もその方がやり易いですし」

それに刹那はにべもなく了承する。

刹那としても全力を出せるのに、これ以上要求するものなどなかった。

近右衛門は刹那のその言葉を受け取ると、二人の様子を確かめ次の言葉を紡ぐ。

「今度こそ準備は整ったようじゃの。」

それでは——始めッ！」

そして、今ここに戦いの火蓋は切って落とされた。

なんて格好良く始まりの文言を綴ったが、その戦闘は如何にも地味な始まり方をする。

ごく自然体で、未だその笑顔を保ったまま、ともすれば相手の、戦

士の誇りを傷つけかねない態度でただ立ち尽くす恵。

対するは、抜き放った剣——夕凧——を正眼に構える刹那。

正眼の構え、それは中段の構えとも呼ばれており現代の剣道において最も基本的且つメジャーな構えである。この構えは、他の構えにスムーズに移行することができ、戦闘中の様々な状況に備えることができ、攻撃するにしても防御するにしてもバランスの取れた構えと言えるだろう。

そして、二人は向かい合ったままどちらも動けずにいた。

正確には、恵は動けない、ではなく動かないだが。

刹那は真実、動けないという表現が正しかった。

悠々と構えもせずただ微笑む恵に対し、刹那は打ち込むことができずにいた。

隙がない、という訳では決してない。恵はこの戦闘において、それほど真面目にやるつもりはなく、その所作の端々に隙がチラついて見える。

しかし、刹那は打ち込めない。どこに、どの隙に打ち込もうとも、逆に自分がやられる光景しか思い浮かばない。

これが力の差かと、これほどの力の差がと、刹那は夕凧を持つその手に汗を滲ませる。

対峙してただけでは解らなかったその差を、その差の大きさを、互いに戦意をぶつけ合うことで幽かにおぼろげにはあるが、刹那はその一端を垣間見る。

恵からすれば、戦意などと言うほどでもないそれも、刹那の足を止めるには十分すぎる圧力であった。

誰もがその膠着した状態を固唾を呑み見守っている中、恵自身が軽い調子でその膠着を破る。それはまるで今からコンビ二にでも行くかのような気安さで。

「桜咲さんから来ないなら、私からいかせてもらいましょうか。」

いく、と宣言した後、恵が誰にも聞き取れないようにボソリと呪文を詠唱する。

それに刹那は身構えるが、それは無意味に終わる。

「これで一本でしょうか？」

「——なッ!？」

恵の声が、自分の真後ろから聞こえてきた瞬間に刹那はその場から飛び退いた。

刹那はそれに驚愕を隠せていなかった。いくら実力に開きがあるからといって、その動作の全てを目で捉えることができないとは思っていなかったのだ。

刹那の目には、今の恵の動きの全てが見えていなかった。

いつこちらへ動き出したのか、いつ自分の後ろに回りこまれたのか、それをその目で一切捉えられていなかった。

そして同様にその場にいたエヴァンジェリンを除く全ての者が驚いていた。その瞬間の恵の動きはその場の誰も目に捉えることができていなかったのだ。

そう、アベルの目にすら恵のその動きは見えていなかった。

恐らく、アベルは刹那以上に驚愕していただろう。アベルの心中は有り得ない、その一言に尽きた。

アベルは腐つても紅き翼の一人だ。^{アラルブラ}少なくとも、この世界においてトップクラスの戦闘力を持っていることは疑いようもない。そのアベルの目に映らなかったのだ。

何か呪文を唱えていたことから、何かしらトリックがあるのかもしれないが、それでも反応できなかったことに変わりはない。

そこでアベルは、そんなことを何の苦もなくやってのけた恵に初めてほんの少しの畏怖を抱いた。

アベルがそんな驚愕を抱く中、戦況には変化が訪れる。

刹那は、額を流れる嫌な汗を拭うこともなく恵に質問をする。

「……今のは、いったい何をしたんですか神代先生？

瞬動にしても有り得ない速さでした。そもそも瞬動における入りも抜きも今の動きには存在しませんでした。いったい貴方は何者ですか？」

いくらなんでも、今の恵の動きは刹那にとって不可解すぎたのだ。

「戦闘中にお喋りとは随分と余裕がありますね。

ですが生徒の質問ですので、それに答えるのは吝かではありません。しかし、いきなり答えを与えてしまうのは教育者としてどうかと思いますので、課題を出します。

そうですね……私に一太刀でも当てることができれば、先程の質問全てに答えるというのはどうでしょうか？」

人差し指を突き立て、にこやかに言う恵のその条件、一見簡単そうに聞こえるが先ほどの動きを見た後ではそうは思えないだろう。

しかし刹那はその条件を呑む。いや、刹那としては呑むしかないだろう。

気になっていた、刹那を悩ませていた恵の正体、それを答えてくれるというのだ。刹那としては願ってもいない展開と言ってもいいだろう。

「解りました、その条件を呑みましょう。
では、今度はこちらから攻めさせてもらいます」

そして、その言葉通り刹那は駆け出す。

瞬動を用いて、一気にその距離を詰める。

それは、入りも抜きも年齢的なことを考えれば、十分な完成度だった。

そして、恵にその奥義を叩き込む。

——神鳴流奥義・斬岩剣！——

だが、その程度では届かない。

「なるほど、年のことを考えれば中々の腕前だ。
ですが、私を捕らえるには至らない」

恵はその剣をいとも簡単に避け、さらにはその評価を口にするほどの余裕を見せる。

「まだですッ」

——奥義・百烈桜華斬！——

百烈桜華斬、それは円の様な軌道を描く太刀筋で複数の相手に攻撃する技。

それを至近距離で、ただ一人の相手に放つ。

それは格上の相手に対し、できるだけ近い距離で当たり判定の大きい技を放つことによって、一太刀でも当てようという苦肉の策。

しかし、この戦闘においての刹那の勝利条件は一太刀を浴びせるこ

と。元よりこの試合に勝てるなどは考えておらず、ただ恵の出した課題をクリアするための攻撃をする。

ただ一太刀を当てる、それを満たすだけならば刹那の策は単純ではあるが、それなりに効果的だ。

しかし、それなり程度の効果では、埋めることのできない差があるのだ。その程度で当たる道理などはない。

「才能溢れる若者というのは見ていて羨ましくなりますね。

私が君ほどの年齢だった頃では恐らく考えられないほどの実力だ。ですが、まだ私の年の功の方が上の方ですね」

その、刹那の連撃も顔色一つ変えることなく恵は避ける。

「……くッ、まだまだッ！」

それでも刹那は諦めない。実力が上といっても、一太刀ならばと、攻撃を続ける。

——神鳴流奥義……——

刹那の持つ夕風に雷が宿る。そして、帯電したそれを恵に向かって振り下ろす。

「ああ、もういいですよ。君の実力は大体把握しました。今のままでは、一生かかっても私に当てられないでしょう」

——雷鳴け、——

「——ッかは」

しかしその剣は、奥義である雷鳴剣は無常にもその技の完成を見る前に恵によって止められる。

恵のしたことは、実に単純。

振り上げた剣の、そのさらに内側に踏み込み、軽く握ったその拳で刹那の顎を打ち抜いた。

ただそれだけ。

しかし、それだけで刹那は膝を突いてしまう。

「……つく」

「無理はしないほうがいいですよ。」

脳震盪は起こさない程度に加減はしたつもりですが、それでも脳が揺れたことには変わりない。しばらく動けないでしょう」

恵は、刹那が最早動けなくなったことを確認し、近右衛門に勝利確認を行う。

「学園長、桜咲さんは戦闘不能です。」

私の勝ち、ということでしょうか」

「う、うむ、そうじゃな。」

文句なく神代君の勝ちじゃろう。

桜咲君も頑張ったが、神代君は想像以上の實力じゃった」

近右衛門は、汗一つ掻くことなく勝利した恵に対して、少し戸惑いながらもその勝利を宣言する。

「桜咲さんは、どうでしょうか。まだ動けませんよね？」

その勝利宣言を聞くと、恵は未だ膝を突く刹那に話しかける。

「……はい、残念ながらまだ立てません」

そこで、横から助け舟が出される。

「それなら、寮で同室の私が運ぼう」

それを申し出たのは刹那と同室である龍宮真名だった。

「龍宮さんですか、それではお願いしますね」

恵はそれに応じ、真名に刹那を任せるとエヴァンジェリンの横に戻る。

近右衛門は刹那が真名に運ばれていくのを確認すると、話を始める。

「うむ、中々見応えのある試合じゃった。

それでは余興も終わったところで、警備についての説明をしようかの。

まず最初に言っておくが、警備といっても何も広域指導員のように学園の敷地内を見回ったりするわけではない」

警備員の説明を始めた近右衛門にアベルは疑問を飛ばす。

「あん？　そうなのか学園長？

てつきり俺はそういうものだったと思ってたんだが」

そのアベルの質問に近右衛門は当然のことだと答える。

「当たり前じゃろ。」

考えてもみるんじゃない。皆ここにいる者は学園の生徒だったり教職員じやったりするんじゃない。

そんなことをさせておったら、仕事や学業に支障が出てしまうわい」

「確かにそれもそうだな……」

アベルも近右衛門のその言葉には納得してしまう。

「うむ、納得してもらったところで説明を続ける。

警備といっても、することは学園結界でワシが感知した侵入者を、その時ローテーションが回ってきていた者に伝えて対応してもらうだけじゃ。

それについても、やたらめったら侵入者が来るわけではないがの」

今度は恵が、抱いた疑問を近右衛門に問う。

「そのローテーションの者だけでは対応できない場合はどうしているんでしょうか？」

「後手に回ることになるが、その時に連絡を入れてもらうようにしとる」

恵は、その回答に確かに後手に回るが、今までそれでやってきたので平気だろうと、特に指摘することなく、そこで納得しておく。

「そして、そのローテーションじゃが、基本的に生徒には強制しておらん。

これは希望者を募り、実力を見た上でローテーションに組み込むか決めておる。

教師の者には悪いがローテーションには強制的に組み込むことにな

つておる。

まあ、何人かで編成するから、そう心配することはないぞい。
ふむ、警備に関しての説明はこれくらいかの。

まだ何か解らないことがあったり、生徒の中で希望者がおれば後日
申し出てくるのじゃ。

それでは今日のところは解散じゃ」

近右衛門が解散を宣言すると、そこにいた魔法関係者がそこから立ち去っていく。

そして、それに合わせ恵とエヴァンジェリンも去っていく。そして、
そこに残るのはアベルと近右衛門、それに高畑だけとなった。

そして皆が去っていくのを見送ったアベルは近右衛門に話しかける。

「それにしても学園の警備システムがそんなことになってたとはなあ
」

「そうじゃ、普段なら今日のように一同が会することなんてないん
じゃぞ？」

まったくアベル君は人気者じゃのう、流石紅き翼といったところかの
」

「……そういうのは止めて欲しいんだがな」

近右衛門から返ってきた言葉に薮蛇だったと、アベルは顔をしかめる。

そして、高畑は、

「僕も一応紅き翼の一員ではあるんですがね……」

ハハハと、乾いた笑いを浮かべて少し落ち込む。

「それにしても、お前さんが連れてきた神代君はとんでもない実力者じゃな。」

ワシが全力で戦えるとしても、勝てる気がせんのじゃが……。
あんな人材いっただこで見つけてきおったんじゃ」

「確かにアレは驚きましたね。」

最初のあの動きは僕もまったく目で追えませんでしたよ」

「ああ、ちよつとな……」

近右衛門が出した恵の話題にアベルは言葉を濁す。

アベルが見た恵の実力のその一端、それを見ることによって、今まで甘く見すぎていたと少し後悔していた。反乱されたとしても、自分がいれば抑えることができると思っていたが、エヴァンジェリンもいるということを考えると、少なくとも自分一人であの二人の相手は無理があるかもしれないと認識を改めた。

そして、あの二人に対してはこれからもう少し慎重に接しようかと思っただった。

オマケ

刹那は未だ動かぬ体を、真名に背負われて帰路についていた。

「……すまない、龍宮さん」

「なに、気にするな。

本来なら料金を請求するところだが、同級生兼同室のよしみでサービスしておいてやる」

「……助かる」

「それと同室なんだ、これから接する機会も多いだろうし、さん付けは要らないよ刹那」

「……そうか、色々と気を使わせるな龍宮」

こうして二人はほんの少し友情を深めていた。

「それにしても、あんな風に積極的に行動を起こすとは意外だったよ刹那。

もっと大人しそうに見えていたんだがね」

その真名の指摘に刹那は答えづらそうにする。

「……うつ、私にも事情があったんだ。

……龍宮は神代先生に何か違和感のようなものは感じなかったか？」

「違和感？」

確かに人ではない気配も少し感じたが……」

それを言うならば、私やお前、エヴァンジェリンにザジもそうだが、と真名は続けようとするがそれは刹那に遮られる。

「ッやはりそうか!？」

「……落ち着け。」

確かにそうだが、英雄が連れてきた人なんだ危険のあるような人ではないだろ。

何か思うところがあるとしても、私は単なる考えすぎだと思っぞ?」

「……それもそうだな、私の考えすぎだったかもしれないな……」

刹那は、同じ様に恵に違和感を感じる者を見つけ、相談することによって、その心の重しを少し軽くすることができたのだった。

21話 その剣は魔王に届かない（後書き）

ああ、もうすぐデイスガイア4の発売日だ。
これは執筆活動に支障が出るかもしれない。

22話 共通点

駆ける、駆ける、少女は駆ける。

唯その仕事をこなすために。

彼女、神楽坂明日菜は未だ日も昇らぬ、多くの人が夢から覚めてすらいないだろう時間帯に街中を疾走する。その肩にかかったバッグの中には大量の新聞が入っており、一見して新聞配達をしてるのだろう、と予測できる姿だった。

彼女は両親がおらず、学費を学園長である近右衛門に負担してもらっている。

近右衛門は気にすることなどないと言ってるが、彼女としてはそういう訳にもいかず、少しでも働いて返そうと、中学生になったことを期にアルバイトを始めたのだ。

実に健気で、善良な精神を持った少女と言えるだろう。

中学生程度ならば、その優しい言葉に流され、言われるがままに何の疑問も持たずに学費を負担してもらっていても、なんら不思議ではない。

と、話がここで終わればこれは、身寄りのない生徒の面倒を見る心優しい老人と、世話をしてくれた人に少しでもそれを返したいという善良なる少女の物語で終わるのだろう。

しかし、ここに一人の男を加えるだけで妙な方向へ向かいだす。

高畑・T・タカミチ、彼のことを考慮した場合、これは少し歪な話になっていく。

神楽坂明日菜、彼女はある時期より前の記憶がない。

それは、何故か？

それは他ならぬ高畑が、彼女の未来を憂いて施した処置によるものだ。

そこまでは、いい。

そこまでだけならば、彼を責める者がいても、擁護する者も大勢いるだろう。彼女の背負っている過去とは、それほどに重いものなのだ。

その行動から、彼は決して悪い人間ではないのだろうと予測できる。むしろ心根の優しい、誰かの為に行動を起こせる善良な人間の部類に入ると言ってもいいだろう。

だが、その後の彼の対応は、果たしてどれほどの人間が肯定でき得るものなのだろうか。

何故彼は、明日菜と中途半端に距離をとるような真似をしたのだろうか。離れるでもなく、かといって引き取ってやるでもなく面倒は見てやるという、中途半端な距離。

彼は、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの記憶を封じ、神楽坂明日菜へと変貌させた張本人である彼は、記憶を奪った彼女を家族または親類として引き取るべきだったのではないだろうか。そして、責任もって養ってやるべきではなかったのか。

それこそが筋なのではないだろうか。

中途半端に世話をして、好意を持たせるだけ持たせ結局彼女に対し何の責任も果たさない彼は、いったい何を考えているのだろうか。

原作において、人に愛される資格がないと彼自身が述べているが、それを否定することは誰にもできない。

彼は、『クライスラー ダッジバイパー SRT-10』などという価格にして1000万円以上もする高級車を乗り回しているのだ。女の子を一人養う程度、訳ないことは言わずとも明らかだ。にも拘らず、彼はそれをしなかった。

それは、魔法関係者である自分とあまり関わらせたくない、しかし

気にはなる、という心情からだったのか。

だがしかし、それにも疑問が湧き上がってくる。

彼は原作で、まだ魔法使いとしても人間としても未熟であるネギ・スプリングフィールドが神楽坂明日菜に近づくのを許容したのだ。それでは、魔法関係者と関わらせたくないという予測とは矛盾してきてしまう。

もしかしたら、それは彼の意思によるところではなかったのかもしれない。近右衛門が勝手に進めてしまった話、なのかもしれない。それでも、記憶を封じ魔法というものから彼女を遠ざけた彼は、それを何としてでも防ぐべきだった。

矛盾している。

彼の行動は矛盾し続けている。

極めて好意的に見るならば、それはとても人間らしいと言えるかもしれないが。

そして高畑を加えた上で、この話を見直すと近右衛門も唯の善人とは言いつらくなる。

近右衛門の一連の行動を邪推するならば、いずれ何らかの形で明日菜を利用しようとしているのではないか、とも思えるのである。もちろん、それが本当に善意のみによる行動であったという可能性もゼロではない。

だが、原作でネギ・スプリングフィールドを明日菜に近づける張本人の近右衛門のその可能性を信じられる者がいったいどれだけいるだろうか。

神楽坂明日菜、彼女は周りの身近な大人たちに裏切り続けられているのかもしれない。

とはいえ、本人は何も知らないのだ。

それならば、誰の思惑も知らずに居続けるのならば、彼女は幸せな

のかもしれない。

たとえ、誰かの手の上で踊っていたとしても、踊っている本人がそこを本物の舞台だと信じているならば、それは紛れもなく本物だということだ。少なくとも本人にとっては。

何事も知らぬが花。無知なことほど幸せなことはない。

原作においてはその辺りが追求されることはなかったが、果たしてこの物語ではどうなることだろうか。

side 明日菜

自分の担当する配達区域に新聞を配り終わり一息つく。

「……ふあゝあゝ」

堪えきれず、大きく口を開けてあくびをしてしまう。

体力には自信があつたから、走って新聞を配ること自体は大した苦にはならないけど、朝早くってというのが結構きつい。

学園長に少しずつでも学費を返したいと始めたバイトだけど、少し失敗したかな、と思う。

けど、一度決めたことだし止めるわけにはいかない。

学園長には気にするな、なんて言われてるけど流石にそんなわけにもいかない。

早起きだって、続けていけばその内慣れるだろうし。

そんなことを考えていたバイトを終えたその帰り道、自分のクラスの副担任になった人を見かける。

「あつ……」

こんな朝早くに外を出歩いているとは思ってなかったから、思わず声を漏らす。

その声で気付かれて、その人が私の存在に気付く。

「？ ああ、これは神楽坂さん、おはようございます」

「お、おはようございます」

「随分と朝早くに会うものですね。ジョギングでもしていたんですか？」

声を出したことを少し後悔する。

この人は、なんというか苦手だ。

別に嫌いとかそういう訳じゃないんだけど、なぜかこの人と話すと調子が狂う。

最初、睨んだのを笑顔で返されてから、ちゃんと顔を見て話せない。

「あ、えと、私バイトしてるんです。

今は新聞配達の帰りで……」

「中学生の内からアルバイトですか？

学業に支障のきたさない程度にしておいて下さいね」

「その……私両親がいなくて自分で学費を稼いでるんです」

「……すいません、デリカシーがありませんでしたね。中学生がアルバイト、という時点で事情を察するべきでした」

神代先生は、私が両親がいないというのを聞くと申し訳なそうに謝ってきた。

うう、そんなつもりで言ったんじゃないけど……。

「えと、別に気にしなくても平気ですよ。

両親がいないって言っても、覚えてないから私自身そんな気にしてないし」

ちらりと横にいる神代先生の顔を見ながら答える。

「覚えていない……？」

「あ、私ある時期から前の記憶が無くて……」

「……重ね重ね、すいません。

どうも私は人の細かい情緒を察するのが苦手で」

そう言つて、重いため息をつく。

だから、そこまで申し訳なさそうにされたら、逆にこっちが悪いこととした気になるわよ。

「そ、そんな謝らないください。ホント気にしてませんからッ。

あ、そうだ。神代先生はこんな朝早くに何してたんですか？」

「私、ですか？」

よかった。話題を逸らすことができたみたい。
あんな風に重い雰囲気には正直堪えられないわ。

「そうですね、私はここら一帯を散策がてら散歩をしていた、というところでしょうか」

なぜか妙に誤魔化すような風に神代先生は話す。

「散策、ですか？」

「ええ、私は麻帆良に来て日が浅いので、まだこのことをよく知らないのを見て回っていたんですよ」

「そうなんですか？」

でもそれなら、こんな朝早くじゃなくても……」

なんでこんなに朝早く散歩なんだろう？

放課後とかのほうが時間があると思うんだけど。

偶然早起きして眠れなかったとか？

「——実はあまり人に見られたくない用事があったもので」

「……え？」

その、意外な答えに聞き返してしまう。

それを言った神代先生の表情はいつも浮かべている柔和な笑顔とは違い、なんとというか背筋がぞくぞくする様な、恐いというか、男の人に言うのが正しいのか解らないけど、どこか妖艶な顔をしていた。ひ、人に見られなくなかったってなによ、何かやましいことでもしたの？

「…………なんて、「冗談ですよ。」

環境が変わったせいかな、少し早く目覚めてしまっていてね。

二度寝するのももったいないと思い、こうして歩いていたんですよ」

そう冗談めかして言う神代先生の表情は、すでにいつも通りの優しそうな表情だった。

さっきの顔がウソだったみたいに。

その雰囲気の変わりように、ビックリした。

というよりもさっきのが幻と言われた方が信じられるわ。

……意外な一面を見た気がするわね。

「も、もうッ、いきなり変なこと言うからビックリしたじゃないですか」

「先ほどまで少し暗い雰囲気になっていましたので、空気を和ませようと思ひまして。」

それにしても良かったです。神楽坂さんが笑ってくれて」

「へ？」

え？ いきなり何？ というより私、今笑ってた？

「神楽坂さん、私のこと苦手でしょう」

その言葉に言葉を一瞬失う。

「…………え、ええと…………」

頬を掻いて誤魔化す。

なんて言っていていいか解らない。

気付かれていたのが、なんだか恥ずかしい。

最初の中からこの人は、なんだかこっちを見透かしてくるみたい。

「副担任とはいえ、自分のクラスの生徒に苦手意識を持たれるのは悲しいですから」

「アハハ……そのー」

その言葉に気まづくなる。

神代先生は何も悪くないのに一方的に苦手意識を持っていたから何も言えない。

「それに……君は少し私と似たような境遇を持っているような気がするから、妙に親近感が沸くんですよ」

「……え？」

私と似た境遇？

それっていったい……。

「これは、少し失言でしたかね。

今のは気にしないで下さい。

私はこの道を向こうですので、これで。

それでは授業でまた会いましょう」

「え、あつ、ちょっとま……」

私の呼び止めは最後まで言葉にならなくて、神代先生は女子寮とは違う方向の道へ行ってしまった。

「何よ……私と似た境遇って……」

私のその小さな呟きは、誰にも届くことはなかった。

side 恵

偶然出会った神楽坂明日菜と分かれ、帰路へ、エヴァのいる我が家へ歩を進める。

それにしても、よりもよって黄昏の姫御子の成れの果てに会うとはな。

英雄殿から聞いていた、黄昏の姫御子のことは。

何でも、過去の記憶を封印されているとか。

完全に奪われ、最早取り戻すことの叶わぬ俺とは少し違うといつても、それでも記憶を奪われたという俺と似た境遇。何とも、同情を禁じ得ずにはられない。

同情、そう同情だ。

何も知らぬ、解らぬ者が軽々しく口にするそれとは違う。

同じ経験を持つ者だからこそ理解できる苦悩。

見たところ、神楽坂明日菜はそれほど気にしている様子はないようだが。それは英雄殿から聞いた事情を本人は知らないからだろう。

自分の境遇を真に理解してしまったら、いったい彼女は何と思うとか。

恐らく、記憶を封じた者、高畑は善意からその行動を起こしたんだろう。だが、記憶を奪われた経験がある俺から言わせて貰えば、嘔飯ものだ。嗤わせるなど、そう言っただけでいい。

自分が今まで生きてきた記憶を失うということを一度でも想像したことがあるのだろうか。ないのだろう。あったとしても、その苦悩のほんのわずかも理解できていない。

記憶を失うということ、それは言いようもない不安が己の内に渦巻くのだ。それが拭えない、消えない、いつまでも付いて回る。俺の場合は、色々あり過ぎて考えている余裕が無かったので、その苦悩に悩まされる事は少なかった。

だがそれでも、ふとした瞬間に恐ろしくなることがあった。自分という存在の不確かさに怖気が走った。誰も俺のことを知らず、存在の証明が何一つない。不老のせいで誰かと親しくなることもできず、記憶を失っているため自分自身ですら存在の寄る辺になることができない。経験していない者に、それは理解できないだろう。

あの恐怖を知った上で誰かの記憶を奪うことができるのは最低の下端だと言える。

そう、断言できる。

まあ、今ではエヴァと出会ったことで、俺にはそんな恐怖などないが。

神楽坂明日菜、彼女も周りの人間に恵まれたのだろう。でなければ、記憶を失って尚、あんな明るい性格になることなどないだろうから。

神楽坂明日菜に関して考察を巡らせていると、ようやく家へ辿り着く。

鍵を開け、扉を開き中へ入ると、茶々丸が出迎えてくれる。

「お帰りなさいませ、恵様」

「ああ、ただいま茶々丸」

こうして誰かに出迎えられるというのは、やはり良いものだ。

家に帰ってきたということを実感できる。

そんな感動を噛み締めつつも、リビングへ行くと、そこには意外な影があった。

「お帰り、メグム」

「エヴァ、こんな時間に起きてるなんて珍しいな」

エヴァが起きていた。

こんな早朝にすでに起きているなんて、少なくとも麻帆良に来てから初めてだろう。

「朝目が覚めたら、普段ならまだいる筈の時間に、メグムがベッドの中にいなかったから起きてしまったんだよ」

ああ成程、そういうことか。

「それで、どこへ行ってたんだ？」

「世界樹を見に、少しな」

「あれを見にいったのか。」

確かに、あの夜は模擬戦をメグムがやることになって、よく見ておけなかったからな。

それで、使えそうだったか？」

「ああ、概ね問題なさそうだったな」

あれならば、俺とエヴァが構想中の術式の行使も容易に、とまではいかなくても不可能ではないだろう。

「それは重畳だな。」

それにしても、暇つぶしの一環で作ったものが、ここまで大事になるとはな。

正直な話、元々冗談のつもりで作り始めたものがここまで形になるとは夢にも思っていなかったぞ」

「確かに、それは俺も同意するな」

あんな夢物語が、現実のものとして形になりつつあることは驚きだ。

「ああ、それとメグム」

俺が、エヴァの言葉に同意して頷いていると、言葉を追加してくる。俺はそれに応じようとするが、その前に胸倉をつかまれ、グイッと引き寄せられる。

そして、エヴァの美しい瞳が俺の目を覗き込む。

「……お前、わずかだが他の女の匂いがするな？」

「……ん？」

エヴァがスツとその眼を細める。

これは、多大なる誤解が生まれている気がするな。

「世界樹を見にいっただけじゃ、なかったのか？」

「あ、ああ……その帰り道に神楽坂明日菜に会ったんだ」

「ほう……」

俺のその言葉にエヴァはさらに目を覗き込んでくる。

何もやましいことは無いはずなのに、何故だか、ヤバいと、そんな言葉が思い浮かぶ。

「……確か、黄昏の姫御子だったか？」

マジック・キャンセラー
魔力完全無効化能力を持っているとかいう」

「あ、ああ、その神楽坂明日菜だ」

「成程。」

それで？ もちろん何もなかったんだろうな」

最早、俺とエヴァの顔は鼻と鼻がくつつくほど近づいており、エヴァは瞬き一つせず俺の目を見据えてくる。こんな時にでも、エヴァの瞳は美しいと、そんなことを考えてしまう。天に輝くどんな美しい星であろうと、その美しさは上位3位以上にいくことはない、そう思う。エヴァの二つの瞳が健在な限り、上位2位以上はエヴァのものだろうから。

「当たり前だろ？ 誓ってもいい。」

そもそも俺がエヴァ以外に靡くなんてあり得ない」

はつきりと、そう断言する。

そもそも俺はガキに興味はない。

中学生相手に何か邪な思いを抱くなんてあり得ない。

「そうか、誓うか。」

だが、いったい何に誓うんだ？」

エヴァはそう言いながらも、さらにその顔の距離を詰めてくる。ここまでくると、近すぎて逆に相手の顔が見づらいほどだ。俺はエヴァの吐息を感じながらも、エヴァの問いに答える。

「何に？ 決まっている。」

エヴァに、俺の唯一にして絶対の女神に誓う」

俺のその言葉に、エヴァは満足そうに微笑む。

ああ、なんて美しく、愛らしく、神々しく、愛おしいんだろう。

「フフ、よくできました」

そして、俺とエヴァの吐息は、今完全に一つに重る。

「——ッん、ぷはっ。」

ごちそうさま……メグムは血だけじゃなく口内も美味だな」

それは、

「それは、俺の台詞だな。」

エヴァの唾液なら、ジョッキでいける」

俺の言葉に、エヴァは少し頬を染める。

「まったく、随分と変態的なことを言うな」

「エヴァが先に行っただろう?」

「……それはそうだが、メグムが攻めに回ると激しすぎて私が攻められないからな。」

それでは、不公平じゃないか。だからメグムは私に攻められてろ」

何とも理不尽なお姫様だ。

だが、そこもまた愛おしい。

愛されていることを実感できる。

「そうだ、メグム。」

一緒にシャワーを浴びるぞ。

いつまでも他の女の匂いをさせておくのは不愉快だ」

「そんなに感じるものなのか?」

「神楽坂明日菜の匂いを強く感じるわけではないがな、メグムの匂いの中に不純物が、私のもの以外の不純物が混じるのが許せん」

なんという独占欲だ。

まあ、俺もエヴァに対しはそれくらいの独占欲はあるからいいか。むしろそこまで想われている俺は幸せ者だろう。

「ほら、メグム。」

何をしてる、早く行くぞ」

そうして、俺はエヴァに連れられ、共にシャワーを浴びに浴室へ向かうのだった。

23話 暗躍メアリー（前書き）

随分と間が空いてしまった。
スランプ&デイスガイア。

23話 暗躍メアリー

side ???

思い通りにならない。

この世界に転生してからというもの、どうにも上手くいかない。

神曰く、暇潰しだから好き勝手してくれて構わない、らしいのだが……。
……。 なんとというか、転生する前に思い描いていたものはずれがある。

僕は神に選ばれた存在であり、この世界では僕が主人公であり、僕を中心に世界が回るべきはずだと思っていた。

そして転生したこの世界で、僕は原作主人公であるネギ・スプリングフィールドのフラグを全て折ってやろうと、世間知らずのネギに現実を教えてやろうと、そう考えていた。

出だしは良かった。

制限があつたとはいえ、自分の望む能力を得て気分は高揚した。

さらに、ヒロイン勢と同年であり、お近づきになる機会も多そうで心が弾んだ。

自分の容姿も、転生前と比べるべくもなく、非常に端麗で美形と言うに相応しく、自身の顔を鏡で見るのが毎朝楽しみなほどだ。

その上、ご都合主義万歳と言うべきか、特に自分で何をするでもなく自然に麻帆良学園に通うことになった。

何もかもが順調で、流石は神に選ばれた転生者、扱いが違つと、笑いを堪えることができなかった。

学園に通うようになってからは、自分のハイスペックさにも嬉しくなった。

この体、容姿端麗だけでなく身体能力も高い。

……まあ、そこは一般人にしては、という程度だが。

それでも、クラスのヒーローになれるほどであり、前世の記憶のおかげで勉強もできる僕は、神童なんて呼ばれるようになった。

普通の人間の人生として見たら、僕はこれ以上ないというほどに充実していると言っただけだ。ただ、僕は普通の人間ではない。

神に選ばれているのだ。それも妄言なんかではなく、実際に神に出会い能力を貰っているのだ。そんな僕が、普通に満足するはずがない。ここは物語の中の世界。そして僕は主人公。そこで満足は出来なかった。

思えばそこからだろうか、僕の思い通りにならないことが増えていったのは。

僕の計算違いは、麻帆良学園に入学してからゆっくりと確実に始まっていた。

まず困ったのが、麻帆良学園は男子部と女子部に分かれているということ。

てつきり中学からそうなのかと思っていたのに、初等部から分かれていたのだ。

『男女7歳にして同衾せず』なんて言葉があるがやり過ぎだろうと思った。

この所為で、僕はヒロイン勢の誰かと仲良くなる機会というのがほとんど持てなかった。

もちろん、だからと言って何もしなかったという訳ではない。

例えば、周りとの認識のずれに苦しんでいるであろう長谷川千雨を探し、優しく声でもかけてやろうと試みたり、図書館島に行って、宮崎のどこを始めとする図書館探検部メンバーを探してみたり、と色々こつちから接触を図ってみたりした。ただ、その悉くが失敗に終わった。

長谷川千雨らしき人物を見つけ話しかけてみれば、ナンパでも思われたのだろうか警戒した目でこちらを見てきて、特に何かを話すこともできずに逃げ出されてしまった。

図書館島で宮崎のどかつぱいのを発見した時も、駄目だった。話しかけると、男が苦手だからかまったく会話にならなかった。それでも、諦めずに話しかけていると綾瀬夕映だろう人物がやってきて、僕が苛めているとでも勘違いしたのか、こちらを睨んで宮崎のどかと共にどこかへ行ってしまった。

他にも色々としてみたが全て無駄、徒労に終わった。

酷い時には、広域指導員のタカミチに注意されてしまうことなんかもあった。

結果、僕はヒロイン勢と仲良くなることには失敗していた。

それだけならば、まだ良かった。

それだけならば、原作が始まってから幾らでも取り返しがつくだろうから、そこまで気にすることではないと、そう思っていた。

だが、少し前に流石に看過出来ないことが起こった。

僕は中等部上がる少し前あたりに、ある人物に接触を図ろうと常々思っていた。

そう、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、その人だ。

エヴァンジェリンに接触を図り、修行をつけてもらおうとしていたのだ。エヴァンジェリンと良好な関係を築ければ原作にも絡みやすいし、先のことを考えたら少しでも強くなっておいたほうがいいだろうと考えて。その年齢まで待ったのは、あまりに子供過ぎでは相手にしてもらえない可能性があると思っただ。

だが、それが上手くいかなかった。

いや、上手くいかなかったというよりも、試みることにすら出来なかった、というのが正しい。なんとエヴァンジェリンは、ここ麻帆良

にいなかったのだ。流石にこれには参った。流石の僕でも、いないものはどうにもならない。

そこで遂に、僕は一つの可能性に思い至った。

この世界には、僕以外の転生者もいるのではないかと。

いや、そもそも考えるまでもなかった。僕という前例がいるのだから、それがいてもまったく不思議ではないのだ。それを考えなかった今までがおかしかったくらいだ。

いるはずの人物がいない。これは、この世界が原作とは既に変わってきてしまっているということだ。それは如何にすれば起こり得ることか。答えは簡単にでる。僕のような、この世界にとってのイレギュラーがいればいい。実に簡単な結論だ。

恐らく僕のこの推論は当たっているだろう。神は言っていた、暇潰しだと。そして、わずかではあるが神と交わした会話の中から、神は一人ではないと臭わせることを言っていた。

無数にあると言っていた世界の中で、何故この世界を選んだのかは知らない。だが、他にもいるであろう神が、同じく暇潰しと称して他の転生者を送ってきていても違和感はない。

そうになると、僕よりも早く転生してきた者がいるということになる。可能性としては、大戦期に魔法世界で紅き翼あたりと関係を持った、^{アラルブラ}というところだろうか。

エヴァンジェリンが麻帆良に縛られていないということは、少なくともその時期くらいには転生してきていなければならぬだろう。

もしかしたら、紅き翼の一員になって英雄の一人に数えられているかもしれない。

それは、少々厄介だ。僕以外の転生者が神からどんな能力を貰ったか、なんていうのは僕の知り及ぶところではない。だが、仮に英雄の一人になっているとしたら、それ相応の戦闘力は持っていると考えるべきだろう。果たして僕的能力で対処できるかどうか。

いや、そもそも最初から敵対するという前提で考えを進めるとするのは得策ではないか。

同じ転生者同士なのだ。話し合えば、協力関係を結ぶことも出来るかもしれない。

まだ姿も見えぬ相手ではあるが、エヴァンジェリンと接触し歴史を改変しているということは、僕と敵対するような相手とは考えにくい。

僕と同じように、ネギ・スプリングフィールドのハーレムを阻止しようとしているかもしれない。そうでなくても、原作主人公のハーレムを阻止したい、あの自分勝手なネギの毒牙にかかる人間を少しでも減らしてやりたい、という考えに否定的というのは考えづらい。

まともな思考回路を持っていたら、アレを放置しようとは思わないはずだ。いずれ世界を救うような存在になるからといって、そこに至るまでに何をしてもし許されるなんてあっていいはずがない。子供が教師をやるといって、日本の労働基準法を余裕でぶちぎるような行為。子供だからといって許されている生徒に対する数々のセクハラまがいの行為。さらには意味不明なモテっぷり、ともすれば魔法で何かしら思考を操作されているのではないかと勘繰ってしまうほどのものを発揮し、多数の生徒に手を出すという行為。いずれも看過できるものではない。

僕でなくても、この世界に転生なんてしてきたら、どうにかしたと思うだろう。

そう考えれば、敵対するよりも協力してネギのフラグを折り、あわよくば二人でフラグを山分け、というのが僕にとっては最善の道か。

……まあ、幾ら考えたところで、全ては想像の域を出ないんだけど。そう、こうやって色々と考えてはいるが、全部僕の推測でしかない。

もしかしたら、エヴァンジェリンが麻帆良にいないのも何か別の理由があるかもしれないし、僕以外の転生者なんて存在しないかもしれない。

だけど、そこでいないと言い切れないのが問題だ。もしいるんだとしたら、その情報を何も持っていないというのは、少しまずいと思う。

だから、

「僕以外に転生者がいるんだとしたら」

そして、原作に関わる気があるんだとしたら、

「なるべく早く、その存在を確認したいところだ」

「あれ、もしかしてアタシ呼ばれちゃったかなー？」

「ッ！？」

僕の思考をさえぎって不愉快な声が響いた。

僕以外いないはずの僕の部屋の中に。

side
メアリー

なんだかアタシの登場は、相手の背後に気付かれないように現れるのが定番になって気がする。

「だ、誰だッ？」

おやおや、怯えちゃって可愛らしい。

転生得点なのか、とても整っている容貌が崩れると台無しだよ？

「誰だとは、失礼だな。君が言ったんじゃないか。

自分以外に転生者がいるなら見てみたいって。

それに、名前聞くんなら自分から名乗ろうよー？」

「……僕の名前は——」

ここで素直に名乗ろうとするなんて、中々生真面目だ。

「ああ、表札見て知ってるから名乗らなくていいよ、たかまがはめこと高天原尊くん。しかし、すごい名前だね？ 高天原って、尊って」

格好良すぎて笑っちゃう。狙いすぎて逆にダセエ。名前が既に中二っぽいつて（笑）。

アタシが小馬鹿にしたように嗤うと、尊くんはその頬をわずかに朱に染める。

「べ、別に僕が望んでこの名前になったわけじゃない。それよりも僕にいたい何のようだ」

身構えちゃって、いつさましー。

いやいや、アベル君とか魔王さんとかに比べると、圧迫感が全くな

くていいねー。

皆こんな感じだとアタシの気苦労も減るんだけどねえ。

まあ、それはアタシが人生楽しむための代金だと思えば安いものか。

「やだなあ、そんなに警戒しないでよ。

アタシってそんなに怪しいかな？」

アタシと会った転生者は皆そうやって警戒するよね。

この登場の仕方はやめた方がいいのかもしれない。

「そうだなー。なんて言えばいいのかな。

少しお話しにきたってところかな？」

「……話？」

「そう、お話。悩める転生者な若者に、耳寄りな情報持ってきてあげたんだよ」

アタシのその言葉に、尊くんは警戒しつつも興味を示す。
いやー、チョロいな。

「その情報が僕にとって有益なものなら聞いておきたい。
だけど、それはお前にとってどんな得があるんだ？」

その情報を見返りに僕に何を要求する心算だつもり」

「それにしても一人部屋って、いいご身分だね。

ここの学生寮って基本的に二人部屋か、三人部屋なんじゃないの？
運で勝ち取ったの？ それとも何か裏工作でもした？」

尊くんの質問はガン無視で言いたいことを言ってみる。

「つく、僕の話聞く気はないのか」

そのアタシの態度が気に入らなかったのだろう、尊くんが睨んでくる。

でも、その程度じゃあアタシをどうにかするのは無理だなー。アベル君の方が鋭かったし、魔王さんとかエヴァンジェリンさんとかの方が威圧感が遥かにあった。

正直この程度、今のアタシにとっては、何の脅しにもならない。相変わらず直接的な戦闘力は皆無だけど、魔王とか英雄とか、この世界で最強クラスの人間と対峙したことがあるんだ。精神的にはかなり図太い自身がある。今更こんな十数年生きた程度の、転生したての子供の睨みにビビる訳ない。

「えー、だって尊くんの言ってること堅いし、聞いてらんないんだもん。

もっとこうさあ、砕けて話せない？」

「口調は転生前からの性分だから、そう簡単には変わらない。

というか、僕は転生前も合わせたら精神年齢的には30歳を超えているから、その子供に接するみたいな喋り方は止めてくれないか」

30って、それ十分に若いじゃんさー。

アタシとか今いったい幾つだよ。アベル君とかも結構イってるだろうし。

魔王さんとかに至っては、数百歳くらいだろうしなー。

「そんなことより早く本題に入ろうよ？」

「……元はといえば、お前から脱線させたんだろう」

そんなこと気にするなんて器ちっちゃいな。

「それで情報なんだけどさ、ここ麻帆良に既に君以外にも複数名いるんだよ」

「ッ！ ……それはお前も含めてか？」

「いやー、アタシと君を含めなくても複数名。

し・か・も、その内一名は紅き翼の一人で自分以外の原作に介入してこようとする転生者を排除しようとしてるんだなー、これが」

「……それは本当か？」

「うん、マジマジ」

うん、嘘は言っていない。言っていないことは多少あるにせよ、少なくとも間違ったことは言っていない。ただ、意図的に黙っていることがあるだけだ。

アベル君は魔法世界救えればそれでいいみたいだし、それが出来るんなら問題ないんだろうけど、これは言う必要ないよねー。いったところで尊くんにかできるとは思えないし。

「その紅き翼の一人っていう奴は、どれくらいの強さなんだ？」

「うーん、そうだなあタカミチより遥かに強いよ。

アレの修行も一時期つけてたみたいだし。

加えて言っと、あのラカンと殴りあえるほどだね」

「そんなにか……」

「だからさ、もし原作に介入しようとしてるんなら慎重にすることをお薦めするよ」

「確かにその通りだな。紅き翼の一人に数えられるほどの実力を持った奴に目を付けられるのは勘弁して欲しいからな」

随分と素直に人の意見を聞くなあ。

アベル君とか魔王さんもこうだとアタシも楽なんだけど。

あ、そうだ。

「それと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルには関わらない方が吉！

アレはやべえ。地雷というか、最早爆弾、隠れてない。危険過ぎるッ」

「ん？ エヴァンジェリンは麻帆良マホウにいなかったみたいだけど？」

おおっと、薮蛇だったか。

あの人たちがここに来る前に確認しに行ってたのか。

これは言わなかった方が、関わる可能性少なかったかな？

いや、何も知らないで鉢合わせするよりはいいか。

「いや、最近ここに来ただけどき、封印とかされてないから不用意に近づくと冗談じゃなく殺されちゃうから。何か原作よりも強くなってるみたいだし？」

「……そうなのか。

言われなかったら、普通に関わろうとしてたな。忠告感謝する」

おおっ、こんなに素直に感謝されるとは。
何か感動だなー。アベル君やら魔王さんやら、アタシに対して皆辛
辣なんだもん。

「情報はこんなもんかなー。」

それじゃ、アタシはそろそろお暇するのでしょうか」

「ちょっと待て」

アタシが去ろうとすると、尊くん呼び止められてしまう。

「最後に一つだけ聞かせてくれ。」

お前はなんで僕にこんな情報を？ 得なんて一つもないだろ」

そんなこと気にするなよ面倒だな。

「そんなこと決まってるじゃない」

イレギュラーである君に簡単に退場されたら詰まらないだろ。

「親切心だよ」

このままでもアベル君の思い通りに原作通り進むことなんてなさそ
うではあるけど、より物語を引っ掻き回して欲しい。

「同じ転生者なんだから、助け合つのに不思議なんてないでしょ？」

だからアタシを楽しませるために存分に踊ってよ。

「だから、君には頑張っ
て欲しくて」

「お前……」

「それじゃあ、今度こそ
バイバイ」

最後の尊くんの顔はやば
かった。

『お前……』とかちよつと
アタシの言葉に感動して
る感じだった。
マジ笑いが止まらない。

本当に皆、尊くんみたく
チヨロいと助かるんだけ
どなー。

23話 暗躍メアリー（後書き）

スランプ。

書くことは決まっているんだが、それを文章に起こせない。

24話 疑心暗鬼（前書き）

迷走中。

何か今回の話はやってしまった気がする。

24話 疑心暗鬼

side 尊

僕は、学校の授業が終わり放課後となった今、つい先日僕の部屋に突如として現れた女性から得た情報の真偽を確かめようとしている。僕以外の転生者の存在を、この目で確認しようとしているのだ。

あの時は、突然の事態にすんなりと彼女の話を受け入れてしまったが、それがどこまで信憑性のある情報なのかは吟味する必要があることに気付いたのだ。

そもそも、僕は彼女のことを何一つ、それこそ名前すら知らないのだ。

何故、僕のことを転生者だと見抜けたのか、それもよく解らない。唯一確かなのは、彼女が僕と同じ転生者だということくらいだろう。そんな彼女の言葉を何一つ疑わずに信じるのは、無用心が過ぎるというものだ。

だからあの後、僕に出来る範囲ではあるが色々調べてみた。

彼女の言を信じるのであれば、転生者の内一人は紅き翼アラルケラの一人。ここ麻帆良にいるんだとしたら、年齢的に考えて教師というのが妥当だ。そして転生者なのであれば、ヒロイン勢に少なからず関わりを持てる立ち位置に納まっているだろうと予想した。

その予想を元に調べるのであれば、やはりヒロインたちのクラス周りにから調べるのがいいだろうと思い立ち、そのあたりから調べてみたのだ。

僕の予想としては、あのクラスの副担任あたりが可能性として高い

と思っていた。

何故ならば紅き翼の一人であるならば、タカミチとの繋がりを持っているはずであり、タカミチが担任を務めているはずのクラスの副担任ならば割かし簡単になれるだろうから。

そして何より副担任という立場はヒロインたちと近くなる、という条件を満たすのに打って付けなのだ。同じ生徒という立場以外ならば、彼女たちと親交を深めるためには原作主人公ネギのように担任もしくは副担任になってしまうのが一番手っ取り早い。

だからこそ、転生者はタカミチと共に担任、副担任をしていると予測していたのだ。

その僕の予測は半分当たっていた、と言うべきなのだろうか。それとも間違っていた、と言うべきなのだろうか。

1 - Aの担任、副担任そのどちらにもタカミチはその名を連ねてはいなかった。

そのクラスを受け持っている人間は、少なくとも僕の持つ原作知識内にはいなかった名前。

担任、副担任のそのどちらにも、僕が知らない、恐らくは転生者であろう名前があった。

という訳で、僕はその二人、アベルと神代という人物を確認しに来たのだ。

来たのだが……直接女子校エリアに行きその二人に会う、なんてことは流石にできるはずもなく、今は適当にその二人がいるのではないだろうか、通るのではないだろうか、というところをブラついてるだけに留まっている。

あの女性の言うことを全て信じるわけではないが、忠告を無視して危険を顧みずに行動するのもどうか、と思ったのだ。

べ、別にビビッている訳ではない。そう、紅き翼のメンバーで転生者を排除しようとしているなんて聞いたからといって、気後れしているなんてことは決してないのだ。

僕は、あくまで慎重な行動を心掛けているだけだ。

なんて心中で、誰かに聞かせる訳でもない無意味な言い訳をしていると、人だかりができているのを発見する。

その人だかりを構成している人たちは、道着を着ていたり袴姿であったり、中には学ランを着ているような者もいるが、いずれも腕に覚えのありそうな屈強な者たちであった。

そしてその中心、丁度取り囲まれているような位置にいるのが、原作でもお馴染みの古菲だった。

彼女の噂は、別に格闘系の部活動に所属している訳でもない僕にも聞こえてきていた。

中学一年生にして、中国武術研究会で既にその才能を遺憾なく発揮し、次の学園の格闘大会では優勝間違いなしとの呼び声が高いのである。

そんな噂を聞きつけ、最初はわずかだった挑戦者も日に日に増しているらしい。

小さな体躯の古菲が、大柄な男たちに取り囲まれているのを実際に見ると、アレは本当に大丈夫なのだろうかと心配になってくる。

いや、大丈夫なんだろうけど。

原作でもモブキャラなんて歯牙にもかけずに簡単に伸していたし、今いる周りの野次馬たちも喧嘩を煽ったり、賭け事をしたりと心配している様子は見受けられない。やはり僕の心配など無用なようだならば、野次馬に混じり少し観戦していこうか。この世界の一般人の最強レベルというものを実際にこの目で見ておきたい。

そうして見ていると、その乱闘は始まり、そして終わった。

古菲の戦いは凄まじいものだった。

あまりに早く終わってしまった、特に描写することもないほどに。一度に複数を相手にしているというのに、いともアッサリと全員を叩き伏せてしまった。

片手で相手の攻撃をいなし、空いているほうの拳で他の相手を沈める。ほぼこれの繰り返しだ。

凄まじい。これで一般人というのだから、この世界の人間の戦闘力には驚かされる。

「おい古、喧嘩するにしても場所を選べ」

古菲の戦いにそんな感想を抱いていると、なにやらスーツを着た柄の悪い男がそこに来ていた。

な、何だアイツは？ イケメンではあるが、雰囲気は堅気の人じゃない。

「む、アベル先生。

今度は先生が相手になってくれるアルか？」

せ、先生！？ アレが教師だとツ？

僕の目がおかしいのか、少なくとも教師には見えない。

ん？ というかアベル？

そつか、あれが今のところ転生者の可能性が高そうな男か。

side アベル

ああ、面倒だ。

「む、アベル先生。

今度は先生が相手になってくれるアルか？」

そんな訳ないだろうが。

というか何でこいつはこんなに教師である俺と戦いたがるのかねえ。

「違えよ。

職員室に連絡が入ったんだよ。

路上でバトっている馬鹿共がいるってな。

その中心になってる奴がなんと1-Aの生徒だって言うじゃねえか。

その所為で、俺が駆り出されることになったっていう訳だ」

そもそも原作ではタカミチが担任だったんだから、タカミチが戦いを迫られてたのか？

いや、そんな描写はなかったと思うが……。

出張がないのと、タカミチより若く見える所為でタカミチより親しみ易いかもしれねえな。

「そつなんアルか？

でもわざわざ来たんならワタシと一戦交えていくアル。

弱い奴ばかりで退屈してたアル」

そう言つて、構えを取る古。

好戦的過ぎるな、こいつの頭の中には戦うことしかないのかよ。

ああ、バカレンジャーだったな、そういえば。

「だから、交えねえよ」

俺が頑なに拒否すると、不満そうな目でこちらを見てくる古。

んな目されたって、戦わねえよ。というかお前は仮にも教師に手を挙げるつもりかよ、どれだけ俺に対して気安いんだよ。

こっちとしては、あんまり生徒と関係を築きたくないんだがなあ。

「つれないアル。

神代先生は相手してくれアルヨ？」

「何？ 神代が相手を？ マジかよ……」

アイツはいつの間にそんなことを。

というか神代の奴はわざわざ古の喧嘩に付き合ってたのか。それは意外だな。

アイツなら生徒が喧嘩吹っかけてこようと相手にしないと思って、特に気にかけてなかったが予想が外れたな。

「いやー、神代先生は強かったアル。

これでも結構自信があっただけど、ワタシじゃ相手にならなかったアル。

氣付いたら投げ飛ばされてたアルヨ。

ワタシの見立てじゃ、アベル先生も相当強いはずアル」

そう言つて、古は再び好戦的な目を俺に向けてくる。

何で、神代は古の相手をしてやったんだ？

こんなの一回聞いてやったら、何度も突っかかってきそうなのに……。

……いや待て、逆に考えるんだ。

「ふう、そこまで言うなら仕方ねえ。相手になってやるか」

「本当アルかッ？」

そうだ、逃げるから追っかけてくるんだ。

なるほど、神代の方には俺に比べて全くと言っていいほどつかつかられていないと思っていたんだが、一度戦ってやったからなのか。だからまだ一度も戦ったことのない俺に大して勝負を仕掛けてきてた訳か。

そうだったんなら話は早い。一度相手して、圧倒的な差を見せ付けてやれば、しつこく戦いを挑んでくることもなくなるはず。そのはず、だよな……。

「ああ、本当だ。

とつととかかってこい」

「何か扱いがぞんざいアルな……」

古が何か言ってるようだが無視だ。

「そんな風に油断していると、痛い目見るアル、ヨッ！」

その言葉と共に、古は踏み込んできた。

前に足を踏み出しながら重心は後ろに置いたその独特な構え、形意券における三体式と呼ばれる立ち方から、跟歩こんぽという歩法を用いて踏み込んでくる。

その半歩の踏み込みと同時に、縦に据えた拳が俺に向かって打ち込まれる。

崩拳と呼ばれる形意拳の基本技の一つ。古が放ったその拳は、跟歩によって生まれた力を余すことなくその拳に伝えており、女子中学生が打つそれとは思えない程の完成度だった。

だが、それだけだった。

その拳は、俺に別段これといった技や技術を使わせることもなく、簡単に片手で受け止められてしまう。

「むッ!？」

古の放ったそれは、確かに完成度が高く、その拳の速度、威力、正確さ、どれをとっても一級品と言っていていいだろう。

一般人という枠組みの中でなら。

形意拳という無駄を削ぎ落とした、形だけなら誰でも真似できそうなそれ。

だが、簡素に見えるその動きは洗練され尽くしているからこそ実現できるものであり、それを極めるのは難しい。それを中学生という若さでここまで身に付けているというのは、素直に驚嘆に値する。

俺が神に咸卦法の才能を貰ったように、古は武術の才能を神から貰ったのではないかと錯覚させるほどだ。

だが、それでも古の持つ戦闘力は一般人という枠組みの中のものだ。所詮、気の運用もできていない表の人間だ。

武術の錬度という面だけを見れば、裏に関わる人間の中でもかなりのものだろう。

だが、それでは単純に出力が足りない。気を用いずに人の筋肉だけで発揮できる膂力だけでは、俺に一撃を入れるのは不可能と言ってもいい。

いやまあ、例えば出力が足りていたとしても、少なくとも今の古に遅

れをとる気はないが。

俺もこの世界において最高峰の戦闘力を保有する人間だ。才に恵まれ努力をしているからといって古に負けるようじゃ、紅き翼の戦闘員は名乗れない。

「……つく」

古は痛みにその顔を少し歪めて、掴まれた拳を引こうとするが、その拳はその位置からピクリとも動かない。

これは単純に俺の膂力がなせる技だ。

いや、技なんて呼ぶのはおこがましいか。ただ相手の拳を強く握ってそこから動かさないようにしているだけだからな。

だからといって、簡単なわけじゃないが。相手の拳を掴んだまま、その場の位置に固定して動かさない、というのは中々筋力がある。

まして、相手が古だ。先程は出力が足りないなんて言ったが、その膂力は中学生の範疇なんてものには当然収まっておらず、一般人の枠から片足を飛び出している域のものだ。

単純に膂力だけで抑えるには正直しんどい。

もちろん、咸卦法は言うに及ばず、気での強化さえ行えば、労せず抑えられる。

だが、それだと言つかプライドが傷つく。俺のちっばけなプライドが。一般人に対して、それも自分の生徒、女子中学生に対して、気で強化して相手をするなんて嫌過ぎる。

「一度捕まえたら、逃がさねえよ」

だからこそ俺は余裕だと、そう自分に言い聞かせる意味も込めて、不適に笑ってみせる。

そして、俺のその言葉を聞いた古は、

「……えッ」

——その顔を赤らめた。

「——ッらあッ!」

その表情を見た瞬間、俺は古を思い切り蹴り飛ばした。
もちろん気での強化なんてしていないが。

一瞬強く蹴り過ぎたかとも思ったが、相手は古だ。

少し強く蹴った程度で、どうにかなるほど弱くはないはずだ。
それよりも今は優先すべき問題がある。

マズイ。

今のは、アレだ。

テオの時と似ている。

神代に原作壊すようなこと控えろとか言っておいて、俺が真っ先にぶっ壊すようなことしたら笑い話にもならない。それも女生徒相手にフラグを立ててしまいました、なんてアホ過ぎる。

俺は言葉の選択を激しく誤った気がするな。というか、古もあんな一言で頬を染めるなよ、キャラじゃねえだろ。

いや待て、まだそうだと決まった訳じゃない。見間違いかもしれない。

俺は一縷の希望を胸に、蹴り飛ばした古の方へと近づいていく。

「す、スマン、古。

少し強く蹴りすぎたかもしれねえ。

怪我は無いか？」

そう言つて、未だ倒れ伏す古に手を差し伸べてやる。

「だ、大丈夫アル」

古は、朱に染まる顔を俯かせたまま俺の手をとつた。

「……あつ」

そして、繋がれた俺と自分の手を見ると、さらに顔を赤くし、

「わ、ワタシはこれで失礼するアルッ！」

走り去つていつてしまった。

俺はその様子を黙つて見送ることしかできなかった。

……あれ、これマジでフラグ立っちまったか？

side 尊

僕は、人が恋に落ちる瞬間を、見てしまった。参つたな……。

いやいや、何だあれ？

何僕の目の前でフラグ立ててんの？意味が解らないんだけど。

僕が為し得なかったことを、何簡単にしてくれてんだよ。

そこに痺れる、懂れる、なんていうとも思ったか？ 言わねえよ。いや、僕は別に古菲は狙ってなかったけど？ それでも目の前であんなの繰り広げられたら腹も立つよ？ 蹴り飛ばしたらフラグ成立って何だよ。それでいいのか、古菲。

僕の周りにいる野次馬の一部も、その気配を感じ取りあのアベルとかいう奴に対し軽く殺気立っている。

それにしても、あのフラグを思いつきり立てたのを見ると、あいつが転生者というのは間違いないと見ていいか？

いや、決まった訳じゃないけど、あの古菲を簡単に倒した強さ、イケメンっぷり、そのフラグの建築力などを鑑みると、これはほぼ確定と考えてだろう。

……僕の方がイケメンだと思うんだけど、何故僕にはフラグが誰とも一向に立たないんだろうか。

まあ、それは今は置いておこうか。考えても仕方ない。

原作始まってから、始まってからが勝負だから。

今考えるのは、あのアベル。

あれが、赤き翼メンバーの転生者なのか？

見た目が若すぎる気がするけど、この世界ではそんなものは当てにならない。不老不死やら年齢不祥な奴が大勢いるんだ。年齢と見た目が合わない程度じゃ否定材料にならない。

1 - Aの担任だし、その可能性はかなり高いはずだ。

それに、他の転生者を排除しようとしている奴がいるのだ。1 - Aの担任なんて、目立つポジションにいたら即処分されているだろう。やはり、アベルが赤き翼メンバーと言うのは間違いないと思う。

ん？ あれ？

いやいや、ちょっと待てよ。

担任、副担任どちらも転生者の可能性が高そうな名前が並んでいたはずだ。

まさか、ここまで来て、副担任の方は転生者じゃありませんでしたー、なんてことはないはずだ。もしそうなら、そこにはタカミチの名前がきている可能性が高いはずだ。

副担任の神代っていう方も転生者と見るのが妥当だ。

だが、それだとおかしい。それならばアベルが神代の方を排除しようとするはずだ。

それをしていない、というのはどういうことだろうか。

あの女性の情報が間違っていた、もしくは意図的に嘘をつかれた？アベルと神代の間で、何かしらの契約やら友誼が結ばれた？

実は神代という方は、既に亡き者にされている？

それともアベルは、あの女性の言っていた他の転生者を排除しようとしている奴ではない？

というか、アイツが転生者という予想がそもそも外れてる？

ヤバイ、混乱してきた。

直接聞ければ話は早いんだけど、敵対される可能性があるのに安易にそんな行動は取れない。

もう一度、あの女性に話を聞くことができれば、それが一番いいんだけど。残念ながら接触しようにも手段がない。

……僕はいったい何を信じて行動すればいいんだろうか。

24話 疑心暗鬼（後書き）

という訳で古菲にフラグを立てたアベル。
何か不自然なところや文句があつたら遠慮せず仰っていただけると有り難いです。

25話 君のいる教室（前書き）

また前話から間が……

どうも最近文章が書けない。

文を書こうとしても何も思いつかない。

25話 君のいる教室

それは、恵の授業中の話。

「それでは、各自問題に取り掛かってください。
解らないところがあれば、随時質問してください」

恵の授業は、単純なものであった。

授業の前半に公式等の教科書に沿った説明を行い、それが終わると例題を黒板で実際に解きながらの解説、そして最後に演習用のプリントを配布し各自それをやらせる、というものだった。

因みに授業時間内にプリントが終わらなければ、それは次までの宿題となるので、大抵の生徒はそれなりに真面目にプリントに取り掛かるのであった。

特に捻りもない、何の変哲もない平坦な授業。そもそも大学の教員免許を取得する過程を修めているわけでもない恵に、気の効いた授業内容を求めるほうが酷である。

だが、それでも恵の授業は、生徒から概ね好評であった。

それは、捻りはないが、堅実かつ丁寧な授業であったからだ。決して恵の容姿が優れているから、なんて思春期の女子にありがちな理由で、人気が出ているわけではない、はずだ。

丁寧な文字に、適切な進行速度で書き進められていく板書。質問に対する優しく解りやすい解説。要点やテストに出そうなポイントの漏れのない解説。

無駄話や余談などを一切入れずに、そういった必要最低限の無駄を省いた授業を行った結果、急ぎ足にならない生徒に丁度良いと思われるペースで授業を進めることができていた。

その、ゆとりある時間配分も高評価を得る一因となっていた。

現在は、例題の解説も終わり各自課題のプリントに取り掛かっているところだった。

恵は、教師に話しかけるのが苦手な生徒もいるだろうと、他のクラスの迷惑になるほど五月蠅くならないのなら、という条件付で生徒同士の相談を許可していた。

それ故に大抵の生徒は、生徒同士で教えあったり相談する者がほとんどであり、恵に直接質問する生徒の顔触れは大体決まっていた。

その最たる例である生徒は、課題のプリントが配られた時点ですぐさま挙手する。

「メグム先生、質問だ」

手を挙げたのは、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルその人であつた。

彼女は、演習中はいつもすぐに挙手して恵を自らの近くに侍らせるようにしていた。

それこそ、他の生徒が質問している時以外は、確実に恵はエヴァンジェリンの傍らにいる程に。もちろん、彼女が中学生レベルの問題が解らないなんてことはなく、ただ恵を近くにおいておきたいから、そうしているだけである。

「どこが解らないんですか？」

そして恵はそれに快く、笑顔で応える。

その笑顔は、他の生徒たちに向けられる様な上辺だけのものではなく、真実心からの笑みだということにどれだけの人間が気付けるだろうか。

少なくとも、その笑顔を向けられているエヴァンジェリン自身は理解しているが、それは長い時間を共にした彼女だから解るものであり、それ以外の者から見れば、普段となんら変わりなく映る。

恵に問題の説明を受けている間、彼女は嬉しそうに、見た目相応の少女のように純粋で朗らかな笑顔を浮かべる。それは、作っているようなものではなく、純粋に楽しんでいるものだ。

彼女は、存外この学園での生活を気に入っていた。もちろん能天気でもやかましいクラスメイトや退屈極まりない中学生の勉強など不満もある。それでも、エヴァンジェリンにとって、ここでの生活は今までにない刺激があり、娯楽として十分に楽しめるものであった。まず一つ、その要因として挙げられるのは、アベル・B・カトラルや超鈴音の存在。

彼らの行動は、いずれもエヴァンジェリンや恵の目からは、とても愚かしく滑稽に映り、見ていて飽きないのだ。この世界での自分を否定しつつも、世界を正しい——少なくともアベルはそう思っている——方向へ導こうと必死に右往左往するアベル。未来から過去へやってきて自分の、或いは大切な誰かの為に世界を変えようと足掻く超。どちらもエヴァンジェリンや恵を楽しませるのに十分な配役であった。

そして、それ以上にエヴァンジェリンは恵との学園内での触れ合いに満足していた。

それは偏に、恵との生徒と教師というシチュエーションによるものだった。エヴァンジェリンにとって、教師と生徒という関係は新鮮なものであり、これまでにない感覚を味わうことが出来ていた。普段は主と従者という関係性からか、恵が無条件にエヴァンジェリンよりも上になる、ということが珍しい。それ故に、エヴァンジェリンは恵に上の立場からものを言われることに人知れず喜びを感じて

いた。

恵も恵で、エヴァンジェリンとの学園生活をそれなりに楽しんでいった。

何よりもエヴァンジェリンの愛らしい制服姿を見ることが出来るというのが、恵にとつての幸福だった。普段着ているような、フリルやリボンが大量についている服もエヴァンジェリンによく似合っているが、制服姿というのもまた違う趣があつていいものだ、恵は喜びを噛み締めているのだ。

だが、そんな幸福な時間も永遠には続かない。

今は授業中であり、他の生徒の質問にも答えなければならない。幸福な時間を打ち破る者が一人。

「神代先生、解らないところがあるんですけど」

神楽坂明日菜。

少し前に新聞配達の際に恵と出会って話してからは、苦手意識をほんの少しではあるが、払拭していた。

そのおかげ、と言うべきか、その所為で、と言うべきか成績の芳しくない彼女はエヴァンジェリンほどではないにしろ、恵に質問するようになつていた。

「すみません、こんな最初のところで質問なんかして」

「いえいえ、構いませよ。」

解らないからこそ、こうして学校へ来て授業を受けているんですから。

生徒の皆さんが全て理解していたら我々教師の仕事はなくなってしまうからね」

自身の頭の悪さを理解している明日菜は若干申し訳なさそうにするが、それに対して恵は嫌な顔一つせずに応える。

しかし、それとは対照的にエヴァンジェリンはその顔に少々不満そうな表情を浮かべる。つい先日、恵が明日菜と遭遇したという日から、明日菜が恵に対して絡む頻度が妙に増えているのだ。最初は気のせいかとも思っていたエヴァンジェリンだが、日に日にそれが顕著になっていくのだ。彼女としては、自分のものに勝手に触れられているような気分になり、軽くではあるが業腹なのだ。

明日菜はそんなことには気付かずに、恵からの説明を熱心に聞く。

「ありがとうございます、よく解りました。

あ、そういえば――」

恵の説明は、丁寧で明日菜でも理解できるようなものであり、明日菜は自分でも理解できることに嬉しくなる。そして恵の笑顔での対応も相俟ってか、つい、気分が高揚し今まで気になっていたことが口から出てしまう。

「神代先生とエヴァンジェリンさんって、よく一緒にいるみたいですね」

つい先日、恵から自分と似た境遇だ、というのを聞いてから明日菜は恵のことを意識するようになっていた。

すると、あることに気付く。恵はほとんどの生徒に対して笑顔で平等に接している。だが、そこには唯一と言ってもいい例外が存在していた。それは明日菜が口にしたエヴァンジェリンである。彼女と一緒にいる時間や、話している時間だけが妙に多い。エヴァンジェリンに至っては、恵以外と話していること事態がそもそもほとんど

ない。話していることがあっても、笑顔を見せることなどなく、いつそ不機嫌そうな表情を浮かべてすらいる。それは同級生に限らず教師に対してもそうだった。それに気付いた明日菜は、段々とそのことに対しての疑問をその胸中に募らせていたのだ。

「仲良いんですか？」

それ故に、丁度いいタイミングだと、問題の解説のついでにでもと、つい聞いてしまったのだ。

そして、他の生徒はと言えば、その投げかけられた質問に、今までわずかにしていた話し声も全て途絶え、静まり返ってしまう。

明日菜が、二人の關係に疑問を抱くよりも以前から、他の生徒たちはその二人の關係に対して疑問を抱いていたのだ。

そもそも、授業中だけでなく、それ以外の時間もよく行動を共にしているのを目撃されているエヴァンジェリンと恵の二人は、色々と噂されている存在であった。

ましてそれが、普段授業をサボりがちであり、不機嫌そうな表情を浮かべていることの多いエヴァンジェリンと、新任であり生徒からの人気も高い恵、という組み合わせなものだから、余計に注目を集めていた。

それでも今までそれを声に出して疑問をぶつける、ということをした者はいなかった。

それは、エヴァンジェリンが、その可愛らしい見た目に反して妙な凄みを持っており、気軽に話しかけられる者がいないためであった。唯一、雰囲気が和らいでいるのが恵と共にいる時なのだが、その二人の時間を邪魔してまで話しかけられるほど親しい者もおらず、さらに冗談交じりに聞いていいものか、何か事情があるのではないかと勘繰り誰もが聞くのを躊躇っていたのだ。

しかし今、それを打ち破り、問いを投げる勇者が一人現れた。

そして、その質問に対する恵の返答を聞こうと耳を澄ませる。或いは、いつもの様にはぐらかされてしまうのではないか、という思いもあるが、それでも何か実のある答えが聞けるのではないかと耳をそばだてる。

「私とエヴェンジェリンさんの仲が良いか、ですか……」

ここで、恵は普段通りに適当に誤魔化そうかと考える。

幸い、今は授業中であり誤魔化すための材料には事欠かない。普段からあまり自分のことを話さない恵が、授業に関係のない質問は遠慮して欲しい、とでも言えばすぐに引き下がってもらえるだろう。

しかし、それではあまりも芸がない、と恵は思う。いい加減、適当にはぐらかすのにも飽いていた。

そして何よりも、最愛の人との関係を偽るなどと、そんな愛に背くような行為を恵がよしとするはずもなかった。

「実は、私とエヴェンジェリンさんは」

その恵の言葉に、教室内の誰もが精神を集中させる。

まさか本当に何かしらの答えが聞けるとは思っていなかったのだ。

「麻帆良に来るよりも以前から、面識がありました。

それで、他の方よりも付き合いが長く、その分だけ親しい、という事なんですよ」

約500年分ほどの年季の差、という訳だ。

その、人の寿命では決して追いつくことの出来ない年月を恵とエヴァンジェリンは、時を共有していたのだ。他の生徒と差が出るのは当然のこと、それを埋めることなど誰にもできはなし。

だが、その答えは周りが望んでいたようなものではなかった。

確かに、恵とエヴァンジェリンが以前から付き合いがあったという情報を、普段自分のことを語らず聞かれたとしてもはぐらかしてしまふ恵から聞けたというのは、それなりの収穫だろう。しかし生徒たちは、その以前からある面識というのが、いったいどんな関係だったのかを知りたい訳であり、恵の答えだけでは消化不良極まりない。

付き合いがあった、とは言っても恵とエヴァンジェリンの年齢——外見から判断される年齢——は、それなりに開きがあるように見える。その二人がいったいどんな関係だったのか、年齢の離れている二人がどうしてそこまで親しげなのか、それが知りたいのだ。そして、それは明日菜も同様に思っていることであり、その消化不良を解消するために、さらに質問を重ねる。

「それって、どんな関係だったんですか？」

自分のことをほとんど語ることはない恵が、わずかではあるが語ったのだ。生徒たちは、これはいい機会だと、今なら勢いで答えてくれるのではないかと、期待を募らせる。

だが、恵にとって先ほど答えたのは気まぐれではなく、全て語ることは出来ないにせよエヴァンジェリンとの関係を偽りたくないという、恵なりの理由があったからだ。それ故に、これ以上を語るつもりは欠片もなかった。

「これ以上は、プライベートなことですから」

そう言つて、恵は微笑む。

それは拒絶の微笑であり、相手に優しい印象を与える反面、それ以上は踏み込めない壁を感じさせるものだ。

偽りたくはない、だがエヴァンジェリンと自分の関係を全て他人に語ることなどはしたくない、と恵は考える。それは魔法に関することもあるから秘匿しなければいけない、なんて義務感めいたものではなく、エヴァンジェリンとの時間は自分だけのものにしておきたいという、独占欲によるものだった。

明日菜といえば、その恵から感じる壁の存在に気付き、ある可能性に思い至る。

「それって、前言つてた私と似た境遇つてのいうのに関係が……」

思い返してみれば、それを言つた後の恵はすぐに言葉を濁し、そこから逃げるように立ち去つたように、明日菜には見えた。もしかしたら触れられたくないことに触れてしまったのでは、と不安になる。

明日菜がそんなことを考えていると、そのネガティブな思考を断ち切るように、授業終了のチャイムが鳴り響く。

「チャイムが鳴つたようですので、今日の授業はここまでですね。」

配られたプリントが終わっていない人は、いつも通り次の授業に提出ですから、終わらせてきてくださいね。解らないところがあれば、友人に聞いたり、私に質問に来てください」

そう言つて、恵は教材をまとめて教室から出て行ってしまう。

さらに、エヴァンジェリンも授業の終了と同時に、他の生徒からの追求があつては面倒だと、教室を後にした。

side 明日菜

あー、ちよつと無神経だったかも。

授業が終わつた今、神代先生にした質問の内容が不躰だったかもしれないと、思い悩む。

私も、ほとんど気にしてないとはいえ、記憶がないことについて根掘り葉掘り聞かれたら、あんまりいい気分じゃない。

神代先生は私と似た境遇で言っていたから、もしかしたら私と同じで記憶をなくしてる時期があるのかもしれない。エヴァンジェリンさんと面識があるのも、それが理由だったりするのかもしれない。そんな、本人が気にしているかもしれないことを聞いてしまったことを少し後悔する。

「なー、アスナ」

私がそんな風に思い悩んでいると、このかが声をかけてきた。

「アスナってもしかして、神代先生のこと好きなん？」

それはあまりに予想外な言葉で、

「……えっ？」

何を言われているか、一瞬理解できなかった。

「あれ、違ったん？」

「え、ちよつ、何でそういう話になるの？」

このかは、高畑さんとも面識があり、私が高畑さんを好きなのを知っているはずで、何でそんな話になるのか解らない。好きになった？ 私が？ 神代先生を？

「最近アスナ、神代先生のこと意識してるみたいやつだし、授業中にあんなこと聞くんやもん」

「あ、あんなことって、神代先生とエヴァンジェリンさんのこと？」

「そや。普段ならアスナ、あんなハルナが聞きそうなことなんか聞かへんやろ？」

「やから、そうなんかなーと思って」

まさか、そんな風に思われるなんて思ってたなかった。

私は神代先生のことなんて別に……。

その時、ふと神代先生の顔が脳裏をよぎる。すると、何だか顔が熱くなってきた。

何よこれッ？

「ち、違うわよ、私は今でも高畑さん一筋よッ！」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように大きな声で言い返してしまふ。

「そうなん？」

なら、何で最近神代先生のこと意識してたん？」

「そ、それは……」

それには、ちゃんと理由はある。ただ、理由が理由だけに言いづらい。

実は私と似た境遇を持つてるらしいのよ、なんて言えるわけもない。本人が気にしているかもしれないことを、許可もなく人に話すなんて流石に出来ない。

だから、何て言っていいか解らない。

言えないけど、私が神代先生を意識していたのには、ちゃんと理由がある。

だから私は、別に神代先生のこと好きなのわけではない、はずだ。

「それは……ちょっと言えないけど、でも別に私は神代先生のことを好きななった訳じゃないわよ？」

「そかそか、それなら別にええんやけど。

あんなに高畑さんのことが好きやったのに、神代先生のこと妙に意識してるみたいやったから何事かと思ってたんやけど、ウチの勘違いやったか」

「そ、そうよ、完全にこのかの勘違いよ」

それに私の好みは、高畑さんみたいな渋いオジサマなんだから。神代先生は私の好みじゃないわよ。

そりゃ、見た目の若さに反して、落ち着いていて大人っぽいけど……。

で、でもッ、別に渋くはないから私の守備範囲外だから……。

あ、でも後何年か経てば、結構いい感じに渋くはなりそう……。

……ああッ、このかが変なこと言うから妙に意識しちゃうじゃないッ！

自分の思考の渦で段々と混乱してきて、頭を掻き毟ってしまっ。

私の苦悶はその後も続き、その日の授業の内容は、何一つ頭に入らなかった。

25話 君のいる教室（後書き）

スランプから脱出できない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0350q/>

神の呪いを受けし者

2011年3月11日23時16分発行